

# 笮井中屋敷遺跡

主要地方道藤岡・大胡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



筑井中屋敷遺跡正誤表

頁	行	誤	正
序	1行目	木	城
5	第5図	火災碎流	火碎流
5	第5図	微高地	微高地
5	第5図	広瀬州低地帯	広瀬川低地帯
42	4行目	ネサザ	ネザサ

この用紙はシールになっています。



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第226集

うつぼ い なか や しき  
笕井中屋敷遺跡

主要地方道藤岡・大胡線道路改築事  
業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

主要地方道藤岡・大胡線はほぼ県央部を走り、群馬・栃木・茨木を東西につなぐ国道50号線と交叉して、前橋市の東部を南北に縦断し、近年交通量が増加しています。工事に先立って前橋市筑井町の字中屋敷において所在が明らかであった中屋敷遺跡につき、県埋蔵文化財調査事業団が、平成5, 6, 8年度の各年度にわたり、計3次の発掘調査を実施致しました。

本道路改良工事は現道の両側拡幅のため調査区は細長く、各調査区とも狭い範囲ですが、遺跡の立地する周辺地形が赤城山麓の南西に広がる旧河川（旧利根川）と自然堤防からなる広瀬川低地にあり、現桃ノ木川右岸の自然堤防上に位置し、従来、比較的資料が少なかった該当地域の歴史を再構成する上で、重要な資料を提供することと思います。

調査された遺構・遺物には、古墳～平安時代にかけての46軒の竪穴住居を中心として、中・近世の堀、土坑、古墳・奈良・平安時代の土師器、須恵器、その他中国陶磁などが出土しており、この点でも今後に資するところが大きいといえましょう。

今回の報告書刊行に至るまでには、群馬県道路建設課、前橋土木事務所、県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様に大変御盡力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成9年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**





# 例 言

1. 本書は、主要地方道藤岡・大胡線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 筑井中屋敷遺跡<sup>うつばいなかやしきいせき</sup>は群馬県前橋市筑井町に所在し、調査範囲の道路用地として買い上げる以前の地番は819-2、820-1、822-1、824-3、930-1・3・4、931-2・3・7、936-1、946-2、947-1、949-1・4、973-1番地である。
3. 発掘調査と整理事業は、群馬県土木部道路建設課（前橋土木事務所）の委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査期間、整理期間は次のとおりである。

発掘調査	第1次調査	平成5年6月1日から平成6年3月25日 (1460㎡)
	第2次調査	平成6年4月1日から平成6年5月30日 (1400㎡)
	第3次調査	平成8年4月1日から平成8年5月31日 (650㎡)
整理事業		平成8年10月1日から平成9年3月31日

5. 調査の体制は次のとおりである。

常務理事	中村英一 (平成5・6年度)、菅野 清 (平成8年度)
事務局長	近藤 功 (平成5・6年度)、原田恒弘 (平成8年度)
管理部長	佐藤 勉 (平成5年度)、蜂巢 実 (平成6・8年度)
調査研究部長	神保侑史
総務課長	斉藤俊一 (平成5・6年度)、小淵 淳 (平成8年度)
調査研究課長	巾 隆之 (平成5・6年度)、右島和夫 (平成8年度)
事務担当	国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義 (平成5・6年度)、 大澤友治、吉田恵子、角田みづほ (平成5年度)、松井美智代 (平成5・6年度)、 杉山ひろみ (平成5・6年度)、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、 菅原淑子 (平成6年度)、山口陽子 (平成8年度)、佐藤美佐子 (平成8年度)
調査担当	第1次調査 大西雅広、金井 武、斉藤英敏 第2次調査 右島和夫、金井 武 第3次調査 南雲芳昭、横山千晶

6. 本書作成の担当はつぎのとおりである。

編 集	大西雅広
本文執筆	右島和夫、金井 武、斉藤英敏、大西雅広
遺物観察表	大西雅広
遺構写真撮影	各発掘調査担当者
遺物写真撮影	佐藤元彦

金属器・動物遺存体保存処理 関 邦一、小材浩一、土橋まり子、萩原妙子

整理作業 鈴木幹子、戸神晴美、神谷順子、平林照美、南雲素子、新井千恵子、小林町子

7. 人骨の部位同定と原稿は宮崎重雄氏に依頼した。
8. 発掘調査資料、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

## 凡 例

1. 本書で使用した北方位は座標北を表す。
2. 本書における遺構番号は、発掘調査時に付したものを使用している。調査の都合により一度に調査できなかった遺構は、番号を付した後に遺構種別を変更する必要性が生じ、本書作成時に変更している。したがって、12号住居は欠番となっている。
3. 発掘調査で使用したグリッドは4 m方眼で、南東交点で呼称している。なお、グリッドの基準は日本平面直角座標系第IX系を使用し、座標値との対応関係については本文を参照されたい。
4. 本書で使用した遺物番号は、挿図毎の通し番号である。なお、遺物観察表の登録番号は、土器にはA11、石器にはA12、金属器にはA14を登録番号に冠して当事業団の資料管理番号として使用している。
5. 遺物写真の掲載倍率は、実測図になるべく近づけた。

# 目 次

第1章 調査の経過と概要	1
第2章 立地と周辺の遺跡	4
第1節 遺跡の立地	4
第2節 周辺の遺跡	5
第3節 基本土層	7
第3章 遺構と遺物	9
第1節 住居	9
第2節 その他の遺構と遺物	27
I. 土坑墓	27
II. 井戸	28
III. 土坑	28
IV. 地下式坑	29
V. 溝	29
第4章 まとめ	34
付編 自然科学分析	35
筑井中屋敷遺跡の人名	45

## 挿 図 目 次

第1図 グリッド設定図	1	第26図 16号住居実測図	73
第2図 調査区設定図	2	第27図 17号住居実測図	73
第3図 遺跡位置図	3	第28図 18号住居実測図	74
第4図 赤城山南麓周辺の地形	4	第29図 18号住居出土遺物実測図	75
第5図 遺跡周辺の地形	5	第30図 19号住居・出土遺物実測図	75
第6図 周辺の遺跡位置図	6	第31図 20号住居実測図	75
第7図 基本土層	8	第32図 20号住居掘り方・出土遺物実測図	76
第8図 1号住居・出土遺物実測図	62	第33図 21号住居・出土遺物実測図	76
第9図 2・5号住居・出土遺物実測図	63	第34図 21号住居出土遺物実測図	77
第10図 2・5号住居出土遺物実測図	64	第35図 22号住居・出土遺物実測図	77
第11図 3号住居実測図	64	第36図 23号住居実測図	77
第12図 4号住居実測図	64	第37図 23号住居掘り方・出土遺物実測図	78
第13図 6号住居・出土遺物実測図	65	第38図 24号住居・出土遺物実測図	78
第14図 7号住居・出土遺物実測図	65	第39図 24号住居出土遺物実測図	79
第15図 8号住居・出土遺物実測図	66	第40図 25号住居実測図	79
第16図 9号住居・出土遺物実測図	67	第41図 26号住居実測図	79
第17図 9号住居竈・出土遺物実測図	68	第42図 27号住居・出土遺物実測図	79
第18図 10号住居・出土遺物実測図	68	第43図 28号住居・出土遺物実測図	80
第19図 11号住居・出土遺物実測図	69	第44図 29号住居・出土遺物実測図	81
第20図 13・14号住居実測図	69	第45図 30号住居実測図	82
第21図 13・14号住居掘り方・竈実測図	70	第46図 30号住居出土遺物実測図	83
第22図 13号住居出土遺物実測図	71	第47図 31号住居実測図	83
第23図 14号住居竈・出土遺物実測図	71	第48図 31号住居掘り方・竈実測図	84
第24図 15号住居・出土遺物実測図	72	第49図 31号住居出土遺物実測図	85
第25図 15号住居出土遺物実測図	73	第50図 32号住居・出土遺物実測図	85

第51図	33号住居・出土遺物実測図	86	第78図	1・3・4号土坑実測図	101
第52図	34号住居実測図	86	第79図	5～16号土坑・出土遺物実測図	102
第53図	35号住居・出土遺物実測図	87	第80図	17・20～28号土坑・出土遺物実測図	103
第54図	36号住居実測図	87	第81図	30・31・33～39号土坑実測図	104
第55図	36号住居掘り方・出土遺物実測図	88	第82図	40～52号土坑実測図	105
第56図	37・38号住居・37号住居出土遺物実測図	89	第83図	53～56・58・60号土坑実測図	106
第57図	38号住居出土遺物実測図	90	第84図	1号地下式坑実測図	107
第58図	39号住居実測図	90	第85図	1号地下式坑出土遺物実測図	108
第59図	39号住居掘り方・出土遺物実測図	91	第86図	1号溝実測図	109
第60図	40号住居実測図	91	第87図	2号溝実測図	109
第61図	41・45号住居実測図	92	第88図	2号溝出土遺物実測図	110
第62図	41・45号住居出土遺物実測図	93	第89図	2号土坑・3号溝・出土遺物実測図	110
第63図	42号住居実測図	93	第90図	4号溝・出土遺物実測図	111
第64図	42号住居掘り方・出土遺物実測図	94	第91図	4号溝出土遺物実測図	112
第65図	42号住居出土遺物実測図	95	第92図	5号溝出土遺物実測図	112
第66図	43号住居実測図	95	第93図	13号溝出土遺物実測図	113
第67図	43号住居出土遺物実測図	95	第94図	5・13号溝実測図	114
第68図	44号住居実測図	96	第95図	7～11号溝実測図	115
第69図	44号住居出土遺物実測図	97	第96図	12・14号溝・出土遺物実測図	116
第70図	46号住居・出土遺物実測図	97	第97図	15～19号溝実測図	117
第71図	47号住居・出土遺物実測図	98	第98図	弥生土器出土状態・出土遺物実測図	118
第72図	1号墓・出土遺物実測図	99	第99図	遺構外出土遺物実測図(1)	119
第73図	2号墓実測図	100	第100図	遺構外出土遺物実測図(2)	120
第74図	3号墓・出土遺物実測図	100	第101図	遺構外出土遺物実測図(3)	121
第75図	4号墓・出土遺物実測図	100	第102図	遺跡周辺の地割り図	122
第76図	4号墓出土遺物実測図	101	第103図	笄井町の小字地図	122
第77図	1号井戸・出土遺物実測図	101			

## 写真図版目次

P L - 1	遺跡周辺の航空写真	P L - 9	7号住居竈
P L - 2	遺跡の航空写真	8号住居全景	8号住居竈
1区全景		9号住居南半	9号住居北半
P L - 3	3区北半全景	9号住居掘り方南半	9号住居竈
3区南半全景		9号住居床下の噴砂	
P L - 4	4区全景	P L - 10	10号住居掘り方全景
5区全景		11号住居掘り方全景	13・14号住居全景
P L - 5	7区全景	13号住居全景	
8区全景		P L - 11	13号住居遺物出土状態
11区全景		13号住居竈	14号住居全景
P L - 6	12区全景	14号住居遺物出土状態	14号住居竈
13区全景		P L - 12	15号住居北半
P L - 7	1号住居全景	15号住居南半	15号住居遺物出土状態
2号住居全景		15号住居竈	16号住居全景
2号住居遺物出土状態		17号住居全景	
2号住居遺物出土状態		P L - 13	18号住居全景
P L - 8	3号住居全景	19号住居全景	
4号住居全景			
5号住居全景			
7号住居全景			

P L -14

20号住居全景  
21号住居全景  
23号住居全景

P L -15

24号住居全景  
28号住居全景  
28号住居貯蔵穴  
25号住居全景

P L -16

29号住居全景  
29号住居竈  
30号住居竈  
30号住居全景

P L -17

31号住居全景  
31号住居竈  
33号住居全景  
32号住居全景

P L -18

34号住居全景  
36号住居全景  
36号住居遺物出土状態  
36号住居竈

P L -19

36・37・38号住居全景  
38号住居全景  
38号住居遺物出土状態  
38号住居竈

P L -20

39号住居全景  
39号住居遺物出土状態  
39号住居竈  
39号住居掘り方全景

P L -21

41号住居全景  
41号住居竈  
40号住居全景  
42号住居全景

P L -22

42号住居竈  
42号住居竈掘り方  
42号住居掘り方全景  
43号住居全景

P L -23

43号住居竈  
44号住居遺物出土状態  
44号住居全景  
45号住居全景

P L -24

47号住居全景  
47号住居遺物出土状態  
47号住居遺物出土状態近接  
47号住居遺物出土状態近接  
47号住居竈

P L -25

1号墓全景  
1号墓銭貨出土状態  
2号墓全景  
3号墓全景  
4号墓全景  
4号墓右大腿骨と銭貨出土状態  
1号井戸全景  
1号井戸井筒近接

P L -26

1号地下式坑全景  
1号地下式坑遺物出土状態  
1号地下式坑遺物出土状態  
16号土坑全景  
58号土坑全景

P L -27

2号溝全景  
4号溝北半全景  
4号溝南半全景  
5号溝全景

P L -28

8号溝全景  
12号溝全景

P L -29

13号溝全景  
14号溝全景  
弥生土器出土状態

P L -30

1号住居～11号住居出土遺物

P L -31

13号住居～15号住居出土遺物

P L -32

18号住居～24号住居出土遺物

P L -33

28号住居～36号住居出土遺物

P L -34

36号住居～39号住居出土遺物

P L -35

41号住居～43号住居出土遺物

P L -36

44号住居～47号住居、1号墓出土遺物

P L -37

4号墓、1号井戸、14・24・28号土坑、1号地下式坑出土遺物

P L -38

1号地下式坑、2・4号溝出土遺物

P L -39

13号溝、遺構外出土遺物

P L -40

遺構外出土遺物

P L -41

ブラント・オパール顕微鏡写真

P L -42

筑井中屋敷遺跡の花粉分析顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	うつほいなかやしきいせき
書名	筑井中屋敷遺跡
副書名	主要地方道藤岡・大胡線改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第226集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大西雅広・右島和夫・金井 武・斎藤英敏・宮崎重雄
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279 (52) 2511
発行年月日	1997年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うつほいなかやしき 筑井中屋敷	ぐんま けんまえばしし 群馬県前橋市 うつほいまちあざなかやしき 筑井町字中屋敷	10201		36度 21分 44秒	139度 8分 20秒	19930601～ 19940325 19940401～ 19940530 19960401～ 19960531	3,510	主要地方道 改築事業に 伴う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
筑井中屋敷 遺跡	集落遺跡	弥生時代 後期 古墳時代 後期 奈良・平安時代  中世  時期不詳	遺物集中 竪穴住居 竪穴住居 溝  堀 井戸 土坑墓 溝 土坑	壺形土器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 鉄鎌、鉄鋤、不明軽石製品 越州窯系青磁碗 中国磁器、国産焼締陶器 在地土器、石臼、渡来銭	旧利根川の広瀬川低地帯内の自然堤防に形成された集落遺跡。 弥生時代後期に居住が開始された可能性がある。 中世には環壕集落が存在したと考えられる。

# 第1章 調査の経過と概要

主要地方道藤岡・大胡線道路改築事業に伴う笄井中屋敷遺跡の発掘調査は、平成5年度から平成8年度までの3年間にわたって実施した。調査対象地は、藤岡・大胡線が桃ノ木川を渡る箇所から南に約320mまでで、幅は約15mである。発掘調査にあたっては、調査対象地内の家屋移転の関係もあり、発掘調査可能な地点より順次着手していった。また、調査中に家屋移転が終了した地点に関しては試掘調査を行い、遺構が確認された場所を順次発掘調査対象地に加えていった。

遺構測量の基準点には、日本平面直角座標系第Ⅸ系のX=40100m、Y=-62252mを基準点とし、この座標に沿って調査対象地に4m方眼をかけた。このグリッドの呼称は、X軸を南から北へアラビア数字を用い、東から西へはアルファベットを用いて南東隅を基点とした。

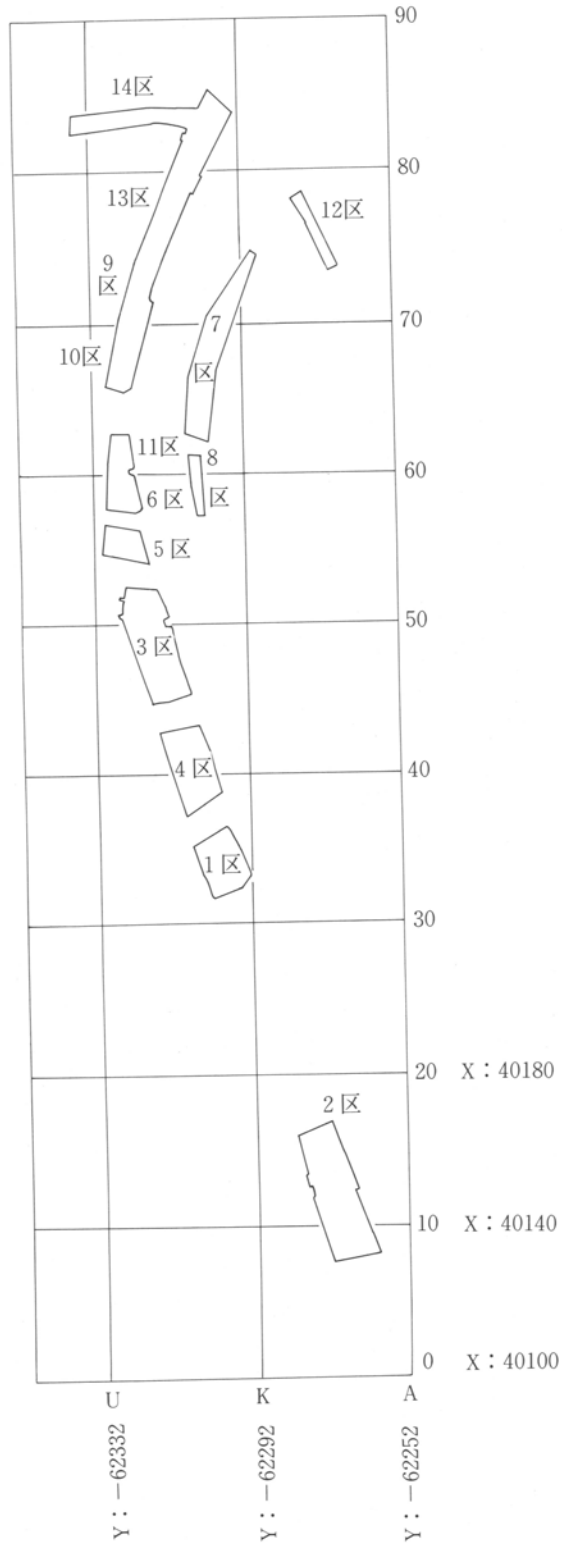
調査区名は、調査可能な地点から順次調査を行ったことと、調査中に行う試掘結果によっては調査を行う必要のない地区ができることが予測されたため、調査順に調査区名を付してゆくこととした。

以下調査年次毎に経過を報告する。

## 平成5年度（第1次調査）

平成4年に行われた県文化財保護課の試掘調査は、家屋移転の関係から2区、3区南半、1区と2区の間しか行えなかった。この結果、1区と2区の間は浅い旧河道であること、2区と3区南半に竪穴住居が存在することが明らかとなった。

当初、先の2地点の調査を目的としていたが、調査に先立ち作業員の駐車場確保のため、1区の試掘をしたところ遺構が確認された。このため、1区から調査を開始し、2区、3区と調査を進めた。また、この間に家屋移転の終了した4区から8区の試掘調査を行い、すべての地点で遺構が確認され、面的に調査可能な5区の調査を行った。



第1図 グリッド設定図  
(国土座標系第Ⅸ系)

## 第1章 調査の経過と概要

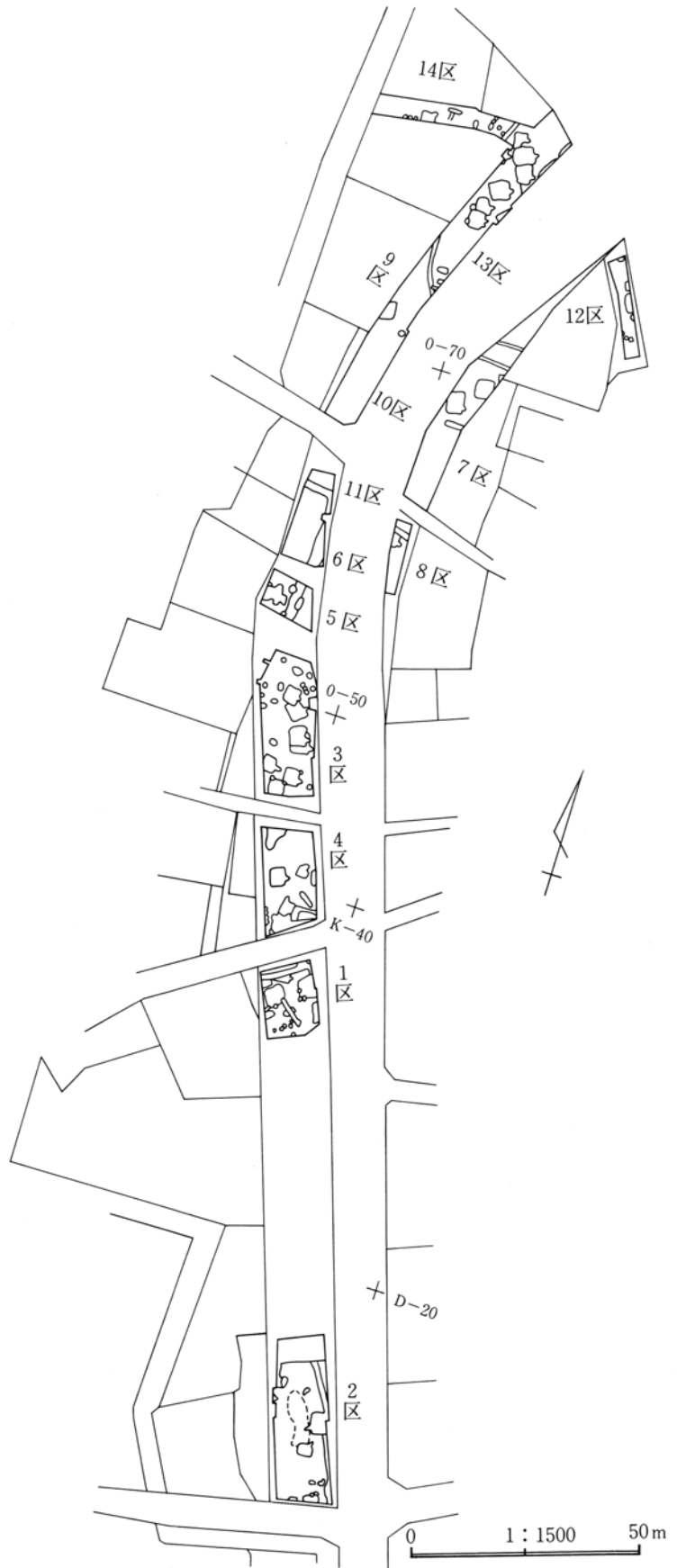
これらの結果、家屋移転未了の地点においても遺構が確認される可能性が高くなり、年度当初の調査計画内での調査終了が困難となった。そこで、本年度は移転が終了している5区までの調査を行い、他は次年度以降に行うこととした。

1区から5区では、奈良・平安時代の竪穴住居28棟、同溝2条、中世の堀2条などが確認された。この中の1軒の住居は、構築時に噴砂を削っていた。また、現状の地形では不明瞭であったが、1区と2区の間は浅く谷地状にくぼみ、旧河道の蛇行部分である可能性が考えられた。2区以南については、基盤となる礫層が急激に深くなり、旧河道であることが明瞭であった。この旧河道は、県文化財保護課の試掘調査や工事中の断面観察の結果、火山灰の堆積や遺構は確認されなかった。

### 平成6年度（第2次調査）

本年度は、昨年度の試掘によって遺構が確認された地点（7区、8区）や、同一の溝が続くと予測される地点（6区、11区）を中心に調査を行った。また、現桃ノ木川の堤防に近い12区や10区においても遺構が確認された。本年度においても家屋移転が完了しておらず、一部の地点は移転を待って試掘を行うこととなった。

確認された遺構は、古代では竪穴住居6軒と少なく、集落の中心からやや離れた地点であることが判明した。しかし、現桃ノ木川の堤防際でも住居が確認されたことにより、現河道が自然堤防を貫いていることが明瞭となった。中世では、昨年度調査した堀の延長が確認されるとともに、新たに1条が確認された。



第2図 調査区設定図

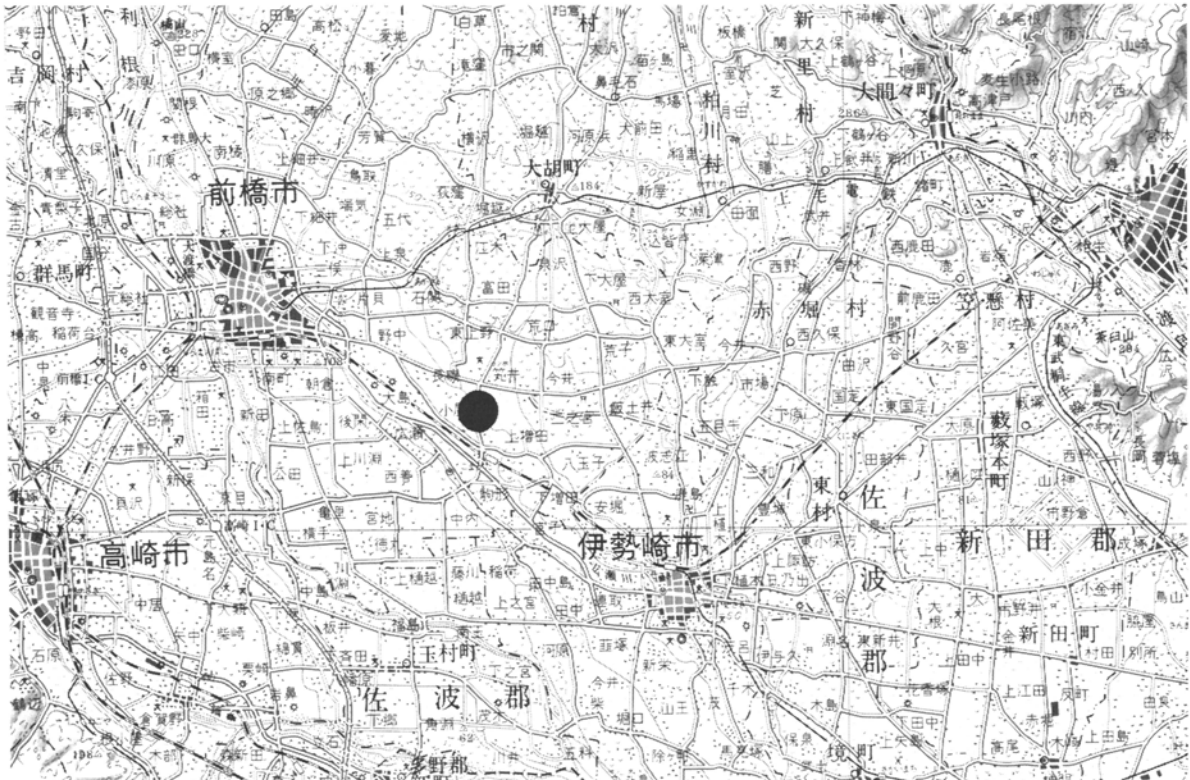


平成8年度（第3次調査）

平成6年度の調査終了後、最後まで残った家屋の移転を待って平成7年度に県文化財保護課が試掘調査を行った。その結果、竪穴住居の存在が明らかとなり、平成7年度に本調査を行うこととなった。

12区、13区とした本年度調査対象地は現桃ノ木川

堤防に近く、昨年度調査した箇所の西側にあたることから住居分布は希薄であろうと推測していたが、古墳時代後期を中心に12軒が確認された。中世では、堀は確認されなかったが、土坑墓3基が狭い範囲で確認された。



第3図 遺跡位置図

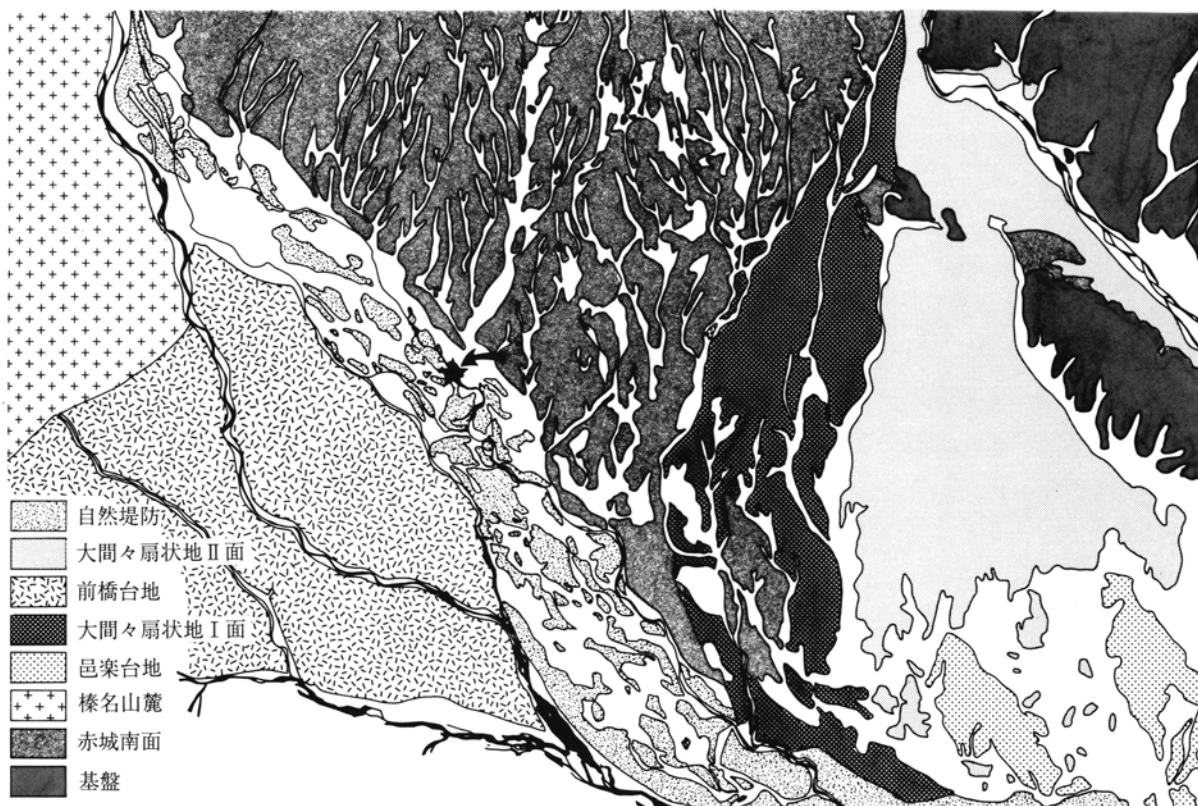
## 第2章 立地と周辺の遺跡

### 第1節 遺跡の立地

筑井中屋敷遺跡は、前橋市筑井町930番地ほかに所在し、小字名では中屋敷にあたる。遺跡の所在する前橋市は、地形的に大きく赤城山麓、前橋台地、広瀬川低地帯、利根川氾濫原の4つに区分される。赤城山は、我が国でも最大級の成層火山であり、山体は急斜面の山頂部と緩斜面の広い山麓から構成され、山麓には火山砕屑層が堆積している。特に南斜面は関東平野に接し、障害物がなかったために平均勾配2度内外の非常に緩い傾斜の山麓が広がっている。南側山麓の末端は、旧利根川の形成した沖積低地に接し、その部分は直線的な山麓崖をなしている。前橋台地は、利根川が榛名山と赤城山山麓の間から関東平野に流れ出したところに広がる緩傾斜の台地

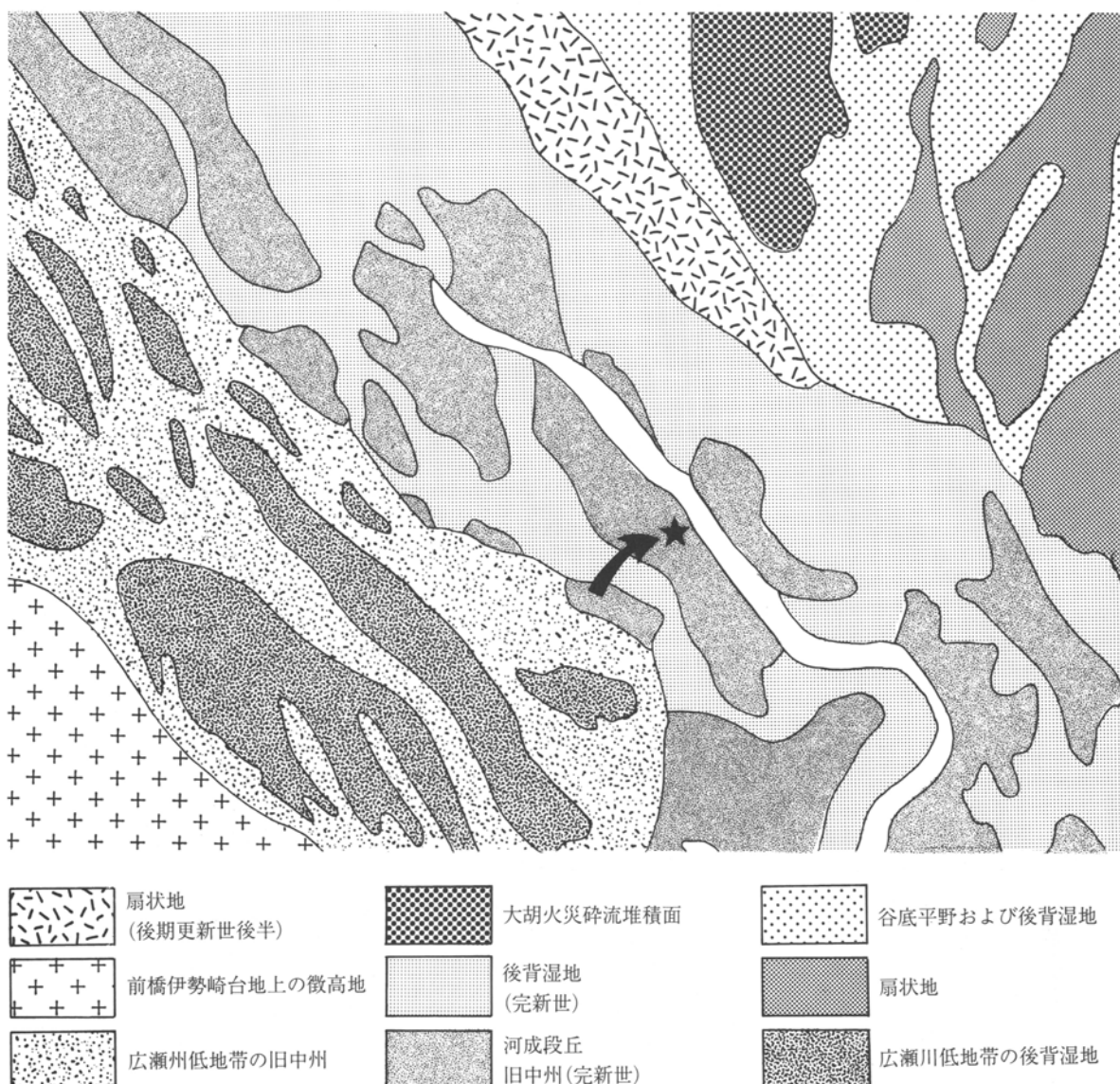
である。<sup>(1)</sup>この前橋台地と赤城山南側山麓の間には、前橋市関根町付近から境町付近にかけて幅約3km、長さ約30kmの長い沖積低地が広がっている。現在この低地帯中もっとも大きい河川が広瀬川であるため「広瀬川低地帯」と呼ばれている。広瀬川低地帯は、現在の利根川流路が不自然であること、現在の河川で形成されるには大規模すぎることなどから、旧利根川流路であると考えられている。<sup>(2)</sup>

広瀬川低地帯は、決して平坦ではなく各所に微高地（自然堤防）が認められ、その部分は集落や畑として利用されている。筑井中屋敷遺跡もこのような微高地上に立地する。



『アーバンクボタNo.19』により作成

第4図 赤城山南麓周辺の地形



『群馬県史 通史編1』により作成

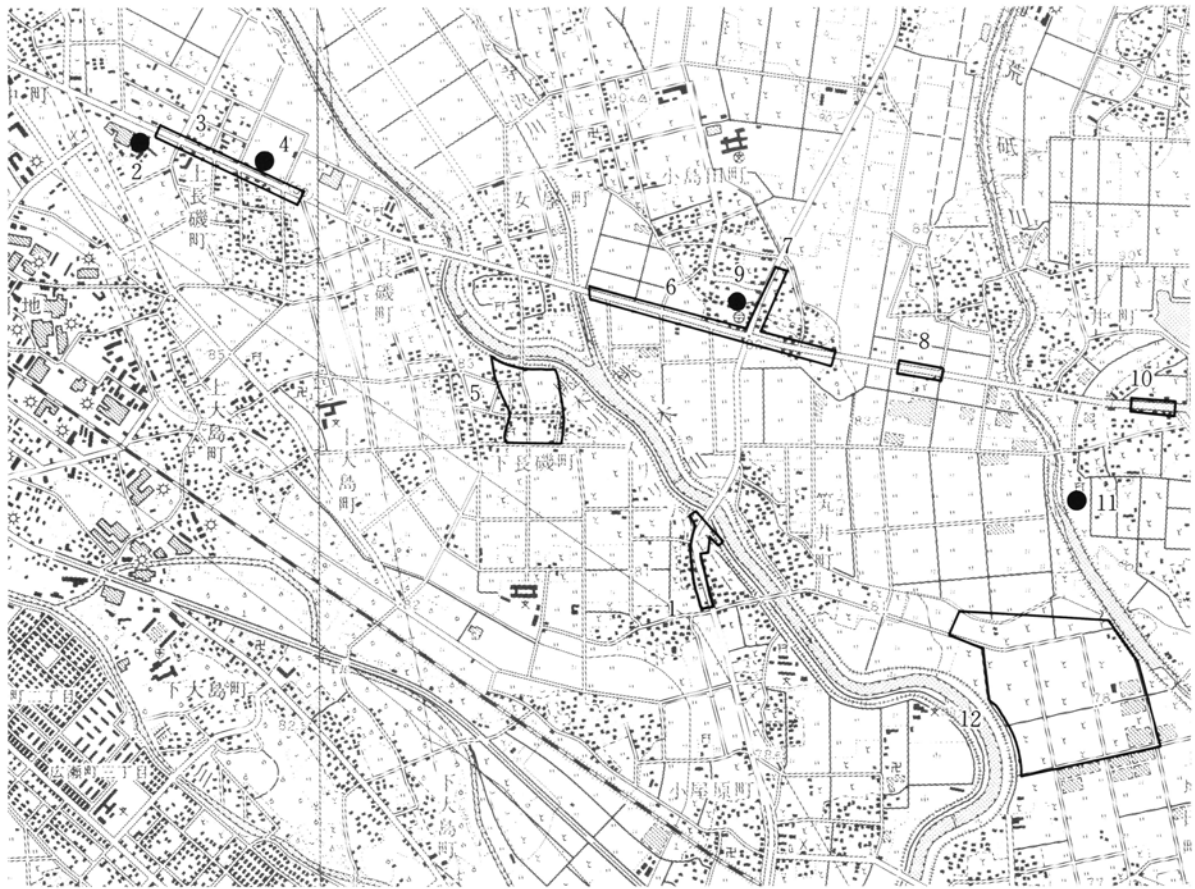
第5図 遺跡周辺の地形

## 第2節 周辺の遺跡

遺跡の密集地である赤城山麓と多くの水田や集落が確認されている前橋台地に挟まれた広瀬川低地帯は、1971年発行の『前橋市史』<sup>(1)</sup>に縄文後期の土器や耳飾りが出土していることが報告されていたが、その後、低地帯内の遺跡分布に触れる文献はなかった。しかし1984年、設楽博巳氏は前出の遺跡を西新井遺跡と命名し、「2つの小集団が併存して1つの集落を形成していたもの」と推測した。<sup>(3)</sup>一方、発掘調査では、1984年と1985年に相次いで発行された『青

柳寄居遺跡』<sup>(4)</sup>と『茶木田遺跡』<sup>(5)</sup>の報告書により、この低地帯での遺跡の存在は確実なものとなった。その後、前橋市教育委員会による橐遺跡<sup>(6)</sup>、伊勢遺跡<sup>(7)</sup>、中原遺跡群や国道50号改築工事に伴う今井白山遺跡<sup>(8,9)</sup>、筑井八日市遺跡<sup>(11)</sup>、野中天神遺跡<sup>(12)</sup>などの発掘調査が行われた。これらの結果、広瀬川低地帯は縄文後期以降人々の生活の舞台となり、時には生産の場として利用されていたことが明らかとなってきた。これらの遺跡の分布や内容を見ると、低地帯内の自然

第2章 立地と周辺の遺跡



国土地理院発行2.5万分の1地形図「前橋・大胡」使用

第6図 周辺の遺跡位置図

堤防上には、ほとんどの場合遺跡が存在すると考えられ、従来のように広瀬川低地帯を特別視する必要はないであろう。また、可能性として、広瀬川低地帯周辺の遺跡一覧表

帯内の遺跡分布や時期は、前橋台地上のそれと同様であると考えられ、今後比較してゆく必要がある。

位置図	遺跡名	主な時代と遺構	立地	文献
1	笄井中屋敷		低地帯	本報告書
2	藁	古墳後期：竪穴住居	低地帯	『藁遺跡』前橋市教育委員会1991
3	野中天神	古墳～平安：竪穴住居 平安時代（As-B下）：水田 中世：掘立柱建物、井戸、土坑墓	低地帯	『野中天神遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
4	伊勢	奈良～平安：竪穴住居	赤城山麓	『伊勢遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
5	下長磯城	中世	低地帯	『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988
6	笄井八日市	縄文：土坑 古墳：竪穴住居、方形区画 平安（As-B下）：水田 中世：溝、井戸	低地帯	『笄井八日市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
7	小島田八日市	縄文草創期：ピット、包含層 中世：堀、竪穴遺構、井戸 近世：井戸、土坑	赤城山麓	『年報-12-』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
8	今井白山	縄文中期：敷石住居 弥生：土坑 古墳～平安：竪穴住居	低地帯	『今井白山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993

周辺の遺跡一覧表

位置図	遺跡名	主な時代と遺構	立地	文献
9	小島田供養碑	仁治元年(1240)の記念銘 前橋市指定重要文化財	赤城山麓	『木瀬村誌』木瀬村誌編纂委員会 平成7年
10	今井道上	古墳中期～後期：竪穴住居 平安：竪穴住居、掘立柱建物 奈良～平安：方形区画 中世：竪穴遺構	赤城山麓	『今井道上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
11	今井神社古墳	5世紀後半、全長69mの前方後円墳。20数基からなる古墳群を形成	赤城山麓	『今井神社古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
12	中原	古墳前期～中期：竪穴住居 奈良～平安：竪穴住居 古墳代前期：遺物包含層 古墳～平安代：畝状遺構 平安(818年洪水層下)：水田 中世：集石遺構 近世：井戸、土坑	低地帯	『中原遺跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993 『中原遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994
	西新井	縄文後期：集落？ 耳飾りや土器が表採されている。	低地帯	設楽博巳「前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料(上)」 『群馬考古通信』第9号 1984
	石関西築瀬	古墳～奈良：竪穴住居	低地帯	『石関西築瀬遺跡 西片貝源田島遺跡』石関西築瀬遺跡調査会 1996
	西片貝源田島	中世：茶毘所、竪穴遺構	低地帯	『石関西築瀬遺跡 西片貝源田島遺跡』石関西築瀬遺跡調査会 1996
	青柳寄居	平安：竪穴住居 奈良～平安？：水田	低地帯	『青柳寄居遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984
	茶木田	奈良～平安：竪穴住居 中世：井戸	低地帯	『茶木田遺跡』前橋市教育委員会 1985

## 注

- (1) 尾崎喜左雄ほか 『前橋市史』第1巻 前橋市 昭和46年
- (2) 早田 勉 『群馬県の自然と風土』『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県 1990
- (3) 設楽博巳 『前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料(上)』『群馬考古通信』第9号 1984
- (4) 前原照子 『青柳寄居遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984
- (5) 唐澤保之 『茶木田遺跡』前橋市教育委員会 1985
- (6) 遠藤和夫ほか 『糞遺跡』前橋市教育委員会 1991
- (7) 荻野博巳 『伊勢遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
- (8) 都所敬尚ほか 『中原遺跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993
- (9) 荻野博巳ほか 『中原遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994
- (10) 飯島義雄 『今井白山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (11) 坂口 一 『笄井八日市遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (12) 坂口 一 『野中天神遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996

## 参考文献

- 奥富雅之ほか 『石関西築瀬遺跡 西片貝源田島遺跡』石関西築瀬遺跡調査会 1996  
 女屋和志雄ほか 『木瀬村誌』木瀬村誌編纂委員会 平成7年  
 坂口 一 『今井道上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994  
 峰岸純夫、能登 健 『赤城南麓の開発と遺構《女堀》』『アーバンクボクNo19』久保田鉄工株式会社 1981  
 山崎 一ほか 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988

## 第3節 基本土層

本遺跡は前項で触れたように沖積地に立地しているため、礫層上に砂質土が堆積する点において全地点共通している。基盤をなす礫層の標高を比較すると、旧河道に接する2区南(第7図右)では、4区(第7図中央)に比して約2m低い。最も高い4区北側では、表土直下が礫層となっていた。遺跡の存

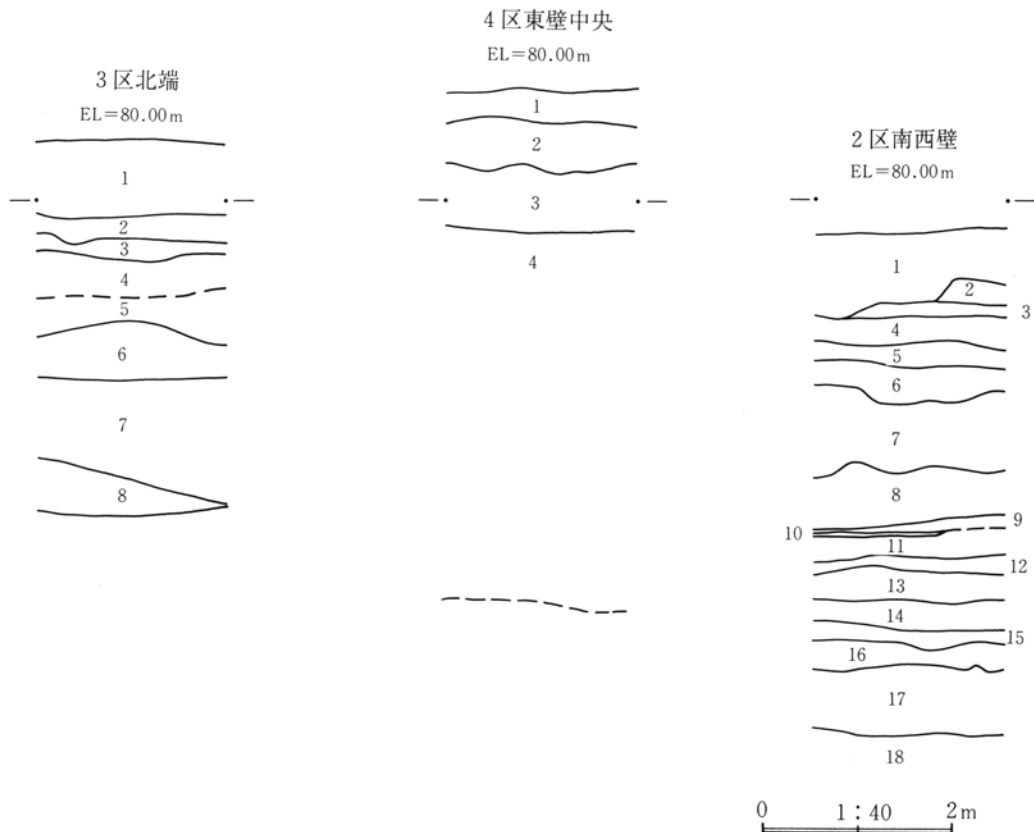
在する自然堤防は、2区が最も低く、1区、4区が最も高くなっている。4区以北はしだいに低くなるが、ほとんど平坦に近く、現桃ノ木川の堤防に至る。この自然堤防は、地形観察や空中写真によって桃ノ木川の対岸にまで連続していることは确实である。この自然堤防の高い部分には、奈良・平安時代の住

第2章 立地と周辺の遺跡

居が集中する傾向が認められた。一方、古墳時代後期の住居は、やや低い13区に集中する傾向が認められた。

や細砂層が堆積し、更にその上に褐色を帯びた土が堆積している。各遺構は、この土層を掘り込んでい

る。礫層上の堆積は各地点によって差があるが、砂層



- 4区
1. 盛り土
  2. 暗褐色壤質砂土層
  3. 黒褐色壤質砂土層 焼土粒を少量含む。住居が削平されていたか？本来ならば下に淡黄褐色細砂層が存在する。
  4. 砂礫層
- 3区北端
1. 盛り土
  2. 1層と3層の混土層
  3. にぶい橙色土層
  4. オリーブ灰色細砂層
  5. オリーブ灰色細砂層 4層と同層位であるが、礫を含む。
  6. 砂礫層
  7. 砂層南下がりのラミナ堆積。
  8. 砂礫層

- 2区
1. 盛り土
  2. 褐灰色砂壤土層
  3. 暗赤褐色砂壤土層 角閃石安山岩粒、As-C?含む。堅穴住居より古い堆積。
  4. 明黄褐色シルト層 2区の遺構確認面。
  5. 4層と6層の漸移層
  6. 暗褐色細砂層
  7. 明黄褐色砂層 1区の遺構確認面。1区では本層以下礫層となる。
  8. 砂層
  9. オリーブ褐色砂層
  10. 暗灰黄色細砂層
  11. 黒褐色砂層
  12. 暗褐色砂層
  13. 暗褐色シルト層 有機質を含みや粘性あり。
  14. 暗褐色シルト層 砂を少量含む。
  15. 黒褐色シルト層 粘性あり。
  16. 褐灰色シルト層
  17. 砂層
  18. 砂礫層

第7図 基本土層

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 住居

#### 1号住居

**位置** N-34グリッド。1区西寄りに位置する。

**形状** 南北方向にやや長い長方形を呈する。規模は長軸長5.5m、短軸長4.4mを測る。

**周壁・周溝** 周壁は全周するが、調査の都合上、重複遺構を同一図としたため、部分的に図化されていない。壁高は22~48cmである。周溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色壤質砂土単一で埋まり、堆積状態を判断することは困難であるが、川原石が住居内東寄りに比較的まとまって出土していることから、人為堆積と推定される。

**床面** 地山が砂質土であるため、床面が確認できないまま地山の砂礫層にまで達してしまった。断面観察においても床面は確認できなかったが、図化した面が掘り方であろう。また、住居内東寄りで、直径40cm深さ15cm程のピットが確認されているが、その性格は不明である。

**竈** 東側壁で少量の焼土分布が認められたが、灰層や壁への掘り込み、粘土など竈の痕跡も確認できなかった。

**遺物出土状態** 土師器の杯・甕、須恵器の杯・甕の破片が出土している。底面付近から出土した土器類は少量で、出土遺物のほとんどが川原石とほぼ同じレベルで出土している。住居廃絶後に廃棄されたものであろう。図化した遺物も底面から10cm以上、上から出土しているが、底面付近出土の土器小片と比較し、明瞭な時期差は認められなかった。

**その他の遺構との重複関係** 1・3号溝、3号土坑と重複している。確認状況から各遺構よりも、本住居のほうが新しい時期のものである。

#### 2号住居

**位置** L-35グリッド。1区東寄り、1号住居の4mほど東に位置する。

**形状** 東壁が調査範囲外に存在するが、交通量の多い県道と電柱に近接し、危険防止を考えて拡張を行わなかった。形状は、南東隅が確認されているので長方形であろう。確認できた部分の規模は、長軸長4.7m、短軸長3.2mを測る。

**周壁・周溝** 周壁は調査範囲外の部分を除いて遺存し、壁高は38~58cm程である。周溝は確認できなかった。

**埋没土** 暗褐色土を主体とし、堆積状態が判断し得る状態ではないが、埋土中に川原石が集中する部分が存在することから人為堆積と推定される。

**床面** 地山の礫が多量に出土し、明瞭な床面は確認できなかった。確認された面は、北から南に向けて徐々に低くなる傾向があり、両端で10cm前後の高低差が認められる。実際の床面は、竈周辺の焼土分布から、砂礫層直上であったと推測される。したがって、図示した平面図は、正確には掘り方であろう。

**竈** 竈そのものは確認できなかったが、貯蔵穴の位置や土層（4層）から、東壁南寄りに位置していたと考えられる。付近からは、袖石として使用したと考えられる。長さ50cmほどの石が出土している。

**貯蔵穴** 住居東南隅に位置し、規模は直径50cm、深さ18cm程である。底部からは、破片であるが、土師器甕（第9図1）が据え置かれたような状態で出土している。

**遺物出土状態** 竈の周辺から土師器甕を主体とした破片が出土している。竈の前から、土師器甕の口縁部（第10図2）が出土しており、本住居の時期を示していると考えられる。

### 第3章 遺構と遺物

**その他の遺構との重複関係** 住居北で5号住居、南寄りではピットと重複し、いずれも本住居が新しい。また、住居中央で、直径50cm深さ16cm程のピットが確認されたが床下土坑と考えられる。

#### 5号住居

**位置** L-36グリッド。1区北東、2号住居の北に位置し、2号住居と重複する。

**形状** 北は2号溝、南は2号住居との重複により、周壁は確認できない。東は調査対象地外であるため、壁の一部が確認されたのみである。全体的な形状は不明である。

**周壁・周溝** 壁高は26～36cmで、周溝は確認されなかった。

**埋没土** 埋土は、暗褐色砂壤土単一のように観察され、堆積状態を判断できる状況ではなかった。

**床面** 1・2号住居同様床が確認できず、地山の砂礫層に達している。2号住居のように、砂礫層直上が床面であったと推測される。

**遺物出土状態** 埋土上層から羽釜（第10図3）が出土しているが、2号住居の時期より新しく、2層からの出土であろう。

**その他の遺構との重複関係** 住居南側を2号住居、北側を2号溝によって削られている。また、直径60cm深さ10cm程のピットと直径50cm深さ15cm程のピットが確認されているが、その性格は不明である。

#### 3号住居

**位置** K-34グリッド。1区東寄り、2号住居の東南1.5mに位置する。

**形状** 調査対象地東に位置するため、調査し得たのは西側約1/3のみであった。したがって、形状は不明であり、規模も南北長（4.9m）が判明したのみである。

**周壁・周溝** 周壁は調査対象地外を除いて全体に遺存していた。壁高は16～26cmで、周溝は確認でき

なかった。

**埋没土** 暗褐色壤質砂土の単一層を主体とし、堆積状態を判断しかねる状況を呈していた。

**床面** 掘り込みは地山の砂礫層に達し、床面は確認できなかった。図示した面は、北から南に向けて徐々に低くなる傾向があり、両端で10cm前後の高低差がある。この面は、掘り方の可能性が高い。また、住居南半の2基のピットは掘り方であろう。

**竈** 他の住居の竈位置から、東壁に構築されている可能性が高い。

**遺物出土状態** 住居内から出土した遺物はわずかである。遺物のほとんどは、住居廃棄後に流れ込んだものと考えられる。

#### 4号住居

**位置** O-35グリッド。1区北西、1号住居の北西隣に位置する。

**形状** 竈のある東辺のみ確認された。北が2号溝によって破壊され、西側の大半が調査対象地外に位置するため、全体の形状は不明である。

**周壁・周溝** 周壁は調査対象地外を除き遺存していた。壁高は38～44cmで、周溝は確認されなかった。

**埋没土** 竈周辺のため、焼土粒を多量に含む暗褐色土を主体とし、自然の埋没状況を示していた。

**床面** 掘り込みは地山の礫層付近にまで達している。明瞭な床面は確認されなかった。

**竈** 住居東辺に位置している。燃烧部は住居壁より外側に出る形式である。規模は、竈幅120cm、燃烧部奥行き約40cmを測る。燃烧部の外側には煙道部が40cm程確認された。

**遺物出土状態** 竈内と竈前面から土器の小片が少量出土したのみである。

**その他の遺構との重複関係** 住居北側を、中世の2号溝に壊されている。



## 6号住居

**位置** N-35グリッド。1区北寄り、1号住居の北東1mに位置する。

**形状** 竈のある東辺、及び南辺の一部のみ確認された。全体的な形状は不明であるが、時期や竈の位置から長方形と推測される。

**周壁・周溝** 周壁は、2号溝と重複した部分を除いて遺存していた。壁高は19～23cmで、周溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色土層の単一層で埋没し、堆積状態を判断しかねる状況であった。

**床面** ほぼ平坦であるが、明瞭な床面は確認できなかった。掘り方は確認できず、床面構築に際してほとんど土の入れ替えを行っていないようである。

**竈** 住居東辺の南に位置する。燃烧部のほとんどが住居内部にある形式である。規模は、焚口幅が約40cm、燃烧部奥行き約50cmを測る。煙道部は住居の外側で50cm程確認された。

**遺物出土状態** 竈内から小片が出土している。住居の規模が不明であるが、2号溝の北側で古代の土器が少量出土しているが、本住居に伴うか否かは不明である。

**その他の遺構との重複関係** 住居北側を、新しい時期の2号溝に切られている。また、2号溝を挟んだ反対側で、やや硬い貼り床状の土層が認められ、本住居床面の可能性も考えられるが、この部分を含めると住居の規模がかなり大きくなり、この時期としては一般的ではない。

## 7号住居

**位置** F-11グリッド。2区中央やや南寄りに位置する。

**形状** 西側は攪乱によって破壊され、東半部のみ確認された。全体的な形状は不明であるが、竈の位置や時期から考えて長方形と推測される。

**方位** N-13°-W

**周壁・周溝** 周壁は、西側攪乱部分を除き遺存し

ていたが、残存状態が悪く壁高は14～22cmとやや低いというに直線的ではなかった。周溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色土層単一で埋没し、埋没状態を判断し得る状態ではなかった。竈周辺では、焼土粒を多量に含んでいた。

**床面** ほぼ平坦である。全体的に均質に、土を入れ替えて面を作っていたが、硬化した部分は確認されなかった。

**竈** 住居東辺南寄りで2基確認された。両者は新旧の関係にあり、最初に使われたのが南東隅のもの、住居廃絶直前に使用されていたのが残存状況のよい北側のものである。東南隅の竈は、規模が北側竈より小さく、煙道部は住居外側で50cm程確認された。煙道部天井が一部残存していた。北側の竈は、規模が大きく、燃烧部が住居壁よりやや外側に出る形式である。燃烧部から煙道部にかけて、多量の焼土が分布していた。また、燃烧部から煙道部にかけて天井が崩落しないで残っていた。燃烧部と煙道部に段差や傾斜はなく、ほぼ水平に延びた後、急傾斜で地表に向けて立ち上がる。この煙道の特徴は、本遺跡の平安時代住居に共通する。竈規模は、焚口幅が約40cm、燃烧部奥行き約50cm、煙道部は天井残存部から外側で約60cmを測る。

**遺物出土状態** 住居北寄りの攪乱との境、床面直上から須恵器椀（第14図1）が出土している。他には出土遺物がほとんどなく、図示した遺物も攪乱との境に位置し、住居の時期を示す資料とするには不安がある。

**その他の遺構との重複関係** 住居西側が、攪乱によって削り取られている。また、住居東南隅で竈が8号住居と重複し、本住居が新しい。

## 8号住居

**位置** E-10グリッド。2区中央部やや南寄りに位置する。

**形状** 東西方向に長い長方形を呈する。規模は、

### 第3章 遺構と遺物

長軸長2.62m 短軸長3.35mを測る。

方位 N-4.5°-W

**周壁・周溝** 周壁は、7号住居に切られた北西隅を除き遺存していた。壁高は18～21cmで、周溝は確認されなかった。

**埋没土** におい黄褐色土を主体とし、自然の埋没状況を示していた。竈周辺では、若干焼土粒を含んでいた。

**床面** ほぼ平坦であるが、硬化した部分は確認されなかった。掘り方は、南東隅で直径78cm深さ32cm程の床下土坑が確認されたのみで、土の入れ替えは行っていない。

**竈** 住居北東隅に位置している。燃焼部が住居外にある形式である。規模は、焚口幅約38cm、燃焼部奥行き約45cmを測る。焚口部には河原石が門柱状に据えられ、中央はややくぼんでいた。また煙道部は、燃焼部すぐ外側の長さ30cm幅30cm程が崩落せずに遺存しており、全体では長さ75cm程が確認された。燃焼部と煙道部には、段差や傾斜がなく、立ち上がり部分で急激に地上に向かって立ち上がる。

**遺物出土状態** 遺物の出土量は少なく、集中箇所もないが、住居東側から比較的多く出土する傾向が認められた。これらの中には、床面から出土した須恵器椀（第15図1）と土師質土錘（第15図2）が含まれ、後者は住居の時期を示すと考えられる。

**その他の遺構との重複関係** 7号住居と重複し、本住居が古い。

#### 9号住居

**位置** E-12グリッド。2区中央、東寄りに位置する。

**形状** 住居東側は調査対象地外のため、全体的な形状は不明。確認された範囲の規模は、長軸長4.62mを測る。また、調査の都合上、同一住居を2回に分けて調査したため、床面の状態に差が生じてしまった。

方位 N-14.5°-W

**周壁・周溝** 周壁は、調査対象地外を除き遺存し

ていた。壁高は32～37cmで、周溝は確認されなかった。

**埋没土** 灰褐色壤質砂土単一で埋没し、埋没状態を判断できない状況であった。竈周辺では、若干焼土粒を含んでいた。

**床面** ほぼ平坦である。他の住居に比して床面の確認は容易であり、全体的に土を入れ替えて床面を作っている。住居中央で2カ所、焼土の広がりや確認され、炭化物もかなり認められており、焼失家屋の可能性が高い。床下では、竈前部で直径35cm深さ44cm、住居東南隅で直径38cm深さ39cm程の床下土坑が確認され、この部分の床面はやや陥没していた。また、住居北東部は、やや深く掘り込んでいる。

なお、住居の基盤が細砂層であるため、掘り方下で規模の小さい噴砂痕が断面で確認された。断面観察では、噴砂痕を住居構築時に削っていることが確認された。また、住居西側に存在した奈良時代の土器を含む黒色土の浅いくぼみでは、その黒色土を噴砂痕が突き抜けていた。したがって、この噴砂は、奈良時代以降、平安時代後期以前の地震によって発生したものと考えられる。

**竈** 住居西側の南隅に位置している。燃焼部が住居外に出る形式である。規模は、焚口幅約38cm、燃焼部奥行き約60cmを測る。また、焚口から河原石が確認されたことから、焚口から河原石が確認されたことから、焚口から河原石が確認されたことと推定される。燃焼部から住居内にかけて薄く灰層が広がっていた。煙道部は、燃焼部すぐ外側の長さ75cm、幅30cm程が崩落せずに遺存しており、全体では長さ100cm程が確認された。煙道はほぼ水平に延び、排出部で急激に立ち上がる。

**遺物出土状態** 川原石が床面に多く認められたが、明確な加工痕や使用痕は認められなかった。遺物の出土量は多くないが、平根式鉄鎌（第17図6）、鎌（第17図7）などが床面や床面直上から出土している。

**その他の遺構との重複関係** 南側で、4号溝を切っており、本住居跡が4号溝より新しいことが確認できた。

## 10号住居

**位置** E-8グリッド。2区南端、やや西よりに位置する。2区の南端は、幅4mほどの道路を挟んで南側は急激に標高が下がり、旧河道となる。したがって、本住居が調査対象地内の南端の住居である。

**形状** 北東コーナー部のみ確認された。住居北西部は攪乱によって切られており、南は調査対象地外である。全体の形状は不明である。

**周壁・周溝** 本住居は、2区の表土掘削を開始した地点にあたり、確認面を確定する段階で確認された。このため、プラン確認時点においてすでに掘り方の状態であった。したがって、遺存していたのは掘り方の周壁である。掘り方での残存壁高は5～12cmである。

**床面** 平面での確認は掘り方のみであったが、断面観察により床面が確認できた。

**竈** 他の住居の竈位置から推察すると、調査対象地外に存在すると考えられる。

**遺物出土状態** 遺物は出土していない。

## 11号住居

**位置** D-8グリッド。2区南端、やや東寄りに位置する。2区の南端は、幅4mほどの道路を挟んで南側は急激に標高が下がり、旧河道となる。したがって、本住居が調査対象地内の南端の住居である。

**形状** 南側が調査対象地外のため、住居北半のみの調査となった。全体の形状は不明であるが、おそらく長方形であろう。

**周壁・周溝** 本住居は、2区の表土掘削を開始した地点にあたり、確認面を確定する段階で確認された。このため、プラン確認時点において床面の状態であった。したがって、周壁は、掘り方の周壁である。周壁は、ピットや攪乱に切られているほかは、遺存していた。壁高は13cmである。

**床面** ほぼ平坦である。全体的に土を入れ替えて面を作っていた。

**竈** 本住居より新しいピットに切られていたが、

住居東辺の壁寄りで確認された。残存状況は不良であるが、東壁外側に張り出していることが確認できた。

**遺物出土状態** 竈周辺の床面から、土器小片が少量出土し、埋土出土の内面に暗文風の刻線を施す土師器杯（第19図1）を図示した。なお、北東隅の床面直上からは、不明鉄製品（第19図2）が出土している。

**その他の遺構との重複関係** 新しい時期のピットが住居東壁を切っている。

## 13号住居

**位置** Q-48グリッド。3区ほぼ中央やや東よりに位置し、14号住居と重複する。

**形状** 南北方向に長軸を取る長方形プラン。長軸長4.40m、短軸長3.42mを測る。

**方位** N-14°-W

**周壁・周溝** 中央住居群のなかでは遺存状態がよく、壁高は34～38cmを測る。14号住居と重複するが、本住居が新しく、周壁は全周する。周溝は確認されなかった。

**埋没状況** 褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる埋没過程を示している。

**床面** におい黄褐色砂層の地山をそのまま使用している。わずかに北側で砂礫層の上面を床面として使用している。比較的平坦である。硬化した床面は認められなかった。

**竈** 東壁中央やや南寄りで、左袖・天井部が崩れた状態で確認された。燃焼部中央に自然石を利用した支脚が遺存していた。燃焼部の壁は焼けて赤化していた。右袖は石を芯材にして褐色粘質土を積んで作っている。燃焼部中央よりやや焚口寄りで15cmほど掘り下げた掘り方があり、褐色粘質土と焼土・炭化物の含まれた土で埋められていた。また、燃焼部には、支脚を立てた小ピットが穿たれていた。

**貯蔵穴** 住居の南東隅で15cmほどすり鉢状に掘り下げている。中から土師器甕の胴部破片が出土し、

### 第3章 遺構と遺物

中央やや北よりの床面出土片と接合（第22図3）している。掘り方調査中に確認したが、位置と形状から貯蔵穴と判断されたため、床面図に掲載した。

**遺物出土状態** 貯蔵穴内と住居北西隅付近に遺物が集中し、西壁付近では散在していた。遺物のほとんどは床面か直上からの出土であり、住居の時期を示す土器と考えられる。これらのうち、北西隅の床から7cm上から出土した須恵器杯（第22図1）と西壁付近から出土した土師器杯（第22図2）、土錘（第22図4）などを図示した。なお、土師器杯は床面出土、土錘は埋土出土である。

**その他の遺構との重複関係** 住居南側で時期的に先行する14号住居を切っていた。

#### 14号住居

**位置** P-48グリッド。3区中央やや東寄りに位置し、13号住居と重複する。

**形状** 南北方向に長軸をとる長方形プラン。長軸長4.60m、短軸長3.90mを測る。

**方位** N-8°-W

**周壁** 13号住居同様遺存状態はよいが、北西部分が13号住居に壊され、床面積は1/3以下である。壁高は30～34cmを測る。

**周溝** 床面調査時には不明瞭であったが、掘り方調査時に確認できた。溝は、南側の壁中央から西側の壁にかけて巡り、幅20cm程、深さ10cm程であった。

**埋没状況** 褐色土を主体にして、周囲からの流れ込みによる埋没過程を示している。

**床面** におい黄褐色砂層の地山をそのまま使用している。地山が砂質であるため、硬化した床面は確認できなかった。

**竈** 東壁南寄りで、左袖・天井部が崩れた状態で確認された。右袖は褐色粘質土で構築されていたが、僅かに残存していた程度である。燃焼部の壁は全体によく焼土化し、底部には灰が良好に堆積していた。

**遺物出土状態** 南壁中央部から、土師器杯が2点（第23図1・2）壁に貼り付くように出土した。そ

の出土状態から、棚状の施設から落ちた状態とも推測される。

**その他の遺構との重複関係** 北西の2/3程が13号住居と重複し、本住居が古い。

#### 15号住居

**位置** Q-50グリッド。3区中央やや東寄りに位置する。調査行程の都合、南半分を調査して埋め戻した後に北半分を調査せざるを得なかった。

**形状** 平面形は、ほぼ長方形を呈し、規模は長軸長4.00m、短軸長3.76mを測る。

**方位** N-40°-W

**周壁・周溝** 西側を一部攪乱により削平され、北壁を29号住居により削られている。壁の遺存状態は良く、壁高は40～56cmを測る。

**埋没状況** 褐色土と暗褐色土を主体とし、周囲からの埋没した自然堆積を示している。

**床面** 比較的平坦である。全体に土を入れ替えて面を作っていたこともあり、硬化していないものの明瞭に確認できた。特に中央部で約15cmほど掘り下げて土を入れ替えていた。

**竈** 東壁中央とやや南よりの2カ所で確認された。先に述べたように、住居を2回に分けて調査した関係で、2基の竈も1基毎の調査となり、断面で新旧関係を確認する事は不可能であった。しかし、竈の残存状態が大きく異なることから、北側が古く、南が新しいと判断できた。南側に位置する新しい竈の燃焼部は、住居内に位置し、左側壁の基部が長さ50cm、右側が長さ30cmにわたって確認された。煙道部にさしかかる部分の壁は、かなり焼土化しており、この部分の傾斜は、約45°の急傾斜をなす。

北側の古い竈は、壁から僅かに張り出した燃焼部の痕跡と煙道部にいたる傾斜部分が残っていた程度である。煙道部には、煙突に使用したと推定される土師器甕の胴部片が、つぶれて落ち込んだ状態で出土している。かつての燃焼部からは、須恵器杯が2個体（第24図1・2）伏せた状態で出土し、本住居

に伴う遺物と考えられる。奈良時代の所産である本住居の煙道は急傾斜であり、平安時代後期の煙道との違いが明瞭である。

**遺物出土状態** 遺物の出土量は少なく、先の竈部分と埋土中の破片を除けば、中央部と北西隅（第25図6）、南西隅（第24図4）、南壁中央（第25図8）から出土している程度である。なお、第25図6の須恵器蓋は、用途不明であるが、天井部内面が使用により摩滅している。

**その他の遺構との重複関係** 29号住居と北側の壁が重複し、本住居が古い。

### 16号住居

**位置** G-13グリッド。2区の北西、すなわち、南側住居群の北に位置する。

**形状** 西側と南東隅を攪乱によって破壊されているため、全体の形状は不明である。南北長は2.5mと小さく、残存部分に竈も確認されていない。他の住居の規模や形態からすると住居でない可能性がある。

**周壁・周溝** 壁高は確認できたところで約25cm程であった。周溝は確認できなかった。

**埋没状況** 褐色土を主体にした周囲からの流入過程を示している。

**床面** 比較的平坦である。

**遺物出土状態** 埋土中から土師器片がわずかに出土したのみであるが、埋土から奈良・平安時代と推定される。

### 17号住居

**位置** G-13グリッド。2区北よりの西端で確認された。

**形状** 東壁に設置された竈部分が、調査対象地内にかろうじて入っている状態であり、形状・規模共に不明である。

**周壁・周溝** 東壁の南寄りと南東隅の一部が確認できた。壁高は17~20cmを測り、周溝は確認できな

かった。

**床面** 竈前面であり、北に向かって灰が認められた。

**竈** 遺存状態が良く、燃焼部の天井部は壊れていたが、煙道の天井は残存していた。煙道は径18cmほどで、燃焼部から60cmほど水平に延びた後立ち上がる。燃焼部・煙道は強く焼けている。また、燃焼部から北側床面に掛けて灰を掻き出している。竈左側の床面から扁平な自然石が出土しているが、用途は不明である。また、焚口付近の両側には、芯材として使用した石の抜き取り痕が認められた。

**遺物出土状態** 遺物の出土はないが、竈の位置と構造から平安時代後期の住居と推定される。

### 18号住居

**位置** Q-46グリッド。3区南側西寄りで確認された。南西の隅が一部調査対象地外になり、完全に調査できなかった。

**形状** 長軸を南北方向にとる長方形プラン。長軸長3.30m、短軸長2.40mを測る。

**方位** N-9°-W

**周壁・周溝** 南西隅を除き、確認された。壁高は17~24cmを測る。周溝は、確認できなかった。

**埋没状況** 暗褐色砂質土を主体にした、周囲からの流入過程を示している。

**床面** 中央部は地山ののぶい黄褐色砂層をそのまま床面としている。周辺部は5cmほど掘り下げ、土を入れ替えて面を作っている。

**竈** 東壁の南隅寄りに構築され、天井部が壊れた状態で確認された。遺存状態が良く、煙道が壁から外側に約90cm水平に出ていた。焚口から南東隅にかけて灰を掻き出している。

**貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物出土状態** 住居内から出土した遺物はわずかであるが、埋土中から須恵器皿（第29図1）、竈前面の床面直上から須恵器羽釜（第29図2）が出土している。

### 第3章 遺構と遺物

その他の遺構との重複関係 西壁中央で10号土坑に切られている。

#### 19号住居

位置 3区南側で確認され、南側1/3ほどが住宅排水関の係で調査できなかった。

形状 南北方向に長軸をとる長方形プランと推定される。

周壁・周溝 壁高は10~17cmを測る。周溝は確認できなかった。

床面 床面は不明瞭であったが、地山のにおい黄褐色砂層および砂礫層をそのまま床面としている。

竈 確認できなかった。周囲の住居から推定して、東壁南よりに存在したであろう。

貯蔵穴 確認できなかった。

遺物出土状態 南西隅で内黒の須恵器椀が出土している。床面より8cmほど上からの出土であるが、住居の時期を示す遺物であろう。

その他の遺構との重複関係 北南西隅で12号土坑に切られている。また、北東隅で11号土坑に切れ、20号住居とも重複する。20号住居との関係は、共に11号土坑より古いため不明である。

#### 20号住居

位置 3区南側で確認された。

形状 南北方向に長軸をとる長方形プラン。長軸長3.90m、短軸長3.10mを測る。

方位 N-5.5°-E

周壁・周溝 北東隅と南西隅を土坑に切られているが全周する。壁高は16~22cmを測る。周溝は、掘り方調査の際に、東壁中央でのみ確認された。

埋没状況 オリーブ灰色土層単一で埋没しており、埋没状況を判断し得ない。

床面 わずかに土を入れ替えて床面を作っている。

竈 東壁南寄りに構築され、天井部、袖が壊された状態で確認された。煙道が壁から外側に約60cmほ

ど水平に出ていた。燃焼部をやや掘り下げている。燃焼部から焚口にかけての下面はよく焼けていた。焚口から南寄りに灰を掻き出していた。

遺物出土状態 土器の小片は、竈付近の出土が多いが、図示し得る個体は、南東隅（第32図3）と西壁際（第32図1・5）などから出土している。

その他の遺構との重複関係 南西隅で11号土坑に切られている。また19号住居と重複するが、関係は不明。北東隅で13号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

#### 21号住居

位置 4区中央で確認された。

形状 後世の削平が著しく、竈と硬化した床面の一部が確認できたのみで、形状は不明である。

周壁・周溝 確認できなかった。

床面 竈の前で一部分固く固められた床面を確認した。

竈 東壁に構築されていた。燃焼部と焚口部分の痕跡を確認した。

遺物出土状態 遺物は、竈前から集中して出土し、灰釉陶器椀（第33図1）や須恵器壺（第34図3）、合わせ釘？（第34図4）などを図示した。出土遺物は、いずれも床面出土である。

#### 22号住居

位置 O-39グリッド。4区南側で確認された。

形状 長軸長3.66m、短軸長3.40mを測る方形プランである。

方位 N-57°-W

周壁・周溝 北西隅を攪乱により壊されているが、ほぼ全周する。壁高は15~20cmを測る。周溝は確認されなかった。

埋没状況 暗褐色砂質土を主体に、周囲からの流入過程を示している。

床面 砂礫層上面まで掘り下げて、5cmほど土を

入れ替えて床面を作っている。

**竈** 北東隅で天井部・袖が壊れた状態で確認された。燃焼部左に石を据え補強している。

**貯蔵穴** 確認されなかった。

**遺物出土状態** 住居からの遺物は少なく、わずかに中央やや北側で出土したものも小片である。埋土出土の土師器杯（第35図1）と刀子（第35図2）の2点が図示できたのみである。しかし、竈の位置から考えて、図示した土師器杯が本住居の時期を示す可能性は低いようである。

**その他の遺構との重複関係** 南東隅で24号住居を切っている。

### 23号住居

**位置** M-40グリッド。4区中央東側で確認された。西壁と南・北壁がわずかに確認でき、ほとんどが調査対象地外になる。

**周壁・周溝** 壁高は16～20cmを測る。周溝は確認できなかった。

**埋没状況** 褐色砂質土を主体とした周囲からの流入過程を示している。

**床面** わずかに土を入れ替えて床面としている。床下の調査で2基の床下土坑を確認した。

**遺物出土状態** 西壁の中央付近で土師器杯（第37図1）が出土した。

### 24号住居

**位置** O-38グリッド。4区南端で確認された。1/3ほどが調査対象地外になる。

**形状** 長軸を南北方向にとる長方形プラン。

**周壁・周溝** 壁高は12～16cmを測る。周溝は確認されなかった。

**埋没状況** 暗褐色砂質土で周囲からの流入過程を示している。

**床面** 20cmほど掘り下げ土を入れ替え床面を作っている。床下土坑は3基認められ、全体の傾向とし

ては北西から南東にかけてわずかに傾斜している。

**竈** 東壁に構築されているが、調査対象地の関係で約半分の調査となった。また、この部分は残存状態が悪く、焼土や灰の残りも僅かであった。

**遺物出土状態** 住居からの遺物は少ないが南西隅で土師器杯（第38図2）、竈前から土師器小型甕（第39図3）が出土している。また、第39図4の土師器甕は掘り方出土であるが、床面が不明瞭であることから、床面の遺物であった可能性が高い。

**その他の遺構との重複関係** 北側で22号住居に切られている。

### 25号住居

**位置** O-38グリッド。4区南側の西端で確認された。竈のみの確認で住居のほとんどが調査対象地外に延びる。

**竈** 埋土の主体が灰白色粘土であり、この粘土を使用して壁を構築していたと考えられる。燃焼部手前には灰が堆積していた。

**その他の遺構との重複関係** 竈の南側で34号土坑と北側で35号土坑と重複する。本住居が存在する部分は攪乱がひどく、断面観察で3者の新旧関係を判断することは不可能であった。

### 26号住居

**位置** M-38グリッド。4区南東隅に位置し、南東約半分が現在の道路下に延びることから調査不可能であった。

**形状** 約1/2強の確認であるため不明であるが、他の住居の形状から推定すると長方形であろう。

**埋没状況** 暗褐色砂壤土単一で埋まり、埋没状況は判断しにくい状態であった。

**床面** 地山の細砂層を床としているために非常に軟らかく、色調の違いのみで確認した。

**竈** 東壁で焼土が確認できた部分を竈として調査したが、竈位置が北に偏しており、竈の作り替えが

### 第3章 遺構と遺物

行われている可能性が考えられる。

**遺物出土状態** 出土遺物は、土器の細片が少量出土したのみであり、時期は特定できない。しかし、出土土器から奈良時代以降の所産であることは確定できる。

**その他の遺構との重複関係** 27号住居と西壁が重複し、本住居が新しい。

#### 27号住居

**位置** N-39グリッド。4区南東隅に位置する。

**形状** 東壁が26号住居と重複するため、全体形状は不詳である。

**周壁・周溝** 東壁と南東壁の一部を除き、直線的に巡る。残存壁高は、8～10cmを測る。

**埋没状況** 暗褐色砂壤土単一で埋まり、埋没状況は判断しにくい状態であった。

**床面** 淡黄色細砂を床面とし、硬化した床は認められなかった。

**竈** 東壁に構築されていた可能性が高いが、26号住居との重複により確認できない。

**遺物出土状態** 図示し得る遺物の出土はないが、奈良・平安時代の土器小片が出土している。本住居の時期もこの時期であろう。

**その他の遺構との重複** 26号住居と重複し、本住居が古い。しかし、両住居の埋土は非常に似ており、区別が困難であったが、竈が確認できなかったことを判断基準とした。

#### 28号住居

**位置** O-40グリッド。4区中央で確認された。

**形状** 南北方向に長軸をとる方形プラン。長軸長3.88m、短軸長3.42mを測る。

**方位** N-11°-W

**周壁・周溝** 全周し、壁高は16～19cmを測る。

**埋没状況** 暗褐色砂質土を主体に周囲からの流入過程を示している。

**床面** 砂礫層上面をそのまま床面としている。竈前から南東隅にかけて5～10cm土を入れ替えて面を作っている。床下土坑は確認されなかった。

**竈** 東壁南寄り、天井部・袖が壊れた状態で確認された。右袖部分で石が確認され、石を袖の一部として使っていたと思われる。

**貯蔵穴** 掘り方調査中に南東隅で径60cm、深さ7cmの掘り鉢状の窪みが確認され、位置的に貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。中から須恵器椀が4個体（第43図1～4）出土している。なお、3の椀体部外面には不明墨書が認められる。

**遺物出土状態** 竈焚口付近の床面上8cmから須恵器椀（第43図5）が、床面からは土師器甕（第43図6）が出土している。床面出土であるが、6の土師器甕は、本住居より古い時代の土器であり、住居には伴わない。

**その他の遺構との重複関係** 他遺構との重複はない。

#### 29号住居

**位置** R-50グリッド。3区北側で確認された。

**形状** 南北4m、東西3.75mのほぼ方形を呈する。

**方位** 竈が構築されている壁が土坑と重複しており、方位の計測が不可能である。

**周壁・周溝** 全周し、壁高は35～45cmを測る。東壁は24号土坑との重複もあり、壁上部がかなり崩壊している。

**埋没状況** 褐色土を主体に周囲からの流入過程を示している。

**床面** 砂礫層上面まで掘り下げて、10cmほど土を入れ替えて床面を作っている。比較的平坦な床面であるが、埋土との固さの違いは認められなかった。

**竈** 東壁の南端と南東隅に焚口部・袖が壊れた状態で2基確認された。共に煙道部は掘り抜いた状態で遺存していた。煙道は径20cmほどで、天井部が北側竈で20cm、南側竈で52cm床面と水平に延びていた。煙道の周囲は良く焼土化している。2基の竈の前後



関係は不明瞭であったが、燃焼部焼土の残存状態から南側竈が新しいと推定される。

**遺物出土状態** 住居からの遺物は少ないが、比較的竈周辺から多く出土し、竈前面床面から出土した羽釜（第44図2）を図示した。また、掘り方からは、第44図1の篋磨きを施した須恵器碗が出土している。

**その他の遺構との重複関係** 南東隅が15号住居と重複し、本住居の竈煙道が15号住居の埋土中で確認されたため、本住居が新しいと判断した。また、東壁で24号土坑と重複し、本住居が古い。

### 30号住居

**位置** L-70グリッド。調査対象地の南寄りで、現有の県道の東側に位置している。南西側に隣接して31号住居がある以外は周囲に住居は認められないので、密集度の低い一群であることがわかる。

**形状** 主軸を東西とし、長軸を南北方向にとる隅丸長方形プランである。また、各辺はやや胴張り気味である。長軸長3.82m、短軸長3.2mの規模を有している。

**方位** N-8°-W

**周壁・周溝** 壁高50～60cmを測り、非常に遺存状態がよいものであった。当初に近い高さを残しているものと思われる。周溝は認められなかった。

なお、後述するように、本住居は火災による焼失住居であったため、壁面が焼けて赤く硬化している部分が多く認められた。

**埋没土** 褐色土を主体とした自然の流入土により構成されている。

**床面** ほぼ平坦である。別の土と入れ替えて床面を造成している状況が認められるが、その造成法に規則性は認められなかった。

**竈** 東壁の南隅寄りに偏して付設されていた。竈の構造としては、焚口部が住居内位置する以外は、燃焼部から煙道部にかけて住居壁の外側にくるものである。竈の構築に際しては、住居壁を外側に向け

て凸字形に掘り取り、粘性土を使用して壁面を造っていた。また、焚口部の両側には、川原石を埋め込んで壁面を構成していた。

煙道は地中を約50cm水平に延び、そこから約45°の角度で立ち上がっている。その先端部分からは、土師器甕の破片が出土していることから、当初は底を抜いた甕（あるいは甗）が据えられていた可能性がある。

**貯蔵穴** 住居内の南西隅には、貯蔵穴と思われる上端で直径60ないし70cm、深さ床面から20cmの鍋底形を呈する土坑が認められた。

**遺物出土状態** 焼失住居であるにもかかわらず、住居に直接伴う完形土器は一切認められなかった。図示した遺物のうち、第46図3の土師器甕は竈前の床面出土であり、他は埋土出土である。なお、第46図4の手づくね土器は、本住居には伴わない。

**炭化物の出土** 床面直上のほぼ全面にわたって、灰・炭化物が認められた。顕著な構造材は認められず、大半は屋根材と思われる茅材であった。

### 31号住居

**位置** M-68グリッド。30号住居の南西3mに近接している。主軸方向、規模等ほとんど同一であり、同時存在あるいは建て替えが推測される時期的接近を窺わせる。

**形状** 主軸をほぼ東西とし、長軸を南北方向にとる長方形プランを呈している。ただし、南及び北壁のラインには歪みがあり、東壁が西壁の長さを凌駕する。長軸長4.2m、短軸長3.84mを測る。

**方位** N-13°-W

**周壁・周溝** 壁高50cmあまりを測り、非常に遺存状態がよかった。おそらく、当初に近い高さを残しているものと思われた。

**埋没土** 褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

**床面** ほぼ平坦である。全体に土を入れ替えて造成している。特に注意されるのは、床面下全体に認

### 第3章 遺構と遺物

められる円形土坑である。主として住居中心部寄り  
と南及び北の壁際から発見されている。

**竈** 住居東壁の南端に偏して付設されていた。袖  
部と焚口部が住居内に位置する以外、燃焼部・煙道  
部とも住居壁の外側にくる構造である。この竈の構  
造的特徴は、川原石を構造材として比較的多く使用  
している点である。川原石が認められたのは、向か  
って左側の焚口部から燃焼部にかけての壁体に2石  
と右側の燃焼部の壁体に1石、及び燃焼部奥寄りか  
ら煙道部にかけての天井面に2石である。

燃焼部の奥寄りの中心には、直径約10cm、深さ8cm  
のピットが認められ、甕を支持する棒状の石が埋め  
られていたものと思われる。

**貯蔵穴** 住居の南西隅に上端で径90cm、深さ30cm  
の貯蔵穴と思われる土坑が認められた。

**竈の灰捨て用と思われる土坑** 竈に向かって右側  
手前には、掘り方調査時に上端で径50cm、深さ15cm  
の土坑が認められた。土坑内の覆土の状況を見ると、  
炭化物と灰が厚さ2cmほどで互層をなして埋まっ  
ていた。一定の期間にわたって、竈から排出される灰  
等を捨てるための施設と推測された。

**遺物出土状態** 住居内から出土する遺物は、土器  
片が主体であり、完形に復せるようなものはほとん  
ど認められなかった。図示した遺物のうち、第49図  
1の須恵器皿は東壁中央の床上8cmから出土してい  
る。また、竈左側付近からは、須恵器皿（第49図2）  
と内黒の椀（第49図3）、竈燃焼部内と竈前からは  
土師器甕（第49図4）が出土している。

#### 32号住居

**位置** N-60グリッド。30・31号住居の南30mに  
位置している。南北方向では周囲には他の住居が認  
められない。

**形状** 住居の西側部分が対象地外となってしまう  
ため、東側1/3ほどの調査であった。そのため、  
住居の正確な形状を知ることはできない。主軸を東  
西とし、四方に正しく合わせていることがわかる。

なお、住居の北側も中世の堀によって壊されている  
ため、その規模を知ることはできない。

**方位** N-1°-E

**周壁・周溝** 壁高30cmほどを残している。当初の  
半分近くまで削られていると考えて間違いない。

**埋没土** 暗褐色土を主体としており、周囲からの  
流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

**床面** ほぼ平坦であり、あまり大きくは土を入れ  
替えていなかった。竈の手前の床面下には、径80cm、  
深さ約15cmの円形土坑が確認されている。

**竈** 東壁の南端に偏して付設されていた。住居壁  
から内側に20cmあまり突出した袖部とそれに挟まれ  
た焚口部が住居内に位置する以外は、燃焼部から煙  
道部まで住居壁外にくる構造である。

**遺物出土状態** 竈の燃焼部で土師器甕の破片（第  
50図1）が確認されている以外は、目立った遺物は  
まったく確認されなかった。

**その他の遺構との重複関係** 住居の北側を後出す  
る中世の12号溝によって切られていた。

#### 33号住居

**位置** R-72グリッド。調査地北端の住居群から  
南へ20mほどの距離をおいて単独で存在している。  
この住居の南側にも、近接する住居は他に全く認め  
られない。

**形状** 住居の西側半分が調査対象地外となってい  
たため、全体を知ることはできなかった。少なくと  
も方位は正しく四方に合わせていることと、隅部を  
ほぼ直角にしていることはわかるが、竈が確認され  
ていないことから、主軸方向を確定することはでき  
ない。

**周壁・周溝** 壁高は35cmないし40cmを有してお  
り、遺存状態は比較的良かった。周溝は確認されな  
かった。

**埋没土** 本住居は、火災による焼失住居と思われ、  
覆土中に多量の炭化物・焼土を含んでいる点が特徴  
的である。ただし、埋没自体は、周囲からの流れ込

みによる自然の埋没過程を示していた。

**床面** 床面は平坦であるが、あまりしまりのないものであった。掘り方の調査では、東壁寄りに2基の土坑が確認された。

**竈** 確認した範囲では認められなかった。東側には付設されていないことは明らかである。本住居の場合、出土土器から平安後期の所産と考えられる。

**住居内土坑** 掘り方調査時に、住居の北東隅において、上端で東西1.4m、南北1mの隅丸長方形で深さ50cmの土坑が認められた。この土坑の内面に接して炭化材が認められることから、住居の施設として機能していたことをうかがわせた。

**遺物出土状態** 本住居で特に注意されたのは、焼失に伴う炭化材の出土であった。特に屋根葺材と思われる茅材が一面に認められ、その下から構造材と思われる木材が認められた。

土器はわずかに須恵器皿（第51図1）が1点出土しているのみで、他に全く見られなかった。一方、中心部の床面上から、40×50cmの不整楕円形で、厚さ7cmの川原石が床面に据えられたような状態で出土している点が注意された。

これらのことを併せて考えると、本住居は一般的な住居とはことなり、特別な用途の建物であったことが推測されよう。

### 34号住居

**位置** E-76グリッド。調査対象地の西側最北端に位置している。現在の桃ノ木川の流路は北西から南東にとるが、その南西側の堤防の裾部で確認されたものである。このことは、遺構面が堤防の下から河川敷まで延びていることを示唆するものであった。

**形状** 南北長4.66mで、四方の方向にほぼ合わせたものであることがわかる。なお、住居の東側2/3以上が堤防下となってしまう、未調査である。

**周壁・周溝** 壁高30cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がるものであった。周溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる、自然の埋没過程を示していた。

**床面** 自然面である礫層面をそのまま使用しており、ほぼ平坦である。

**遺物出土状態** 本住居の時期を推測することができるような遺物はいっさい出土しなかった。

### 35号住居

**位置** F-77グリッド。34号住居の北西側に隣接している。周辺にはこの2軒以外はまったく認められない。

**形状** 住居西側部分の一部の調査であったため、形状を推測することは困難である。南北長約2.3mを測る。通常の住居としては、規模が小さすぎる嫌いがある。

**周壁・周溝** 断面観察からすれば、深さ60cm近くまで残っていたことがわかる。周溝は認められなかった。

**埋没土** 暗褐色土を主体としており、床面近くの覆土中には、炭化物・灰の混入が注意された。

**床面** 自然面をそのまま使用しており、ほぼ平坦である。

**遺物出土状況** 遺物はきわめてわずかである。覆土中から出土した土師器浅鉢（第53図1）は、古墳時代後期の所産であり、この住居の時期を知る目安とする事ができよう。

### 36号住居

**位置** O-79グリッド。調査地の最北端で現在の桃ノ木川の南側に接して確認された9軒の住居群（36～44号）の南端に位置している。

**形状** 長軸を南北方向にとる長方形プランであるが、東壁のほうが西壁より50cmほど長い為、やや変形である。長軸長4.3m、短軸長3.52mの規模を測る。

**方位** N-2°-E

### 第3章 遺構と遺物

**周壁・周溝** 周壁は全体に遺存していた。壁高は床面から約40cmであり、残りのよいものであった。周溝は確認できなかった。

**埋没土** 暗褐色土、黒褐色土を主体とし、自然の埋没状況を示していた。

**床面** ほぼ平坦である。全体に土を入れ替えて面を作っていた。特に竈のある東壁側を除いた壁際はコの字形に幅約1m、深さ約15cmの帯状に掘り下げて土を入れ替えている状況が明瞭に確認できた。

**柱穴** 確認できなかった。

**竈** 東壁の中央寄りに並んで2基確認された。両者は新旧の関係にあり、最初に使われたのが南側のもの(1号竈)で、廃絶直前に使用されていたのが北側のもの(2号竈)である。1号竈は煙道部のみで、壁から外側へ85cm水平に出ていた。燃烧部は、2号竈が構築される際に削平されたものと思われる。床面から掘り込まれてピットが両袖に該当する部分に認められることから、袖部には川原石が門柱状に据えられていたことが推測された。2号竈は、燃烧部が住居壁より外側に出る形式で、袖部は住居内に約20cm突出し、その先端には川原石が門柱状に据えられていた。燃烧部の壁面にも川原石が据えられていたようであるが全面的なものではない。規模は焚口部で幅45cm、燃烧部の奥行き約60cmを測る。燃烧部の外側には長さ約65cmの煙道が取り付けられている。

**遺物出土状態** 住居内から出土した遺物はわずかである。このうち、南壁寄りからはほぼ完形の土師器杯(第55図2)が出土している。住居床面より4cmほど上からの出土であるが、住居に伴うものとしてよいであろう。

**その他の遺構との重複関係** 住居北側で時期的に先行する37・38号住居を切っていた。また、西壁では51号土坑と重複し、本住居が先行する。

#### 37・38号住居

**位置** O-79グリッド。調査対象地中における北端住居群の南に位置する。

**形状** 調査時は、北側を37号住居、竈を含めた東西に長い長方形部分を38号住居としていた。しかし、37号住居と38号住居の東壁が直線的であることや、埋土・掘り方の断面観察でも明瞭な壁が確認されなかったこと、逆に南北に長い住居を想定すると、本遺跡でこのような形状の住居が確認されていないことなど、2軒と判断しにくい状況もある。

**方位** 38号住居の方位は、N-27°-Wである。

**周壁・周溝** 西壁を除きほぼ直線的に確認された。周溝は確認されない。西側は、コーナーを中心に崩壊のせいか丸みを帯びている。

**埋没土** 両住居共に暗褐色土を主体とし、自然の埋没状況を示していた。

**床面** 床面はほぼ平坦であるが、掘り方との固さの違いはほとんど感じられない。床面は、6～22cmの深さで土を入れ替えて作っている。竈前面の掘り方底面は、凹凸が激しく、38号住居中央から北壁、37号住居にかけての範囲は、浅く楕円形に掘り残している。

**竈** 38号住居の東壁南寄りに付設されている。燃烧部のほとんどが壁内部に位置する構造で、壁から50cm以上袖が遺存していた。袖の両端には、自然石が立てられており、中央は浅くくぼんでいた。

**遺物出土状態** 遺物は土器を中心に散在していたが、これらのうち8点を図示した。37号住居出土遺物は、3点を図示したが、第56図3の土師器小型甕のみが床面出土で、他は埋土出土である。38号住居出土遺物は、第57図5・7の土師器杯が竈出土、第57図8の土師器杯が床面出土である。

**その他の遺構との重複** 調査時の所見では、かなり困難であったものの38号住居が新しいとしたが、掘り方においても新旧が判然としないことや、形状や壁の状況から判断して、1軒の住居である可能性も否定できないであろう。

## 39号住居

**位置** N-81グリッド。既述の北寄りの住居群の中央に位置している。

**形状** 主軸をほぼ東西（正確にはやや北にずれている）とし、長軸を南北方向にとる長方形プランである。長軸長4.6m、短軸長4.52mを測り、東壁および西壁が若干弧状を呈している。

**方位** N-29°-W

**周壁・周溝** 周壁は全体に遺存していた。ただし、北・西壁はエッジの部分が崩落しており、壁面が斜めになっていた。壁高は約45cmを有している。周溝は東壁と北壁で部分的に認められた。幅約10cmで深さ4cmを測る。

**埋没土** 黒褐色土・暗褐色土を主とし、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

**床面** ほぼ平坦である。構築時には床面下まで全体に掘り下げて土を入れ替えて床を造成していた。特に、壁際から20～40cm内側の位置を、幅40cm前後で深さ約10cmの周溝状にさらに掘り下げて土を入れ替えている点に注意された。

**竈** 東壁の中心から約1.1m南側に偏して付設されていた。壁面から内側へ50cmほど袖部が張り出しており、燃烧部が住居内に、煙道部のみが住居外に張り出すものである。燃烧部の中心床面上から出土した礫は支脚として使用されていた可能性もある。

**遺物出土状態** 住居内から出土した遺物はわずかである。土器類は大半が破片であり、完形に復せるか原位置をとどめるものは認められなかった。本来的に住居に伴っていたものは、住居が廃絶する以前に持ち去られたものと思われる。

## 40号住居

**位置** N-79グリッド。現桃ノ木川寄り北側の住居群に属している。

**形状** 住居の大半が調査対象地外に属していたため西寄りの一部を調査したのみであった。そのため、形状については不明確な部分が多い。前述の39号住

居の東側に約2mの距離をおいて平行する位置関係にあることから、東西方向に長い長方形プランと考えて間違いないであろう。

**周壁・周溝** 壁高約35cmを測り、遺存状況は良好である。周溝は認められなかった。

**埋没土** 黒褐色土を主体とし、暗褐色土が加わる。周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

**床面** ほぼ平坦である。床は全体に10cm前後掘り下げて土を入れ替えて造成していた。そのうち壁際から30cm程内側の位置を幅30cm、深さ5cmほどの溝状にさらに掘り下げているのが認められた。

**遺物出土状態** 覆土中から極めてわずかな土器片が認められたのみであった。

## 41号住居

**位置** L-81グリッド。遺跡地北端の住居群に属している。群の中でも最も北寄りの1つである。

**形状** 主軸を東西方向とし、南北方向に長い長方形プランを呈する。長軸長4.24m、短軸長3.32mを測る。

**方位** N-17°-W

**周壁・周溝** 周壁は全体に良好に遺存していた。ただし、南壁部分は45号住居と完全に重複しており、厳密な意味の壁体の確認はできなかった。壁高は25～30cmを残していた。周溝は確認できなかった。

**埋没土** 暗褐色土・褐色土を中心として非常に細かく分層することができる。人為的な埋め戻し等の痕は認められないので、周囲からの流れ込みによる自然の埋没であろう。

**床面** ほぼ平坦である。全体に床面下10cmぐらいの深さまで掘り下げて土を入れ替えて造成していた。南壁に沿って認められた土坑は、位置関係からすると床下土坑とも考えられるが、セクションの検討からは住居廃絶後に埋没土を掘り込んで構築したものと推測された。

**竈** 東壁の南に偏して付設されており、燃烧部が

### 第3章 遺構と遺物

一部住居内で、2/3以上が住居外に張り出す構造である。

**遺物出土状態** 住居内から出土した遺物はわずかである。土器類は小破片が中心であり、石類も自然礫が大半である。図示した土器のうち、第62図1・4の2点が本住居の時期を示すと考えられる。

**その他の遺構との重複関係** 南側で先行する45号住居と重複していた。また、住居内にある土坑は、先述したように住居廃絶後に構築されたと考えられる。

#### 45号住居

**位置** M-81グリッド。41号住居の南側に隣接している。住居の大半が調査対象地外にあるため、住居北寄りの一部の調査であった。

**形状** 竈の位置も不明で、住居の形状を推しはかれるまでにはいたらなかった。主軸の方向をいずれにとるかとはかくとして、41号住居とほぼ同一の方向をとっていることは明らかである。

**周壁・周溝** 周壁は、確認された部分では約30cmの高さまで遺存していた。

**埋没土** 暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

**床面** ほぼ平坦である。別の土と入れ替えて床面を造成していることは明らかであるが、調査された範囲では、特徴的な構造は認められなかった。

**竈** 北壁には痕跡も認められないことと、住居方位の同一性、及び住居の推定時期を考慮すると、東壁に竈を有していた可能性が非常に高い。

**遺物出土状態** 調査範囲が限定されていたことも考慮しなければならないが、住居に直接ともなう遺物は認められなかった。

**その他の遺構との重複関係** 時期的に後出する41号住居によって北壁寄りを切られていた。

#### 42号住居

**位置** N-83グリッド。北寄りの住居群に属している。西に43号、東に41号住居が隣接している。

**形状** 主軸を東西とし、東西方向に長軸が来る長方形プランである。長軸長4.74m、短軸長4.06mの規模を有する。住居南東隅付近のラインが膨らみ気味であるが、構築当初からの形状ではなく住居壁の崩落の結果と思われる。

**方位** N-29°-W

**周壁・周溝** 周壁は全体に良好に遺存していた。壁高は約30cmを残していたが、面が垂直に近く立ち上がる箇所は少なかった。壁体のエッジ部分は全体に崩落していたためである。周溝と思われるものが部分的に認められるが、範囲があまりにも短いことから、通例の周溝と同一のものとするにはためらいを感ずる。

**埋没土** 暗褐色土を主体とする構成で、周囲からの流れ込みによる埋没であることを明瞭に示していた。

**床面** ほぼ平坦である。土の入れ替えによる床面の造成が極めて顕著であり、厚さ10cm前後に及ぶ。特に中心部と壁際を残して5～10cm近く幅広の溝状にさらに掘り窪めているのが確認された。

**竈** 前後して使用された2基の竈が確認された。両者とも東壁の中心から南側に偏して並んで付設されていた。中心寄りの2号竈が住居構築時に使用されたものである。その後2号竈が廃棄された後、南側に1号竈が作り替えられたものである。そのため、1号竈は完存していたが、2号竈は主として煙道部分のみの遺存であった。

1号竈は、燃烧部が住居内、煙道部が住居外にくる構造である。住居壁から40cmほど袖部が張り出ししており、焚口部での幅約55cmを測る。煙道は幅20cm、長さ1mを測り、当初の規模を残しているものとしてよいであろう。袖等にはやや粘土質の土が意図的に選ばれているが、礫等の使用は全く認められなかった。

**遺物出土状態** 住居に伴う遺物は極めて少ない。

土器類は1号竈の燃焼部の中心から出土した土師器杯(第65図7)が唯一の完形品で他は破片である。南壁の際からややまとまった量の礫が出土しているが、その積極的な意味を推定できる程の条件は有していなかった。

**その他の遺構との重複関係** 北壁中央で後出する43号住居と重複していた。

### 43号住居

**位置** N-84グリッド。調査対象地の最北端に位置する住居で、42号住居の北側に隣接している。すぐ北側が桃ノ木川の堤防である。

**形状** 主軸をほぼ東西とし、長軸を南北方向にとる長方形プランであるが、長軸長3.36m、南北長2.94mと値は接近している。

**方位** N-8°-W

**周壁・周溝** 周壁は全体に遺存していた。遺存する壁高は、北側で30ないし40cm、南側で20cmを有していた。周溝は確認されなかった。

**埋没土** 黄褐色土・灰黄褐色土を主体とし、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

**床面** ほぼ平坦である。中心部寄りを除いて全体に10cmほど掘り下げて土を入れ替えて床面を造成していた。

**竈** 東壁の中心から0.5m東に偏して付設されていた。全体が住居壁の外側に位置するもので、燃焼部で幅70cm、奥行き90cmを有していた。煙道部は失われていた。

**遺物出土状態** 本住居で注意されたのは、北半部を中心に床面上から炭化材が認められたことであり、焼失家屋であったことを示していた。それにもかかわらず、住居に直接伴うと思われる遺物はわずかであった。主なものとしては、竈部分から出土した土師器甕(第67図4)と中央部分から出土した石製紡錘車(第67図5)がある。ただし、紡錘車は床面から約13cm浮いた状態での出土であり、直接伴うものではない可能性がある。

**その他の遺構との重複関係** 既述のように、南壁が42号住居と重複していた。

### 44号住居

**位置** N-82グリッド。42号住居の西側に隣接している。重複部分は認められないが、本住居竈煙道部先端の位置が42号住居に触れてしまうほど接近していることから、両者の同時存在はあり得ないといえる。

なお、住居の大半が、調査対象地の外となってしまうため、住居東寄りのごく一部の調査であった。

**形状** 調査部分が限られていたため、主軸をほぼ東西とするものであったことはわかるが、プラン形状は不明である。

**方位** N-10°-W

**周壁・周溝** 検出された部分では、壁高約30cmを残していた。

**埋没土** 暗褐色土・黒褐色土を主体とし、周囲からの流入による自然の埋没過程を示していた。

**床面** 検出範囲が狭いため、不明確であるが、ほぼ平坦であったことが推測される。床面下約15cmまでは土を入れ替えて造成していた。

**竈** 東壁に位置している。燃焼部が住居壁内にあり、煙道部のみが外にくる構造である。発達した袖部を有する構造で、その先端には川原石が配されていた。焚口部寄りでの幅約40cmで、煙道は長さ1.1mと長大な点に注意された。煙道の先端からは土師器甕の破片が出土しており、煙出し部分に使用されていたものと推測された。

**遺物出土状態** 竈燃焼部からわずかな土師器甕の破片、竈の右脇の床面から比較的まとまった土師器杯と甕の破片(第69図1～3)が出土している。

### 46号住居

**位置** S-84グリッド。36～45・47号住居の一群からは西へ約20mの距離において単独で存在する。

### 第3章 遺構と遺物

**形状** 南寄りが調査範囲外となっているため、全体の半分ほどの調査である。方位を正しく四方に合わせており、プランは正方形あるいは南北方向に長い長方形である。東西長2.88mを測る。

**周壁・周溝** 壁高60cmほどを測る。他の住居より20cm以上深い点は注意する必要がある。

**埋没土** 黒褐色土を主体としており、主として東側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

**床面** 中心寄りに向かって窪む鍋底形に近い形状であり、通常の住居跡の床面とは異なるものである。土を入れ替えて床面を造成しているように見えるが、乱雑な状態であり、通例の貼床構造とは趣を異にしている。

**遺物出土状態** 極めて少量の小破片が認められたのみで、皆無に等しい。

本遺構の有している諸要素を勘案すると、平安期までに属する通常の竪穴住居と同種のもものと認定することは困難であろう。図示した土器（第70図1）も、住居の時期を示すとは限らない。

#### 47号住居

**位置** M-83グリッド。調査対象地における北側住居群の北端に位置する。

**形状** 42・43号住居との重複により南壁が確認できず、全体形状は不明である。遺存部分では、長軸長3.2m、短軸長1.85m以上を測り、かなり小規模かつ狭長な形状である。

**方位** N-66°-W

**周壁・周溝** 北および西壁は直線的で、壁面の崩壊がほとんど認められない。一方、東壁では壁面の崩壊が認められ、壁上端が直線的でない。周溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色土を主体とし、流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

**床面** 竈部分と住居中央を10cm前後土を入れ替えて床を構築している。床面は平坦であるが、硬化し

た面は確認されない。床面には2カ所焼土が認められたが、埋土中や他に焼土や炭化材が認められないことから焼失家屋ではないであろう。

**竈** 北東隅に付設する。燃焼部を住居壁内に有する構造で、天井部はすべて崩落していたが、燃焼部壁が袖状に約60cm遺存していた。燃焼部と煙道部の境は、15cmほどの段差をなし、煙道部も半ばから傾斜を有している。竈の付設場所は、平安時代的であるが、燃焼部の位置や煙道の構造的特徴は古墳時代的である。

**遺物出土状態** 竈燃焼部から土師器甑（第71図4）、須恵器杯（第71図1）、土師器杯（第71図2）の完形品が出土している。これらは、いずれも燃焼部底面から10～20cm浮いた状態で出土している。甕が出土していないため、竈に掛けられていたものが崩落の際に落ちたとは考えられず、竈付近に置かれていたものが転落したと推定される。また、住居中央の床面直上からは、ほぼ完形の土師器杯（第71図3）が出土している。なお、この土師器杯は、口縁部が一部欠けているが、欠け口が摩滅していることから、欠損後もしばらく使用されていたと考えられる。

**他の遺構との重複関係** 42・43号住居と重複し、本住居が古い。本住居は、古墳時代後期の所産であるが、きわめて特異な形態を有している。



## 第2節 その他の遺構と遺物

### I. 土坑墓

#### 1号墓

**位置** S-55グリッド。調査対象地のほぼ中央、中世の堀である5号溝の3m西に位置する。調査範囲内に限っていえば単独で存在する。

**形状** 東西70cm、南北100cmの長方形を呈する。しかし、本墓は、1号地下式坑と重複し、プラン確認が困難であったこと、確認壁高が4～6cmと遺存が悪いことなどから、規模と形状は正確ではない可能性が十分ある。

**埋葬体位** 遺存状態のせいか、頭部が確認できないが、埋葬人骨の観察からいわゆる北枕であったことは確実であろう。頭部が当初からないのか、後世の削平によるものかは、墓坑の遺存が悪く不明である。埋葬体位は、側臥位であろうが、詳細は不明である。

**遺物出土状態** 出土遺物は渡来銭のみで、西中央からは10枚（第72図1～5・7・9・11～13）が重なって出土した。これらの銭には布痕が認められ、孔内には縄のような紐が認められた。他は1枚の出土である。総計14枚の出土であるが、内1枚は脆く掲載不能である。

**その他の遺構との重複関係** 1号地下式坑が完全に埋まった後に造られている。

#### 2号墓

**位置** O-83グリッド。調査対象地の北西隅に位置し、この地区は現桃ノ木川の堤防付近にあたる。

**形状** 表土を除去した時点で人骨が確認され、後世の削平が著しく、墓坑の底部が僅かに遺存していた程度であった。このため、形状や規模は不明である。なお、図示した範囲は、後述する4号墓の上端の範囲であり、本墓坑の形状ではない。

**埋葬体位** 頭骨の状態から、北向西面すなわち北

枕で顔を西に向けていることが判明した。方位はやや東に偏している。埋葬体位は、おそらく右側臥屈曲位と推測される。なお、頭骨内に肋骨が入り込むなどやや不自然な状態がみうけられるが、棺崩壊時の土圧による可能性がある。

**遺物出土状態** 古銭などの出土はなかったが、遺存が悪いため、当初の副葬品の有無は不明である。

**その他の遺構との重複関係** 4号墓構築後、年月を経て埋葬されている。

#### 3号墓

**位置** P-83グリッド。調査対象地の北西隅に位置し、この地区は現桃ノ木川の堤防付近にあたる。

**形状** 長軸長134cm、短軸長72cmの長方形を呈し、長軸はほぼ南北を示す。後述する4号墓に比して幅が狭く、遺体も墓坑中軸線に沿っている。

**埋葬体位** 右側臥屈曲位の北向西面、すなわち頭部が北向きで顔が西向きである。顔面はやや下を向いていた。

**遺物出土状態** 胸部から咸平元寶が1枚出土したのみである。

**その他の遺構との重複関係** 他遺構との重複はない。

#### 4号墓

**位置** O-83グリッド。調査対象地の北西隅に位置し、この地区は現桃ノ木川の堤防付近にあたる。

墓が3基確認された14区の調査対象地幅は4mと狭く、墓域は南北に広がるであろう。

**形状** 長軸長142cm、短軸長104cmの長方形を呈する。先の3号墓に比して幅が広い。

**埋葬体位** 他の墓同様右側臥屈曲位であるが、遺体が墓坑の対角線上に埋葬されているために頭位が

### 第3章 遺構と遺物

北西を向いている。顔面は西面する。

**遺物出土状態** 胸部から集中して9枚の渡来銭が出土している。

**その他の遺構との重複関係** 本墓の存在がほとんど忘れ去られた後に2号墓が作られている。

前半と考えられる。第77図2は、平安時代末頃に生産された中国製白磁である。

**その他の遺構との重複関係** 中世の堀である5号溝より古い。出土遺物と重複関係から、本井戸は古代末から中世前半（12世紀～14世紀）に廃棄されたと考えられる。

## II. 井 戸

### 1号井戸

**位置** S-56グリッド。調査対象地のほぼ中央に位置する。

**形状** 平面形は、径1.6～1.7mのほぼ円形を呈し、深さは1.5mと浅い。底部は円形を呈するが、位置は南に偏している。底部には、径40cmの曲物の井筒が一部遺存していたが、遺存状態が非常に悪く図示できなかった。冬季調査のため、調査時には湧水が認められなかった。

**遺物出土状態** 出土遺物はほとんどなく、埋土中から図示した2点が出土したのみである。第77図1は、焼締陶器細片であり、厚さから古代末から中世

## III. 土 坑

### 概 要

本遺跡では、60基が土坑として調査されているが、本報告ではこれらのうち56基を報告する。記載しない土坑は、形状が不定形で遺構と判断されないものである。しかし、遺構番号は、調査時の番号を使用し、不掲載土坑は欠番とした。

土坑の分布は、住居や井戸の分布と一致しており、空白箇所が認められる。しかし、遺物が出土する土坑が非常に少なく、住居埋土に近似した埋土の土坑が認められず、ほとんどすべてが時期・性格共に不詳といえる。

### 土坑一覧表

土坑番号	位置	形状	規模 (cm)	挿図番号	出土遺物	備 考
1	N-33	不詳	—×90×27	第78図		1号住居より古い。
2	L-32	長方形	240×170×7	第89図		3号溝より古い。
3	M-33	不整形	—×—×60	第78図		
4	D-9	長方形?	170×95×12	第78図		2基の重複か?
5	D-9	長方形	110×83×8	第79図		
6	D-8	不整円形	115×70×10	第79図		11号住居より新しい。
7	R-47	長方形	190×110×20	第79図		
8	P-47	長方形	140×53×29	第79図		
9	F-13	不整形	—×—×45	第79図		
10	R-46	不詳	—×—×23	第79図		18号住居より新しい。
11	P-45	円形	108×94×10	第79図		19・20号住居より新しい。
12	Q-45	円形?	—×—×12	第79図		19号住居より新しい。
13	P-46	円形?	—×—×16	第79図		20号住居との新旧不詳。
14	O-46	円形	120×110×35	第79図	第79図 (鉄製品)	
15	O-46	不詳	—×—×14	第79図		
16	R-55	長方形	312×130×65	第79図	第79図 (中世焼締陶器)	5号溝より古い。
17	O-40	長方形	210×180×25	第80図		
20	Q-50	円形	110×95×48	第80図		21号土坑より古い。
21	Q-51	円形	152×140×35	第80図		20・26号土坑より新しい。
22	P-51	円形	—×120×36	第80図		
23	Q-51	円形	115×100×70	第80図		
24	Q-50	円形	116×116×35	第80図	第80図 (中世カワラケ)	29号住居より新しい。
25	R-50	長方形	128×100×45	第80図		
26	Q-51	不整形	140×100×75	第80図		21号住居より古い。
27	S-50	長方形	125×90×12	第80図		
28	R-50	長方形	184×120×24	第80図	第80図 (中世カワラケ)	

土坑一覧表

土坑番号	位置	形状	規模 (cm)	挿図番号	出土遺物	備考
30	R-52	円形	140×135×44	第81図		
31	R-52	不整円形	250×190×25	第81図		
33	O-37	不詳	-×-×10	第81図		
34	O-37	不詳	-×-×15	第81図		25号住居との新旧不詳。
35	O-38	不詳	-×100×10	第81図		25号住居との新旧不詳。
36	L-70	円形	95×80×43	第81図		
37	L-70	長方形?	-×-×50	第81図		
38	L-69	円形?	77×-×25	第81図		
39	L-69	不詳	-×-×50	第81図		30号住居より古い。
40	E-74	不詳	-×100×36	第82図		
41	E-74	不詳	-×-×20	第82図		
42	E-74	円形	93×90×14	第82図		
43	E-75	不詳	-×-×25	第82図		
44	F-78	不詳	-×-×13	第82図		
45	G-78	長方形?	-×-×12	第82図		
46	E-74	不詳	-×100×20	第82図		
47	E-74	円形	103×80×40	第82図		
48	P-74	不詳	-×-×14	第82図		
49	P-75	不詳	-×-×20	第82図		
50	P-75	不詳	-×95×10	第82図		
51	O-78	楕円形	130×92×10	第82図		36号住居より古い。
52	M-80	円形	95×85×30	第82図		
53	P-78	円形	102×83×25	第83図		
54	S-83	円形?	-×-×25	第83図		
55	S-84	円形	50×50×15	第83図		
56	S-83	長方形	103×52×26	第83図		
58	O-84	楕円形	127×67×143	第83図		底部付近に円礫多い。
60	T-83	円形?	-×-×23	第83図		

※一覧にない土坑は欠番とした。

#### IV. 地下式坑

##### 1号地下式坑

**位置** T-55グリッド。調査対象地ほぼ中央の5区西側に位置する。中世の堀である5号溝は、1～3m東に走向する。

**形状** 平面図面上は不整形であるが、北側の浅い部分は断面観察で本遺構より古い土坑であることが確かめられている。また、断面観察において新旧関係が判然としなかった東側についても、As-Cを含む黒褐色土(3・4層)が認められないことや5層が深い部分に達していないこと、T-56グリッドピン付近にのみ自然礫が集中することなどから重複関係にあると推定される。したがって、地下式坑は、入り口を南とし、本体の長軸を東西にとる「T」字型を呈する。西側が調査対象地外であるため、全体形状と規模は不明である。

**埋没土** 入り口部は地山と異なり、やや細かい砂

礫層で埋まる。本体は、地山の淡黄色細砂を中心とした土流入し、その後、天井としていたAs-Cを多量に含む黒褐色土層が崩落している。

本地下式坑が完全に埋まった後、エレベーションポイントA付近では、新しい土坑が掘り込まれている様子が観察される。

**遺物出土状態** 埋土上層からは、焼締陶器片口鉢の口縁部片(第85図1)が出土している。地下式坑部からは、内耳鍋と石臼(第85図2～4)が出土している。後者3点は、本遺構の廃棄年代を示すと考えられる。

#### V. 溝

##### 1号溝

**位置** N-33グリッド。1区の南西に位置する。1区と2区の間には浅い低地が存在し、この低地は

### 第3章 遺構と遺物

北の微高地上に存在する遺構の南端に属する。

**形状・走向** 1号住居との重複と調査対象地の関係から、わずか2mほど確認されたのみである。走向は、1号住居付近ではほぼ直角に北に屈曲し、この部分が土坑状に窪んでいる。上端幅は一定である。

**埋没土** 円礫を多く含んでいたが、流水を示すような砂層は確認されない。

**遺物出土状態** 遺物は、土師器細片がわずかに出土したのみであり、土器から時期を推定することはできない。

**他の遺構との重複関係** 重複関係では、1号住居より本溝が古いと判断されたため、古代か古墳時代の溝であろうと推定される。

#### 2号溝

**位置** N-35～L-35グリッド。北側微高地の南端付近に位置する。

**形状・走向** 1区とした調査区は、砂礫層の標高が高い場所であり、後世の削平が進んでいるうえ、確認箇所が北端であったため、全体の走向は不明である。調査対象地内での走向は、調査区に平行して直線的に11m確認され、北東部で「T」字状に分かれ、4区側に伸びていた。しかし、4区ではこの堀の延長は確認されず、堀による区画は不明である。平面的に確認された堀の規模は、東西方向部分が幅約2m、深さ約40cm、南北方向部分が幅約2.5m、深さ約40cmである。この規模は、中世の堀としては非常に小規模であるが、調査時に盛り土と考えていた調査区西端の高まりが削平をあまり受けていない部分であり、この場所の断面により少なくとも幅3m以上、深さ1m以上あったことが判明した。

**埋没土** 暗褐色砂壤土で埋まり、底面に滞水や流水を示すような堆積は認められなかった。

**遺物出土状態** 平安時代の遺物（第88図1）も図示しているが、この須恵器碗は、場所的に6号住居の床の可能性もあるので掲載した。中世遺物としては、知多窯の焼締陶器甕（第88図2・4）と「元豊

通寶」があるが、これらの時期が堀の廃棄年代を示すとは限らない。注目される遺物としては、古代の遺物であるが、越州窯系青磁碗（第88図3）の小片が出土している。

**他の遺構との重複関係** 4～6号住居と重複し、いずれも本溝が新しい。

#### 3号溝

**位置** L-33～M-34グリッド。北側微高地の南端に位置する。

**形状・走向** 7.5mにわたって確認された。走向はほぼ直線的であるが、幅は0.9～1.3mと一定せず、深さも両端が深い。

**埋没土** 暗褐色砂壤土で埋まり、滞水などによる堆積は認められなかった。

**遺物出土状態** 埋土中から焼締陶器細片（第89図1）が出土している。

**その他の遺構との重複関係** 1号住居、2号土坑と重複している。2号土坑との重複は、断面観察によって本溝が新しいことが確認された。1号住居との関係は、プラン確認時には判然としなかったが、出土遺物から本溝が新しいと考えられる。

#### 4号溝

**位置** C-8～F-15グリッド。南側微高地にあたる2区の東に沿って確認された。

**形状・走向** 確認された範囲内のほぼ中央で9号住居によって分断され、この部分で方向を変えるが、走向はほぼ直線的である。幅を計測できる北半で、幅45～50cmを測り、深さは55cmである。

**埋没土** 住居埋土に近似した暗褐色土で埋まる。滞水や流水の痕跡は認められなかった。

**遺物出土状態** 遺物の出土量は非常に少ないが、調査区内（2区）に遺構が確認されていない時期（古墳時代前期）の土師器甕（第90図2）を参考として図示した。第90図1の須恵器杯は、1点の出土であ

るが、9号住居との重複を考慮すると本溝の時期を示す可能性がある。また、同図3の軽石製品は、用途不明であるが、地覆石の可能性も考えられる。

**他の遺構との重複関係** 平安時代後期の9号住居と重複し、本溝が古い。

### 5・13号溝

**位置** 北側微高地のほぼ中央に位置する。調査工程の関係で、第1次調査分を5号溝、第2次調査分を13号溝と呼称した。この2条の溝は、水道管の関係で中央部を調査できなかったが、同一溝で間違いないであろう。

**形状・走向** 断面形は、最大幅4.2m、深さ1mの浅い箱薬研形を呈する。走向は、N-7.5°-Wで直線的である。調査長は約24mで、南側は住宅と畑地への進入路確保のため調査できなかったが、3区の北側で確認できると考えていた。しかし、3区北側の調査の結果、5号溝の延長は確認できず、調査対象地西側ぎりぎりまでトレンチ調査を行ったが確認できなかった。したがって、未調査部分でこの堀が屈曲もしくは「T」字形を呈しているものと推測される。北側も現道下に延びるが、その延長は調査対象地内では確認できず、南側同様道路部分で屈曲しているものと考えられる。

**埋没土** オリーブ灰色粘質土で埋まり、流水などを示す堆積は認められなかった。

**遺物出土状態** 埋土中から中世遺物が少量出土し、第92・93図に図示し得る中世遺物のすべてを図示した。

**他の遺構との重複関係** 16号土坑、1号井戸と重複し、いずれも本溝が新しい。更に、北側では14号溝と重複し、本溝が古いことが断面観察により確認された。

### 7号溝

**位置** M-39～N-40グリッド。北側微高地の南寄

りに位置し、26号住居と近接する。

**形状・走向** 全長5m、幅70cm前後、深さは15cm前後を測る。走向は直線的である。

**埋没土** 淡褐色砂壤土単一で埋まり、流水や滞水の痕跡は認められない。

**遺物出土状態** 遺物はまったく出土していない。

**他の遺構との重複関係** 遺物の出土がないうえに、重複もなく、時期は推定できない。

### 8号溝

**位置** P-41～P-43グリッド。4区北西に位置し、基盤をなす砂礫層の標高が高い部分である。周囲に遺構は確認されていない。

**形状・走向** 調査区の北西隅で確認されたため、5.5mしか確認されず、調査区外に延びている。形状は、幅が1～4.2mと一定せず、深さも一定していない。しかし幅は、北に向かうにしたがって広くなり、深さは逆に南に向かうにしたがって深くなる傾向が伺える。本調査区の北に位置する3区では、8号溝の延長と考えられる溝は確認されなかった。

**埋没土** 暗褐色砂壤土で埋まり、流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

**遺物出土状態** 奈良・平安時代の土器片が少量出土したが、他の時期の土器がなく、埋土が住居と似ていることから、古代の溝と推定される。

**他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。

### 9号溝

**位置** K-71～L-71グリッド。現桃ノ木川に近い北側住居群の南に位置する。

**形状・走向** 走向は直線的で、規模は幅55cm、深さ10cmを測る。調査区内を東西に横切るように、5.2mにわたって確認された。

**埋没土** 淡褐色砂壤土で埋まる。流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

### 第3章 遺構と遺物

**遺物出土状態** 遺物は出土していない。

**他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。時期不詳。

#### 10号溝

**位置** K-72～L-72グリッド。現桃ノ木川に近い北側住居群の南に位置する。

**形状・走向** 走向は直線的で、規模は幅90cm、深さ20cmを測る。調査区内を東西に横切るように、4.2mにわたって確認された。

**埋没土** 淡褐色砂壤土で埋まる。流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

**遺物出土状態** 遺物は出土していない。

**他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。時期不詳。

#### 11号溝

**位置** M-67グリッド。現桃ノ木川に近い北側住居群の南端に位置する。

**形状・走向** 幅70cm、深さ40～45cmを測り、長さ3.5mにわたって確認された。東側は調査対象地外に延びる。走向は直線的である。

**埋没土** 淡褐色砂壤土で埋まる。流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

**遺物出土状態** 遺物は出土していない。

**他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。時期不詳。

#### 12・14号溝

**位置** N-60～S-61グリッド。北側微高地のほぼ中央に県道を挟んで確認された。本遺跡の調査は住宅地であるため、狭い範囲を調査して埋め戻した後、次に調査区を始めるという制約があり、両溝も調査時には別番号を付した。しかし、他の調査区では、類する溝が確認されず、両溝は同一の可能性が高い。

なお、調査時には県道を挟んだ東側を12号溝、西側を14号溝としている。

**形状・走向** 断面は「U」字形を呈し、幅1.6～1.7mを測る。調査長は、12号溝が2.8m、4号溝が6.3m、道路幅を含めると25.6mに及ぶ。走向は直線的で、方位はN-103°-Wを示す。先述の5・13号溝とは重複関係にあるが、角度は95.5°とほぼ直交する。

**埋没土** 暗褐色土で埋まり、滞水や流水を示す堆積は認められなかった。

**遺物出土状態** 出土遺物は非常に少なく、図示し得る遺物は焼締陶器片1点(第96図1)のみである。

**他の遺構との重複関係** 13号溝、32号住居と重複し、いずれも本溝が新しいことが確認されている。

#### 15号溝

**位置** P-74～Q-76グリッド。現桃ノ木川に近い北側住居群の南に位置する。

**形状・走向** 幅50cm、深さ6cmの浅い溝で、走向は弧状を呈する。端部はいずれも調査区外に延び、県道を挟んだ東側の7区では、位置的に10号溝に続くようにも見えるが、10号溝の走向が直線的であることを考慮すると可能性は低いようである。

**埋没土** 黒褐色土で埋まり、流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

**遺物出土状態** 出土遺物がないが、埋土が住居と似ていることから、古墳時代から平安時代の可能性が高い。

**他の遺構との重複関係** 49号土坑と重複し、本溝が新しい。

#### 16号溝

**位置** M-79グリッド。現桃ノ木川に近い北側住居群中に位置する。

**形状・走向** 13区の東端で確認されたため、長さ2.5mにわたって西側が確認されたのみであった。このため、規模は不明である。走向も不詳であるが、

南側が東に曲がっているようであり、直線的ではないようである。

**埋没土** 暗褐色砂壤土で埋まり、流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。

**遺物出土状態** 遺物は出土しなかった。

**他の遺構との重複関係** 40号住居と重複し、本溝が新しい。本溝の時期は不詳。

### 17号溝

**位置** L-82～K-84グリッド。現桃ノ木川の堤防直下、北側住居群の北端に位置する。

**形状・走向** 13区の北東隅で確認され、長さ9.3mにわたって西側のみが確認された。両端は更に調査区外に延びるようである。調査した範囲内での深さは15cmと浅い。

**埋没土** 灰褐色砂壤土で埋まり、流水や滞水の痕跡はみうけられなかった。埋土の特徴から、少なくとも中世以降であると考えられる。

**遺物出土状態** 遺物は出土していない。

**他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。

### 18号溝

**位置** N-83～N-84グリッド。現桃ノ木川の堤防に近い、北側住居群の北端に位置する。

**形状・走向** 幅95cm、深さ55cmを測り、長さ4.4mにわたり確認された。両端は調査対象地外に延びる。

**埋没土** 黒褐色土で埋まり、住居の埋土と近似している。

**遺物出土状態** 出土遺物がなく、時期を特定することはできないが、埋土から中世以前の可能性が考えられる。

**その他の遺構との重複関係** 重複はないが、43号住居と近接しており、少なくとも43号住居とは同一時期ではないと考えられる。

### 19号溝

**位置** U-83グリッド。現桃ノ木川の堤防に近い、北側住居群の北西端に位置する。本溝が位置する場所は、住居の集中範囲外であり、住居群の北西からやや外れた場所にあたる。

**形状・走向** 幅1.5m、深さ90cmを測り、長さ1.5mにわたって確認された。両端は調査対象地外に延びる。

**埋没土** シルトを主体とした埋土。調査時の所見では、6層以下は地山と似ており、本溝は小規模な噴砂に沿って調査した可能性も考えられる。本来の19号溝は、5層までの小規模なものであったであろう。

**遺物出土状態** 出土遺物はない。

**その他の遺構との重複関係** 他の遺構との重複はない。

### 弥生土器集中箇所

**位置** P-72グリッド。付近には33号住居が単独で存在する他に遺構はなく、遺構の希薄な場所に位置する。

**遺物出土状態** 土器はすべて細片であり、総数で53点が集中して出土した。遺構としての掘り込みは確認できなかったが、遺構が存在していた可能性が高い。これらは、胎土や焼成から同一個体の可能性が非常に高い。接合の結果、細片であるため接合率は悪く、口縁部から底部に近い部分までを選んで6点を図示した。第98図1は、口縁部の折り返し部の小片である。

### 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、希少性の高いこと、中世遺物、石製品であることなどを条件に第99～100図に掲載した。

2は、円筒埴輪口縁部下位片であり、6世紀後半頃であろう。3は、龍泉窯系青磁碗の体部片である。4は、古代末頃の中国製白磁碗の体部下位片である。5～7・14は、中世遺物である。13は、現桃ノ木川の河川改修時（昭和40年代）に出土したほぼ完形の

## 第4章 まとめ

土師器杯である。河川改修時には大量の土器が出土したとの話であるが、完形であったこの土器は、地元の方によって大切に保管されていた。この土器の存在は、現在の桃の木川が自然堤防を貫いて流れる

# 第4章 まとめ

広瀬川低地帯の自然堤防上に立地する笄井中屋敷遺跡からは、弥生後期の土器集中箇所を最古とし、中世にいたるまでの生活の跡を確認することができ、現在も最も高い部分に集落が存在している。縄文時代から古墳時代前期までの遺構・遺物は、低地帯内ではやや希薄な傾向があり、本遺跡の場合も例外ではない。古墳時代前期の遺構は確認されなかったが、2区で土器が出土していることや桃ノ木川左岸に位置する中原遺跡<sup>(1)</sup>では竪穴住居が確認されていることから、周辺に集落が存在する可能性も残されている。

狭い範囲の調査から推測すると、古墳時代後期になると集落として確認できるが、調査対象地中央部には竪穴住居を構築していない。調査対象地は、地表観察や空中写真(PL-1)判読によると、自然堤防でもより高い部分の西側周縁に沿うように位置しており、竪穴住居が確認された場合でも、集落の中心部ではない可能性が高いと考えられる。この傍証となるのが、「桃ノ木川の堤防を昭和40年代に工事した際、多量の土器が出土した」との地元の方々の話である。また、現在まで保管されている土器(第100図13)も古墳時代の土師器であった。以上のことから、今回確認した竪穴住居群は集落の周縁部であり、中心はより東側に存在すると推定される。

奈良・平安時代の竪穴住居は、標高の高い部分に集中する傾向が認められるとともに重複もかなり存在し、古墳時代とは占拠が異なっているようである。また、10世紀～11世紀にかけての土器が、調査対象地西側の畑で確認されており、平安時代後期には集落が西側のやや低い自然堤防にまで広がっていた可

という地形観察結果と一致し、河川敷や堤防部分に古墳時代後期の集落が存在したことを示している。10は、榛名軽石を使用した大型の五輪塔の風輪である。1区の表土掘削中に出土した。

能性がある。この要因が集落の拡大なのか、河川の変流により自然堤防に変化が認められたかは不明であるが、調査対象地内に限れば住居は増大している。出土遺物では、越州窯系青磁碗の口縁部片が注目される。越州窯系青磁は、県内での出土地に偏りがあるうえ、出土量も少ない<sup>(2)</sup>。その青磁碗が、1点であれ従来あまり注目されなかった地域で出土した意義は大きい。

中世遺構は、標高の高い中央部分を中心に堀、井戸などが確認されている。遺跡地と周辺の小字には「中屋敷」、「北屋敷」、「前屋敷」、「西屋敷」、「屋敷裏」がまとまり、中屋敷と北屋敷、前屋敷と中屋敷の間に桃ノ木川が流れている。先にも触れたように、現在の桃ノ木川は同一の自然堤防を貫いており、これらの小字名は互いに関連する地名であったことは間違いない。そして、これらの地名と中世の堀が関連する可能性が考えられる。また、確認された堀の位置は現在の道路に近く、走向も一致する。このことは、集落内で屋敷地を囲むように存在する道路や地境に未確認の堀が存在する可能性が高いことを示している。本遺跡調査以前には、地表観察では中世環壕集落の存在は確認されていなかったが<sup>(3)</sup>、このような堀ありかたは、前橋台地の微高地に存在する中世集落と共通し、同じ状況が広瀬川低地帯の自然堤防上にも多数存在する可能性を示唆している。

今回の調査対象面積は狭く、幅も狭いため、各時期を通じて集落の様子を推測するには情報不足であり、今後の調査の進展に期待したい。

注

(1) 都所敬尚ほか『中原遺跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993

荻野博巳ほか『中原遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994

(2) 大西雅広『舟橋遺跡出土の白磁について』『舟橋遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989

(3) 山崎一ほか『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988



## 付編 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I. 筑井中屋敷遺跡の地質とテフラ

## 1. はじめに

赤城火山と前橋台地にはさまれた広瀬川低地に位置する筑井中屋敷遺跡の発掘調査では、広瀬川低地帯を構成する地層の上部をよく観察することができた。また住居址や溝遺構も多く検出された。そこで地質調査を行い土層断面についての記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラの降灰層準から地層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、7区、8区、9区、10区、11区の自然堆積の土層断面10地点と、4遺構である。

## 2. 土層の層序

## (1) 7区K73グリッド

ここでは、下位より亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径45mm）、灰色砂層（層厚6cm）、暗灰色砂層（層厚17cm）、黄灰色砂層（層厚15cm）、灰色砂層（層厚5cm）、暗灰色土（層厚6cm）、黄褐色砂層（層厚53cm）、暗褐色土（層厚13cm）、黄灰色軽石に富む黒褐色土（層厚8cm、軽石の最大径6mm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり黒褐色土（層厚26cm）、暗褐色土（層厚13cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚25cm）、灰色がかった暗褐色砂質表土（層厚15cm）の連続が認められた（図1）。

## (2) 7区L71グリッド

本地点では、下位より亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径261mm）、暗灰色砂質土（層厚12cm）、黄灰色砂層（層厚27cm）、灰色砂層（層厚4cm）、灰色砂層（層厚12cm、下より若干色調が暗い）、黒褐色土（層厚6cm）、黄褐色砂層（層厚54cm）、暗褐色土

（層厚13cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚11cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚27cm）、暗褐色土（層厚6cm）、黄色砂層（層厚7cm）の連続が認められた（図2）。

## (3) 7区N63グリッド

ここでは、下位より黄灰色砂層（層厚21cm以上）、灰色がかった暗褐色土（層厚11cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚24cm）、暗褐色土（層厚3cm）、灰色砂質土（層厚4cm）、黄灰色砂質土（層厚9cm）が認められた（図3）。

## (4) 8区12号溝北地点

本地点では、下位より黄褐色砂層（層厚22cm以上）、暗褐色土（層厚12cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚6cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚18cm）、暗褐色砂質土（層厚10cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚23cm、2層）、灰色がかった暗褐色砂質表土（層厚35cm、1層）の連続が認められた（図4）。

## (5) 8区N58グリッド北端

ここでは亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径232mm）の上位に、下位より褐色砂層（層厚23cm）、褐色砂質土（層厚13cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり褐色土（層厚28cm）、暗褐色砂質土（層厚16cm）が認められた（図5）。

## (6) 9区最北トレンチ

ここでは亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径279mm）の上位に、下位より灰色砂層（層厚5cm）、黄灰色砂層（層厚10cm）、黒灰色土（層厚13cm）、黄褐色砂層（層厚26cm）、黄褐色砂層（層厚17cm）、暗

付編 自然科学分析

褐色砂層（層厚14cm）、黄色砂層（層厚19cm）、暗褐色土（層厚6cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚9cm、軽石の最大径6mm）、黄灰色軽石および白色軽石（最大径22mm）混じり暗褐色土（層厚24cm）、褐色土（層厚6cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚23cm、2層）、灰色がかった暗褐色砂質表土（層厚35cm、1層）が認められた（図6）。

(7) 10区S69グリッド

本地点では、下位より黄褐色砂層（層厚8cm以上）、暗褐色土（層厚8cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚15cm）、暗褐色土（層厚5cm）、黄褐色土（層厚9cm）が認められた（図7）。

(8) 10区T67グリッド

本地点では暗灰色砂質土（層厚3cm以上）の上位に、下位より黄褐色砂層（層厚52cm）、暗褐色砂層（層厚18cm）、黄色砂層（層厚10cm）、暗褐色土（層厚11cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚14cm）、黄褐色土（層厚5cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚18cm）、灰色がかった暗褐色砂質表土（層厚21cm）、盛土（層厚16cm）が認められた（図8）。

(9) 10区T66グリッド

ここでは、下位より暗灰色砂質シルト層（層厚9cm以上）、黄褐色砂層（層厚38cm）、黄褐色砂層（層厚18cm）、暗褐色砂質土（層厚13cm）、黄褐色砂層（層厚11cm）、暗褐色土（層厚7cm）、黄灰色軽石に富む灰色がかった暗褐色土（層厚6cm）、黄灰色軽石および白色軽石混じり暗褐色土（層厚9cm）、褐色土（層厚5cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚31cm）、盛土（層厚26cm）の連続が認められた（図9）。

(10) 11区S59グリッド

本地点では、亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径312mm）の上位に、下位より暗灰色砂質シルト層（層厚13cm）、灰色砂質シルト層（層厚13cm）、黒灰色砂質シルト層（層厚14cm）、暗灰色砂質シルト層（層厚4cm）、褐色がかった灰色砂層（層厚60cm）、暗褐色砂層（層厚12cm）、黄褐色砂層（層厚7cm）の連続が認められた（図10）。

厚4cm）、褐色がかった灰色砂層（層厚60cm）、暗褐色砂層（層厚12cm）、黄褐色砂層（層厚7cm）の連続が認められた（図10）。

(11) 7区30号住居址

この縦穴住居址では、黄灰色軽石混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚6cm）からなる盛土（床面構成層）の上位に、下位より黄灰色軽石および白色軽石混じりの灰色がかった暗褐色砂質土（層厚54cm、発掘調査では3層に区分）、とくに砂質の灰色がかった暗褐色砂質土（層厚12cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚10cm）、灰色がかった褐色砂質土（層厚27cm）が認められた（図11）。

(12) 8区12号溝

この溝の基底の上位には、下位より灰色がかった暗褐色砂質土（層厚35cm、発掘調査では3層に区分）、黄褐色砂質土（層厚17cm）、暗褐色砂質土（層厚23cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚21cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚22cm、2層）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚33cm、1層）の連続が認められた（図12）。

(13) 8区32号住居址

この縦穴住居址では、黄灰色軽石（最大径3mm）混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚5cm）からなる盛土（床面構成層）の上位に、下位より黄灰色軽石混じりの灰色がかった褐色砂質土（層厚17cm）、黄灰色軽石混じりの褐色土（層厚16cm）、とくに砂質の灰色がかった暗褐色砂質土（層厚11cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚8cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚11cm、2層）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚25cm、1層）が認められた（図13）。

(14) 11区南R57グリッド13号溝

この溝遺構の基底の上位には、下位より灰色がかった褐色土（層厚14cm）、褐色がかった暗灰色砂質土（層厚37cm）、白色軽石（最大径4mm）混じりで

褐色がかった暗灰色砂質土（層厚17cm）が認められた（図14）。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

地質調査の対象とした5地点から採取された土壌試料7点について、テフラ検出分析を行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラを検出して、土層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料の収集を試みた。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。分析の結果、3種類の軽石が検出された。

3種類の軽石は、下位より灰白色、白色、淡褐色を各々呈するものである。灰白色の軽石はスポンジ状によく発泡しており、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1972）に由来するものと考えられる。また白色の軽石は、あまりよく発泡しておらず、斑晶に角閃石が認められる。この軽石は、その岩相や遺跡の位置とテフラの分布の関係などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来するものと思われる。さらに淡褐色の軽石は、比較的良好に発泡しており、その岩相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出したとされる浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に由来するものである。

7区K73グリッド試料番号2にはAs-Cに由来する軽石（最大径6.2mm）が多く、また試料番号1にはHr-FAに由来すると思われる軽石（最大径112mm）が少量含まれている。7区30号住居址覆土試料番号

1には、As-Bに由来する軽石（最大径5.3mm）が多く認められた。また8区12号溝覆土基底の試料番号1および8区32号住居址試料番号1からも、As-Bに由来する軽石が多く検出された。軽石の最大径は、各々4.3mmと3.3mmである。11区R57グリッド13号溝の試料番号2にはAs-Bに由来する軽石（最大径3.0mm）が少量、また試料番号1には比較的多く（軽石の最大径4.0mm）認められた。

### 4. 考察—土層の堆積年代と遺構の構築年代について

筑井中屋敷遺跡における地質調査とテフラ検出分析の結果、ほとんどの地点において、筑井中屋敷遺跡の発掘調査で基盤の地層とされた礫層の上位に、下位よりAs-C、Hr-FA、As-Bに由来する軽石の濃集層または包含層が認められた。したがって7～11区における礫層の堆積終了年代、つまりおそらくは広瀬川の河道の離水は、4世紀初頭以前であることが明らかになった。またHr-FAより上位にも洪水起源の砂層の堆積が認められる（たとえば7区L71グリッド）。礫層上位の洪水砂層の広がりや層位、さらに年代については、今後詳細な土層断面図を基に検討していきたい。

また示標テフラとの層位関係から、8区32号住居址の構築年代はAs-C降灰後でAs-B降灰前、7区30号住居址の構築年代はHr-FA降灰後でAs-B降灰以前と考えられる。8区12号溝は覆土基底からAs-Bが多く、また11区南R57グリッド13号溝覆土基底からAs-Bが少量検出されている。さらに8区15号溝の覆土中にもAs-Bが多く含まれていることが予想されるが、その基盤にあたる土層についての情報が無いことから、ここではAs-B降灰前後以前の可能性を指摘するにとどめる。

### 5. 小 結

筑井中屋敷遺跡7～11区において地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、礫層の上位に下位より浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間

Bテフラ (As-B, 1108年) の3層の示標テフラが  
検出された。これらとの層位関係から、7~11区に  
おける広瀬川の河道の離水は、As-C降灰つまり4

世紀初頭以前と推定された。また、これらの示標テ  
フラとの関係から、住居址や溝の遺構の構築年代に  
関する資料を収集することができた。

文献

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.  
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.  
坂口 一 (1986) 榛名火山二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.  
早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第4紀研究, 27, p.297-312.  
早田 勉 (1990) 群馬県 of 自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.27-135.

表1 笄井中屋敷遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
7区K73G	1	+	白	11.2
	2	++	灰白	6.2
7区30号住居	1	+++	淡褐	5.3
8区12号溝	1	+++	淡褐	4.3
8区32号住居	1	+++	淡褐	3.3
11区13号溝	1	++	淡褐	4.0
	2	+	淡褐	3.0

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,  
-: 認められない. 最大径の単位は, mm.

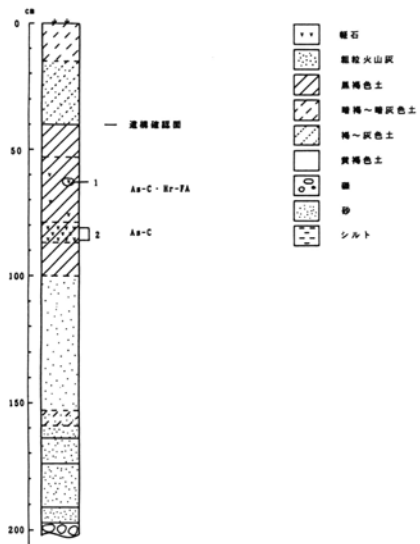


図1 笄井中屋敷遺跡 7区  
K-73グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

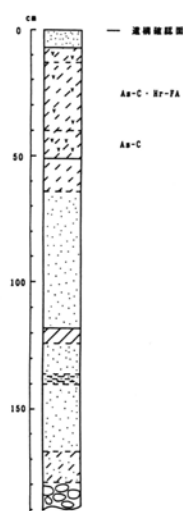


図2 笄井中屋敷遺跡  
L-71グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

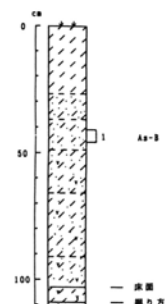


図3 笄井中屋敷遺跡 7区  
30号住居址覆土の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

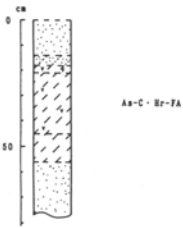


図4 笄井中屋敷遺跡 7区  
N-63グリッドの土層柱状図

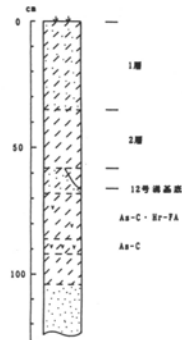


図5 笄井中屋敷遺跡 8区  
12号溝北地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

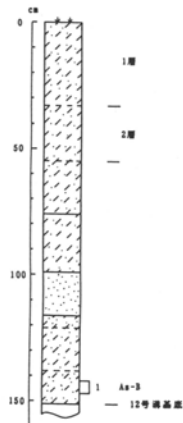


図6 笄井中屋敷遺跡 8区  
12号溝覆土の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

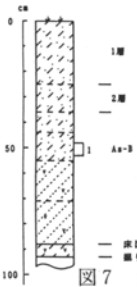


図7 笄井中屋敷遺跡 8区  
32号住居址覆土の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

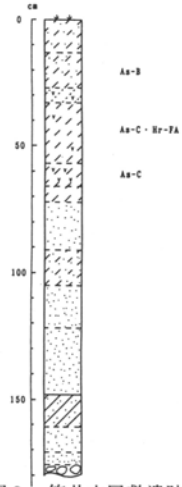


図8 笄井中屋敷遺跡 9区  
最北トレンチの土層柱状図

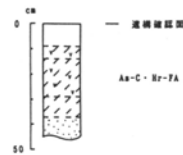


図9 笄井中屋敷遺跡 10区  
S-69グリッドの土層柱状図

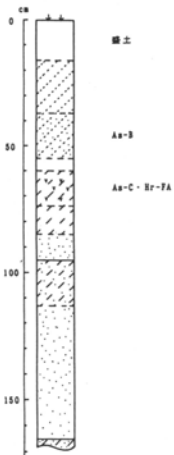


図10 笄井中屋敷遺跡 10区  
T-67グリッドの土層柱状図

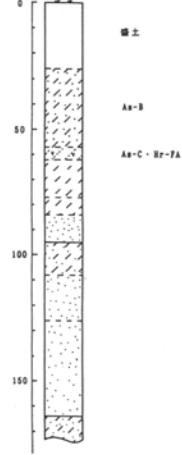


図11 笄井中屋敷遺跡  
T-66グリッド南端の土層柱状図

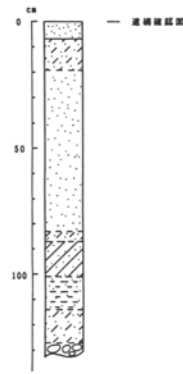


図12 笄井中屋敷遺跡 11区  
S-59グリッドの土層柱状図

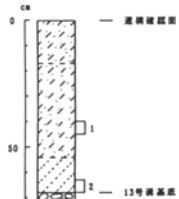


図13 笄井中屋敷遺跡 R-57グリッド  
13号溝覆土の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

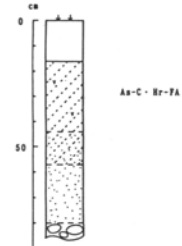


図14 笄井中屋敷遺跡 8区  
N-58グリッド北端の土層柱状図

## II. 放射性炭素年代測定結果

筑井中屋敷遺跡11区S59グリッドの亜円礫層直上(灰色砂質シルト層)について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年より

遡った年数(B.P.)である。

年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。

放射性炭素年代測定結果

採取層準	種類	年代値	コードNo
亜円礫層直上	灰色砂質シルト	3,870±130 (1920B.C.)	GaK-18160

(学習院大学理学部年代測定室)

## III. 筑井中屋敷遺跡の植物珪酸体分析

### 1. 試料

調査地点は、7区L-71グリッド、9区最北トレンチ、10区T-67グリッド、11区S-59グリッドの4地点である。試料は、7区L-71グリッドではAs-C混層とその上下層について、その他の地点ではAs-Cより1m程度下位に位置する灰色～黒灰色の砂質シルト層について、計7点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

### 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10<sup>-5</sup>g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属(ヨシ)の換算係数は6.31、ウシクサ族(ススキ)は1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

### 3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来:ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属や

チガヤ属など)、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、莖部起源、未分類等

[樹木]

はめ絵パズル状(ブナ科ブナ属など)、その他

分析の結果、ほとんどの試料から棒状珪酸体が10万個/g以上と極めて多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成され

参考文献

杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号:p.27-37.  
 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号:p.70-83.  
 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9:p.15-29.

る。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。As-Cより下位層ではネザサ節型も比較的多く検出され、ヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)なども見られた。

4. 植物珪酸体分析からみた植生・環境

当時の遺跡周辺は、棒状珪酸体やウシクサ族型の給源植物を主体としてネザサ節やススキ属なども見られるイネ科植生であり、低地部ではヨシ属も生育していたものと推定される。これらの植物は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

表1 筑井中屋敷遺跡の植物珪酸体分析結果

検出度数(単位:×100個/g)

分類群 / 試料	7区L-71グリッド			9区最北	10区T-67	11区S-59	
	1	2	3	1	1	1	2
イネ科							
ヨシ属	23	14	8	7	8	29	15
ウシクサ族(ススキ属など)	31	35	54	27	46	7	45
キビ族型	8				8		
ウシクサ族型	214	141	147	113	244	298	276
ウシクサ族型(大型)	8		8				
タケ亜科							
ネザサ節型	15	14		166	91	189	209
クマザサ属型	8	7		33	15	44	15
未分類等	15	35	31	106	99	138	224
その他のイネ科							
表皮毛起源	38	7	23	13	23	22	15
棒状珪酸体	1049	542	721	925	1158	1162	1217
莖部起源		7	16	13		36	22
未分類等	919	633	744	858	845	791	873
樹木起源							
はめ絵パズル状(ブナ属など)					8		7
その他						7	
(海綿骨針)	8			7		7	
植物珪酸体総数	2328	1435	1752	2262	2544	2723	2918

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

ヨシ属	1.45	0.89	0.49	0.42	0.48	1.83	0.94
ウシクサ族(スキ属など)	0.38	0.44	0.67	0.33	0.57	0.09	0.56
ネサザ節型	0.07	0.07		0.80	0.44	0.91	1.00
クマザサ属型	0.06	0.05		0.25	0.11	0.33	0.11

※仮比重を1.0と仮定して算出。

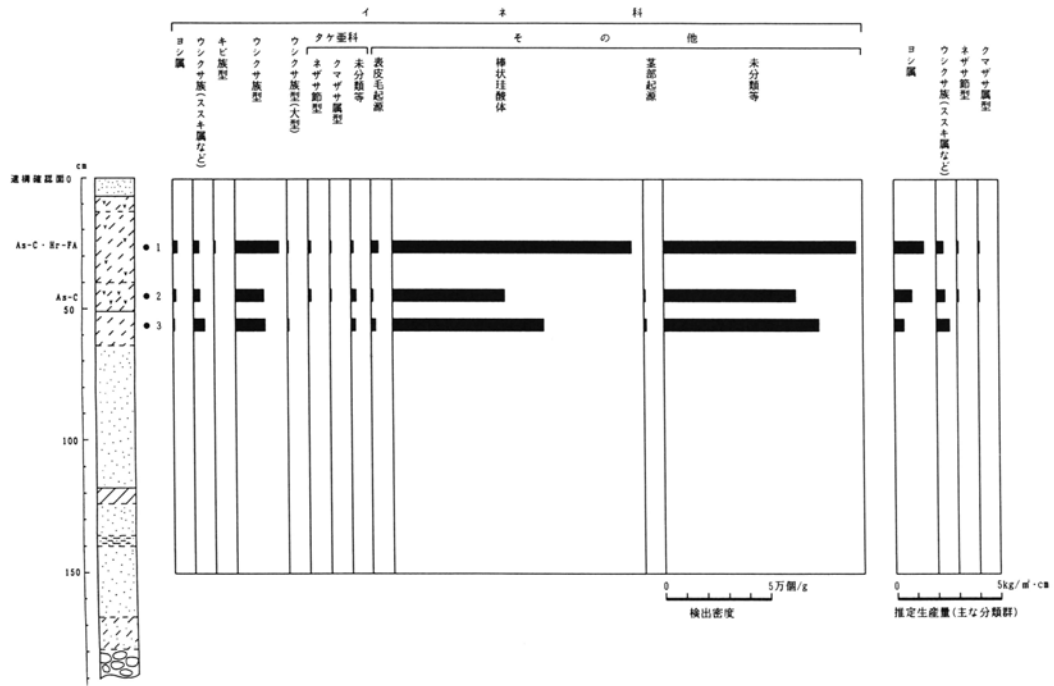


図1 筑井中屋敷遺跡、7区L-71グリッドの植物珪酸体分析結果

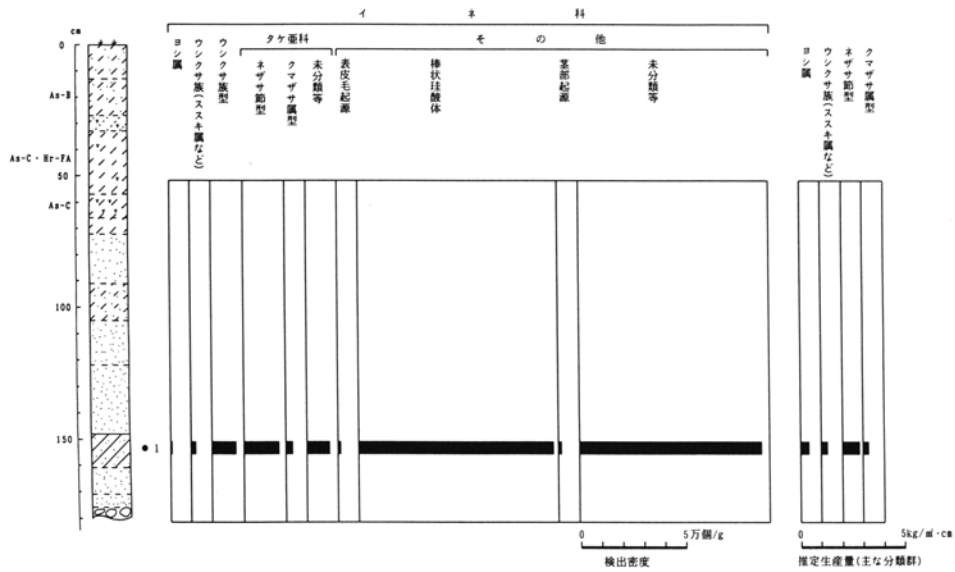


図2 筑井中屋敷遺跡、9区最北トレンチの植物珪酸体分析結果



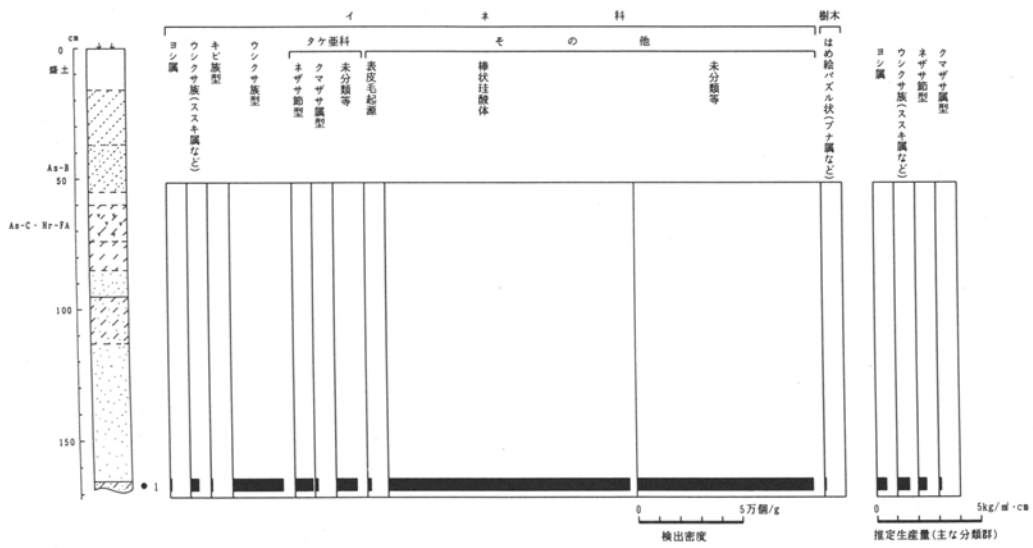


図3 笄井中屋敷遺跡、10区T-67グリッドの植物珪酸体分析結果

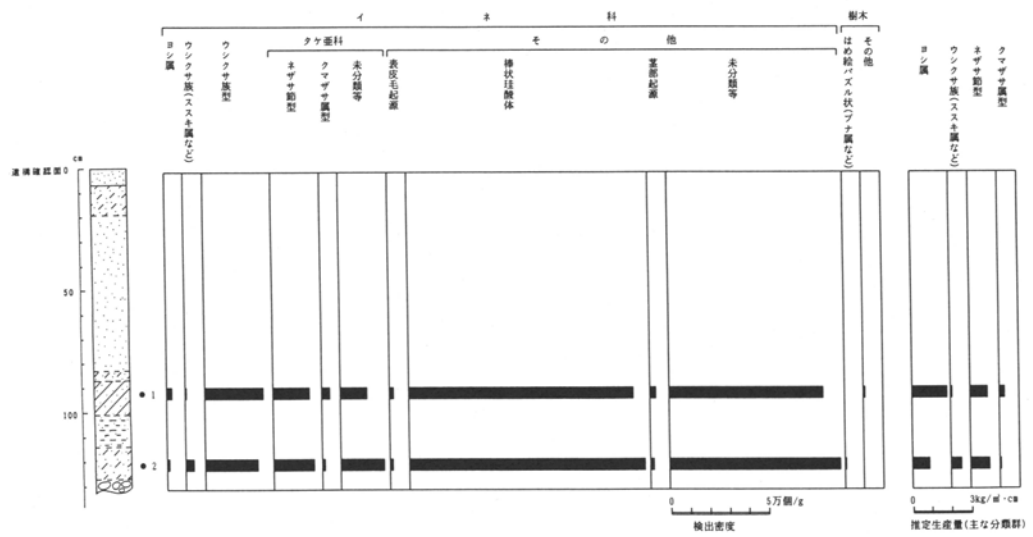


図4 笄井中屋敷遺跡、11区S-59グリッドの植物珪酸体分析結果

#### IV. 筑井中屋敷遺跡における花粉分析

##### 1. 試料

調査地点は、9区最北トレンチ、10区T-67グリッド、11区S-59グリッドの3地点である。試料は、As-Cより1m程度下位に位置する灰色～黒灰色の砂質シルト層について計4点が採取された。これらは植物珪酸体分析と同一試料である。

##### 2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無氷酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グ

リセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

##### 3. 結果と考察

分析の結果、11区S59グリッドの試料2からは草本花粉のヨモギ属がわずかに検出されたが、その他の試料からは花粉・胞子はまったく検出されなかった(表1)。

このことの原因として、花粉などの微細な有機質遺体が、堆積作用によって淘汰されたことや、風化作用によって分解されたことなどが考えられる。

#### 参考文献

- 中村 純(1973)花粉分析, 古今書院.  
 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店.  
 日本第四紀学会編(1993)第四紀試料分析法, 東京大学出版会.  
 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集.  
 中村 純(1980)日本産花粉の標徴, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集.

表1 筑井中屋敷遺跡における花粉分析結果

分 類 群		9区最北	10区T67	11区S59	
学 名	和 名			1	2
Pollen・Spore	花粉・胞子	(-)	(-)	(-)	(+)
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Artemisia	ヨモギ属				1
Charcoal fragment	炭化物片	(+)	(+)	(+)	(+)
Helminth egg	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)

(+):含まれている (-):含まれていない

## 筑井中屋敷遺跡の人骨

宮崎 重雄

筑井中屋敷遺跡は群馬県前橋市筑井町にあり、県道藤岡大胡線の拡幅工事に伴う発掘調査によって出土したものであり、中世の人骨である。

### 1号墓

長方形で、長軸は100cm、短軸は70cm、長軸方向は南北である。

横臥屈葬姿勢を基本としながらも、うつ伏せ状態で埋存していた。強く屈曲した下肢は右が東側、左が西側にあり、上肢も強く屈曲して右が東側、左がその西斜め上にあつて、体が下肢部で強く、頭部に近づくとつれて弱く西へ回転し、背を斜め上から上に向けて埋存していた。頭蓋骨は残存しないが、歯が1本だけ検出されている。

歯は左右不明の上顎第1小白歯で、歯冠近遠心径が7.3mm、頬舌径が9.4mm、歯冠高が7.6mm、齲蝕はなく、歯石の付着もない。舌側咬頭に半月状の、象牙質の露出がある。

大腿骨の骨体中央横径は25.2mm、骨体中央矢状径は25.4mmであり、脛骨の栄養孔における骨体横径は23.4mm、骨体矢状径は31.5+mmである。

性別不明の壮年期の個体と推定される。

### 2号墓

遺存が悪く形状は不明である。

寛骨の一部と思われる骨片をのぞき下半身の骨は見あたらない。

頭蓋の保存は比較的良好で、顔を西に向けている。脳頭蓋最大長は175.6mmでかなり小さい。

上顎歯槽突起幅(60)は60.5mmあり、前上顎歯槽突起幅(61-2)は29.0mm、口蓋幅(63)は41.0mm、前口蓋幅(63-2)は23.7mmである。

歯は比較的小さく、上顎犬歯・下顎犬歯の近遠心径はそれぞれ7.8mm、6.6mmで、上顎第1大白歯・下顎第2大白歯の近遠心径はそれぞれ10.2mm、10.8mm

あり、女性の可能性を伺わせている。

齲蝕が多く、齲蝕によって喪失した歯は上顎左第2大白歯・第3大白歯で、同右第2大白歯・第3大白歯、齲蝕され歯根部のみが残っている歯は上顎左第1小白歯、同右第1小白歯・第2小白歯、下顎左第2小白歯の4本である。また歯髄に達する齲蝕のある歯は顎左第2小白歯で、近心隣接面に直径3.2mmで開口している。歯髄に達しない齲蝕のある歯は上顎左犬歯、左下顎第3大白歯で、前者は直径4.9mmの大きさで開口している。

口蓋部は完存し、横口蓋縫合・正中口蓋縫合には癒合がなく、切歯縫合は左右の両縁が消失しかかっている。ラムダ縫合は内板・外板とも全く癒合していない。

この個体は口蓋部・脳頭蓋部の縫合線の癒合度だけから見ると、21~26歳ほどと推定されるが、歯の咬耗は進んでいて、例えば左第1大白歯では遠心両咬頭が象牙質でつながり、近心両咬頭もそれぞれ象牙質が面状に露出している。また、右第2大白歯では遠心舌側咬頭をのぞき象牙質が点状から面状に露出し、左上顎第3大白歯では舌側の咬頭にエナメル質の面状の咬耗がある。

以上の事実から、この個体は青年期後半から壮年期前半の女性と思われる。

### 3号墓

長方形で、長軸は134cm、短軸は72cm、長軸の方向は南北である。横臥屈葬で上肢・下肢とも強く折り曲げ、顔面を西に向けている。

脳頭蓋最大長(1)は約180.0mmで、脳頭蓋最大幅(8)が124.0mmで、頭蓋長幅指数は68.9で過長頭である。

上顎では、左の第1小白歯より遠心部の5本が欠損し、この部分の下顎高が低くなっている、歯槽部が近遠心方向の広くて浅い溝状になっている。右は

筑井中屋敷遺跡の人骨

第1大臼歯より遠心部の3本の歯が欠損しているが、左のように下顎高が低くなっていない。

植立している歯は左犬歯だけで、近遠心径が8.4mmあり、唇側歯冠部に直径5.0mmの歯髄に達する齶蝕がある。舌側面全面に象牙質が露出している。

犬歯の大きさは男性を示唆している。

内板で見る縫合線は前頭縫合・ラムダ縫合では癒合が観察されず、矢状縫合では1/3~2/3ほどが閉鎖している。

以上の事実から、壮年期後半から熟年期前半の男性と思われる。

4号墓

長方形で、長軸は142cm、短軸は104cm、長軸の方向は南北である。横臥屈葬で上肢・下肢とも強く折り曲げ、顔面を西に向けている。体軸の方向は北北西-南南東である。

脳頭蓋長は193.0mm、メトピオン頭蓋長は192.5mm、脳頭蓋最大幅は123.5mmで、頭蓋長幅指数は64.0で、

超長頭である。

切歯縫合は消失し正中口蓋縫合は癒合していないことから、壮年期後半の個体であろう。

下顎の歯は、左ではすべて欠損していて、歯根のみ残るもの1、浅い歯槽が残るもの3、歯槽閉鎖しているもの4である。右では2つの切歯で歯槽閉鎖していて、残りの歯はすべて歯頸部が齶蝕されている。そのうち、第3大臼歯は歯頸部全周に齶蝕を受け、特に頰側は歯髄に達するほどであり、近心側も歯髄に達しないまでも、深く穿たれている。

上顎の歯は、すべての左大臼歯と右第2・第3大臼歯が欠損している。歯槽閉鎖しているのが右第2小臼歯と同第1大臼歯である。右上顎第1小臼歯は歯槽の痕跡のみが残存する。左犬歯には唇側歯頸部にC1の齶蝕が見られる。

内板で見る縫合線は矢状縫合では癒合は全くみられず、ラムダ縫合でも癒合はない。大腿骨の中央横径は22.0mm、中央矢状径は31.2mmである。

座骨切痕の角度からみて、女性と思われる。

参考・引用文献

馬場悠男 (1981) 「人骨計測法」『江藤盛治・人類学講座一別巻I』。雄山閣、東京。  
 Brothwell, D.R. 1981 *Digging up bones*. British Museum of Natural History, London.  
 藤田恒太郎 (1949) 歯の計測基準について。人類学雑誌, 61: 27-32.  
 埴原和郎・小泉清隆 (1979) 歯冠近遠心径に基づく性別の判定-判別関数法による-。人類学雑誌, 87: 445-456.  
 河西秀智 (1969) 日本人における智歯の統計的観察 (智歯の出現, 發育, 萌出の時期と頻度について)。口腔病理学雑誌, 26: 463-478.  
 上条雍彦 (1994) 「日本人永久歯解剖学」。アナトーム社、東京。  
 片山一道 (1990) 「古人骨は語る-骨考古学ことはじめ」。同朋出版、東京。  
 北村宗一 (1942) 歯牙萌出の時期及び順序に関する研究。歯科学報, 47: 274-287, 352-368.

筑井中屋敷遺跡の下顎骨計測値

(単位: mm)

計測番号	計測部位	2号墓	3号墓	4号墓
61	上顎歯槽突起幅	60.5		
61(2)	前上顎歯槽突起幅	29.0		
63	口蓋幅	41.0		
63(2)	前口蓋幅	23.7		21.6 e
66	下顎角幅		96.0 e	
67	前下顎幅	47.7	49.6	42.3 ?
68(a)	下顎臼歯弦長	29.9		28.4
68(1)	下顎投影最大長	114.0		
69	オトガイ高	31.6	30.2	27.1

計測番号	計測部位	2号墓	3号墓	4号墓
69(1)	下顎体高	34.8	28.2	30.0
69(2)	下顎体高(M2)	29.7	28.6	27.2
69(3)	下顎体厚	13.1	13.3	10.8
69(b)	下顎体厚(M2)	15.8	16.2	14.9
70(2)	最小枝高	43.0		
71(a)	最小下顎枝幅	35.3		
79	下顎枝角	150		
79(4)	下顎底角	60°	82°	53°

2号墓人歯記録表

切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	2	6.9	6.5	9.8	なし 切縁から近心辺縁隆線に象牙質線状露出
	1	8.0	7.0	11.5	なし 近心辺縁隆線に象牙質線状～帯状に露出
下顎 左	1	5.3	6.0	7.6	なし 切縁に象牙質帯状に露出
	2	6.0	6.4	8.3	なし 切縁に象牙質帯状に露出

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	7.8	8.3	8.9	なし	尖頭部に象牙質露出
下顎 左	6.6	7.5	10.1	なし	切縁に紡錘状の面状の象牙質露出

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
左 2	6.9	9.2	6.8	C3	舌側咬頭に帯状の象牙質露出

下顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
右 2	7.0	8.7	5.3	なし	頬側咬頭に帯状に大きく象牙質露出
左 1	7.2	8.0	7.2	なし	頬側咬頭に線状～帯状に象牙質露出

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
左 1	10.2	11.2	5.8	なし	遠心舌側咬頭面状に象牙質露出

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度	備考	
右 2	11.0	10.8	4.4	C1?	遠心舌側咬頭をのぞき象牙質点状～面状に露出第7咬頭あり	第7咬頭あり	
左	2	10.8	10.3	5.3	なし	近心2咬頭に点～面状に象牙質露出中央結節?あり	中央結節?あり
	3	10.5	10.5	5.2	C2	舌側咬頭のみエナメル質面状咬耗	

以上単位：mm

4号墓人歯記録表

切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
上顎 左 1	8.2	7.4	10.8	なし	切縁に帯状に象牙質露出

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	7.3	7.9	6.4	なし	全面に象牙質露出
	左	7.3	8.1	9.1	C1
下顎 右	6.1	7.2	6.7	なし	咬合面全面に象牙質露出

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度	
左	1	6.9	9.0	6.4	なし	頬・舌側両咬頭に象牙質露出
	2	6.3	8.9	5.2	なし	頬・舌側両咬頭に象牙質露出

下顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度	
右	2	6.9	8.1	4.9	C4	頬・舌側両咬頭の象牙質が連続して大きく露出
	1	6.7	8.3	5.2	なし	頬・舌側両咬頭の象牙質が連続して大きく露出

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲歯	咬耗部位・咬耗度	
右	3	10.2	9.2	5.5	C3	近心両咬頭に線状に象牙質露出
	2	10.9	10.6	5.5	C1	頬側3咬頭に点状に象牙質露出
	1	11.5	11.0	5.4	C1	頬側3咬頭には大きく象牙質露出、近心舌側咬頭にはごく小さな象牙質露出

以上単位：mm

遺物観察表

1号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第8図1 PL-30	須恵器 杯	+11 2/3	底(9.6)	①白色鉍物少量含む。 ②良。 ③暗オリーブ灰色。	貼り付け高台。底部切り離し不明。底部内面撫で。 高台端部と腰部外面摩滅。	000001
第8図2 PL-30	土師器 杯	+22 2/3	口12.3 高4.3	①黒色鉍物少量含む。 ②普通。 ③明褐色。	口縁部横撫で。体部内面撫で。底部外面篋削り。	000002
第8図3 PL-30	土師器 甕	+31 1/2	口21.4	①白色鉍物多く含む。 ②普通。 ③明褐色。	口縁部横撫で。端部強い横撫で。外面の篋削りは、 上から横・縦。	000003

2号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第9図1 PL-30	土師器 甕	+4 1/2	底10.1	①黒色鉍物少量含む。 ②普通。 ③内：にぶい赤褐色。 外：黒褐色。	体部外面斜め篋削り。底部外面篋削り。内面撫で。 外面に煤の付着はないが、黒褐色に変色。	000004
第10図2 PL-30	土師器 甕	+8 1/3	口(19.8)	①黒色鉍物少量含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	口縁部外傾。器表剥離。口縁端部強い横撫で。	000005

5号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第10図3 PL-30	須恵器 羽釜	埋土 破片	口(18.6)	①石英粒少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部回転横撫で。体部内面撫で。	000006

6号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第13図1 PL-30	須恵器 羽釜	覆土 1/2	底7.6	①石英粒少量含む。 ②普通。 ③内：にぶい赤褐色。 外：黒褐色。	体部外面縦位篋削り。底部外面砂付着。内面撫で。	000007

7号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第14図1	須恵器 椀	床直 底部	底7.3	①石英粒少量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	轆轤左回転成形。貼り付け高台。高台「ハ」の字状 に開く。	000014

8号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第15図1 PL-30	須恵器 椀	床直 3/4	口(15.2) 底9.5 高4.9	①金雲母含む。 ②普通。 ③明褐色。	轆轤右回転成形。貼り付け高台。杯部の切り離しは、 回転糸切り。高い貼り付け高台。	000018
第15図2 PL-30	土師質 土錘	床直 一部欠	最大径1.9	①黒色鉍物少量含む。 ②普通。 ③黒褐色。	長さの割に最大幅が大きい。	000019

## 9号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第16図1	須恵器 椀	覆土 破片	口(13.4)	①白色鉾物含む。 ②やや不良。 ③明褐色。	轆轤成形。内面に段差のような轆轤目が残る。 胎土、焼成、内面の特徴から28号住居出土須恵器(第43図5)と同一個体であろう。	000022
第16図2 P L-30	土師質 土錘	床直 完形	長5.9 最大径2.5	①黒色鉾物多く含む。 ②普通。 ③鈍い橙色。	最大径と最小径の差が小さい。表面摩滅。	000023
第16図3 P L-30	石製品 紡錘車	+14 2/3	径5.1 厚1.1		下部の径は2cmと小さい。	000021
第16図4 P L-30	鋳物 鉄製品	埋土 小片	厚0.5		鋳物独特の亀甲状の錆が認められる。錆をのぞいた厚さは、0.5cmである。	000024
第17図5 P L-30	石製品 砥石	床直 約1/2	幅4.3 厚1.8		面の広い2面は、かなりくぼむまで使用される。狭い2面は、深い「V」字形の使用痕が残る。	000020
第17図6 P L-30	鉄製品 平根式鎌	床直 一部欠	最大幅3.1 厚0.6~ 0.4		茎の一部欠損。	000120
第17図7 P L-30	鉄製品 鎌刃	床直 完形	長16.0 最大幅3.8 最大厚0.7		刃は、先で大きく曲がる。	000121

## 10号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	備 考	登録番号
第18図1 P L-30	鉄製品 刀子	埋土 一部欠	長4.5 最大幅0.9 最大厚0.4	茎一部欠損。	000122

## 11号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第19図1	土師器 杯	覆土 1/5	口(13.6) 底(8.2) 高3.2	①黒色鉾物少量含む。 ②良。 ③明褐色。	口縁部外傾。平底。体部内面放射状の狭い暗文。底部外面、体部外面斲削り。	000015
第19図2 P L-30	鉄製品 不明	床直 一部欠?	最大幅0.8 最大厚0.5		両端は欠損。一方はかなり残っており、次第に細くなる。断面形は長方形。	000123

## 13号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第22図1 P L-31	須恵器 杯	+7 一部欠	口13.3 底8.2 高3.7	①白色鉾物少量含む。 ②普通。 ③灰色。	右回転轆轤成形。底部外面から体部下端回転斲削り。底部外面焼成前の「下」と焼成後の「×」刻書。	000031
第22図2 P L-31	土師器 杯	床面 完形	口12.9 高3.4	①白色鉾物含む。 ②良。 ③橙色。	口縁部横撫で。口縁部外面木口状工具による横撫で。体部から底部内面撫で。底部外面斲削り。	000030
第22図3 P L-31	土師器 甕	床直 1/2	口23.4 底4.0 高31.9	①白色鉾物含む。 ②良。 ③明褐色。	口縁部直立ぎみに外傾。口縁部強い横撫で。体部外面丁寧な斲削り。	000033
第22図4 P L-31	土師質 土錘	埋土 完形	長5.7 最大径1.5	①黒色鉾物少量含む。 ②やや不良。 ③鈍い赤褐色。	器表撫で。器表わずかに摩滅。	000032

## 14号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第23図1 P L-31	土師器 杯	床直 完形	口12.4  高4.1	①黒色鉱物微量含む。 ②良。 ③橙色。	器高やや高い。口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。底部外面磨削り。底部外面1/2黒色。	000034
第23図2 P L-31	土師器 杯	床直 1/2	口(12.5)  高3.9	①黒色鉱物微量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。	000035
第23図3	土師器 杯	+25 1/3	口(14.3)	①黒色鉱物微量含む。 ②良。 ③橙色。	口径やや大きく、器高やや高い。口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。底部外面磨削り。	000036
第23図4 P L-31	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口17.1	①黒色鉱物粒微量含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部外反。口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。底部外面磨削り。	000037

## 15号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第24図1 P L-31	須恵器 杯	+8 ほぼ完形	口13.8 底3.5 高3.5	①黒色鉱物粒微量含む。 ②普通。 ③明褐色。	轆轤成形。底部、体部下端外面右回転磨削り。口縁部わずかに外反。	000054
第24図2 P L-31	須恵器 杯	床直 1/3	口(13.8) 底(9.8) 高3.4	①黒色粒吹き出す。 ②良。 ③灰色。	轆轤成形。底部外面丁寧な右回転磨削り。底部中央くぼむ。	000055
第24図3 P L-31	土師器 杯	埋土 1/2	口(13.5)  高3.7	①金雲母?微量含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。口縁部歪む。	000038
第24図4 P L-31	土師器 杯	+23 1/2	口(15.2)  高2.7	①黒色鉱物含む。 ②不良。 ③橙色。	口縁部外反。口縁部横撫で。底部外面磨削り。器表摩滅。	000040
第24図5	土師器 杯	竈埋土 1/3	口(13.6)  高4.0	①石英粒微量含む。 ②良。 ③にぶい褐色。	口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。口縁部やや歪む。底部外面磨削り。底部外面器表黒色。底部外面不明墨書。	000039
第25図6 P L-31	須恵器 蓋	+9 1/2	口(17.5)  高2.9	①白色鉱物含む。 ②非常に良。 ③灰色。	轆轤右回転成形。天井部内面撫で。天井部内面中央摩滅。天井部外面自然釉付着。口縁部歪む。断面セピア色。	000056
第25図7 P L-31	須恵器 壺	床直 1/3	口(12.8)	①白色鉱物多く含む。 ②普通。 ③暗灰黄色。	轆轤成形。口縁部端部摩滅著しい。	000058
第25図8 P L-31	土師器 甗?	+7 1/3	口(21.4)	①白色粘土粒含む。 ②不良。 ③橙色。	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面粗い磨削り。器表摩滅。	000057

## 18号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第29図1 P L-32	須恵器 杯	覆土 2/3	口(9.6) 底6.0 高2.3	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	轆轤左回転成形。底部外面左回転糸切り無調整。底部内面突出。	000041
第29図2 P L-32	須恵器 羽釜	床直 1/5残	口(22.4)	①黒色鉱物少量含む。 ②不良。 ③明褐色。	酸化炎焼成。轆轤成形。鈔貼り付け。	000042



## 19号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第30図1 P L-32	須恵器 椀	+8.5 2/3	口9.9 底6.1 高4.0	①黒色鉾物微量含む。 ②普通。 ③内：黒色。 外：にぶい黄橙色。	轆轤右回転成形。貼り付け高台。内面黒色処理。内面磨き。	000043

## 20号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第32図1	灰釉陶器 段皿	+9 1/3	口(13.7) 底(7.4) 高2.1	①白色鉾物少量含む。 ②普通。 ③青灰色。	轆轤右回転成形。高台貼り付け。口縁部灰釉漬け掛け。底部内面、高台端部やや摩滅。東濃諸窯。	000046
第32図2 P L-32	須恵器 皿	埋土 1/3	口(9.8) 底(6.2) 高2.3	①黒色鉾物含む。 ②普通。 ③にぶい黄橙色。	轆轤左回転成形。底部外面左回転糸切り無調整。底部内面中央突出する。	000045
第32図3 P L-32	灰釉陶器 椀	床面 1/4	口(14.4)	①白色鉾物少量含む。 ②不良。 ③灰白色。	轆轤右回転成形。口縁部灰釉漬け掛け。東濃諸窯。	000047
第32図4 P L-32	須恵器 椀	埋土 1/2	口(15.1)	①黒色鉾物含む。 ②不良。 ③にぶい赤褐色。	轆轤右回転成形。貼り付け高台。高台端部欠損。	000044
第32図5 P L-32	鉄製品 刀子	床直 一部欠	最大幅1.5 最大厚0.5		切先、茎尻共に先端欠損。	000124

## 21号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第33図1 P L-32	灰釉陶器 椀	床面 1/3	口(15.2) 底(8.1) 高4.6	①白色鉾物含む。 ②普通。 ③灰白色。	轆轤右回転成形。貼り付け高台。口縁部、体部灰釉漬け掛け。底部焼き膨れ。東濃諸窯。	000060
第33図2	須恵器 椀	床直 1/4	底(5.5)	①黒色鉾物含む。 ②やや不良。 ③灰褐色。	轆轤右回転成形。底部右回転糸切り後、高台貼り付け。	000059
第34図3 P L-32	須恵器 壺	床面 1/3	底17.4	①夾雑物殆ど含まない。 ②良。 ③灰色。	底部粘土板。体部は紐造り成形後、轆轤調整。内面撫で。断面の色調はセピア色。搬入品であろう。	000061
第34図4 P L-32	鉄製品 合釘?	床面 両端欠	最大幅0.6 最大厚0.5		現存長13.7cm。断面長方形。両端は欠損。	000125

## 22号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第36図1	土師器 杯	埋土 1/4	口(10.8)	①白色鉾物含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。底部外面磨削り。口径やや小さい。	000062
第36図2 P L-32	鉄製品 刀子	埋土 小片	最大幅1.5 最大厚0.7		区部分のみ残存。	000126

## 23号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第37図1 P L-32	土師器 杯	+10 1/2	口(12.4) 底10.1 高2.8	①黒色鉾物少量含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	口縁部、体部内面横撫で。体部外面、底部内面撫で。底部外面磨削り。	000063

## 24号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第38図1 P L-32	緑釉陶器 椀	埋土 破片	口(16.8)	①夾雑物殆ど含まない。 ②普通。 ③淡黄色。	図上復元。体部は内湾し、口縁部は外傾する。薄い黄緑色の釉は、部分的に剝離する。猿投窯。	000067
第38図2 P L-32	土師器 杯	床面 1/4	口(12.8)	①白色鉱物細粒含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	口縁部、体部内面横撫で。体部外面、底部内面撫で。体部外面皺状の痕跡顕著に残る。	000064
第39図3 P L-32	土師器 甕	床直 1/2	口12.2	①白色鉱物含む。 ②良。 ③にぶい赤褐色。	「コ」の字状口縁台付き甕。底部、台部欠損。口縁部横撫で。口縁部沈線状にくぼむ。体部内面丁寧な撫で。	000065
第39図4 P L-32	土師器 甕	掘り方 1/4	口(19.7)	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③褐色。	「コ」の字状口縁甕。口縁部と頸部下位横撫で。頸部外面皺状の痕跡顕著に残る。体部上位、木口状工具による撫で。体部内面撫で。内面紐造り痕残る。	000066

## 27号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第42図1	須恵器 椀	床直 底部破片	底(8.8)	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	轆轤成形。外反する高い高台を貼り付ける。底部内面の調整は粗い。	000068

## 28号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第43図1 P L-33	須恵器 杯	掘り方 1/4	口(12.7) 底5.4 高4.0	①白色鉱物多く含む。 ②不良。 ③灰白色。	口縁部外傾。轆轤成形。口縁部強い回転横撫で。体部外面轆轤目残る。底部外面右回転糸切り無調整。	000070
第43図2	須恵器 椀	掘り方 1/2	口(14.0)	①白色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい黄褐色。	口縁部外反。轆轤成形。口縁部丁寧な回転横撫で。体部外面、底部内面轆轤目残る。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。高台欠損。	000071
第43図3 P L-33	須恵器 椀	掘り方 2/3	口14.4 底6.4 高5.4	①白色鉱物含む。 ②良。 ③黄灰色。	口縁部外反。轆轤成形。口縁部丁寧な回転横撫で。体部外面、底部内面轆轤目残る。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。体部外面不明瞭な不明墨書。	000073
第43図4 P L-33	須恵器 椀	掘り方 1/2	口(15.2) 底6.6 高5.6	①白色鉱物少量含む。 ②普通。 ③黄褐色。	口縁部小さく外反。轆轤右回転成形。口縁部丁寧な撫で。体部直線的に開く。体部外面の轆轤目は目立たない。	000074
第43図5 P L-33	須恵器 椀	+10 1/3	口(15.0) 底(4.2) 高5.5	①白色鉱物含む。 ②やや不良。 ③内：褐灰色。 外：橙色。	口縁部小さく外反。轆轤右回転成形。内面段差のような顕著な轆轤目残る。9号住居出土須恵器(第16図1)と同一個体であろう。	000072
第43図6	土師器 台付き甕	床直 1/3		①黒色鉱物少量含む。 ②良。 ③内：にぶい赤褐色。 外：橙色。	高台欠損。内面撫で。外面篋削り、上位より横、縦の順。他の須恵器椀と時期的に隔たりがあり、混入であろう。	000069

## 29号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第48図1 P L-33	須恵器 椀	掘り方 底部	底7.2	①石英粒少量含む。 ②普通。 ③明黄褐色。	轆轤右回転成形。底部内面やや粗い篋磨き。「ハ」の字状に開く高い高台を貼り付ける。	000048
第48図2 P L-33	須恵器 羽釜	床直 1/4	口(26.6)	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	口縁部丁寧な回転横撫で。内面回転横撫で。外面轆轤目残る。鐙張り付け。	000049

## 30号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第46図2 P L-33	須恵器 皿	埋土 1/3	口(8.6) 底4.5 高1.7	①黒色鉾物少量含む。 ②やや不良。 ③にぶい橙色。	轆轤成形。底部左回転糸切り無調整。体部外面下位は丸みを帯びる。底部内面中央くぼむ。	000086
第46図3 P L-33	土師器 甕	床直 1/4	口(22.4)	①黒色鉾物含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	いわゆる「土釜」である。口縁部は雑に仕上げる。外面は幅の狭い工具で縦位の撫で。内面は横位の撫で。	000087
第46図4	土師器 手づくね 土器	竈埋土 1/4	口(6.0)	①白色鉾物多く含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	手づくね。外面の一部に皺状の痕跡残る。内面黒褐色。混入品であろう。	000088
第46図5 P L-33	鉄製品 刀子	埋土 一部欠	最大幅1.7 最大厚0.5		茎の一部と切先欠損。	000127

## 31号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第49図2	須恵器 皿	+20.5 1/4	口(7.8) 底(4.0) 高2.0	①黒色鉾物少量含む。 ②良。 ③にぶい赤褐色。	体部下位丸みを有する。口縁部小さく外反。轆轤成形。底部左回転糸切り無調整。	000089
第49図3	須恵器 椀	竈埋土 1/4	口(11.0)	①黒色鉾物含む。 ②やや不良。 ③内：黒色。 外：浅黄褐色。	轆轤成形。器表の調整は丁寧。内面器表剝離。	000091
第49図4 P L-33	土師器 甕	床面 1/3	口(21.6)	①白色鉾物含む。 ②良。 ③黒褐色。	体部から内湾し、口縁部に至る。口縁部横撫で。外面幅の狭い工具による縦位撫で後、下半縦位篋削り。体部内面撫で。	000092

## 32号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号

## 33号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号

## 35号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号

## 36号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第55図1 P L -33	土師器 杯	床直 完形	口10.8 高3.3	①白色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい褐色。	口縁部丁寧な横撫で。底部内面撫で。底部外面篋削り。底部外面黒色。	000142
第55図2 P L -33	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口13.0 高4.6	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部小さく内傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部内面篋削り。器表やや摩滅。	000139
第55図3	土師器 杯	埋土 1/5	口(16.4)	①黒色鉱物微量含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	胎土やや緻密。口縁部小さく外湾。口縁部、体部内面横撫で。内面体部から横撫での撫で上げ痕あり。底部外面篋削り。	000140
第55図4	土師器 杯	埋土 1/6	口(19.0)	①黒色鉱物微量含む。 ②普通。 ③橙色。	胎土やや緻密。口縁部小さく外傾。口縁部、体部内面横撫で。体部から底部歪む。体部外面皺状の痕跡残る。	000141
第55図5 P L -34	土師器 甕	床直 2/3	口24.8	①金雲母?含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部歪む。口縁部強い横撫で。口縁部横撫で。体部外面篋削り。体部内面撫で。	000143
第55図6 P L -33	鉄製品 鎌	埋土 1/2	最大幅2.8 最大厚0.5		刃先欠損。刃部は殆ど湾曲しない。	000128

## 37号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第56図1	土師器 杯	埋土 1/5	口(11.7)	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で。体部内面横撫で。底部内面丁寧な撫で。底部外面篋削り。	000144
第56図2	土師器 杯	埋土 小片	口(17.1)	①石英粒含む。 ②良。 ③にぶい褐色。	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部、底部内面撫で。底部外面篋削り。	000145
第56図3 P L -34	土師器 小型壺	床直 2/3	口7.3 高7.5	①石英粒少量含む。 ②良。 ③橙色。	口縁部横撫で。体部、底部篋削り。内面丁寧な撫で。	000146

## 38号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第57図4 P L -34	土師器 杯	床直 破片	口(16.4)	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい赤褐色。	口縁部内傾。口縁部横撫で。体部、底部内面撫で後、放射状暗文風の沈線。底部内面に布圧痕。	000147
第57図5 P L -34	土師器 杯	床直 3/4	口11.2 高3.4	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	口縁部僅かに内傾。口縁部横撫で。底部内面撫で。底部外面篋削り。体部外面皺状の痕跡。底部外面無調整部分がくぼんで残る。	000148
第57図6 P L -34	土師器 杯	床直 3/4	口12.9 高4.1	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部内傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面篋削り。	000151
第57図7 P L -34	土師器 杯	床面 1/3	口(13.4)	①黒色鉱物微量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面篋削り。外面口縁部に皺状の痕跡残る。	000150
第57図8 P L -34	土師器 杯	床面 1/2	口11.0 高3.0	①片岩含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面篋削り。内面器表一部剝離。	000149

## 39号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第59図2 P L-34	土師器 杯	上層 1/3	口(12.8)	①黒色鉾物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部直立気味。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面斲削り。底部外面器表黒色。	000155
第59図3 P L-34	土師器 杯	上層 1/2	口18.6 高3.3	①黒色鉾物少量含む。 ②やや不良。 ③橙色。	口縁部横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面斲削り。口縁部歪む。	000156
第59図4 P L-34	土師器 杯	床直 1/5	口(14.4)	①黒色鉾物少量含む。 ②やや不良。 ③橙色。	口縁部内傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。	000190
第59図5 P L-34	土師器 杯	床直 一部欠	口11.4 高2.9	①黒色鉾物微量含む。 ②良。 ③橙色。	口縁部内湾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。底部外面一部還元炎で灰色を呈し、焼き膨れとなる。外面皺状の痕跡目立つ。	000153
第59図6 P L-34	須恵器 蓋	上層 2/3	口19.0	①長石目立つ。 ②良。 ③褐灰色。	口縁部歪む。つまみ欠損。轆轤右回転成形。口縁部内面かえりを有する。	000152

## 41号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第62図2 P L-35	土師器 杯	土坑内 1/2	口17.6	①黒色鉾物含む。 ②良。 ③にぶい橙色。	口縁部外反。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。口縁部歪む。	000187
第62図3 P L-35	土師器 杯	床面 ほぼ完形	口14.3 高3.3	①白色鉾物含む。 ②良。 ③明赤褐色。	竈埋土、竈掘り方出土破片と接合。口縁部内湾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。口縁部やや歪む。	000158
第62図4 P L-35	土師器 杯	掘り方 2/3	口12.7 高3.7	①黒色鉾物含む。 ②良。 ③橙色。	口縁部外傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。口縁部やや歪む。	000159
第62図5 P L-35	土師器 甕	+15 1/2	底9.5	①金色鉾物細片含む。 ②良。 ③にぶい赤褐色。	この時期の高台付き甕にしては体部下位が丸みを帯びる。外面丁寧な斲削り。内面撫で。器表やや摩滅。	000160
第62図6 P L-35	土師器 甕	床直 1/2	口12.1	①金色鉾物細片含む。 ②やや不良。 ③明赤褐色。	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面斲削り。器表やや摩滅。	000168

## 45号住居

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第62図8 P L-35	土師器 杯	+15 2/3	口12.3 高4.0	①黒色鉾物微量含む。 ②良。 ③にぶい橙色。	口縁部僅かに内傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。口縁部と体部境外面に皺状の痕跡あり。底部凹凸目立つ。	000178
第62図9 P L-35	土師器 杯	床直 1/4	口(12.5) 高(3.6)	①黒色鉾物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部僅かに外傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部外面斲削り。	000179
第62図10 P L-35	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口12.5 高3.5	①黒色鉾物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部僅かに内傾。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面斲削り。	000180
第62図11 P L-35	土師器 杯	埋土 1/2	口12.1	①黒色鉾物含む。 ②やや不良。 ③明赤褐色。	口縁部ほぼ直立。口縁部、体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面斲削り。器表やや摩滅。	000181

## 42号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第64図1 P L-35	土師器 杯	床直 完形	口10.7 高3.1	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	やや小型の杯。口縁部丁寧な横撫で。体部内面横撫で。底部内面撫で。底部外面鋭削り。器表やや摩滅。口縁部歪む。底部外面黒色。	000161
第64図2 P L-35	土師器 杯	床面 一部欠	口11.2 高3.5	①黒色鉱物微量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で。底部外面鋭削り。器表摩滅。	000164
第64図3 P L-35	土師器 杯	床面 2/3	口12.0 高3.5	①黒色鉱物少量含む。 ②やや不良。 ③橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で。底部外面鋭削り。器表摩滅。	000163
第64図4	土師器 杯	埋土 1/4	口(11.6) 高(3.5)	①黒色鉱物少量含む。 ②やや不良。 ③橙色。	口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で。底部外面鋭削り。	000167
第64図5 P L-35	鉄製品 火打金	埋土			ねじり鎌タイプの火打金と考えられるが、錆がひどくメタル部分が残っていないため、詳細は不明。火打金の形に錆が膨らんでいる状態である。	000129
第65図6 P L-35	土師器 杯	床直 1/2	口14.2 高4.3	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③橙色。	歪みにより口縁の平面形が楕円形を呈する。口縁部横撫で。底部外面鋭削り。器表やや摩滅。	000166
第65図7 P L-35	土師器 杯	床面 完形	口11.3 高3.4	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部やや内湾。口縁部横撫で。底部内面撫で。底部外面鋭削り。底部外面黒色。	000162
第65図8 P L-35	土師器 杯	床直 2/3	口10.2 高3.3	①黒色鉱物少量含む。 ②普通。 ③にぶい橙色。	口縁部内湾。口縁部横撫で。底部内面撫で。底部外面鋭削り。小型の杯。器表やや摩滅。	000165

## 43号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第67図1 P L-35	須恵器 杯	+10 1/4	口(15.1) 底(11.3) 高3.3	①黒色粒子吹き出す。 ②良。 ③灰色。	轆轤右回転成形。口縁部外傾。高台張り付け。底部外面切り離し技法不明。	000170
第67図2	須恵器 小型壺	+30 底部	底5.9	①黒色粒子吹き出す。 ②良。 ③灰白色。	轆轤右回転成形。高台張り付け。	000171
第67図3	須恵器 蓋	埋土 破片	口(17.9)	①黒色粒子少量含む。 ②良。 ③灰白色。	轆轤右回転成形。天井部外面自然釉。口縁部内面かえりあり。	000169
第67図4 P L-35	土師器 甕	+6 2/3	口23.1	①黒色鉱物含む。 ②やや不良。 ③橙色。	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面鋭削り。体部内面丁寧な撫で。	000172
第67図5 P L-35	石製品 紡錘車	+15 完形	直径4.2 厚1.8		断面台形。周囲に放射状と同心円状の細い線刻。	000173

## 44号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第69図1 P L-36	土師器 杯	床直 2/3	口18.2 高4.5	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部外反。口縁部横撫で。底部内面撫で。底部外面鋭削り。底部外面の一部は、焼成時に赤褐色に変色。器表摩滅。	000174
第69図2 P L-36	土師器 甕	床直 口縁のみ	口14.5	①金雲母?少量含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部外傾。口縁端部強い横撫で。体部外面鋭削り。体部内面鋭で成形の後、撫で。頭部内面紐造り痕。	000175
第69図3 P L-36	土師器 甕	床直 小片	口(20.4)	①赤褐色粒含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面鋭削り。体部内面鋭成形後、撫で。	000176

## 46号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第70図1	土師器 甕	床面 小片	口16.4	①片岩を含む。 ②良。 ③橙色。	口縁部横撫で。体部外面篋削り。体部内面丁寧な撫で。	000182

## 47号住居

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第71図1 P L - 36	須恵器 杯	+20 完形	口11.4 高4.7	①石英粒少量含む。 ②不良。 ③灰黄色。	轆轤右回転成形。全体に器壁厚い。底部外面回転篋削り。器表のみ僅かに還元し、焼き締まりがない。	000183
第71図2 P L - 36	土師器 杯	+20 完形	口12.3 高4.3	①石英粒少量含む。 ②良。 ③明赤褐色。	須恵器を強く意識した器形。口縁部丁寧な横撫で。口縁端部内面沈線状に浅くくぼむ。内面丁寧な撫で。底部外面丁寧な篋削り。	000185
第71図3 P L - 36	土師器 杯	+6 ほぼ完形	口12.2 高5.3	①黒色鉱物含む。 ②普通。 ③にぶい黄橙色。	器壁厚い。口縁部内傾。口縁部、体部内面横撫で。底部内面篋成形の後、撫で。底部外面篋削り。	000184
第71図4 P L - 36	土師器 甌	+10 完形	口20.3 底7.2 高15.2	①石英粒少量含む。 ②やや不良。 ③にぶい橙色。	口縁部強い横撫で。口縁部歪む。内面篋状工具による撫で。外面篋削り。孔径6.3cm。	000186

## 1号土坑墓

挿図番号	種別	出土位置			備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第72図1 P L - 36	銅銭 永楽通寶	完形			明(1408年)初鑄。	000105 - 1
第72図2 P L - 36	銅銭 永楽通寶	完形			明(1408年)初鑄。	000105 - 2
第72図3 P L - 36	銅銭 元豊通寶	完形			北宋(1078年)初鑄。	000105 - 3
第72図4 P L - 36	銅銭 元祐通寶	完形			北宋(1086年)初鑄。	000105 - 4
第72図5 P L - 36	銅銭 紹聖元寶	完形			北宋(1094年)初鑄。	000105 - 5
第72図6 P L - 36	銅銭 元豊通寶	完形			北宋(1078年)初鑄。	000106
第72図7 P L - 36	銅銭 政和通寶	完形			北宋(1111年)初鑄。	000105 - 9
第72図8 P L - 36	銅銭 政和通寶	完形			北宋(1111年)初鑄。	000108
第72図9 P L - 36	銅銭 紹聖元寶	完形			北宋(1094年)初鑄。	000105 - 6
第72図10 P L - 36	銅銭 至道元寶	完形			北宋(995年)初鑄。	000107
第72図11 P L - 36	銅銭 洪武通寶	完形			明(1368年)初鑄。	000105 - 8
第72図12 P L - 36	銅銭 嘉祐通寶	完形			北宋(1056年)初鑄。	000105 - 7
第72図13 P L - 36	銅銭 元祐通寶	完形			北宋(1086年)初鑄。	000105 - 10

### 3号土坑墓

挿図番号	種別	出土位置			備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第74図1	銅銭 咸平元寶	完形			北宋(998年)初鑄。	000191

### 4号土坑墓

挿図番号	種別	出土位置			備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第75図1 P L-37	銅銭 □□□寶	完形			鑄がひどく、銭文判読不能。	000133
第75図2 P L-37	銅銭 景祐元寶	完形			北宋(1034年)初鑄。	000134 - 1
第75図3 P L-37	銅銭 □□元□	3/4			鑄がひどく、銭文判読不能。	000134 - 2
第75図4 P L-37	銅銭 元□□寶	完形			銭文判読不能。	000135 - 1
第76図5 P L-37	銅銭 熙寧元寶	一部欠			銭文が不明瞭であるが、篆書の熙寧元寶であろう。 北宋(1068年)初鑄。	000135 - 2
第76図6 P L-37	銅銭 皇宋通寶	完形			北宋(1038年)初鑄。	000135 - 3
第76図7 P L-37	銅銭 □□□□	完形			鑄がひどく、銭文判読不能。裏面に布痕が残る。	000136
第76図8 P L-37	銅銭 紹聖元寶	完形			北宋(1094年)初鑄。	000137
第76図9 P L-37	銅銭 元豐通寶	完形			北宋(1078年)初鑄。	000138

### 1号井戸

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第77図1	焼締陶器 甕	埋土 小片		①白色鈹物含む。 ②良。 ③胎土灰色。	器表は褐色を帯び、外面には灰釉が流れる。知多窯。	000084
第77図2 P L-37	中国磁器 白磁碗	埋土 体部小片		①黒色粒微量含む。 ②やや不良。 ③灰白色。	器表オリーブ灰色を帯びた白磁釉。	000076

### 土坑

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第79図1 P L-37	鉄製品 合釘	14土坑埋土 両端欠損	最大幅0.9 最大厚0.7		中央の断面形は長方形であるが、先端に近い部分は方形となる。形態や長さから合釘と考えられる。	000130
第79図2	焼締陶器 片口鉢	16土坑埋土 口縁部小片		①白色鈹物含む。 ②良。 ③灰赤色。	外面器表は灰赤色。他は灰白色。知多窯。13世紀。 5号溝出土破片(第92図1・2)と遺構外出土破片(第99図7)と同一個体であろう。	000077
第79図3	在地土器 内耳鍋?	16土坑埋土 体部小片		①片岩の細片?含む。 ②普通。 ③灰白色。	器表は灰色、断面は灰白色。内耳鍋の体部下小片であろう。器壁が厚く、古い時期の所産であろう。	000078
第80図1 P L-37	在地土器 カワラケ	24土坑埋土 1/2	口8.3	①赤色粒含む。 ②良。 ③明赤褐色。	口縁部、体部内面横撫で。体部、底部外面粗い撫で。 口縁部外面沈線状に浅くくぼむ。	000050
第80図2 P L-37	在地土器 カワラケ	28土坑埋土 1/4	口(7.3) 高(2.0)	①金雲母?含む。 ②普通。 ③橙色。	口縁部歪む。口縁部、体部内面横撫で。体部、底部外面粗い撫で。13世紀。	000051



### 1号地下式坑（6号溝）

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第85図1	焼締陶器 片口鉢	+80 口縁部小片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③灰色。	片口部小片。口縁部回転横撫で。体部外面は縦方向に浅い沈線状の調整痕残る。遺構外出土の鉢(第99図6)と同一生産地であろう。	000109
第85図2 P L-37	在地土器 内耳鍋	+19 1/3	口(28.0) 底(20.0) 高16.5	①金雲母細片?含む。 ②普通。 ③赤灰色。	底部平底。体部下端強い撫で。口縁部横撫で。体部内面斜め方向の撫で。体部下端、底部内面撫で、砂粒目立つ。器表暗赤灰色。	000083
第85図3 P L-37	石製品 下白	+18 完形	径28.0 高6~8		ふくみ1.6cm。片減りが著しく、周縁で2cmの比高差がある。白の目はかろうじて1/3程度で確認される。	000112
第85図4 P L-38	石製品 上白	+22 1/5	径(35.0) 高10.4		供給口の一部残存。目は残存するが、中間に古い目が僅かに認められる。	000111

### 2号溝

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第88図1 P L-38	須恵器 椀	+7 1/2	底7.2	①金雲母細片?含む。 ②不良。 ③にぶい黄橙色。	轆轤右回転成形。底部右回転糸切り無調整後、高台張り付け。	000009
第88図2 P L-38	焼締陶器 甕	+41 口縁部小片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③青灰色。	器表にぶい赤褐色。口縁部内面と肩部外面自然釉。口縁部はさほど外に引き出さずに端部を立ち上げる。13世紀前半。知多窯若しくは知多窯系諸窯の製品であろう。	000008
第88図3 P L-38	中国磁器 青磁碗	+11 口縁部小片		①夾雑物含まない。 ②普通。 ③胎土：灰白色。	越州窯系青磁碗。釉に貫入はいる。白土掛けはない。	000010
第88図4 P L-38	焼締陶器 甕	埋土 口縁部小片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③青灰色。	器表鈍い赤褐色。自然釉かかる。口縁部は水平に引き出した後、端部を立ち上げる。13世紀前半から中頃。知多窯。	000011
第88図5 P L-38	鉄製品 不詳	埋土 両端欠			断面方形で最大の一辺が0.6cm。釘であろうか。	000131
第88図6 P L-38	銅銭 元豊通寶	底部 完形			北宋(1078年)初鑄。	000102

### 3号溝

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第89図1	焼締陶器 甕	埋土 体部小片		①白色鉱物含む。 ②やや不良。 ③内：灰褐色。 外：にぶい褐色。	断面は鈍い橙色。内面は光沢を有するほど使用により摩滅する。底部から体部下位にかけて非常に摩滅している例が県内でも認められることから、体部下位片と考えられる。知多窯であろう。	000012

### 4号溝

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第90図1	須恵器 杯	+14 1/4	底(8.8)	①白色鉱物含む。 ②普通。 ③灰色。	轆轤右回転成形。底部外面右回転糸切り無調整。底部内面中央丸く突出する。	000025
第90図2 P L-38	土師器 甕	+6 1/4	口(13.0)	①黒色鉱物含む。 ②良。 ③にぶい橙色。	口縁端部小さく立ち上げる。口縁部横撫で。外面刷毛調整。内面浅い刷毛調整。古墳時代の混入品である。	000026
第90図3 P L-38	軽石製品 地覆石?	+20 1/2?			椽名軽石の周囲を調整し、一方の木口を組み手状に加工する。	000115
第91図4 P L-38	軽石製品 不明	+12 1/2?			椽名軽石の表面を粗く削る。一部が被熱していることから竈構築材と推測される。	000114
第91図5 P L-38	軽石製品 不明	+8 軽石	長9.1 幅7.1 厚4.7		ほぼ中央に円孔を穿ち、ひとつは貫通する。両面には刃物傷状の研ぎ痕が残る。	000027

5号溝

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第92図1	焼締陶器 片口鉢	埋土 口縁部破片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③灰白色。	口縁端部はやや肥厚する。内面自然釉付着。外面器表は灰赤色。2と16土坑出土片(第79図2)、遺構外出土片(第99図7)と同一個体であろう。知多窯。13世紀。	000079
第92図2	焼締陶器 片口鉢	埋土 体部小片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③淡赤灰色。	外面器表灰赤色。内面自然釉付着。1と16土坑出土片(第79図2)、遺構外出土片(第99図7)と同一個体であろう。	000080
第92図3	在地土器 内耳鍋	埋土 体部小片		①赤色粒含む。 ②普通。 ③内：褐灰色。 外：黒褐色。	断面暗赤褐色。内面の口縁部と体部境の段差はない。口縁部、体部器壁やや厚い。	000081
第92図4	在地土器 内耳鍋	埋土 口縁部小片		①片岩細片?含む。 ②普通。 ③黄灰色。	口縁部片で器壁薄い。還元炎焼成。	000082

13号溝

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第93図1	焼締陶器 甕	埋土 体部小片		①白色鉱物含む。 ②良。 ③内：明黄褐色。 外：灰白色。	外面自然釉付着。器壁厚い。知多窯。14~15世紀。	000097
第93図2	在地土器 内耳鍋	埋土 口縁部小片		①片岩小片?含む。 ②やや不良。 ③灰白色。	器表灰色。口縁部やや内湾。口縁部内面下段をなす。器壁厚い。	000096
第93図3	在地土器 内耳鍋	埋土 体部小片		①赤色粒含む。 ②普通。 ③暗褐色。	体部下位から底部周縁の小片。器壁やや厚い。	000095
第93図4 PL-39	石製品 上臼	+15 1/4	径(28.2) 高(12.4)		直径に対して高さが高い。供給口とものくばり残る。目は摩滅する。	000110

12号溝

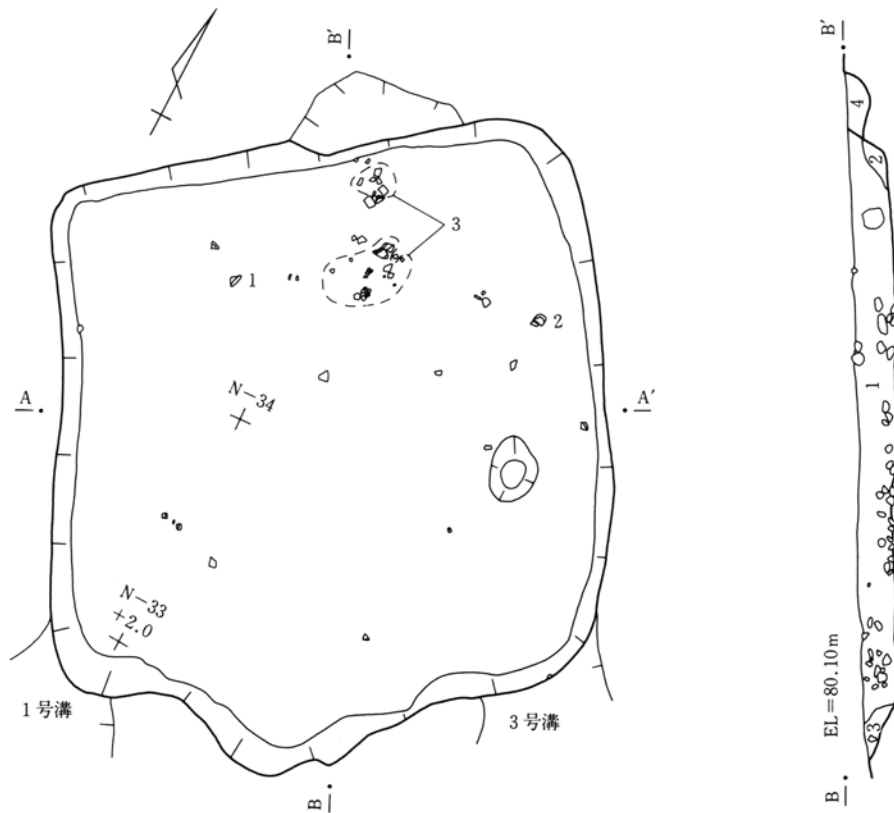
挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第96図1	焼締陶器 甕	+26 体部小片		①白色鉱物含む。 ②普通。 ③灰色。	器表暗灰色。外面に一部格子目叩き残る。胎土は渥美窯にやや似ているが、叩きが異なるようである。	000101

弥生土器

挿図番号	種別	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
図版番号	器種	残存状態				
第98図1 ~6	弥生土器 壺	小片		①夾雑物多く含む。 ②良。 ③鈍赤褐色。	同一地点から出土し、胎土・焼成から同一個体と考えられる。内面甕削り後粗い撫で。外面は体部下位まで縄文を施す。1は口縁部の折り返し部分小片。	000188

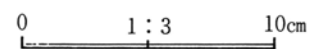
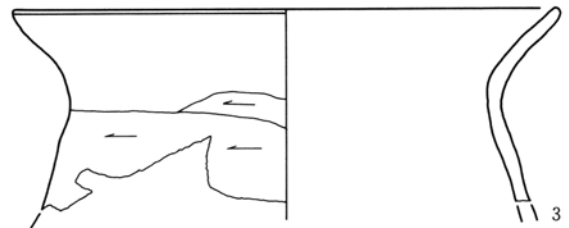
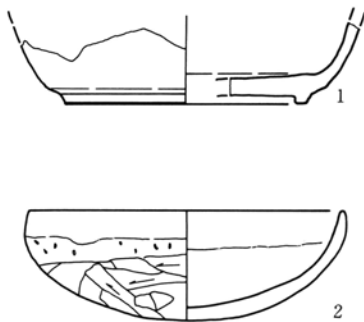
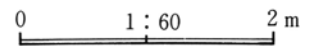
遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴、備考	登録番号
第99図1 P L-39	土師器 皿	12区 1/4	口(18.2) 高3.2	①黒色鉾物含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	口縁部外反。体部内面、口縁部横撫で。底部外面鋭削り。一部器表剥離。	000099
第99図2	埴輪 円筒	13・14区 小片		①黒色鉾物含む。 ②普通。 ③明赤褐色。	円筒埴輪の口縁部下位片。内面横位刷毛目。外面縦位刷毛目。6世紀。	000191
第99図3 P L-39	龍泉窯系 青磁碗	11区 体部小片		①夾雑物含まない。 ②良。 ③胎土：青灰色。	鎬連弁文碗の体部下位片。	000098
第99図4 P L-39	中国白磁 碗	2区 体部小片		①黒色粒僅かに含む。 ②やや不良。 ③胎土：灰白色。	碗の体部下位片。外面下位は無軸。軸は、ややクリーム色を帯びた白色。内面の軸は使用により擦れる。	000029
第99図5	焼締陶器 甕	4区 体部小片		①黒色粒吹き出す。 ②普通。 ③淡赤灰色。	外面器表暗赤褐色。格子状の叩き。知多窯。	000075
第99図6 P L-39	焼締陶器 片口鉢	1区 口縁部片		①白色鉾物含む。 ②良。 ③灰色。	口縁部片。口縁部回転横撫で。体部外面は縦方向に浅い沈線状の調整痕残る。1号地下式坑出土片口鉢(第85図1)と同一産地であろう。体部内面の調整は粗く、接合痕が明瞭に残る。体部内面下位は、すり鉢としての使用により摩滅する。	000013
第99図7	焼締陶器 片口鉢	3区 口縁部小片		①白色鉾物含む。 ②良。 ③灰白色。	口縁部はやや肥厚する。外面自然軸掛かる。器表は暗赤色。16土坑出土(第79図2)、5号溝出土片口鉢(第92図1・2)と同一個体であろう。	000053
第99図8	在地土器 すり鉢	3区 底部片		①片岩細片を含む。 ②普通。 ③灰色。	外面器表鈍い橙色。内面幅広い擦り目。底部外面は糸切りではない。底部周縁から体部下位内面使用により摩滅する。	000052
第99図9 P L-39	五輪塔 空輪	1区 完形	上幅12.7 最大幅 25.5 厚14.8		粗粒安山岩製と考えられる。笠部の反りが少なく、近世か近代の製作であろう。	000117
第100図10 P L-40	五輪塔 空輪	2区 一部欠	上幅 23.5 最大幅 45.4 厚21.3	榛名軽石。	大型の軽石製五輪塔。下面は全体に剥離がひどく、火輪を受けるくぼみが僅かに残る。	000118
第100図11 P L-40	石製品 玉	2区 完形	長1.5		緑色を呈し、中央に穿孔する。表面の成形と調整は粗く、形は整わない。一部に自然面を残す。	000103
第100図12 P L-40	鉄製品 鎌	7区 1/2	最大幅2.8 最大厚0.4		中央部で折れて欠損する。先端も曲がっている。全体に湾曲する形態である。	000132
第100図13	土師器 杯	遺跡周辺	口12.6 高6.5	①白色鉾物含む。 ②普通。 ③鈍黄橙色。	調査地周辺の現桃の木川の堤防工事中に発見された。口縁部外湾し、内傾する。内面放射状の暗文。底部内面接合痕明瞭。	個人蔵
第100図14 P L-40	銅銭 咸平元寶	4区 完形			北宋(998年)初鑄。	000104
第101図15 P L-39	五輪塔 風輪	2区 一部欠	長(27.0) 最大幅 18.7		先端とソケット部分欠損。	000116
第101図16 P L-39	石製品 下臼	1区 完形	径39.1 高14.5		ふくみは1.2cm。全体にすり減り、目は不明瞭。	000113
P L-40	鉄滓	区不詳				000028

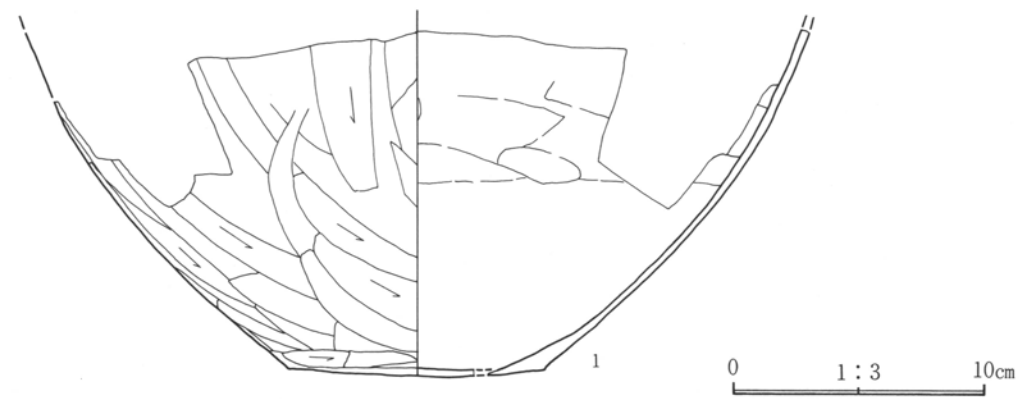
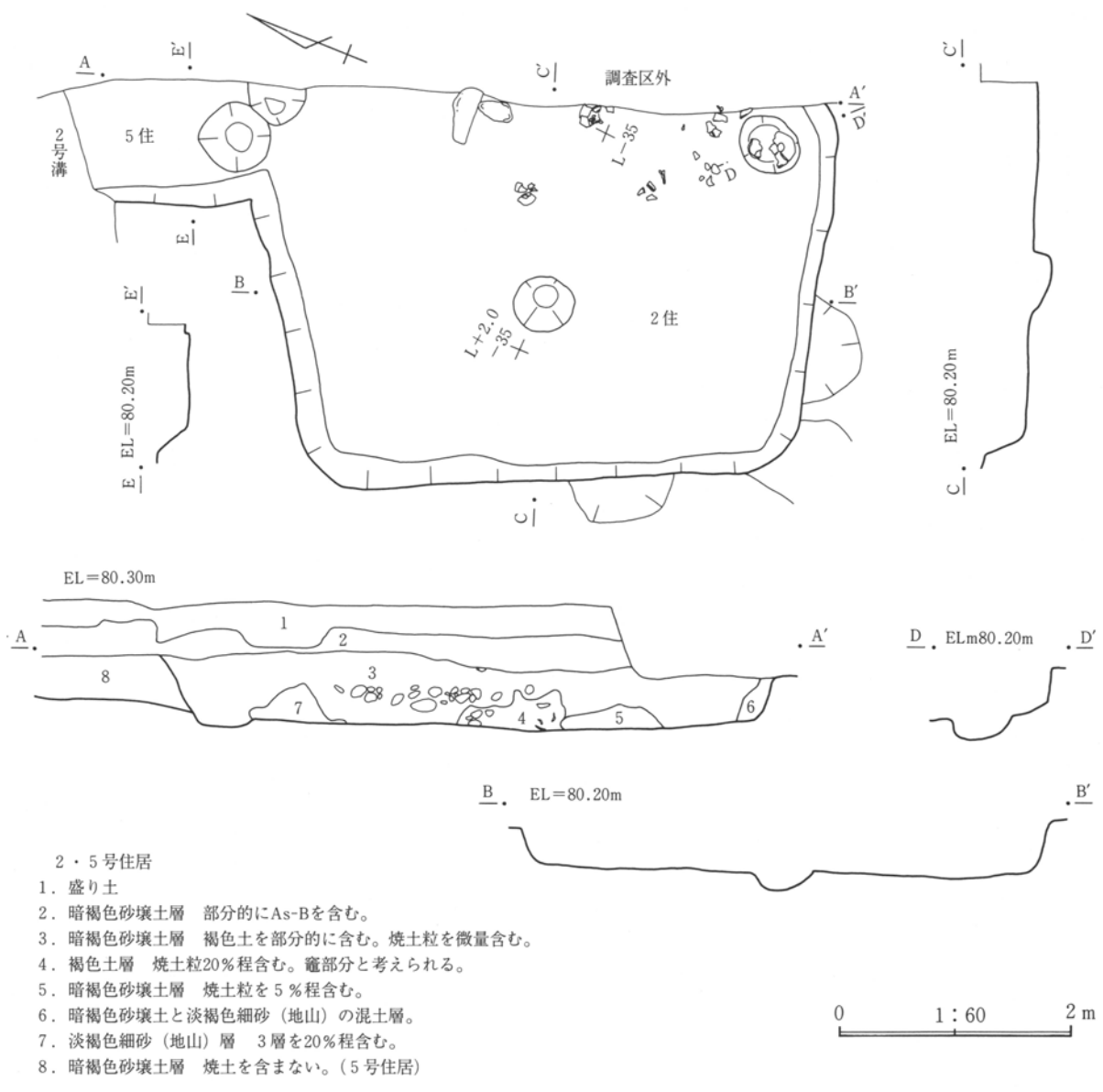


1号住居

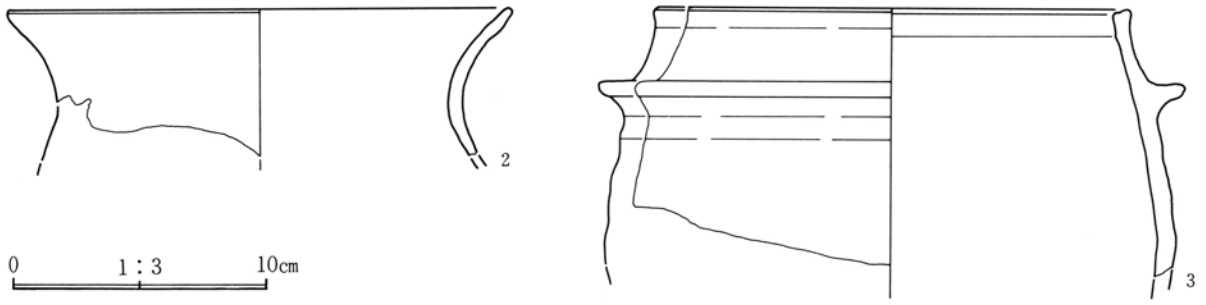
1. 暗褐色土層 礫を多く含む。部分的に焼土を微量含む。
2. 1層に地山の淡黄色砂壤土を塊状に含む。
3. 砂礫層
4. 暗褐色土層 住居より古い土坑、若しくは壁の崩壊。



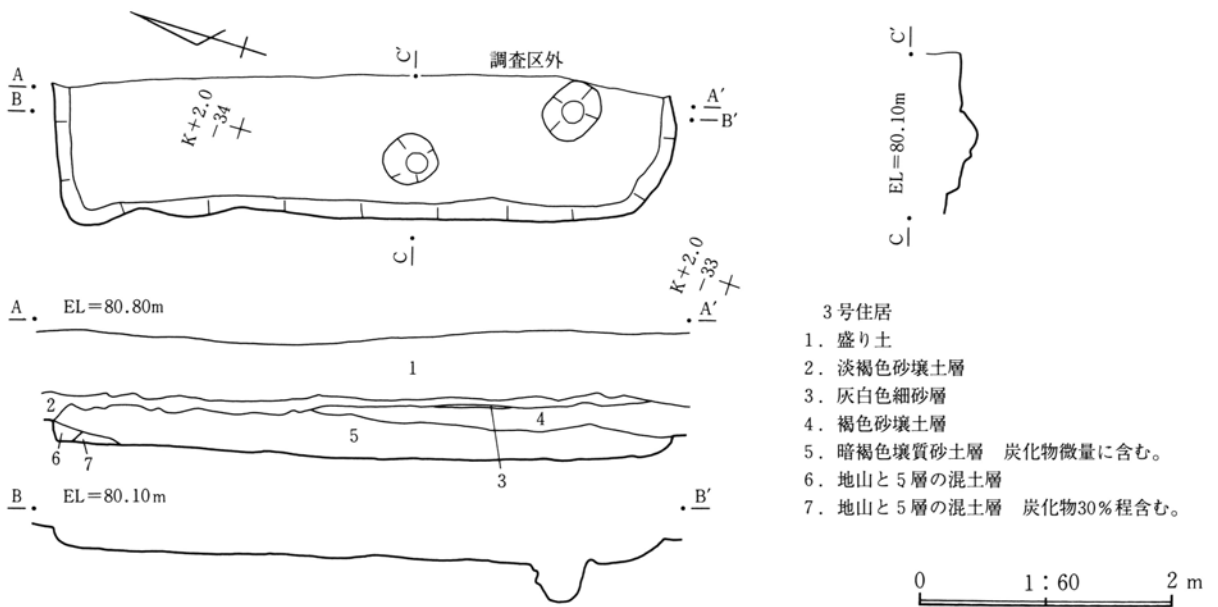
第8図 1号住居・出土遺物実測図



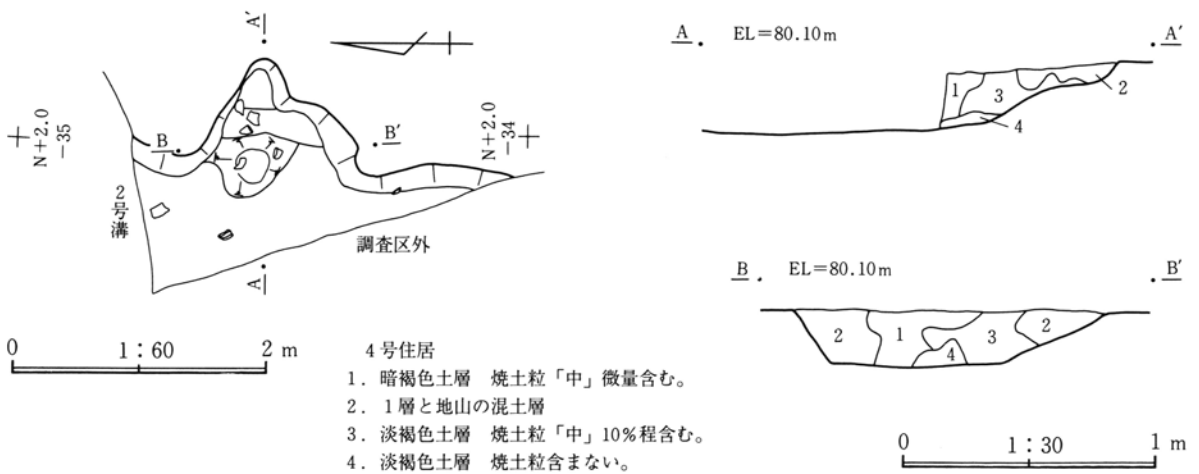
第9図 2・5号住居・出土遺物実測図



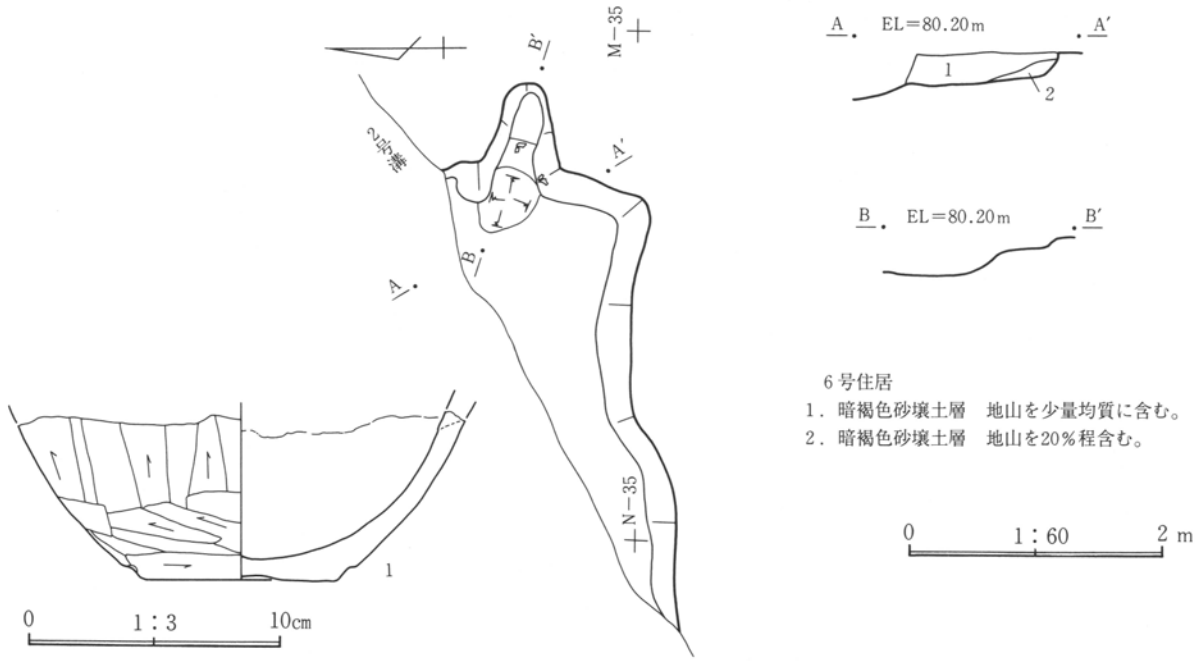
第10図 2・5号住居出土遺物実測図



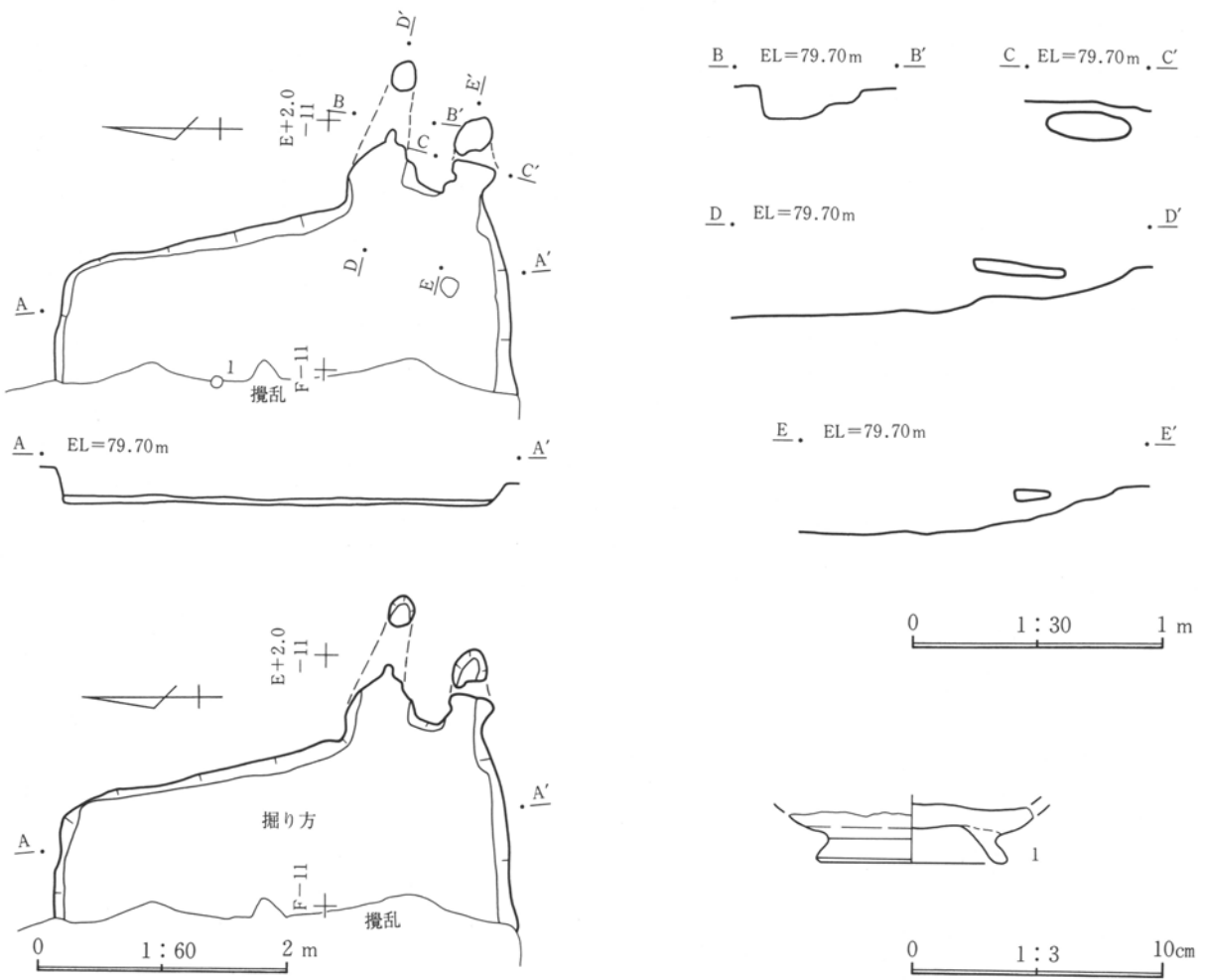
第11図 3号住居実測図



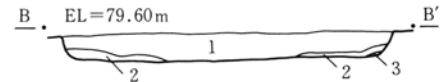
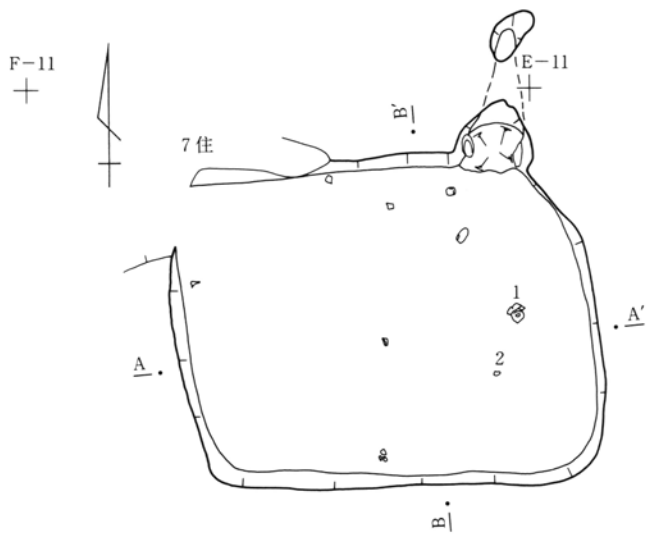
第12図 4号住居実測図



第13図 6号住居・出土遺物実測図

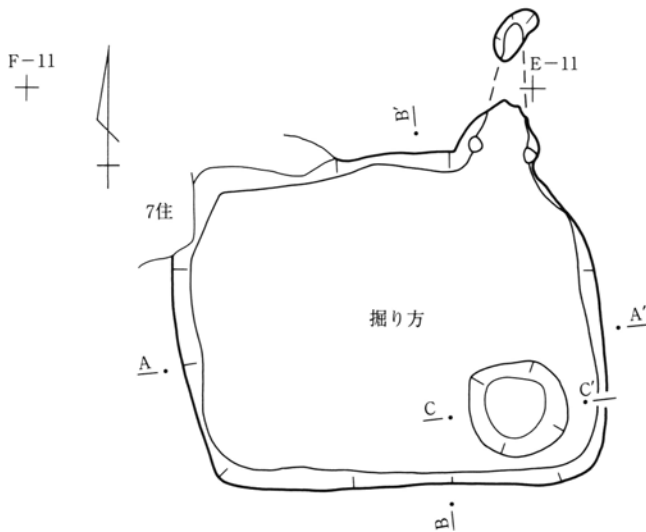


第14図 7号住居・出土遺物実測図



8号住居

1. 鈍黄褐色土層 直径1~3mmの角閃石安山岩を少量含む。
2. 灰黄褐色土層 細砂層を塊状に含む。
3. 鈍黄褐色シルト質土層

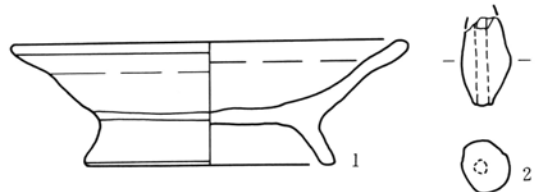


C. EL=79.60m C'



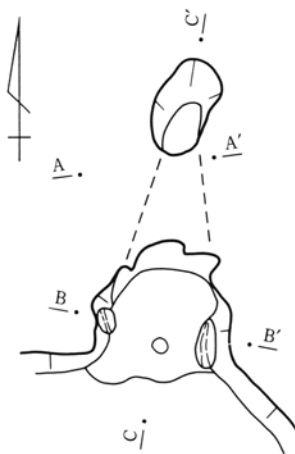
8号住居掘方

1. 住居埋土2層
2. 暗褐色砂壤土層 明褐色砂小塊を含む。
3. 暗褐色砂壤土層 焼土粒「小~中」10%程含む。



0 1:60 2 m

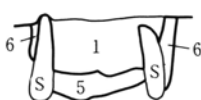
0 1:3 10cm



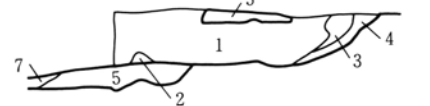
A. EL=79.70m A'



B. EL=79.70m B'



C. EL=79.70m C'



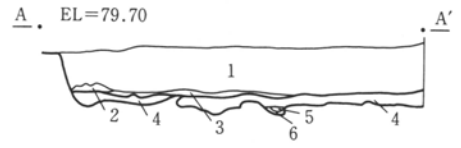
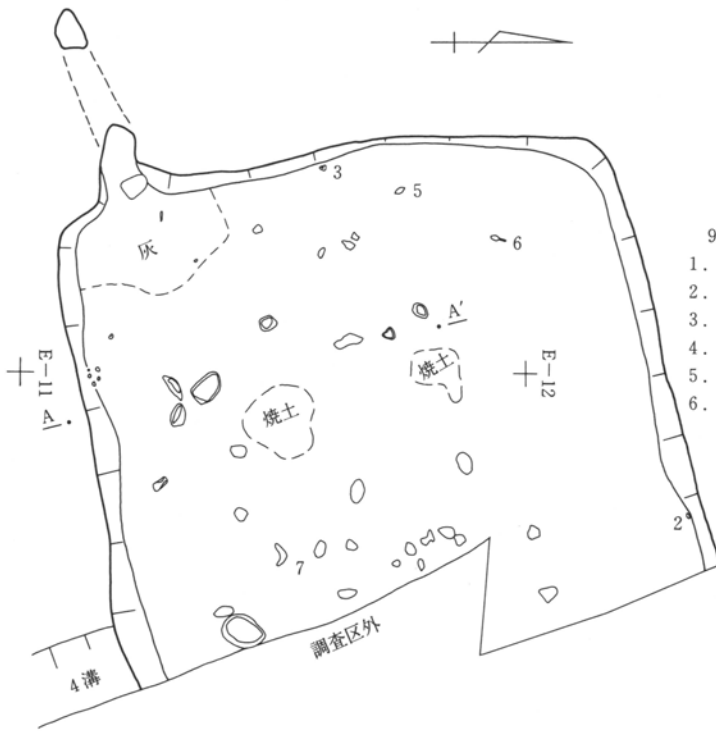
8号住居竈

1. 鈍黄褐色土層 直径1~3mmの角閃石安山岩を少量含む。
2. 焼土塊
3. 鈍黄褐色土層 焼土粒20%程含む。
4. 地山小塊
5. 地山の焼土化した部分
6. 地山を主体とし、少量炭化物を含む。
7. 1層と灰の混土層

0 1:30 1 m

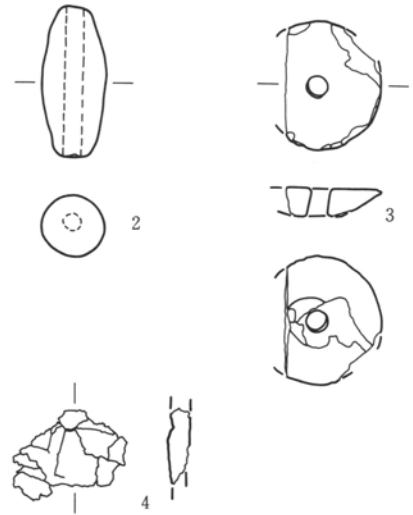
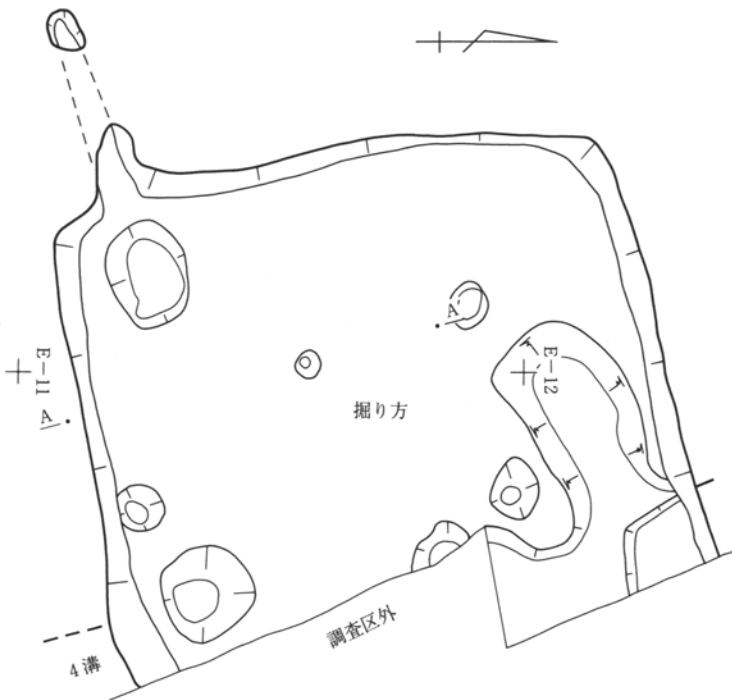
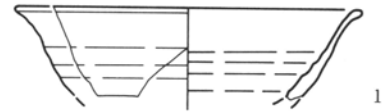
第15図 8号住居・出土遺物実測図





9号住居

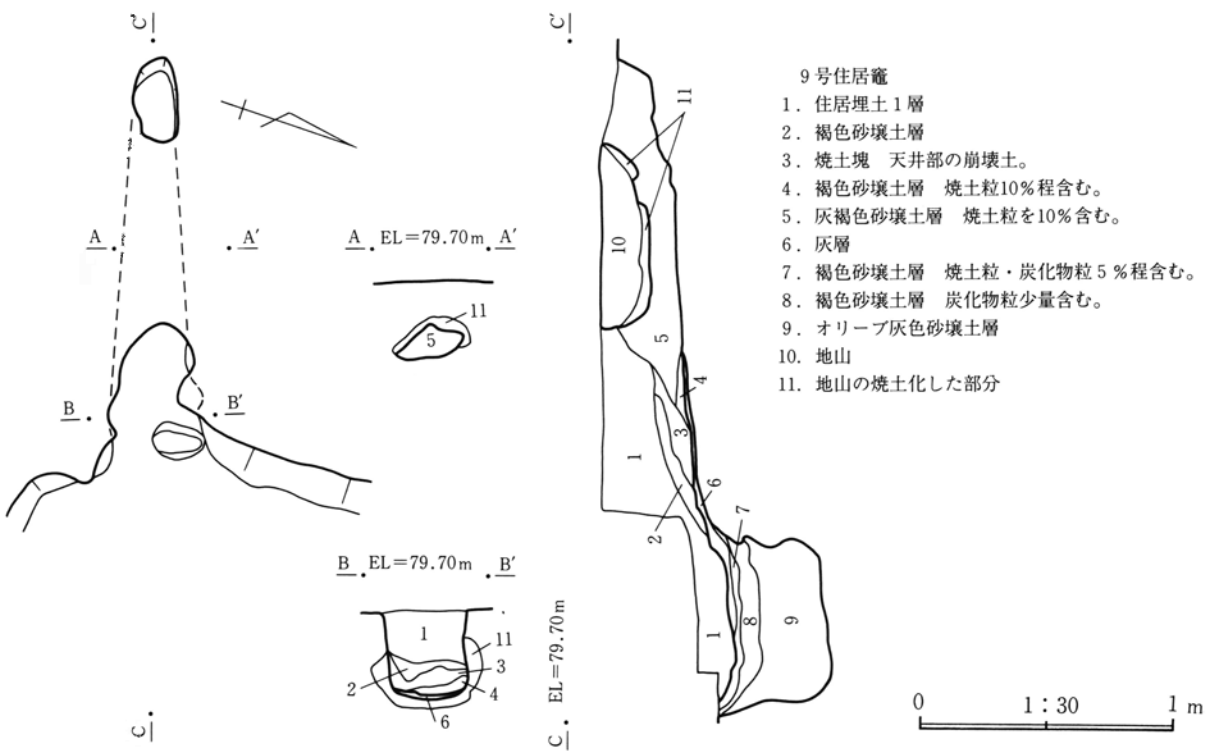
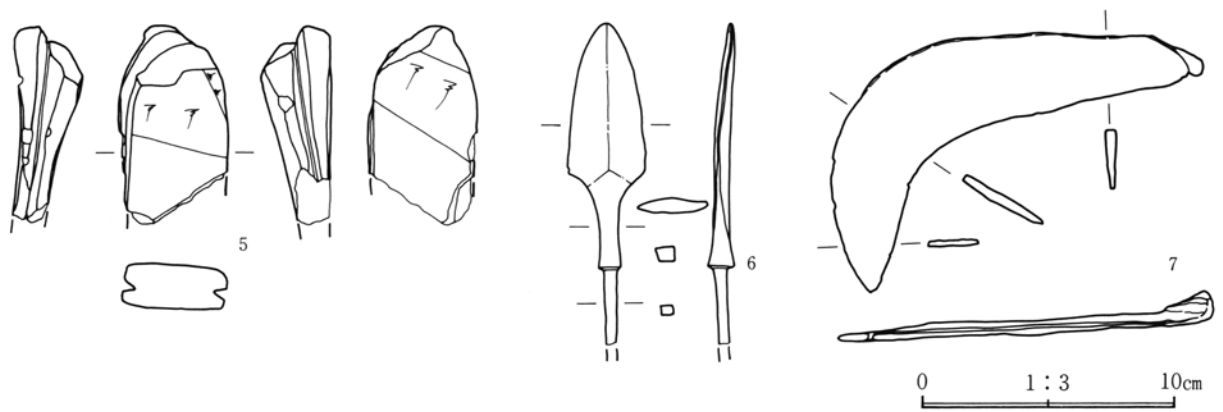
1. 灰褐色砂壤土層 焼土粒を5%程含む。
2. 灰褐色砂壤土層 焼土粒を5%程含む。炭化物10%程含む。
3. 灰層 1層を10%程含む。この直下が床面。
4. 褐色砂壤土層 黄褐色砂層小塊と炭化物粒を20%程含む。
5. 灰と黄褐色砂の混土層
6. 焼土層 堆積土ではなく、地山の焼土化した部分。



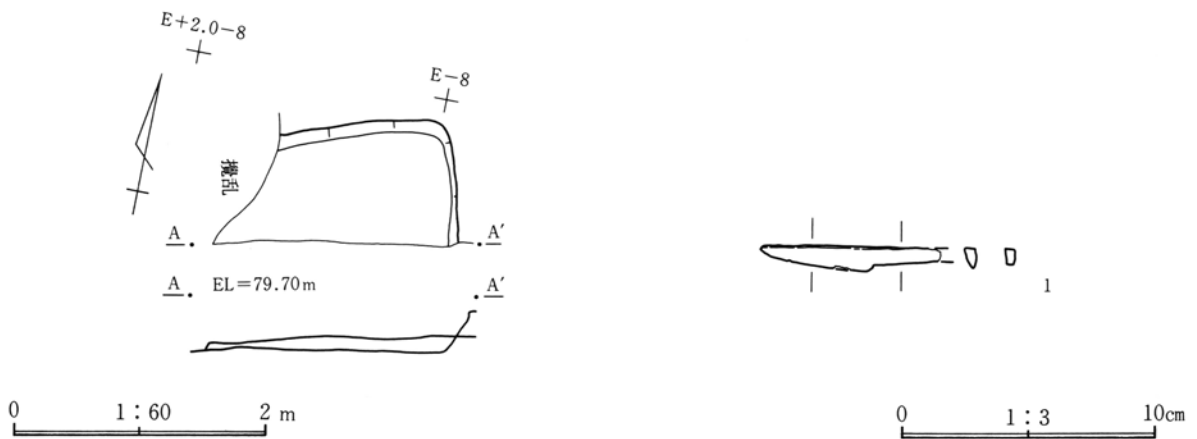
0 1:60 2 m

0 1:3 10cm

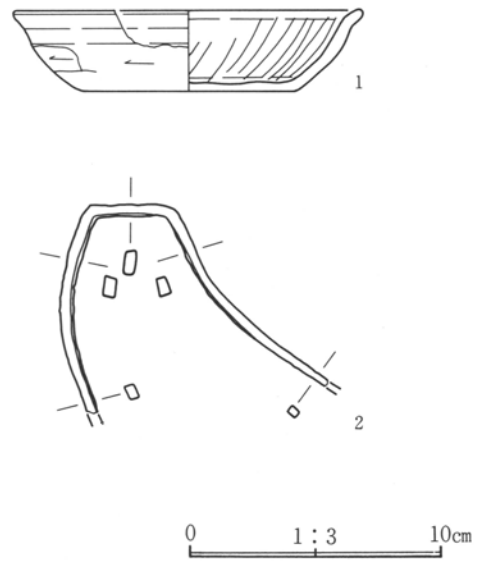
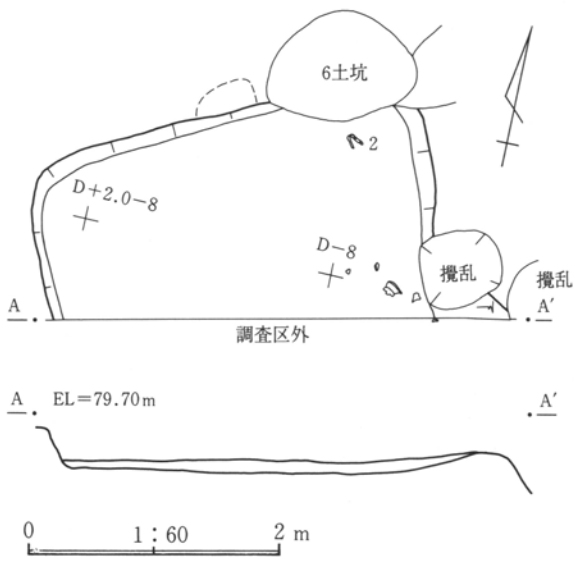
第16図 9号住居・出土遺物実測図



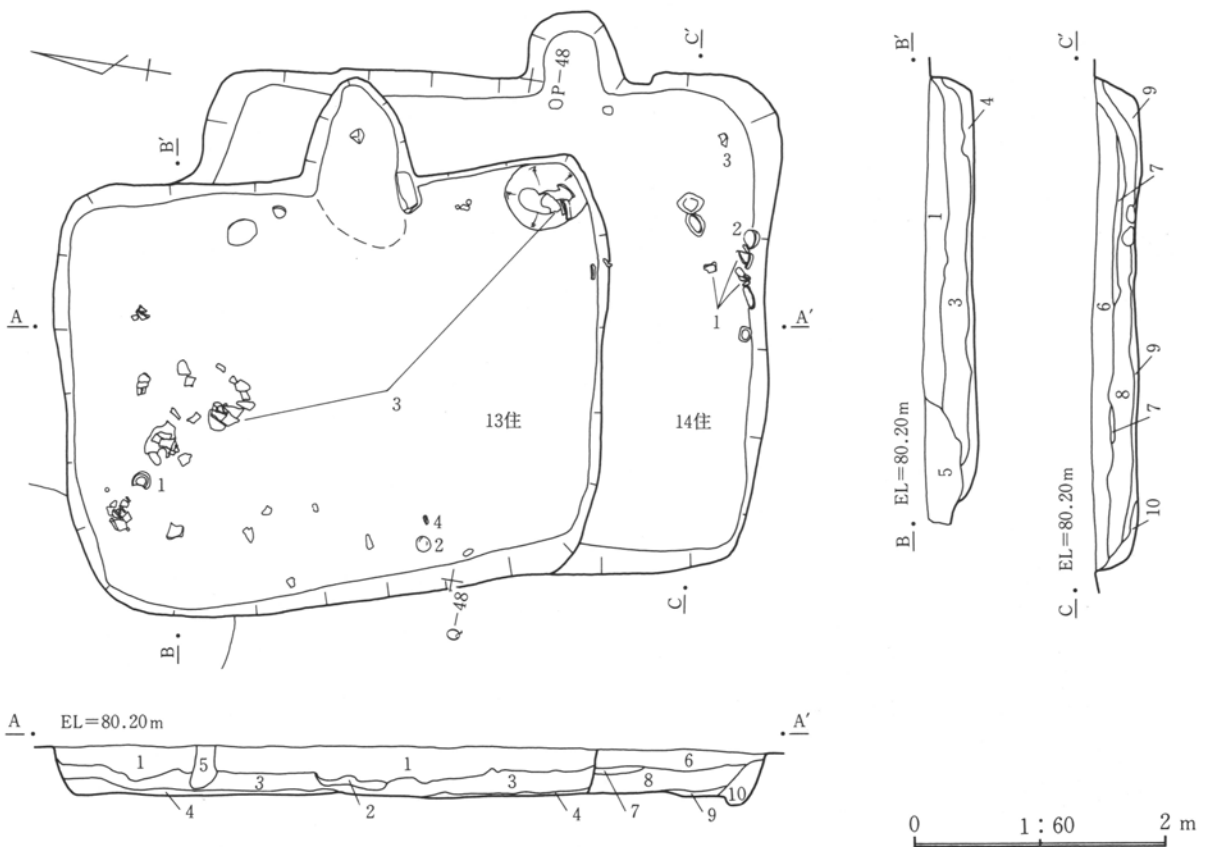
第17図 9号住居竈・出土遺物実測図



第18図 10号住居・出土遺物実測図



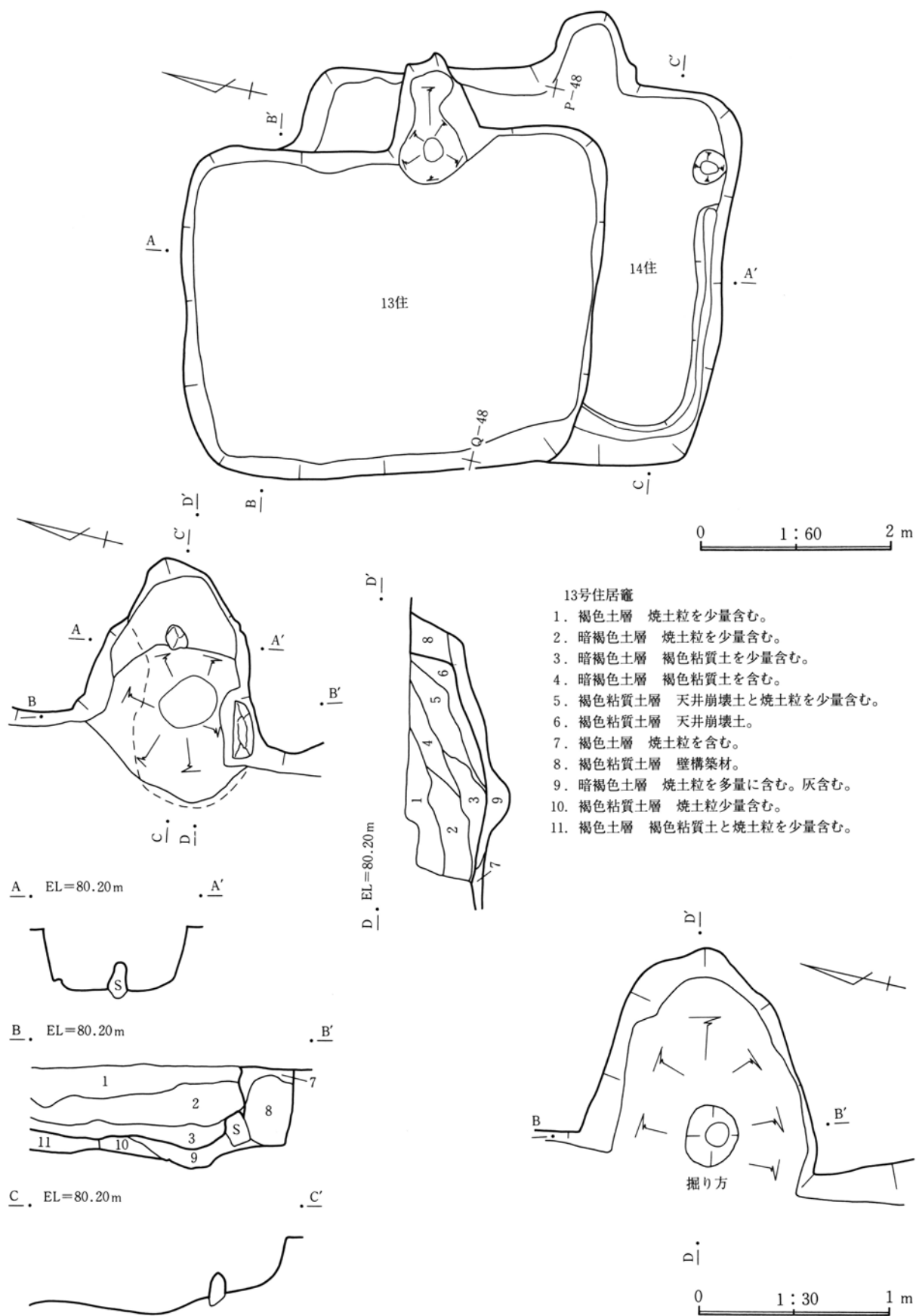
第19図 11号住居・出土遺物実測図



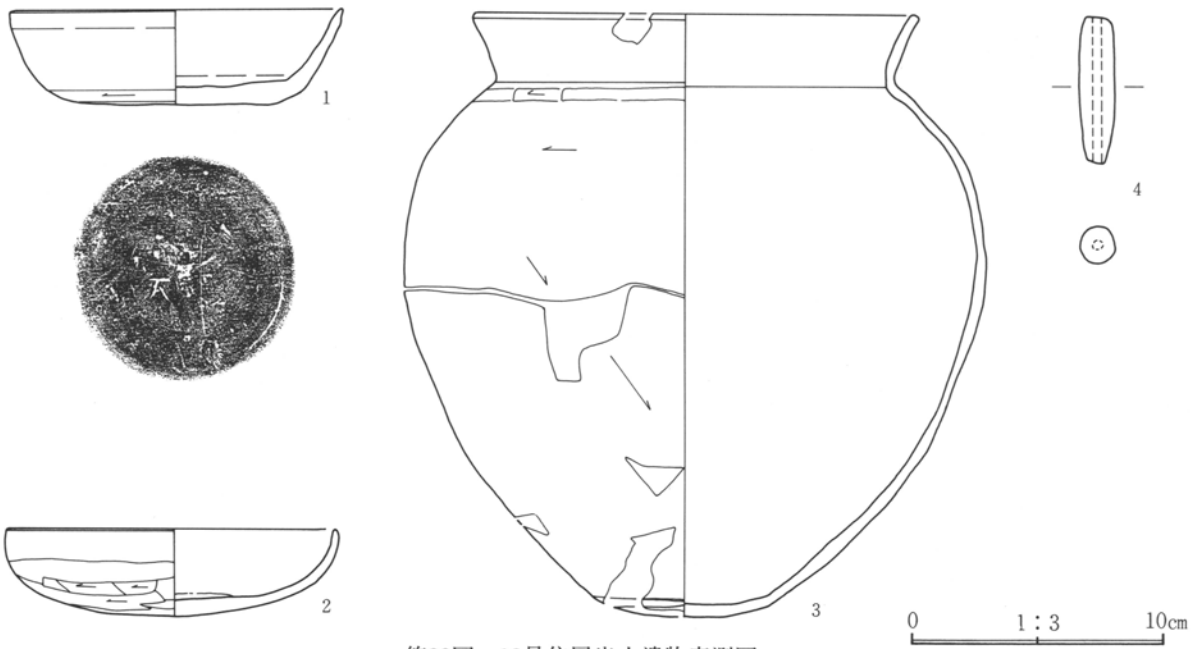
13・14号住居

- |                            |                              |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. 褐色土層 黄褐色砂質土・焼土粒を含む。     | 6. 褐色土層 黄褐色砂質土・焼土粒、黒褐色土塊を含む。 |
| 2. 褐色土層 黄褐色砂質土を多量に含む。      | 7. 褐色層 焼土粒を多量に含む。            |
| 3. 褐色土層 黒褐色土塊・焼土粒を含む。      | 8. 黒褐色土層 黄褐色砂質土を含む。          |
| 4. 褐色土層 黒褐色土塊を含む。焼土粒を少量含む。 | 9. 褐色層 焼土粒を少量含む。             |
| 5. 攪乱                      | 10. 黄褐色土層 黒褐色土を少量含む。         |

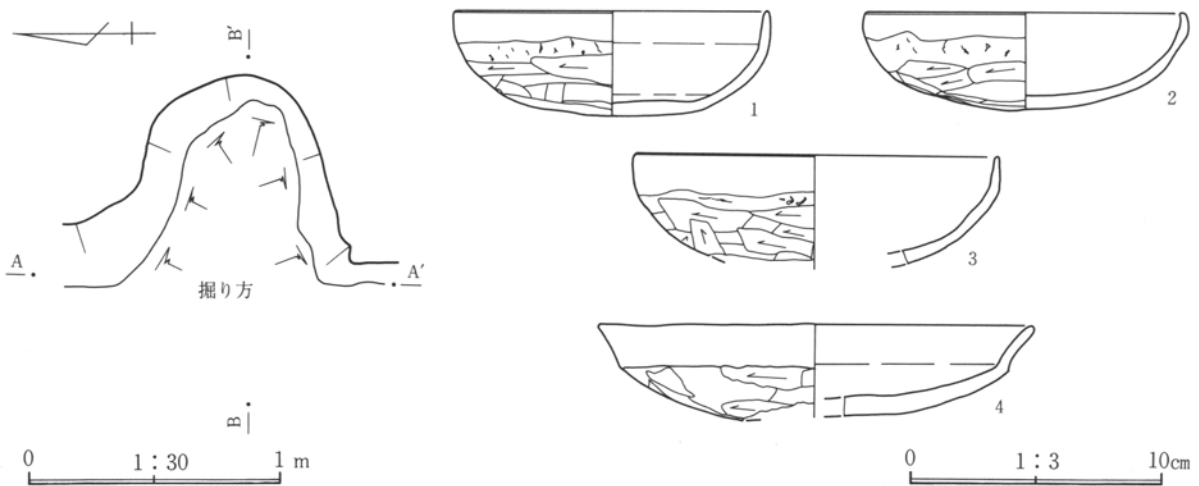
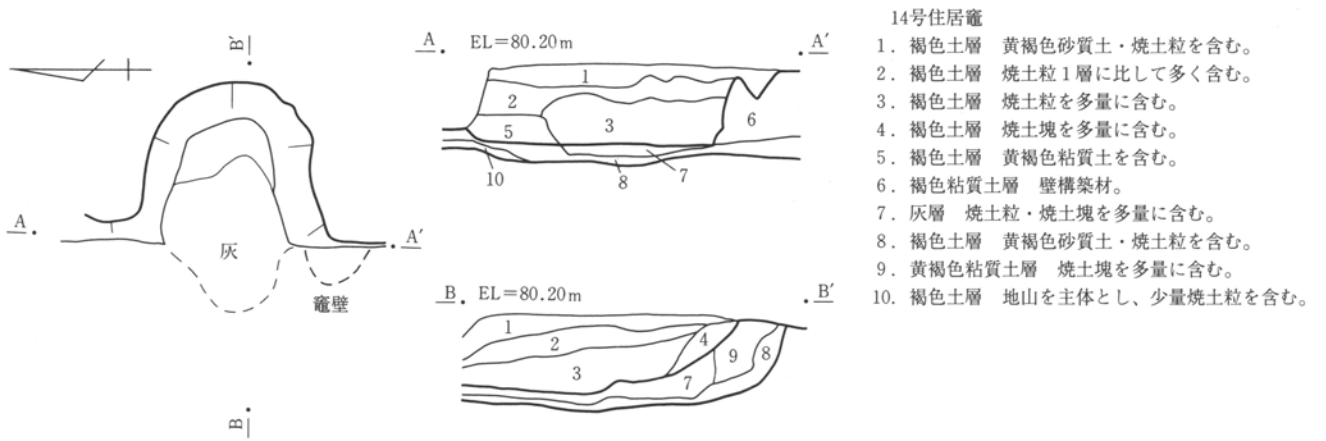
第20図 13・14号住居実測図



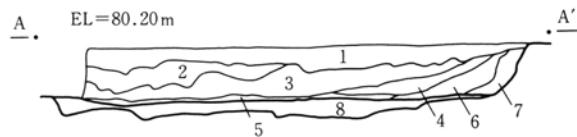
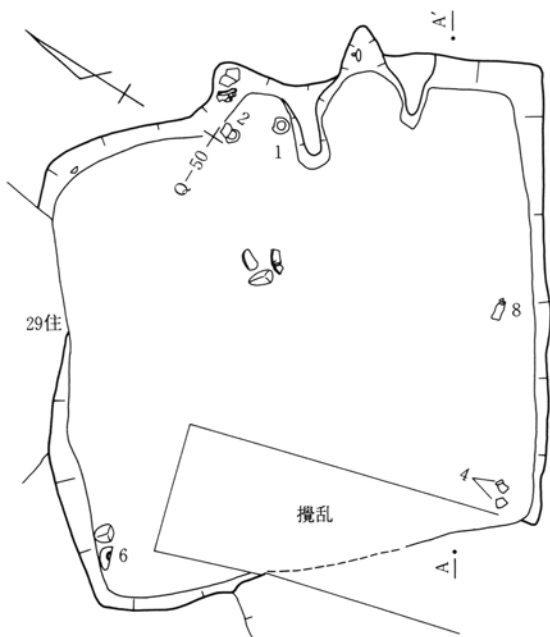
第21図 13・14号住居掘り方・竈実測図



第22図 13号住居出土遺物実測図

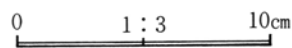
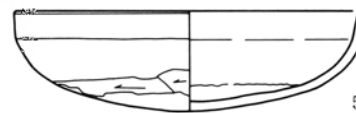
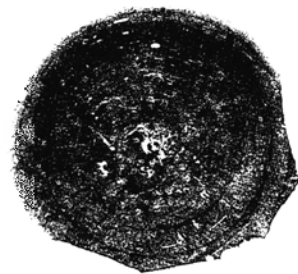
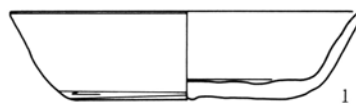
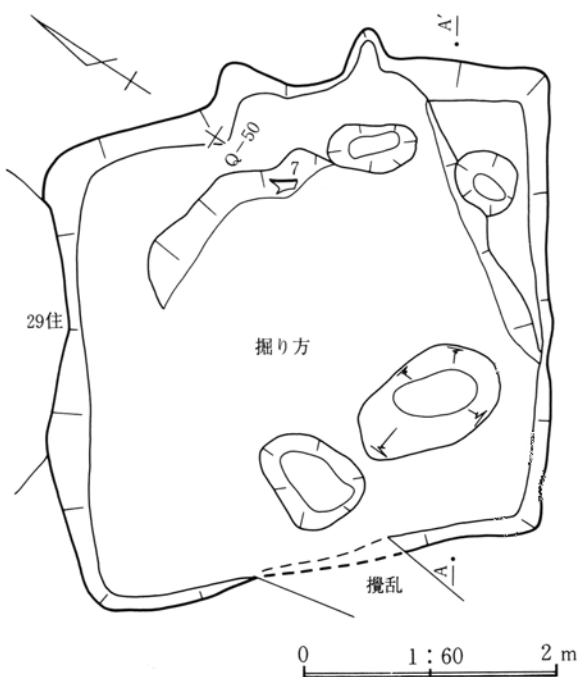


第23図 14号住居竈・出土遺物実測図

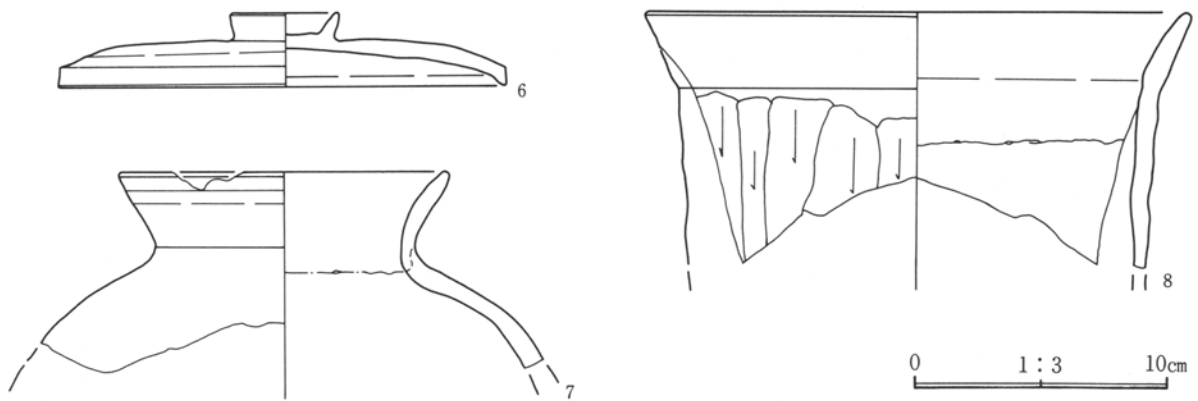


15号住居

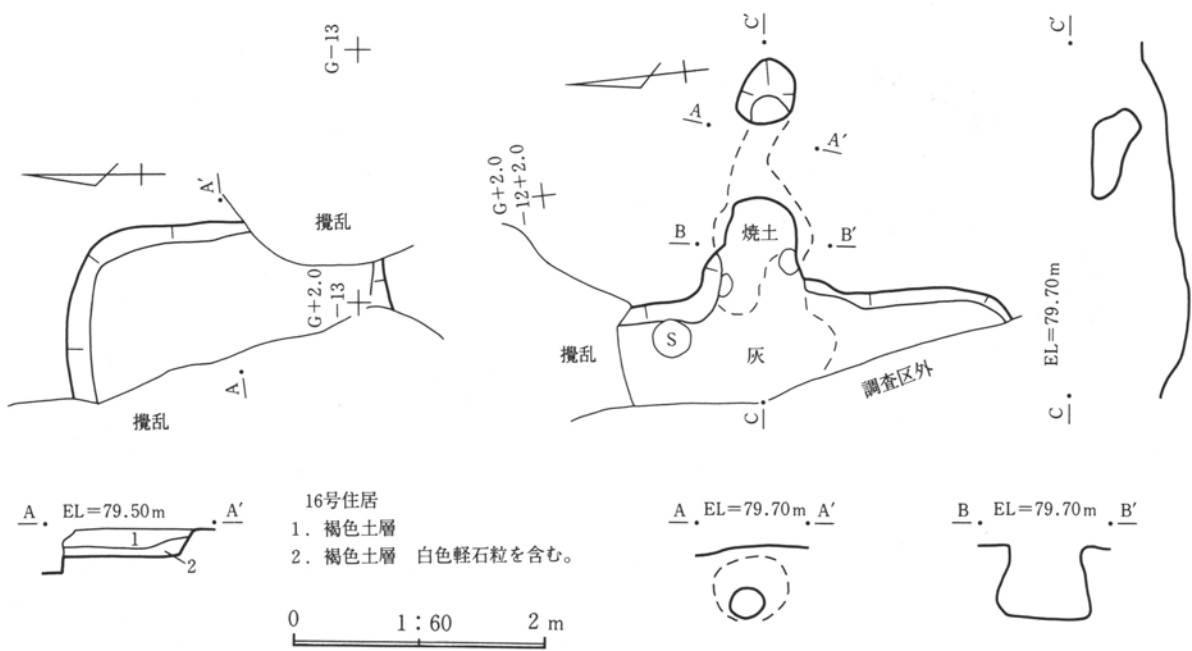
1. 褐色土層 焼土粒を少量含む。黄褐色砂質土塊を含む。
2. 褐色土層 焼土粒を含む。黄褐色砂質土塊を少量含む。
3. 暗褐色土層 黒褐色土塊を含む。
4. 暗褐色土層 黒褐色砂壤土塊を含む。
5. 暗褐色土層 黄褐色砂壤土塊を含む。
6. 暗褐色土層 焼土粒を含む。
7. 黄褐色砂壤土層 黒褐色土を少量含む。
8. 暗褐色土層 黄褐色砂壤土塊を多量に含む。



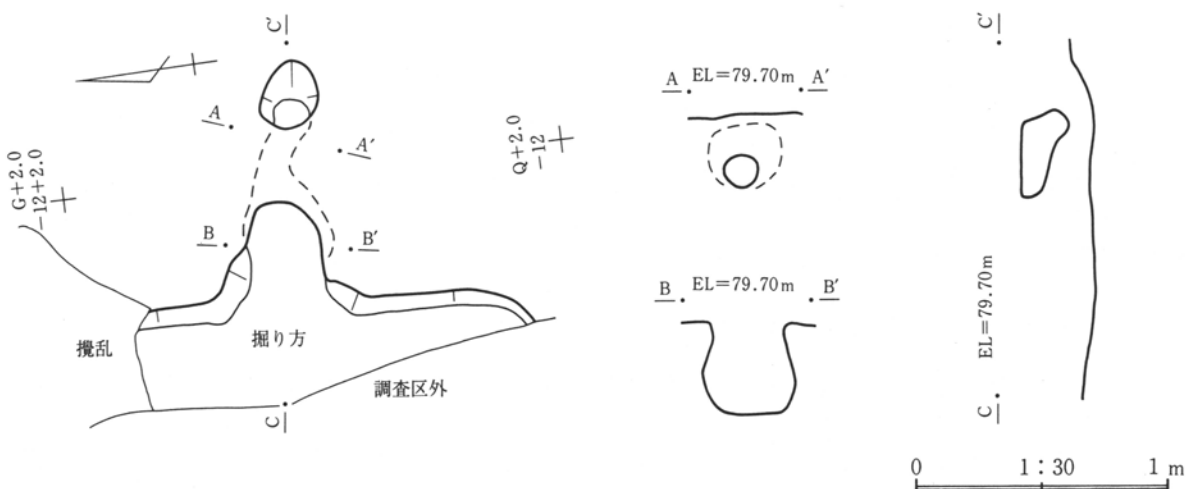
第24図 15号住居・出土遺物実測図



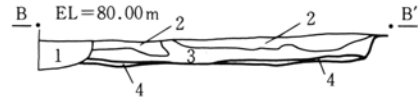
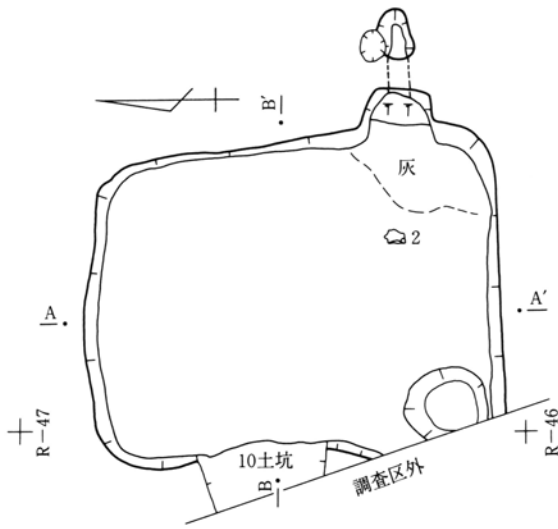
第25図 15号住居出土遺物実測図



第26図 16号住居実測図

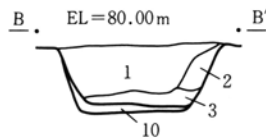
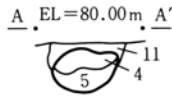
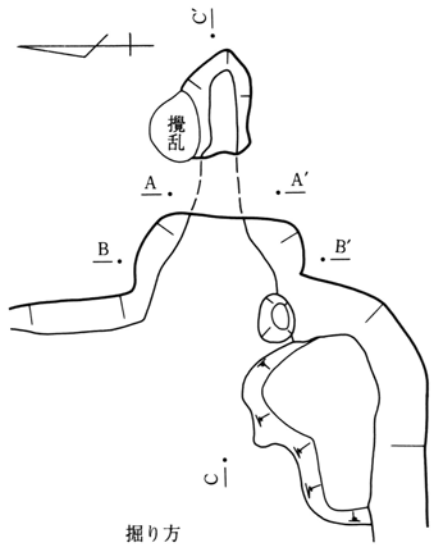
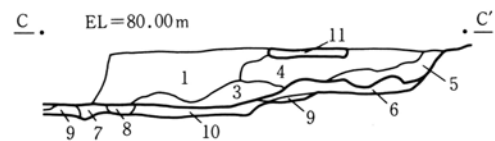
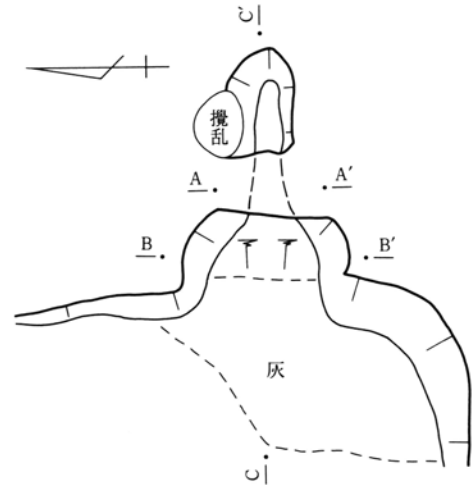
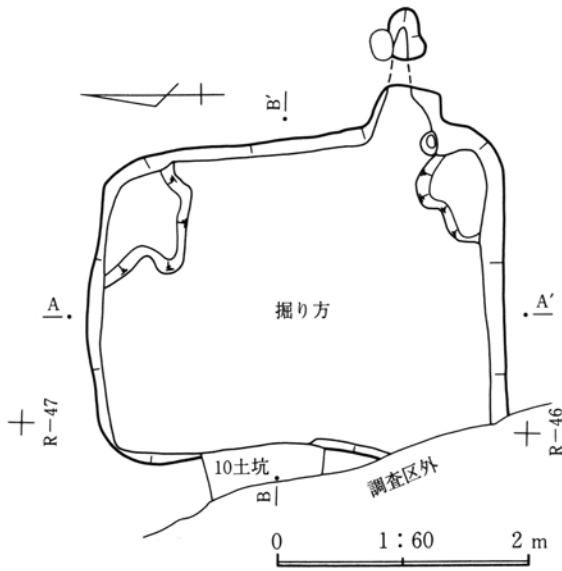


第27図 17号住居実測図



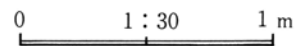
18号住居

1. 暗褐色砂壤土層 地山の黄褐色細砂を5%程含む。(10号土坑)
2. 暗褐色砂壤土層 1層に比して黒味が強い。
3. 1層と地山の黒褐色土との混土層
4. 地山の黄褐色細砂に黒褐色土を少量含む。



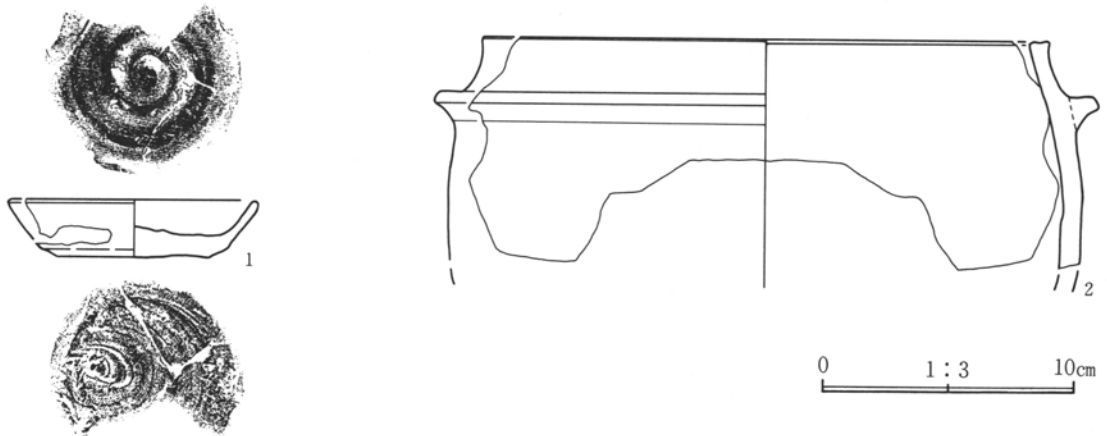
18号住居竈

1. 住居埋土2層
2. 暗褐色砂壤土層
3. 暗褐色砂壤土層 灰・焼土粒を含む。
4. 黄褐色細砂を主体とし、焼土粒を5%程含む。
5. 灰と4層の混土層
6. 地山の崩壊土を主体とし、5層を少量含む。
7. 暗褐色砂壤土層 暗褐色土を少量含む。
8. 焼土層
9. 灰層
10. 7層と灰の混土層
11. 地山の焼土化した部分

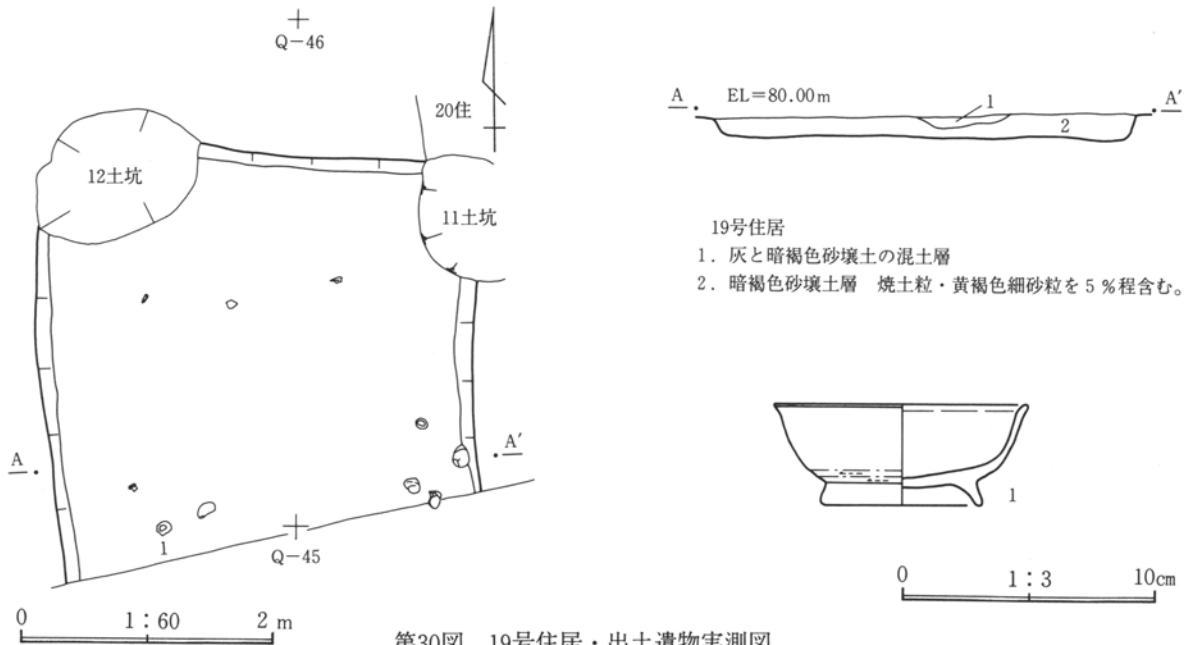


第28図 18号住居実測図

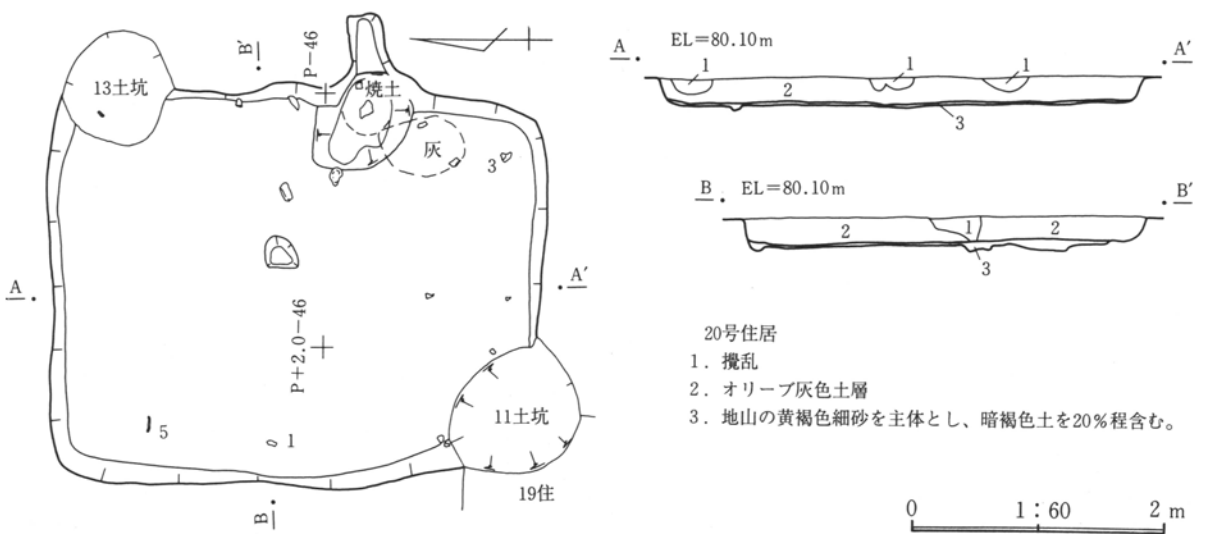




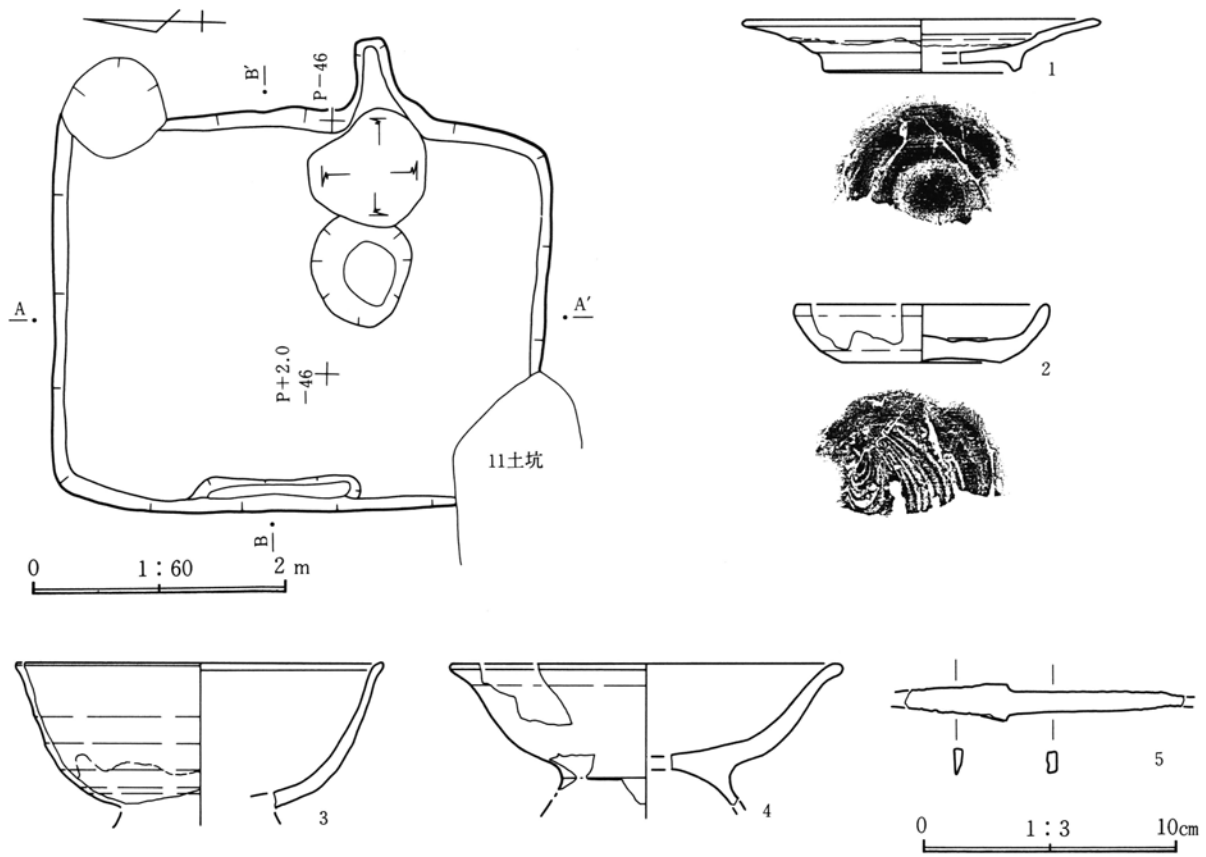
第29図 18号住居出土遺物実測図



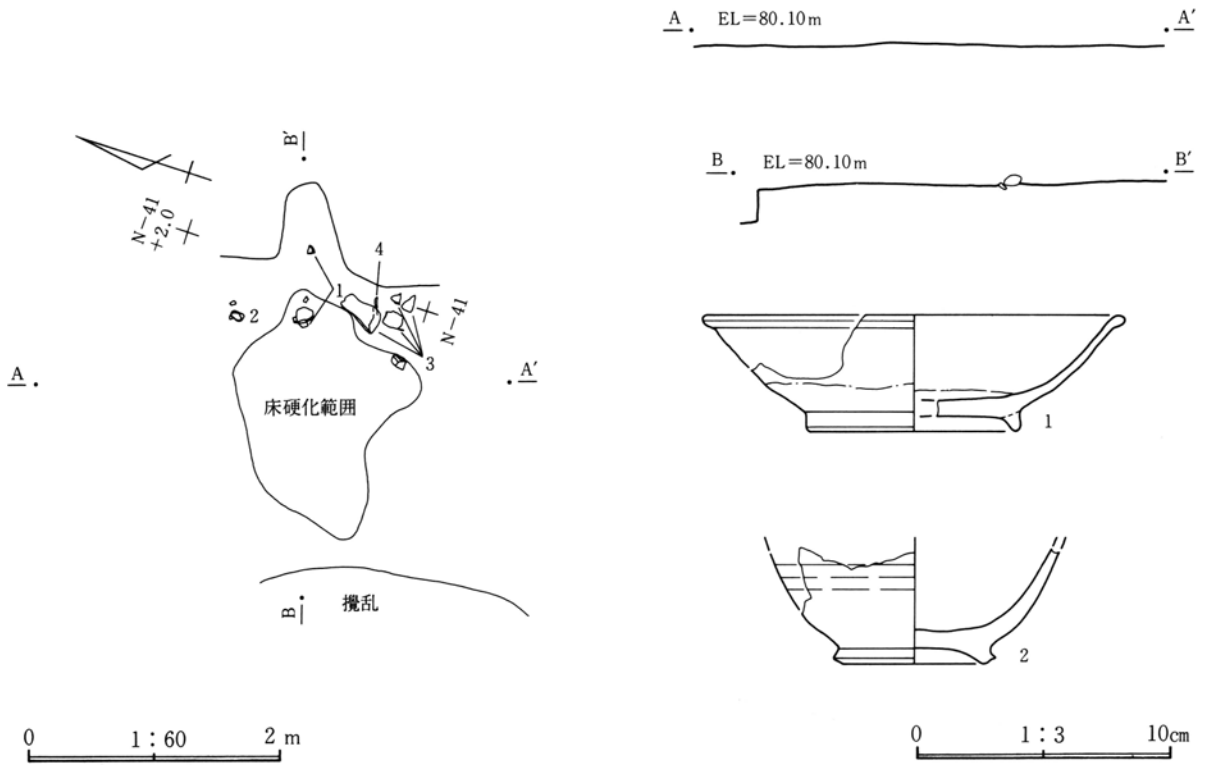
第30図 19号住居・出土遺物実測図



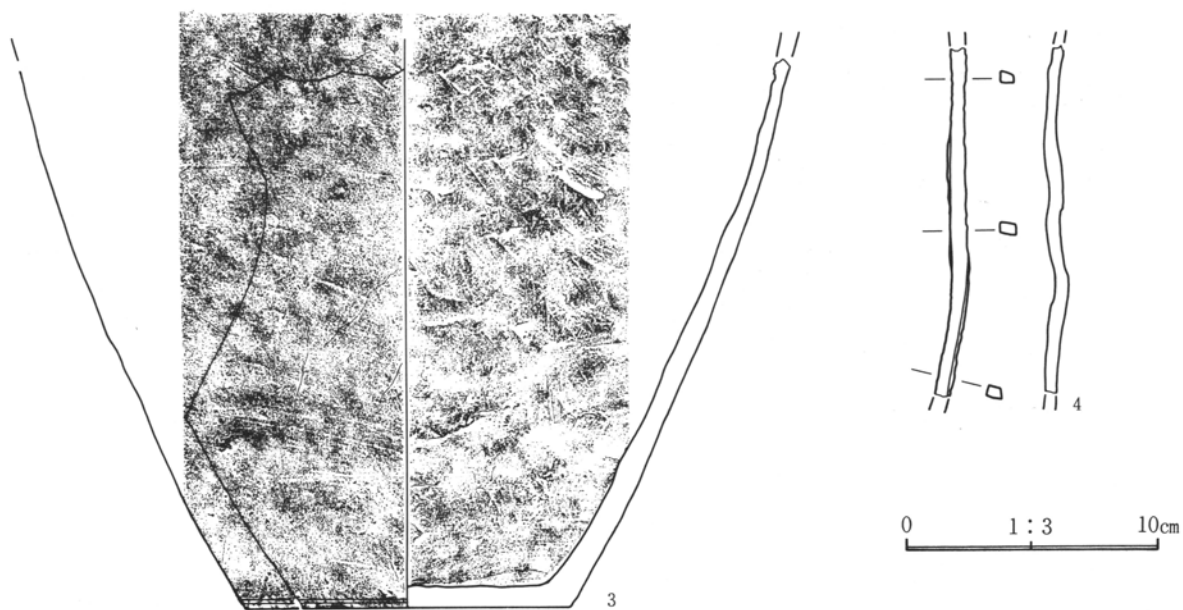
第31図 20号住居実測図



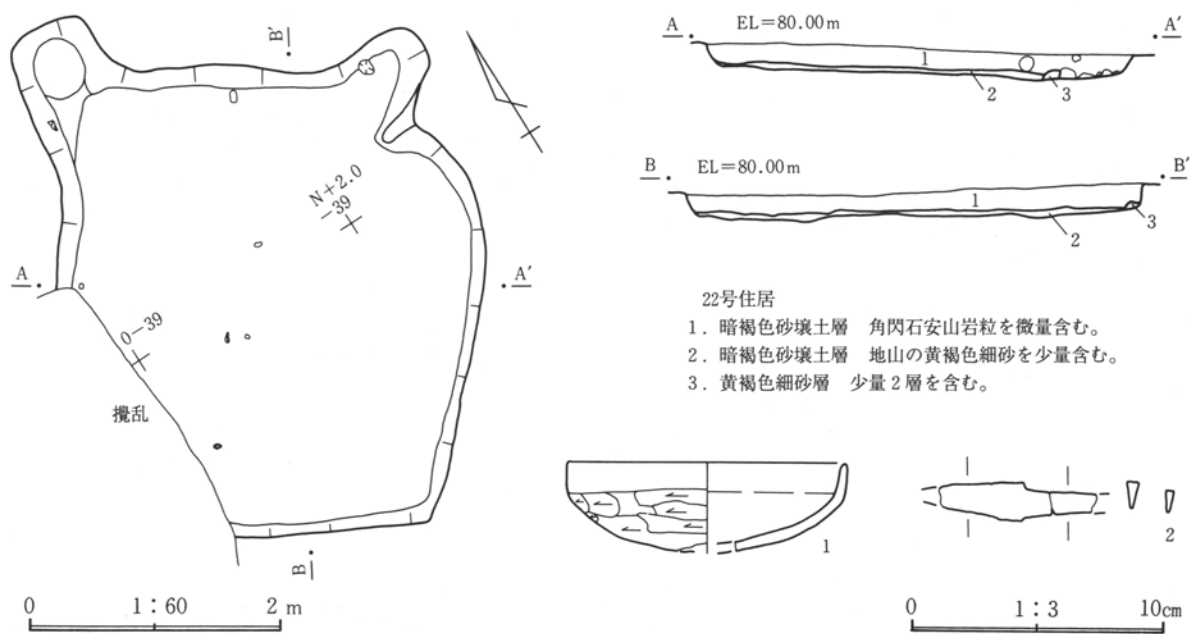
第32図 20号住居掘り方・出土遺物実測図



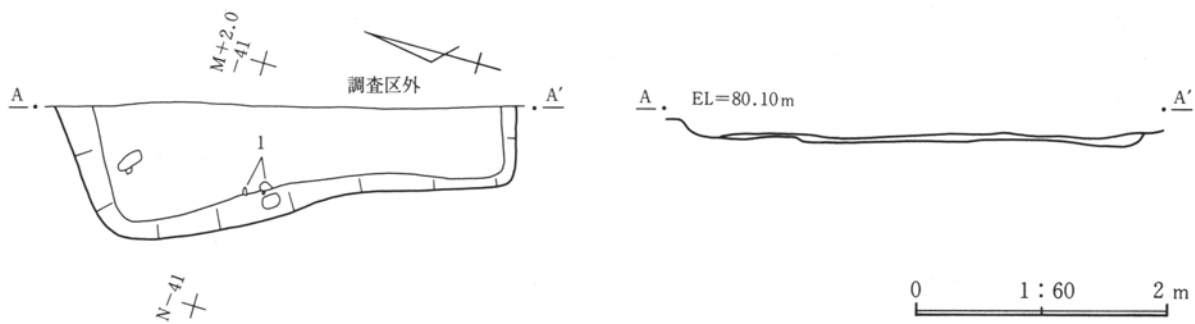
第33図 21号住居・出土遺物実測図



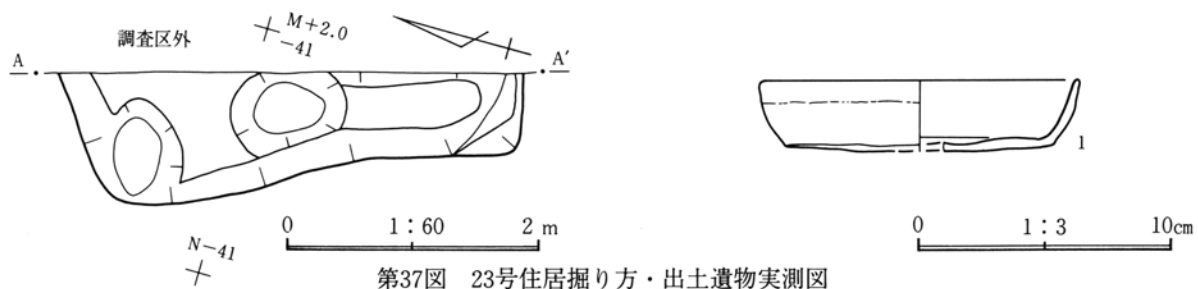
第34図 21号住居出土遺物実測図



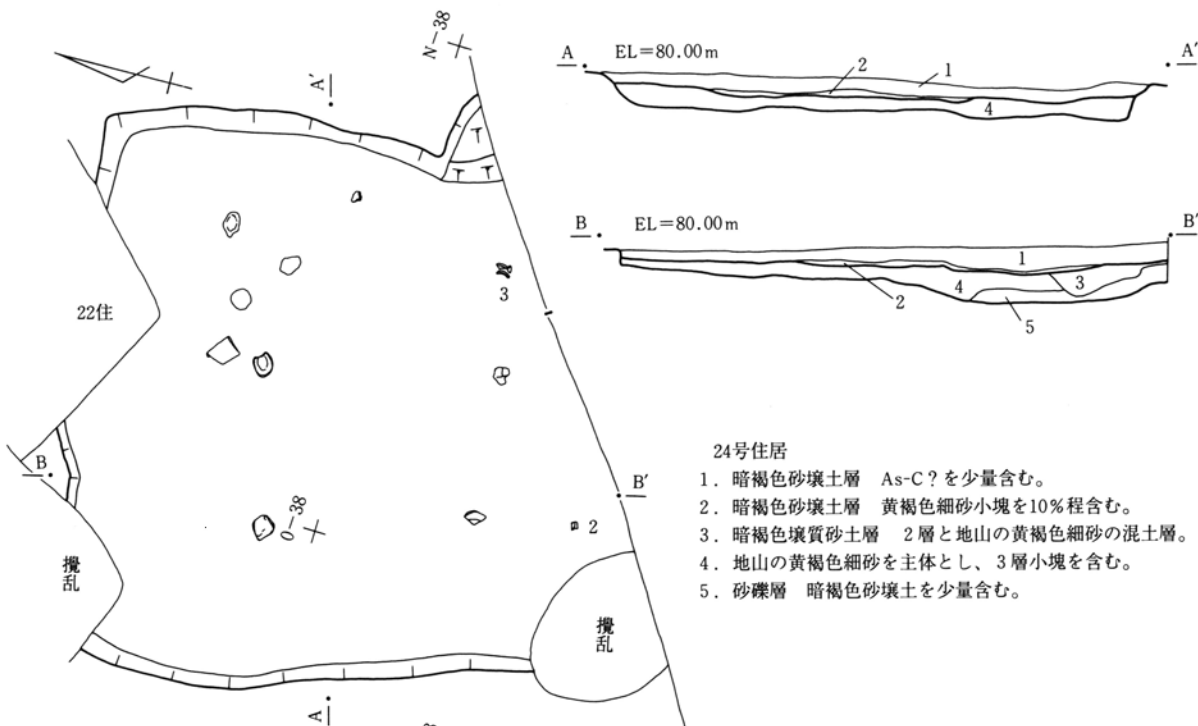
第35図 22号住居・出土遺物実測図



第36図 23号住居実測図

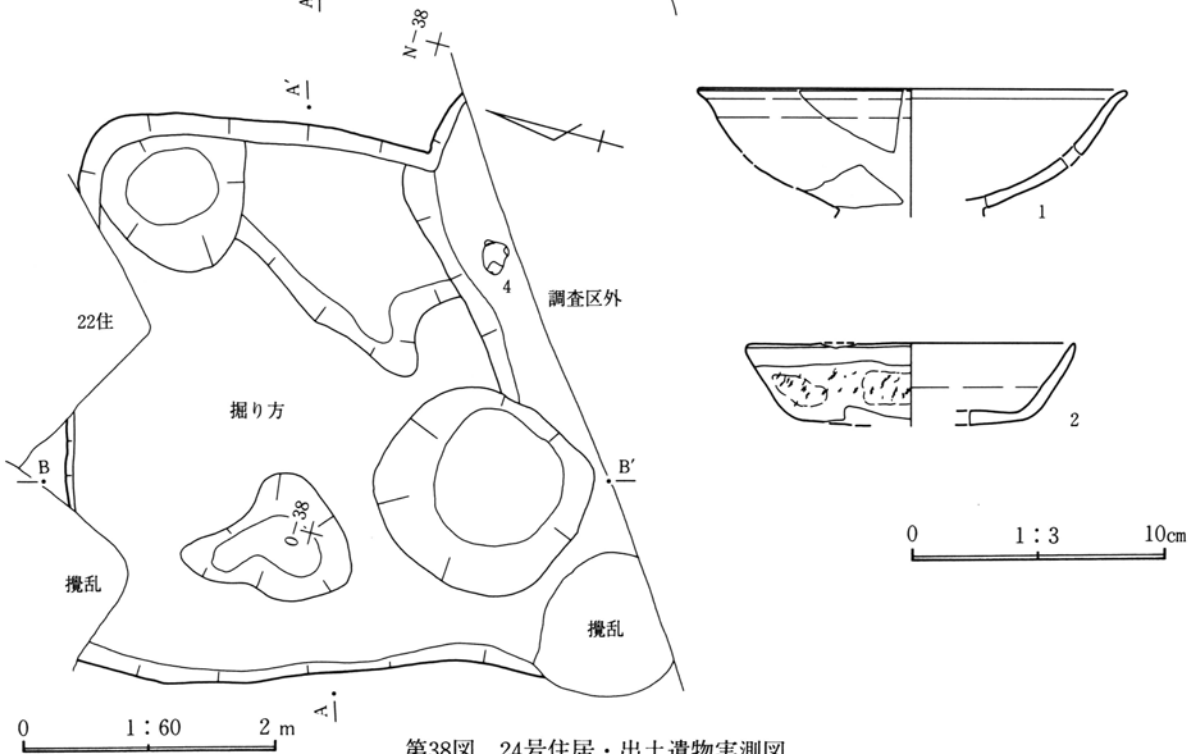


第37図 23号住居掘り方・出土遺物実測図

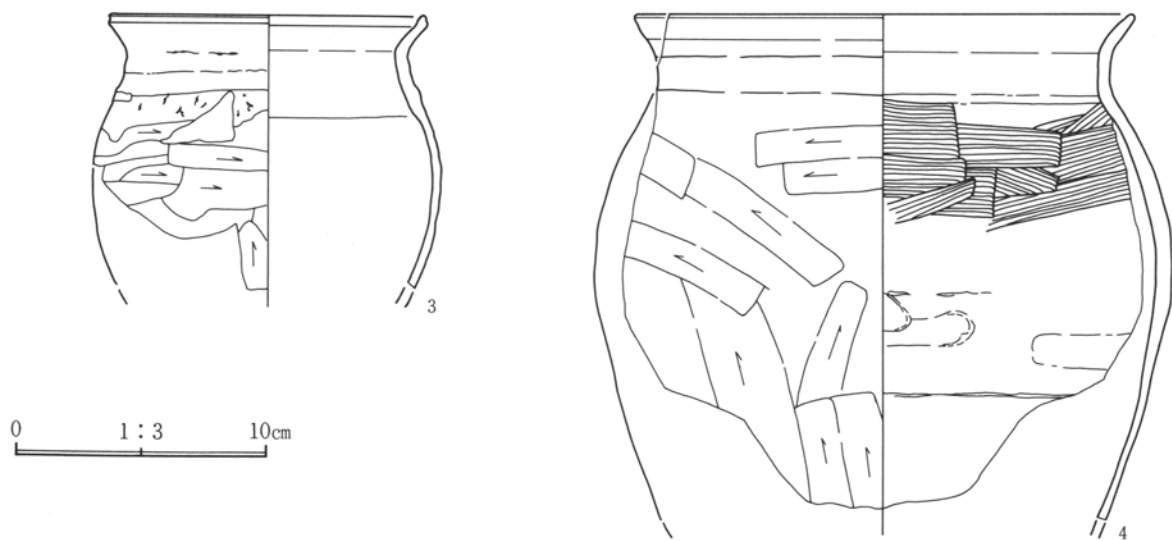


24号住居

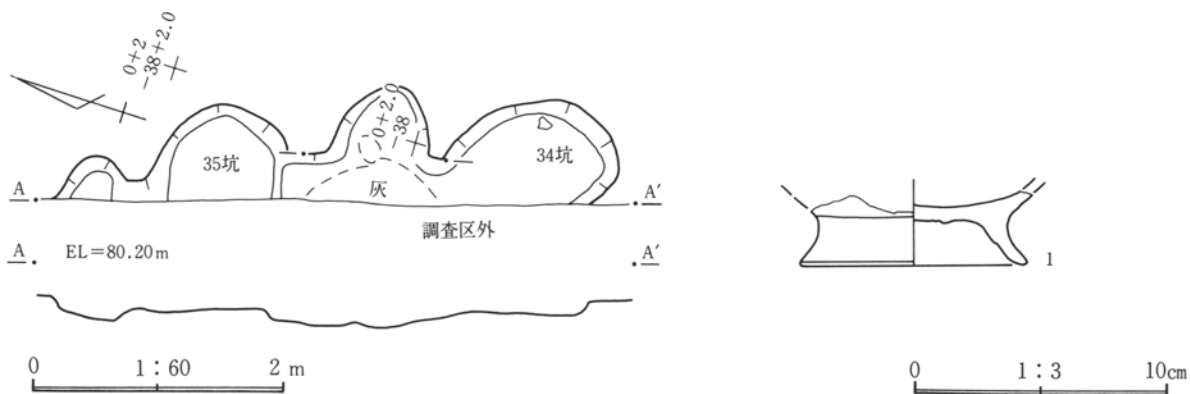
1. 暗褐色砂壤土層 As-C?を少量含む。
2. 暗褐色砂壤土層 黄褐色細砂小塊を10%程含む。
3. 暗褐色壤質砂土層 2層と地山の黄褐色細砂の混土層。
4. 地山の黄褐色細砂を主体とし、3層小塊を含む。
5. 砂礫層 暗褐色砂壤土を少量含む。



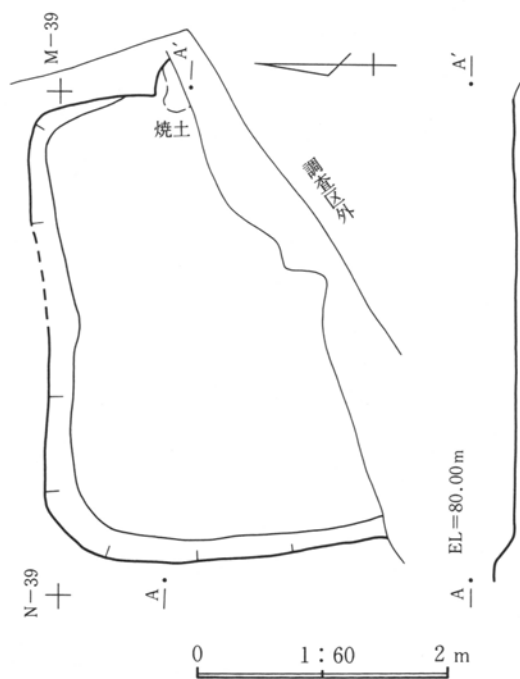
第38図 24号住居・出土遺物実測図



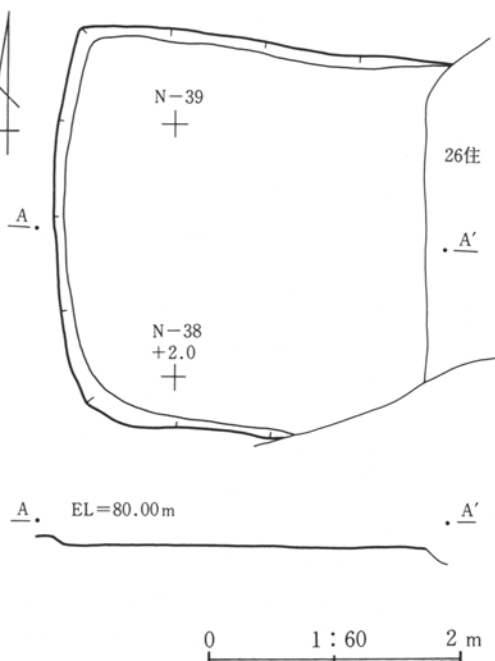
第39図 24号住居出土遺物実測図



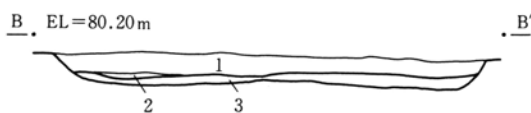
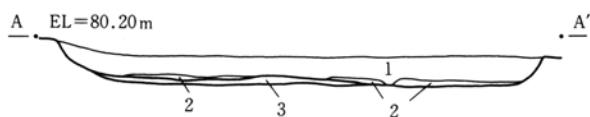
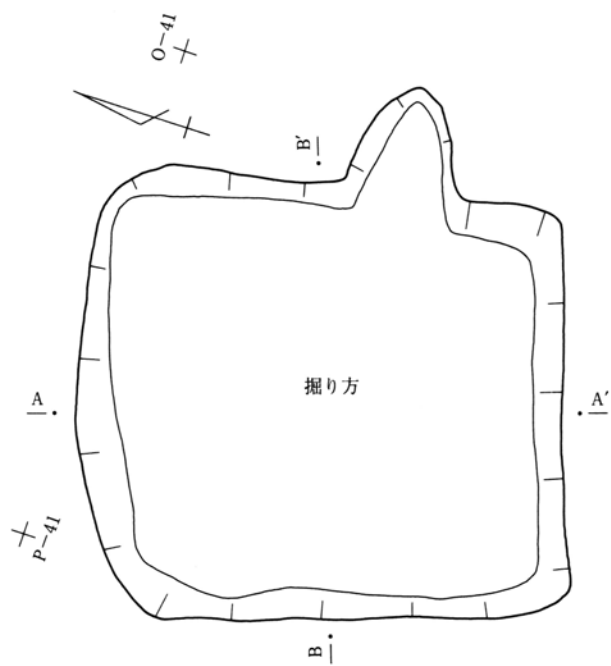
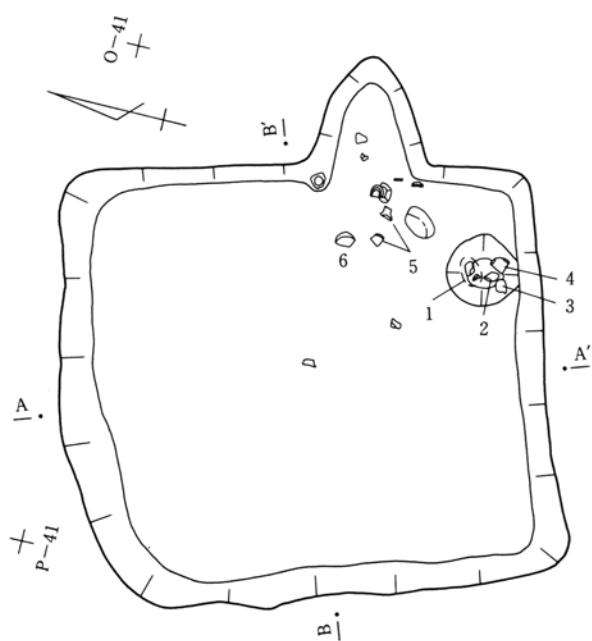
第40図 25号住居実測図



第41図 26号住居実測図

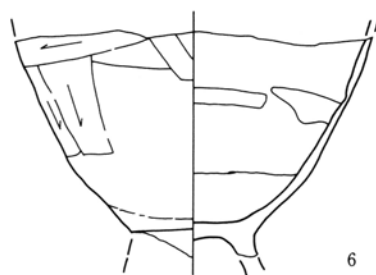
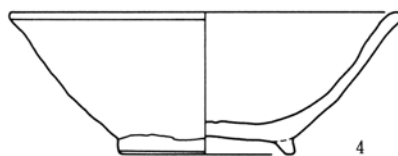
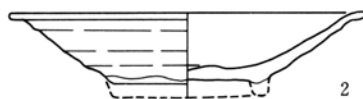


第42図 27号住居・出土遺物実測図



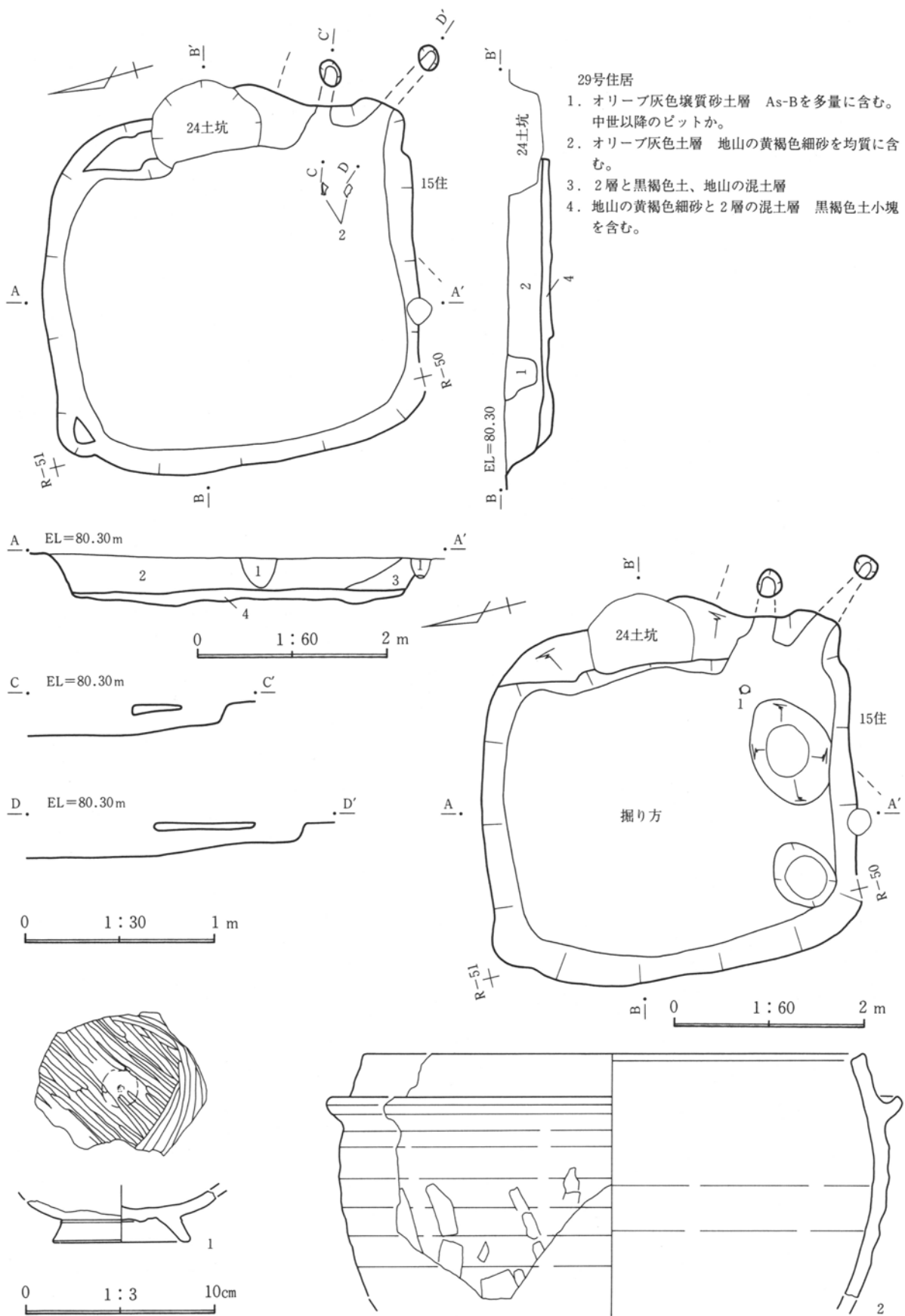
28号住居

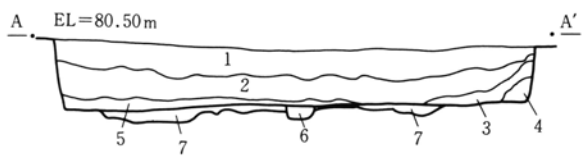
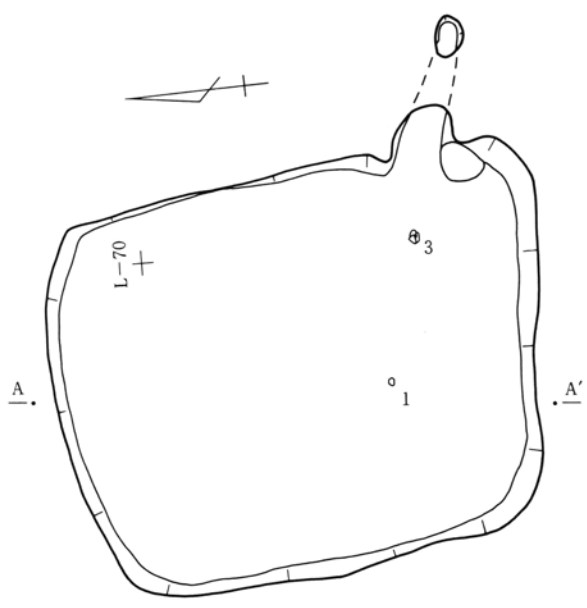
1. 暗褐色砂壤土層 円礫少量含む。
2. 暗褐色砂壤土層 焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色壤質砂土層 焼土粒を微量含む。



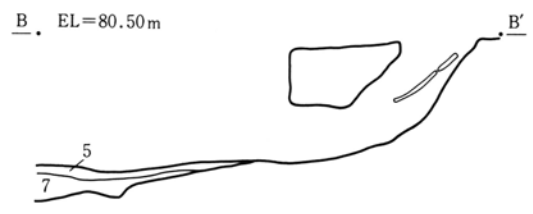
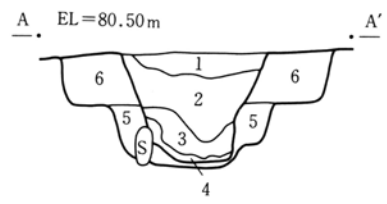
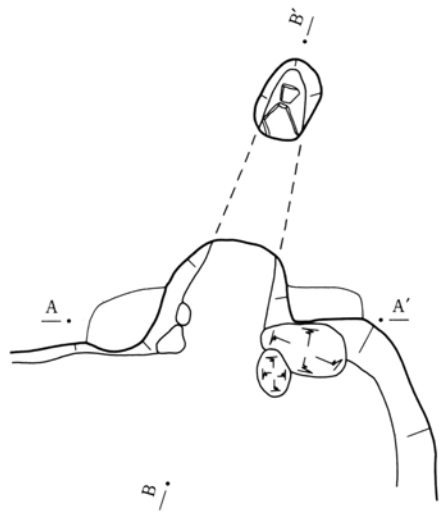
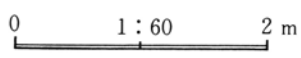
0 1:3 10cm

第43図 28号住居・出土遺物実測図

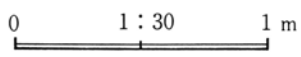




- 30号住居
1. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物を含む。
  2. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物やや多く含む。
  3. 暗褐色土層 褐色粘質土を多量に含む。
  4. 黒褐色土層 壁崩壊土。炭化物微量に含む。
  5. 暗褐色土層 焼土粒多量に含む。
  6. 暗褐色土層 黄褐色細砂小塊を含む。
  7. 暗褐色土層 黄褐色細砂と黒褐色土塊を含む。

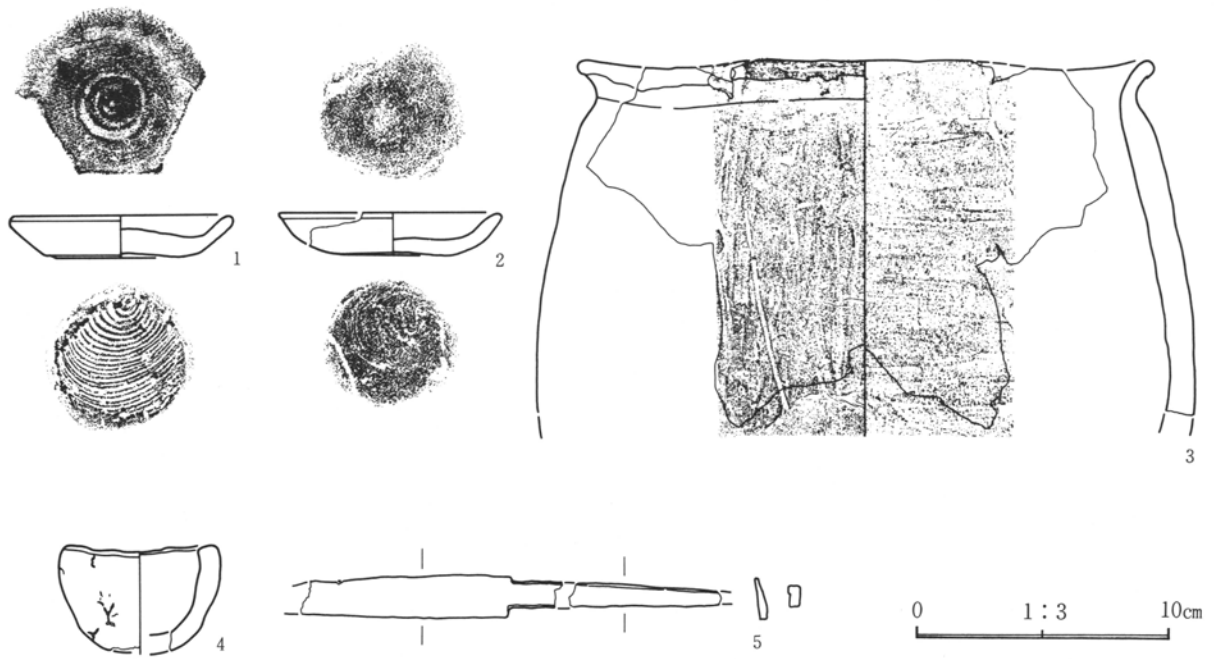


- 30号住居竈
1. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物を含む。
  2. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物をやや多く含む。
  3. 褐色土層 炭化物・焼土粒を少量含む。
  4. 焼土層 天井と壁の崩壊土。下面は灰層。
  5. 暗褐色土層 炭化物・焼土粒を多量に含む。
  6. 暗褐色土層 壁内面の焼土化した部分がなく、掘方でない可能性もある。
  7. 暗褐色土層 焼土粒を少量含む。黄褐色細砂小塊を含む。

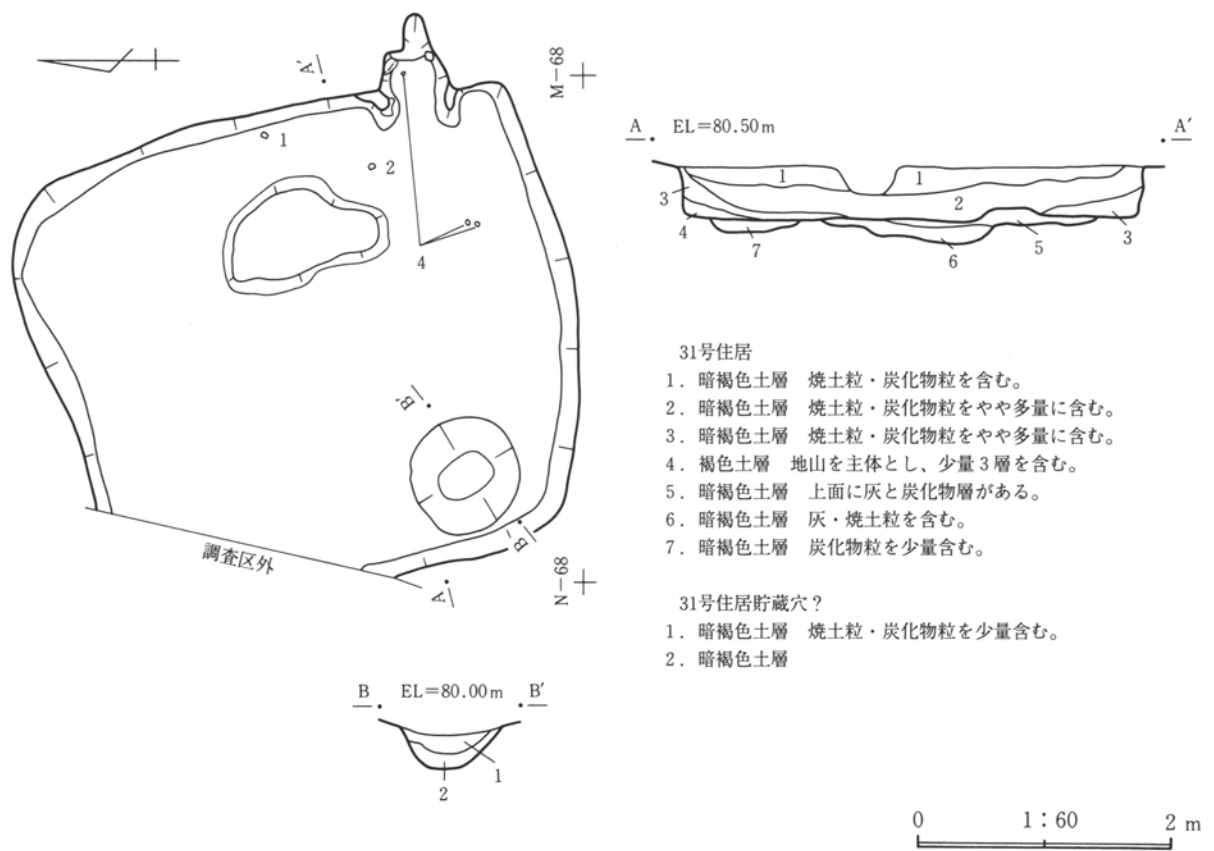


第45図 30号住居実測図





第46図 30号住居出土遺物実測図



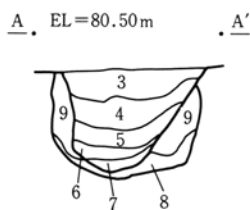
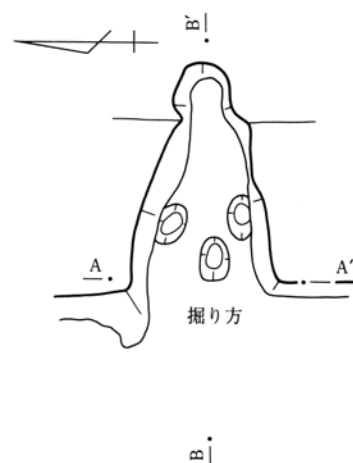
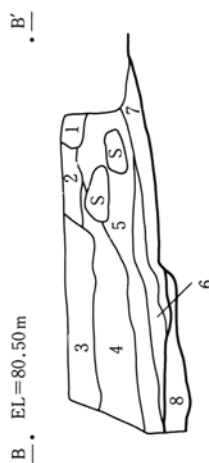
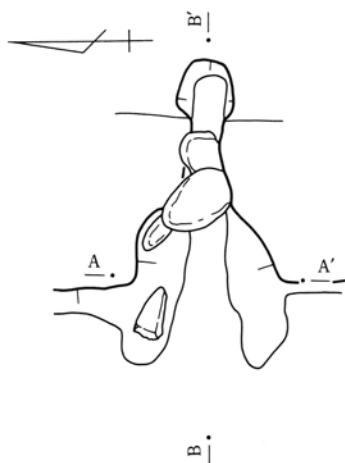
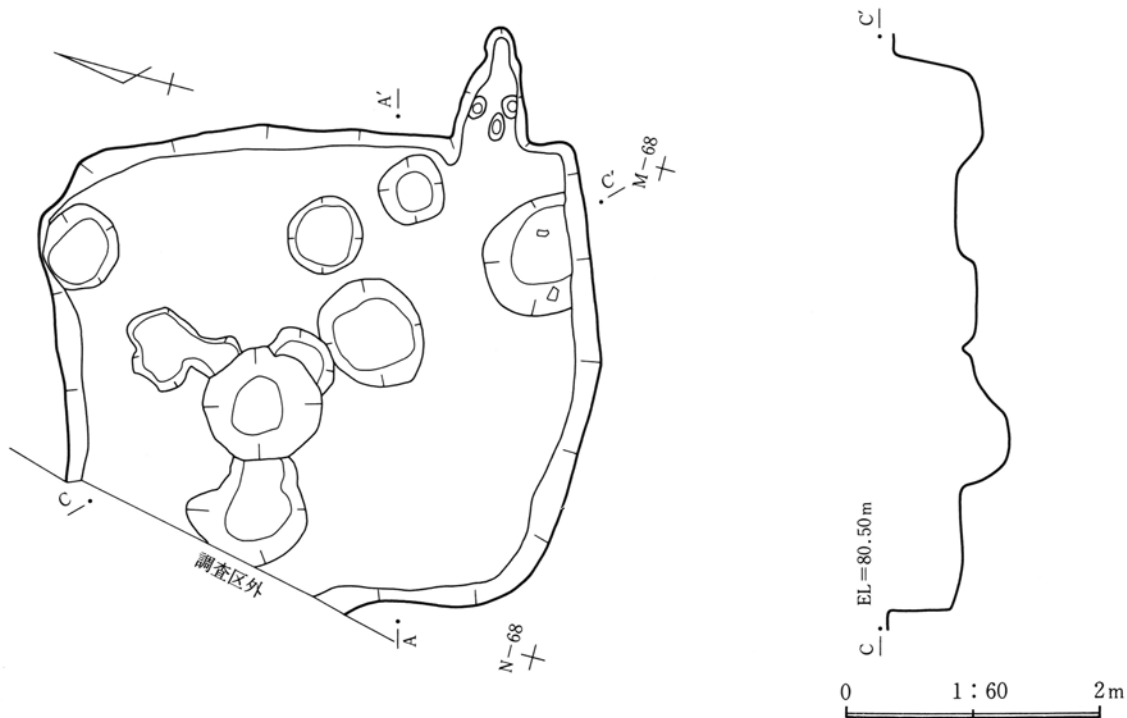
31号住居

1. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物粒をやや多量に含む。
3. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物粒をやや多量に含む。
4. 褐色土層 地山を主体とし、少量3層を含む。
5. 暗褐色土層 上面に灰と炭化物層がある。
6. 暗褐色土層 灰・焼土粒を含む。
7. 暗褐色土層 炭化物粒を少量含む。

31号住居貯蔵穴？

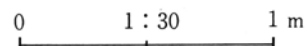
1. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 暗褐色土層

第47図 31号住居実測図

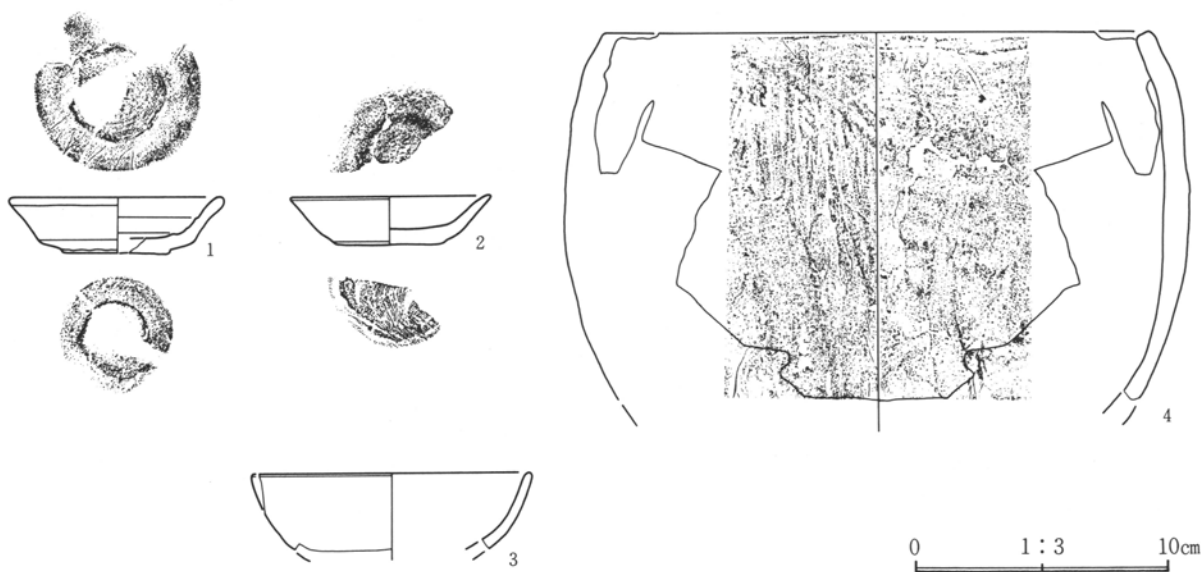


31号住居竈

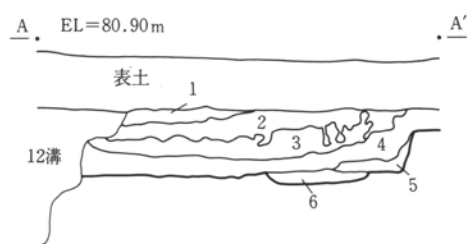
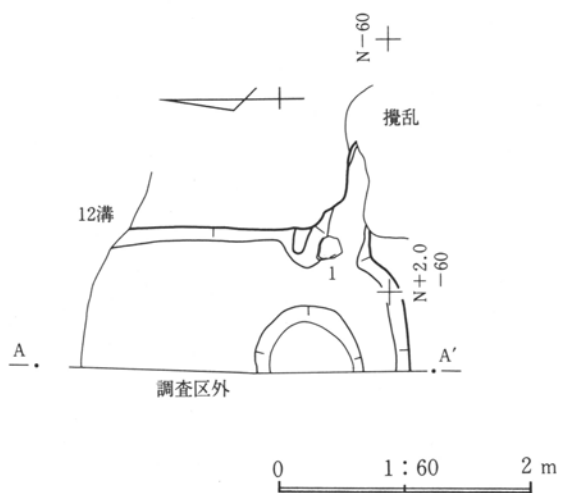
1. 焼土塊
2. 灰褐色土層 焼土粒多量に含む。
3. 灰黄褐色土層
4. 暗褐色土層 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
5. 灰黄褐色土層 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
6. 褐色土層 焼土・灰・炭化物を多量に含む。
7. 灰褐色土層 焼土と灰を少量含む。
8. 灰褐色土層 焼土粒を多量に含む。
9. 地山の焼土化した部分



第48図 31号住居掘り方・竈実測図

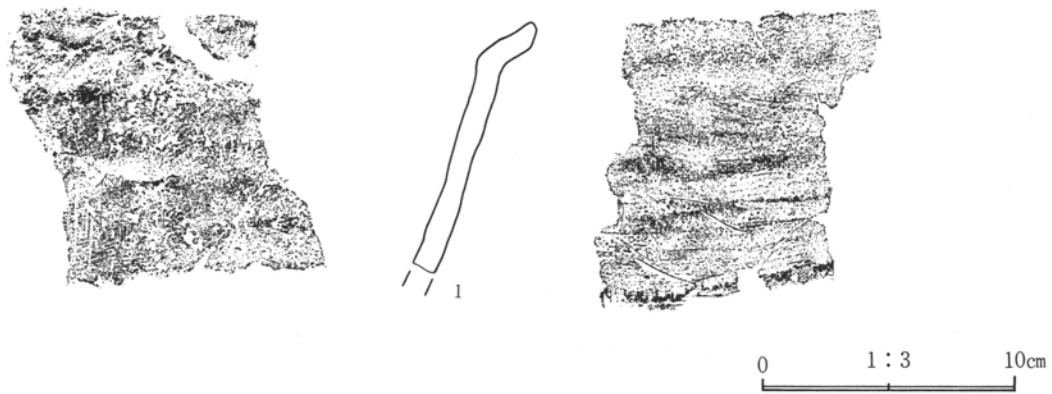


第49図 31号住居出土遺物実測図

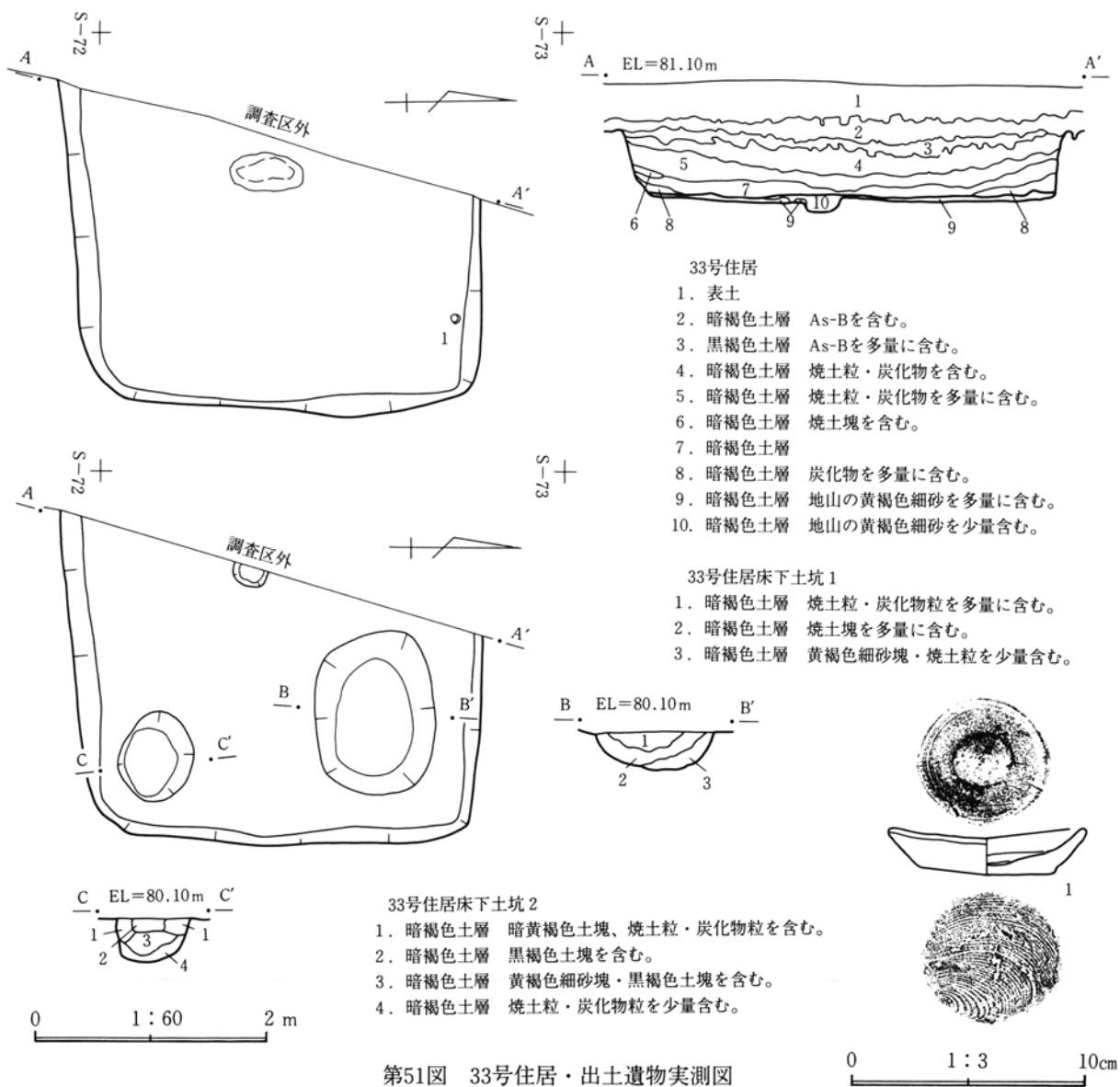


32号住居

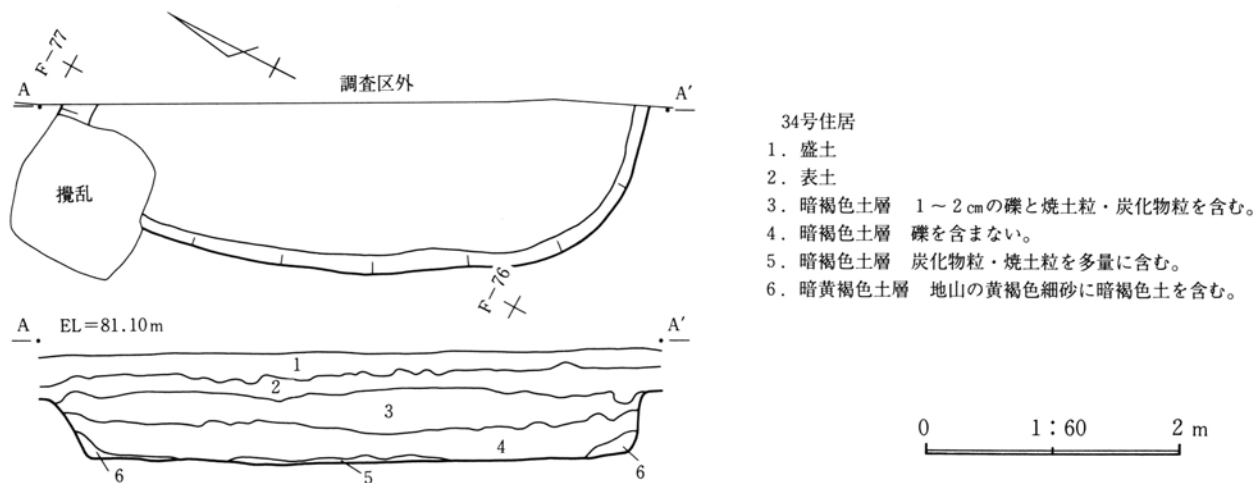
1. 暗褐色土層 表土に似るが、As-Bを含む。
2. 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。
3. 暗褐色土層 炭化物粒・焼土粒を少量含む。
4. 暗褐色土層 炭化物粒・焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土層 地山の黒褐色土と黄褐色細砂の混土層。
6. 黄褐色土層 黄褐色細砂を主体とし、少量黒褐色土を含む。



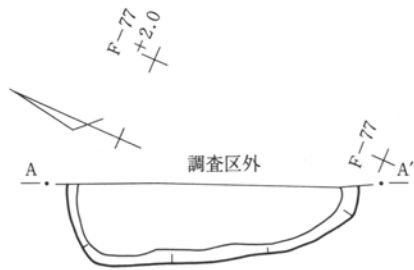
第50図 32号住居・出土遺物実測図



第51図 33号住居・出土遺物実測図

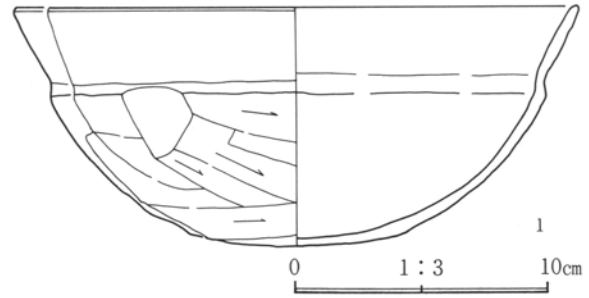
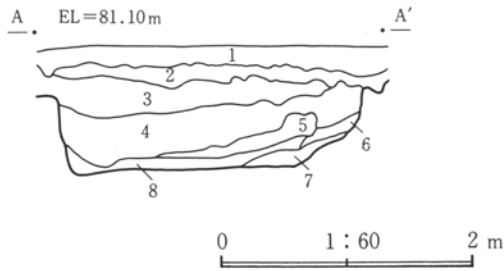


第52図 34号住居実測図

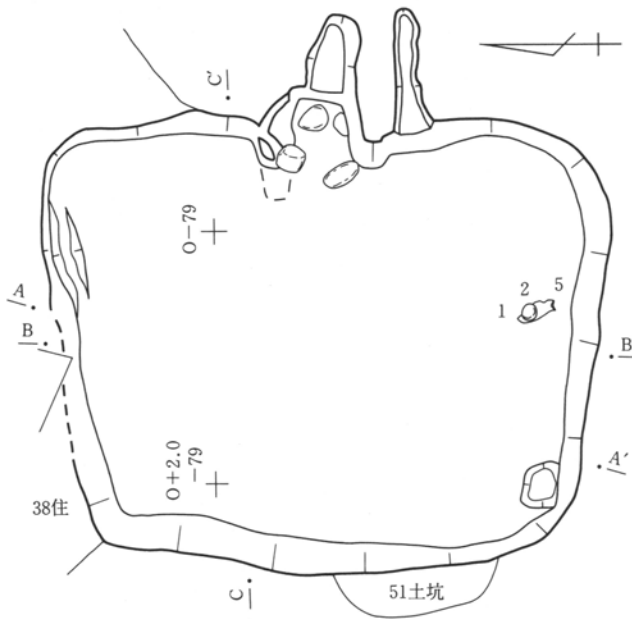


35号住居

1. 盛土
2. 表土
3. 暗褐色土層
4. 暗褐色土層 礫を少量含む。
5. 暗褐色土層 褐色粘質土を含む。
6. 暗褐色土層 褐色粘質土を含む。焼土粒を多量に含む。
7. 暗褐色土層 褐色粘質土、炭化物を含む。焼土粒を多量に含む。
8. 暗褐色土層 黄褐色細砂を少量含む。炭化物粒・焼土粒を含む。

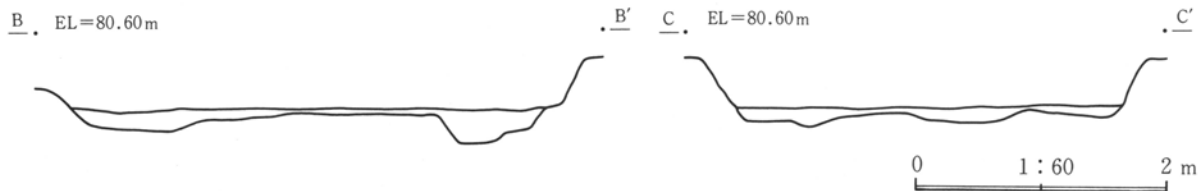
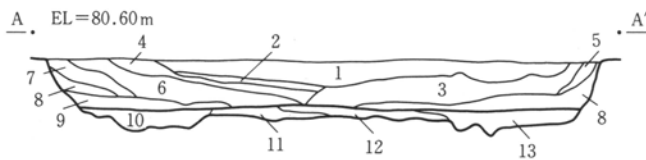


第53図 35号住居・出土遺物実測図

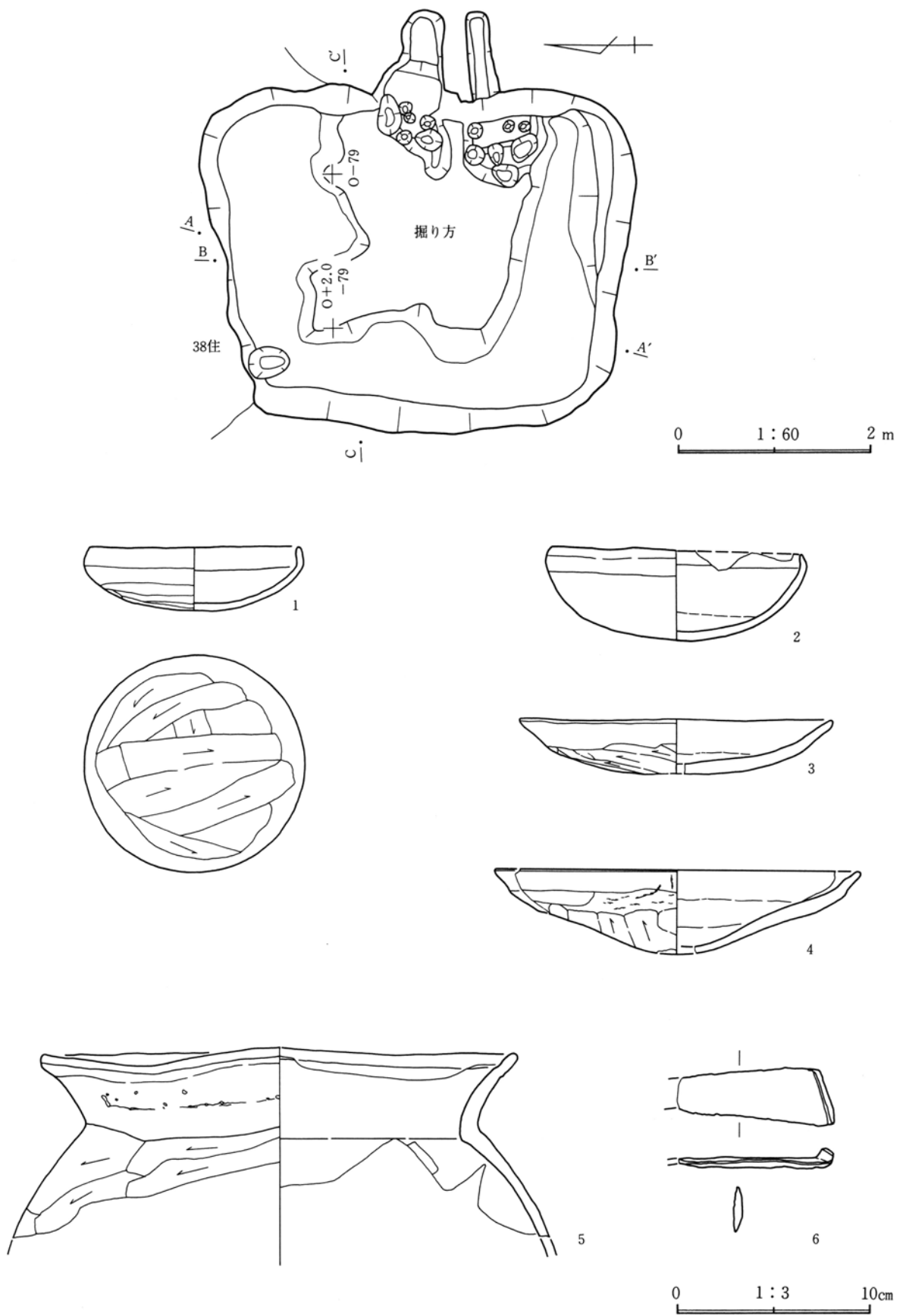


36号住居

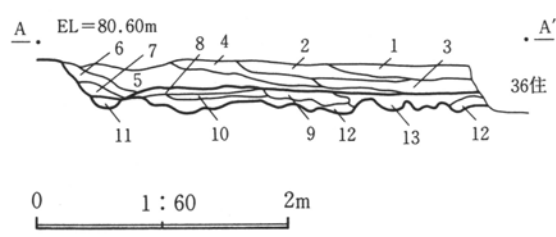
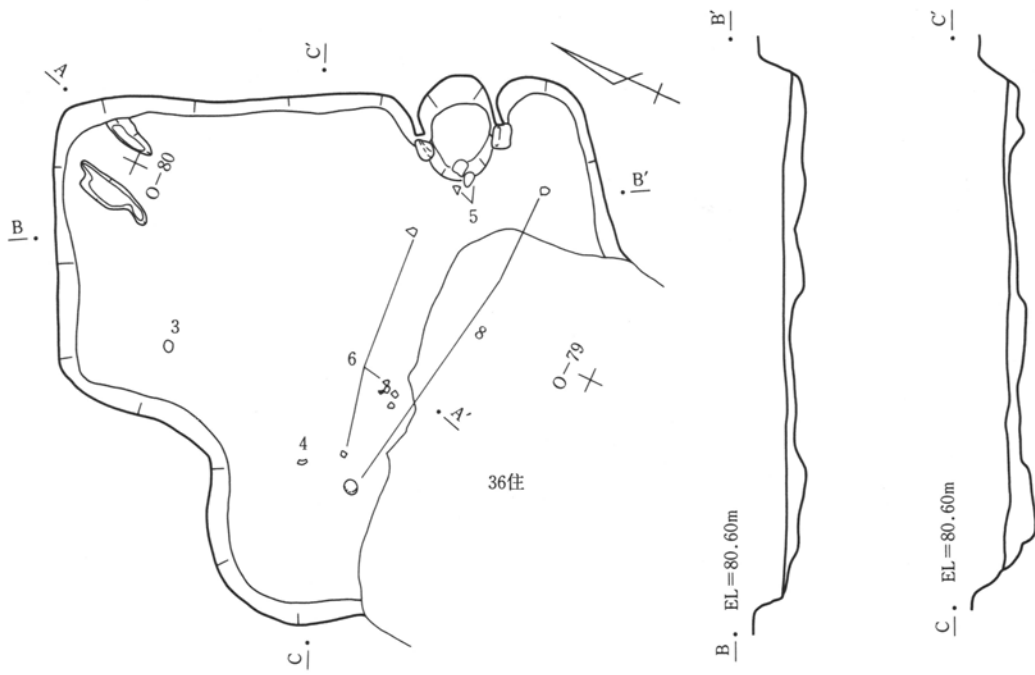
1. 暗褐色土層 黄褐色土を含む。
2. 暗褐色土層 灰白色土粒・黒褐色土粒を含む。
3. 暗褐色土層 灰白色土粒を少量含む。焼土粒を微量含む。
4. 暗褐色土層 黄褐色土粒を含む。
5. 暗褐色土層 黄褐色土と灰白色土を均質に含む。
6. 暗褐色土層 2層に黒色灰を含む。
7. 暗褐色土層 5層に似るが、黄褐色土と灰白色土を不均質に含む。
8. 黒褐色土層 地山の黒褐色土の二次堆積。黄褐色土を少量含む。
9. 黒褐色土層 黄褐色土を含む。焼土粒を少量含む。
10. 鈍い黄褐色土層 黒褐色土を少量含む。
11. 鈍い褐色土層 黒褐色土塊を含む。
12. 暗褐色土層 灰白色土を少量含む。
13. 黄褐色土層 地山を主体とし、少量12層を含む。



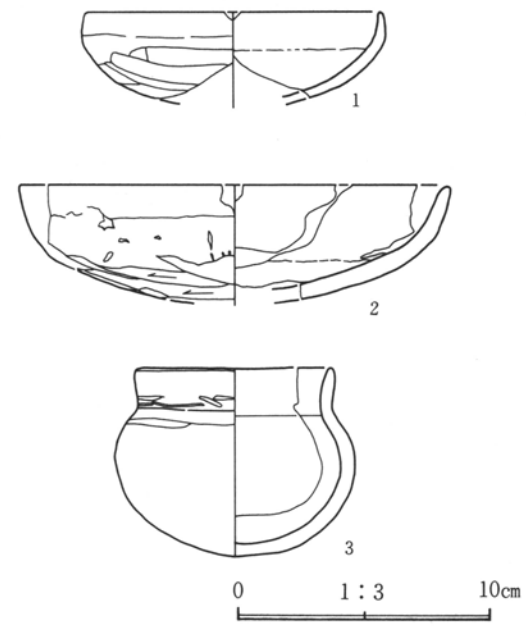
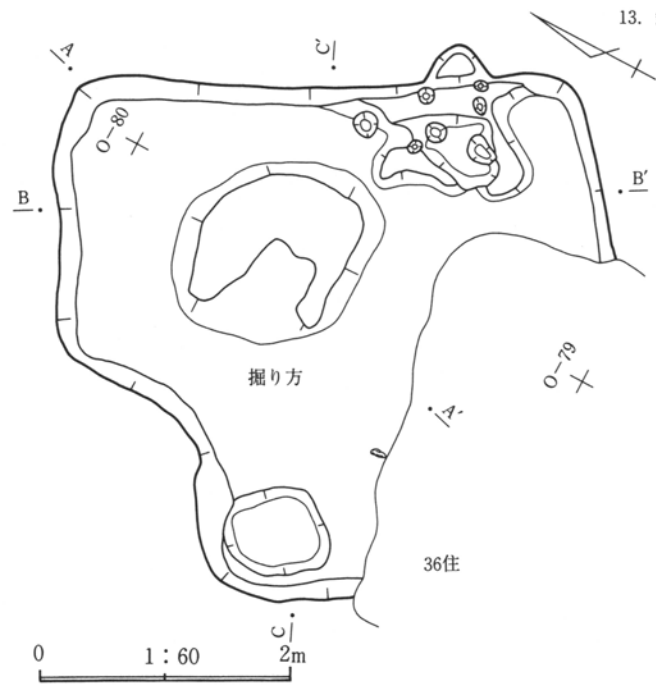
第54図 36号住居実測図



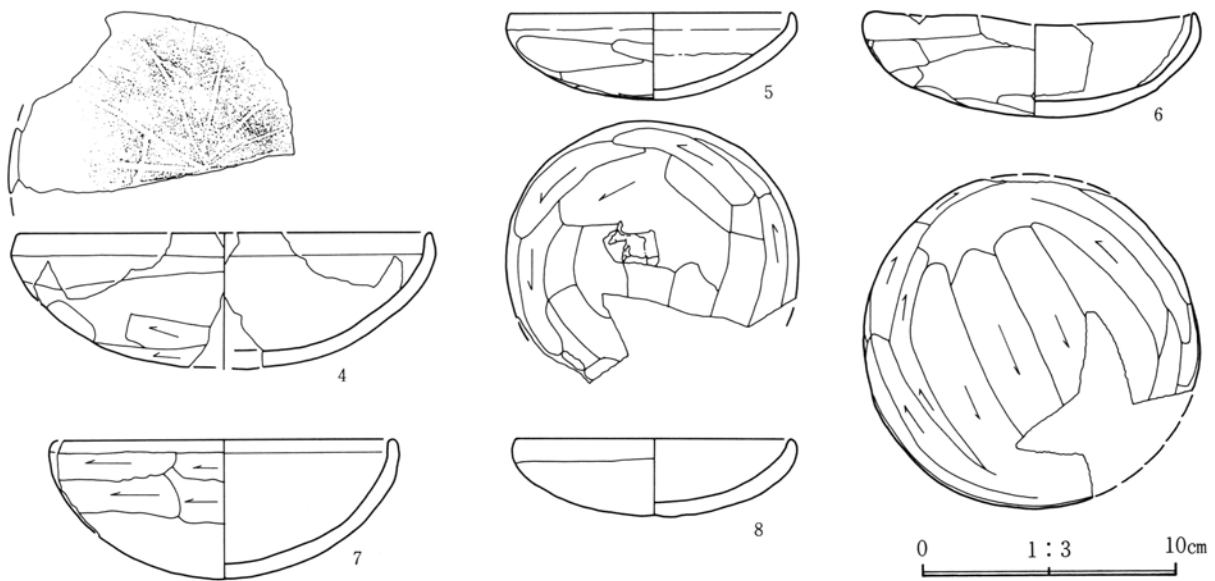
第55図 36号住居掘り方・出土遺物実測図



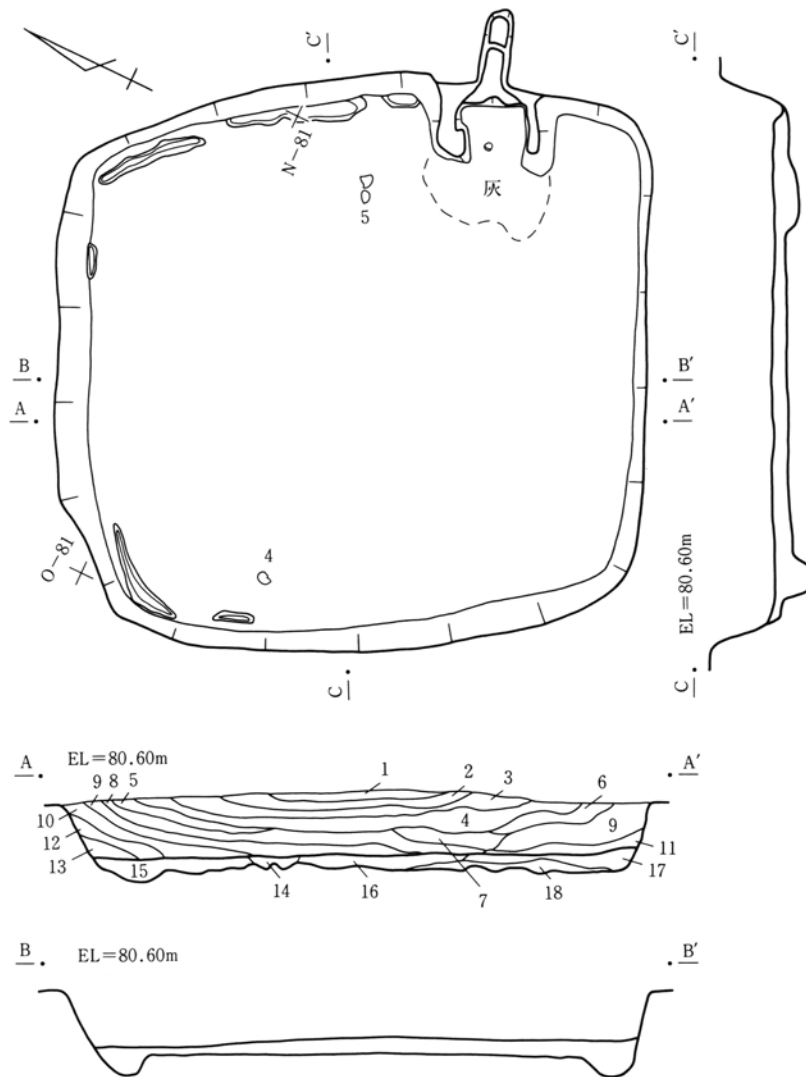
- 37・38号住居
1. 黒褐色土層 焼土粒を含む。
  2. 暗褐色土層 黄褐色土を含む。炭化物粒を微量含む。
  3. 暗褐色土層 黄褐色土・焼土粒を含む。薄い黒色灰が互層をなす。
  4. 暗褐色土層 3層と同様であるが、色調がやや明るい。
  5. 暗褐色土層 焼土粒を少量含む。
  6. 黒褐色土層 黄褐色土を含む。
  7. 黒褐色土層 黄褐色土を少量含む。
  8. 黒褐色土層 黒色灰を多量に含む。
  9. 黒褐色土層 地山の黄褐色細砂を含む。
  10. 鈍い褐色土層 黒褐色土を含む。
  11. 暗褐色土層 黒褐色土を含む。
  12. 鈍い黄褐色土層 黒褐色土を均質に含む。
  13. 鈍い黄褐色土層 黄褐色土と黒褐色土の混土層。



第56図 37・38号住居・37号住居出土遺物実測図



第57図 38号住居出土遺物実測図

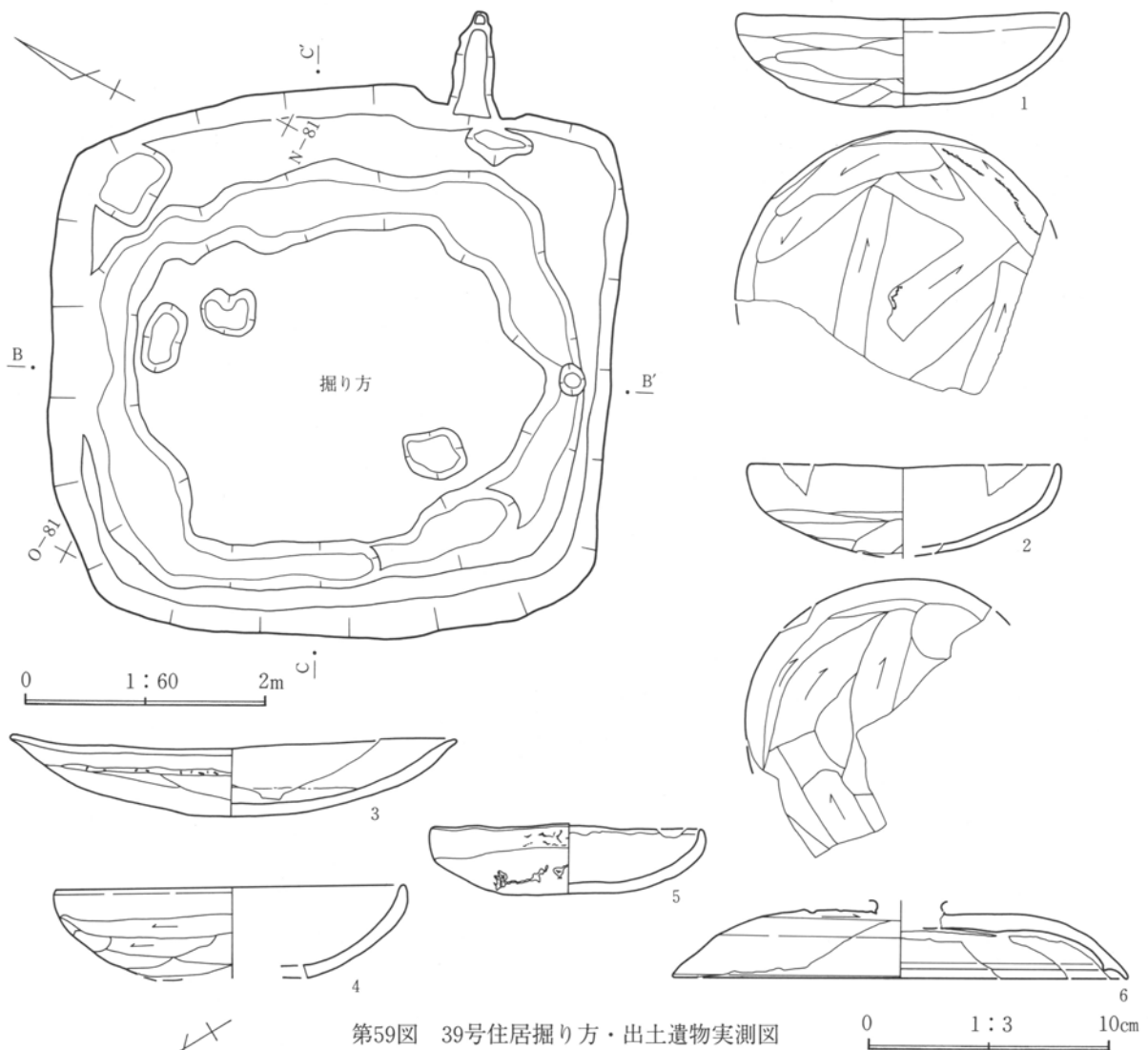


39号住居

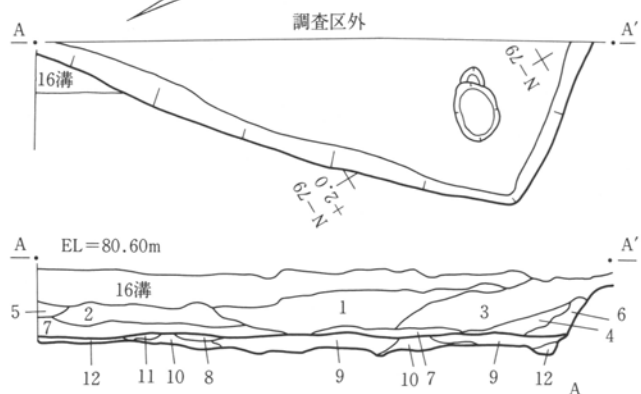
1. 暗褐色土層
2. 黒褐色土層 炭化物粒・焼土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土層 地山の黄褐色細砂を含む。灰白色土粒を微量含む。
4. 暗褐色土層 地山の黄褐色土粒・黒褐色土粒を含む。
5. 暗褐色土層 黒色土を含む。
6. 暗褐色土層 地山の黄褐色土粒を多く含む。
7. 暗褐色土層 黒色土粒・黒色土塊、黄褐色土粒・黄褐色土塊を含む。
8. 暗褐色土層 地山の黄褐色土塊を含む。黒色土粒を微量含む。
9. 暗褐色土層 地山の黄褐色土中塊・黒色土中塊を含む。
10. 暗褐色土層 8層と同様であるが、色調がやや明るい。
11. 暗褐色土層 10層に灰白色土を少量含む。
12. 黒褐色土層 地山の黒褐色土、炭化物粒を少量含む。
13. 黄褐色土層 地山の黄褐色細砂の崩壊土。
14. 黒褐色土層 地山の黄褐色細砂に黒色土粒を縞状に含む。
15. 黒褐色土層 地山の黄褐色土を不均質に含む。
16. 明褐色土層 黒褐色土粒を含む。粗砂塊を含む。
17. 15層に比して黄褐色土を多く含む。
18. 黄褐色土層 地山の黄褐色細砂を主体とし、黒褐色土粒を含む。

第58図 39号住居実測図





第59図 39号住居掘り方・出土遺物実測図

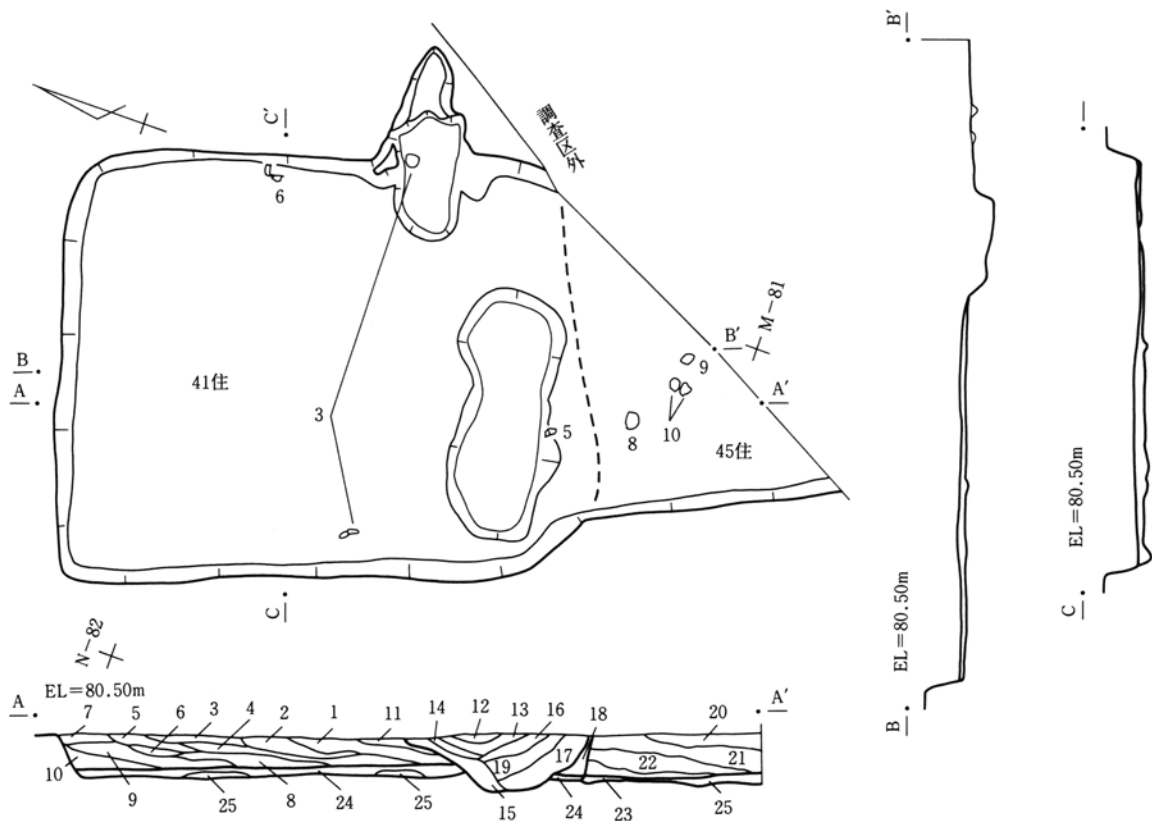


40号住居

1. 黒褐色土層 灰色土粒を含む。
2. 暗褐色土層 1層と黄褐色細砂との混土層。
3. 黒褐色土層 1層に地山の黄褐色細砂を含む。
4. 黒褐色土層 1層に比して色調に黒味が強い。
5. 暗褐色土層 1層塊と2層塊の混土層。
6. 褐色土層 黄褐色土粒と黄褐色土塊を含む。
7. 褐色土層 黄褐色土を均質に含む。

8. 鈍い黄褐色土層 地山の黄褐色細砂に黒褐色土を含む。
9. 暗褐色土層 地山の黄褐色土に黒褐色土を多量に含む。
10. 鈍い黄褐色土層 地山の黄褐色土に黒褐色土を少量含む。
11. 褐色土層 10層に比して色調が暗い。
12. 暗褐色土層 地山の黄褐色細砂を主体とし、黒褐色土を少量含む。

第60図 40号住居実測図



41・45号住居

1. 暗褐色土層 灰白色土と黄褐色土を含む。
2. 暗褐色土層 灰白色土と黄褐色土をやや多く含む。
3. 暗褐色土層 黒褐色土と灰白色土、黄褐色土の混土層
4. 暗褐色土層 灰白色土塊を多量に含む。
5. 褐灰色土層 灰白色土を主体とし、黄褐色土を含む。
6. 暗褐色土層 灰白色土を含む。
7. 4層に比して灰白色土が少ない。
8. 灰白色土層 黒褐色土粒を少量含む。

9. 褐灰色土層 黒褐色土と暗褐色土を含む。

10. 6層に黄褐色土を含む。

11. 暗褐色土層 灰白色土を少量含む。

12. 2層に比して色調がやや明るい。

13. 鈍い褐色土層 黄褐色土を多量に含む。

14. 灰白色土層 黄褐色土粒を少量含む。

15. 暗褐色土層 黄褐色土を塊状に含む。

16. 暗褐色土層 黄褐色土を少量含む。

17. 暗褐色土層 黄褐色土を微量含む。

18. 暗褐色土層

19. 暗褐色土層 黄褐色土を含む。灰白色土を少量含む。

20. 暗褐色土層 黄褐色土粒を微量含む。

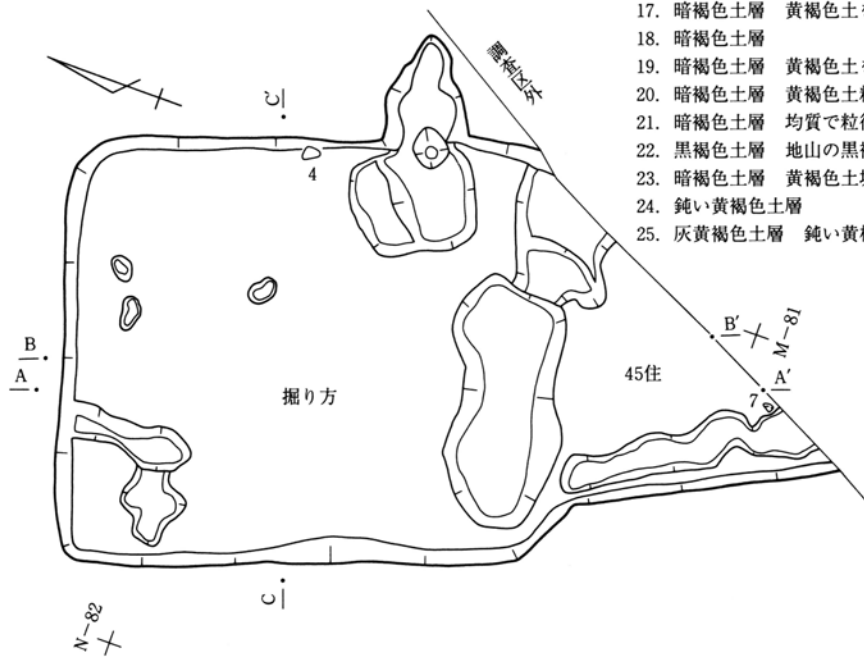
21. 暗褐色土層 均質で粒径小さい。

22. 黒褐色土層 地山の黒褐色土を主体とし、黄褐色土を少量含む。

23. 暗褐色土層 黄褐色土塊を多量に含む。

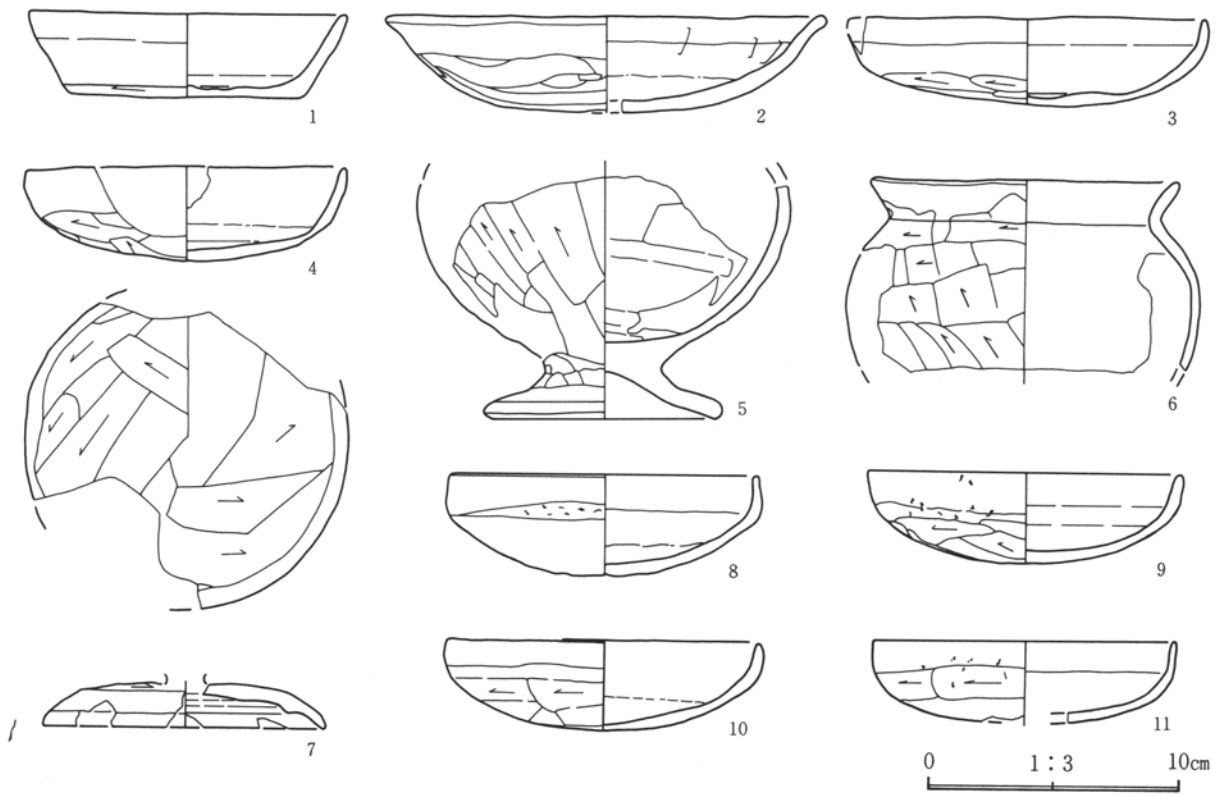
24. 鈍い黄褐色土層

25. 灰黄褐色土層 鈍い黄褐色土を均質に含む。

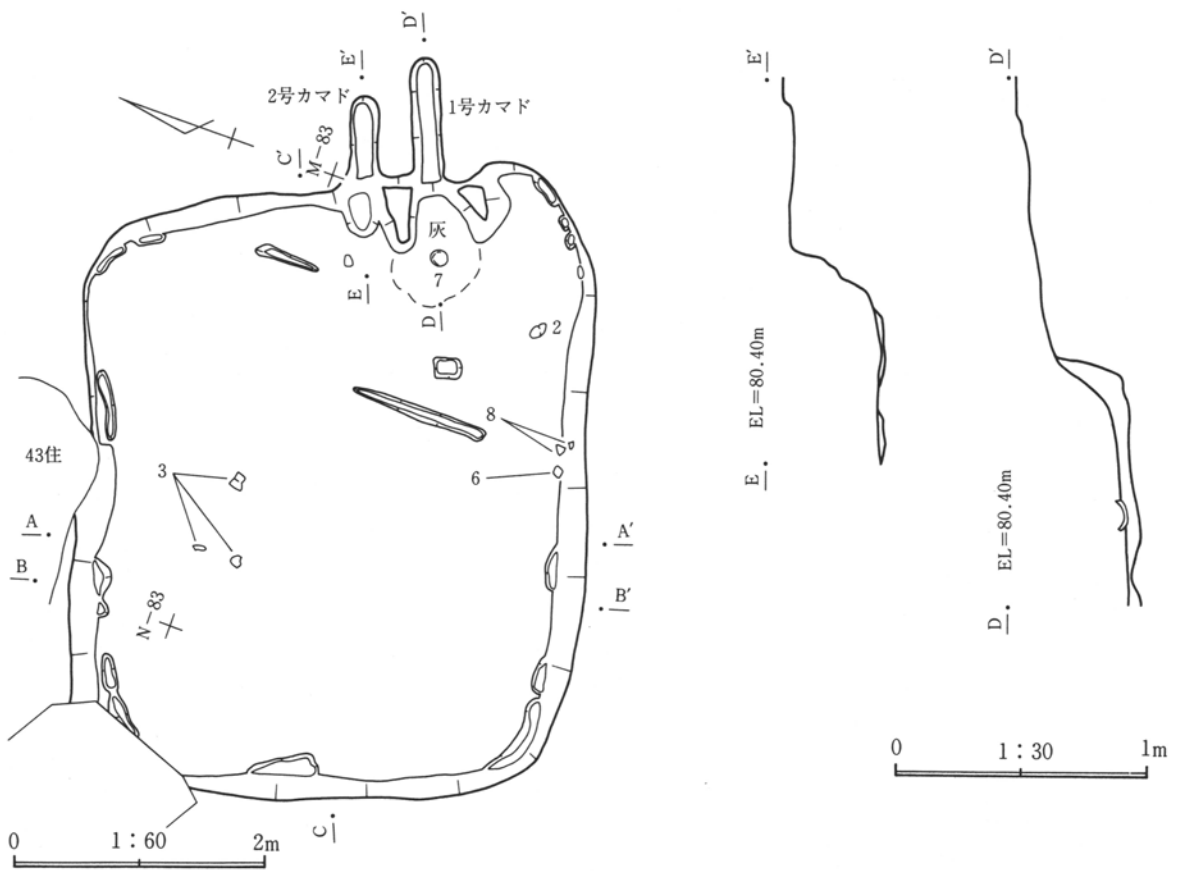


0 1 : 60 2m

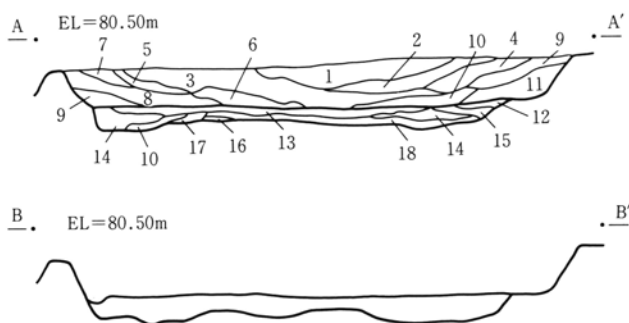
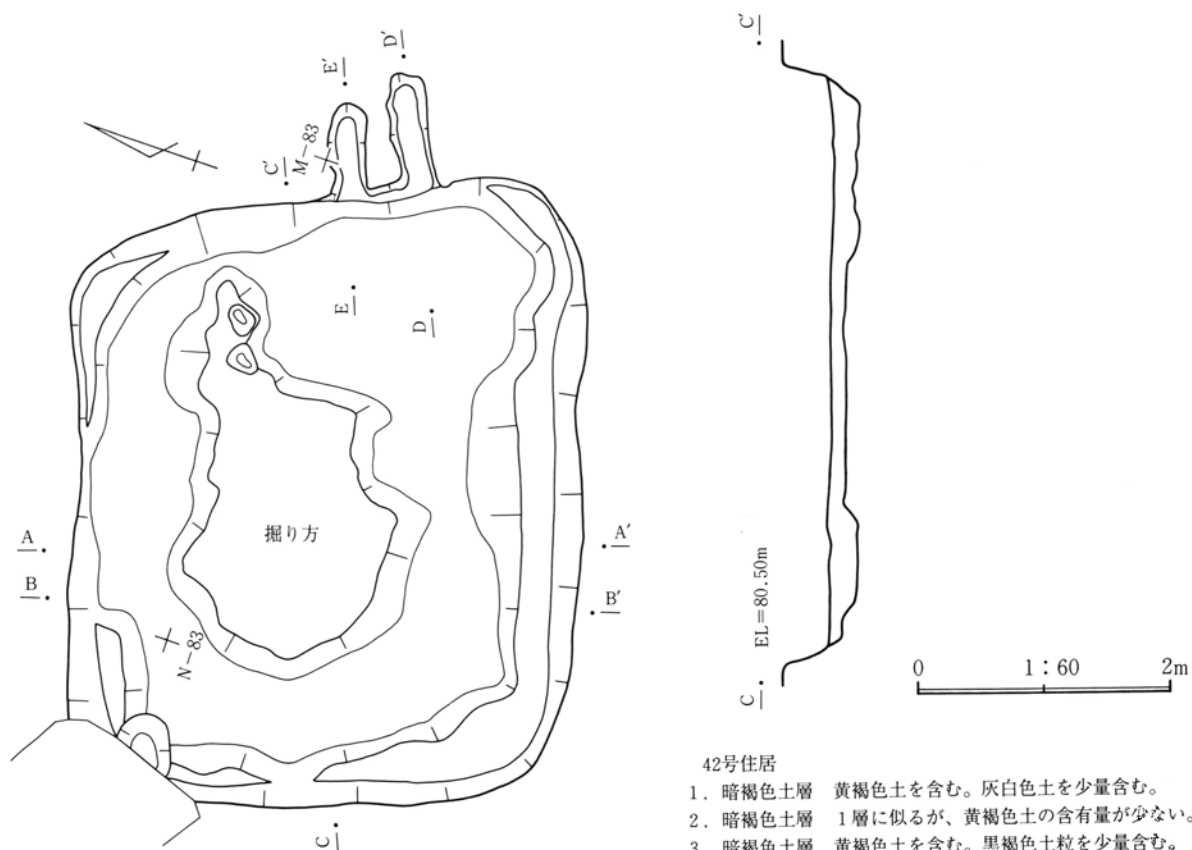
第61図 41・45号住居実測図



第62図 41・45号住居出土遺物実測図

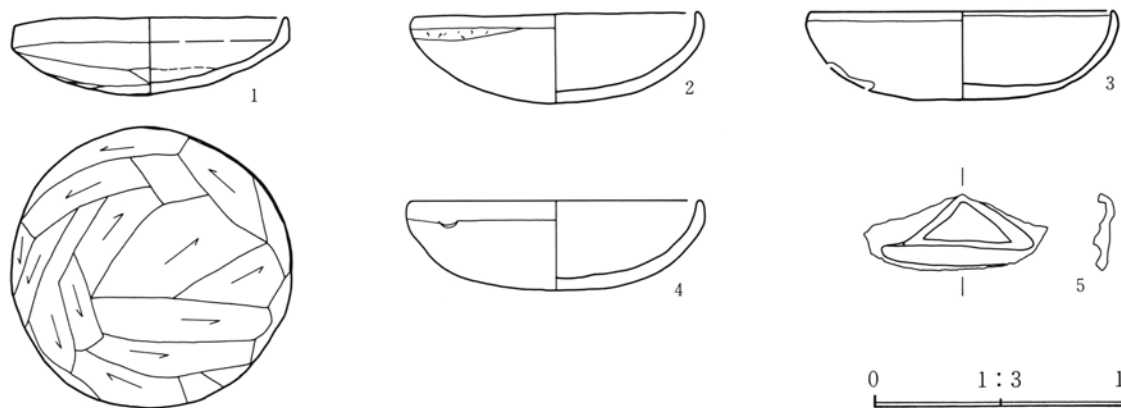


第63図 42号住居実測図

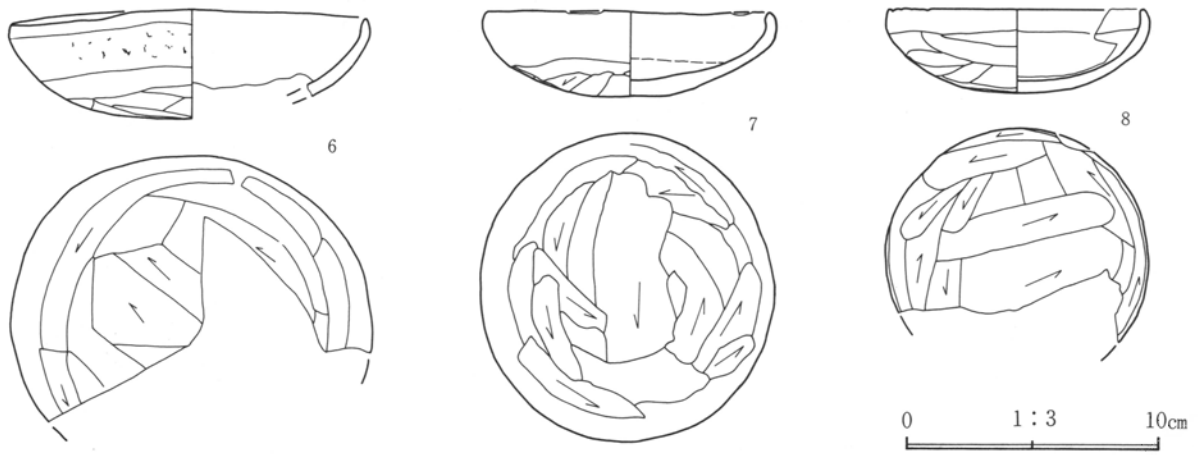


42号住居

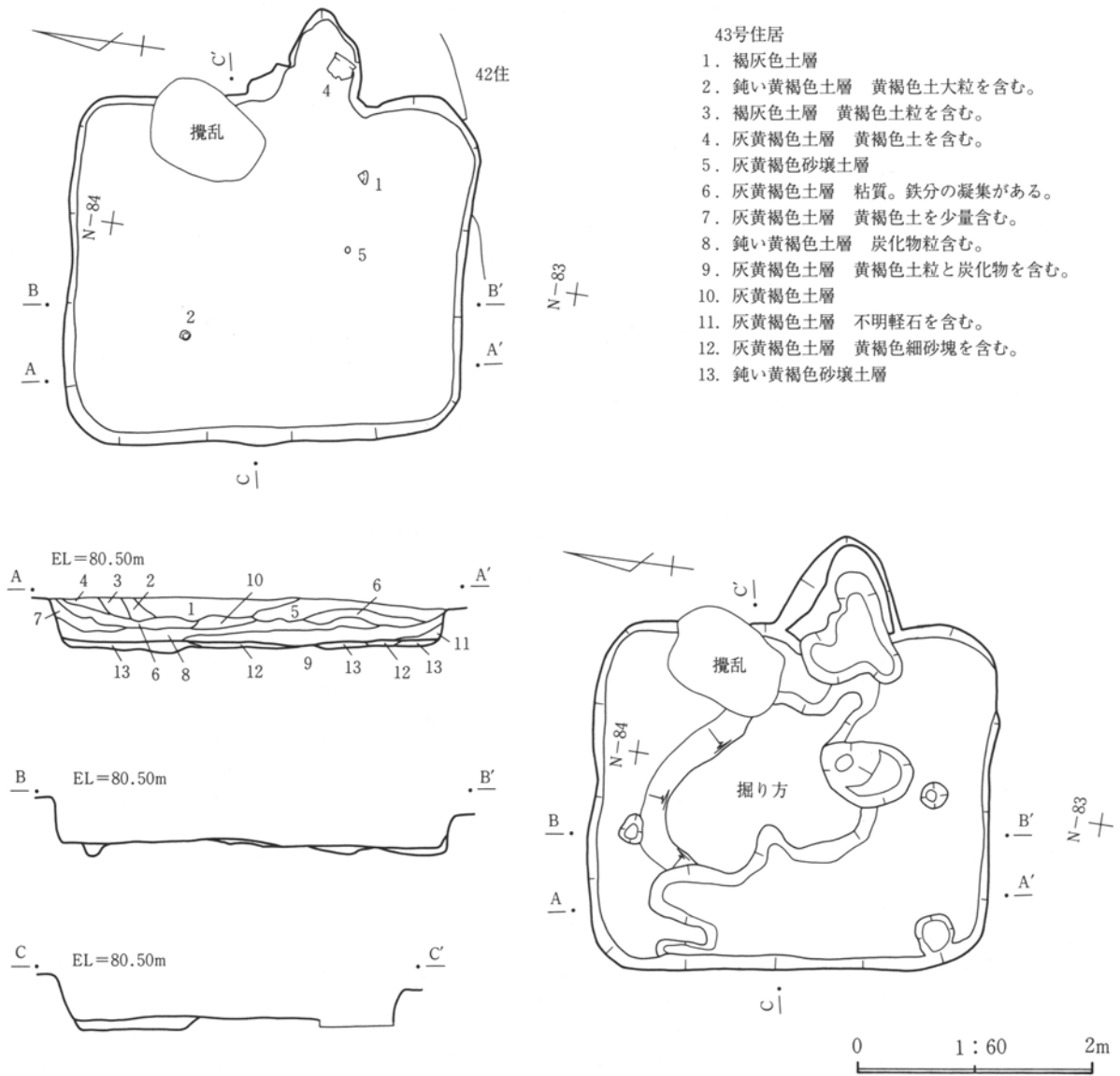
1. 暗褐色土層 黄褐色土を含む。灰白色土を少量含む。
2. 暗褐色土層 1層に似るが、黄褐色土の含有量が少ない。
3. 暗褐色土層 黄褐色土を含む。黒褐色土粒を少量含む。
4. 暗褐色土層 黄褐色土を少量含む。
5. 暗褐色土層 黄褐色土を微量含む。
6. 暗褐色土層 黄褐色土塊を多量に含む。
7. 暗褐色土層 黄褐色土を含まない。
8. 暗褐色土層 黄褐色土細粒を含む。
9. 黒褐色土層 黄褐色土を少量含む。
10. 暗褐色土層 黄褐色土細粒・黒褐色土細粒を含む。
11. 黒褐色土層 黒褐色土と黄褐色土の混土層
12. 黒褐色土層 鈍い黄褐色土粒を含む。
13. 鈍い黄褐色土層 黒褐色土塊を含む。
14. 鈍い黄褐色土層 他の土を含まない均質な堆積土。
15. 黒褐色土層 鈍い黄褐色土塊を含む。
16. 鈍い黄褐色土層
17. 黒褐色土層 鈍い黄褐色土塊を少量含む。
18. 鈍い黄褐色土層 黒褐色砂質土を不均質に含む。



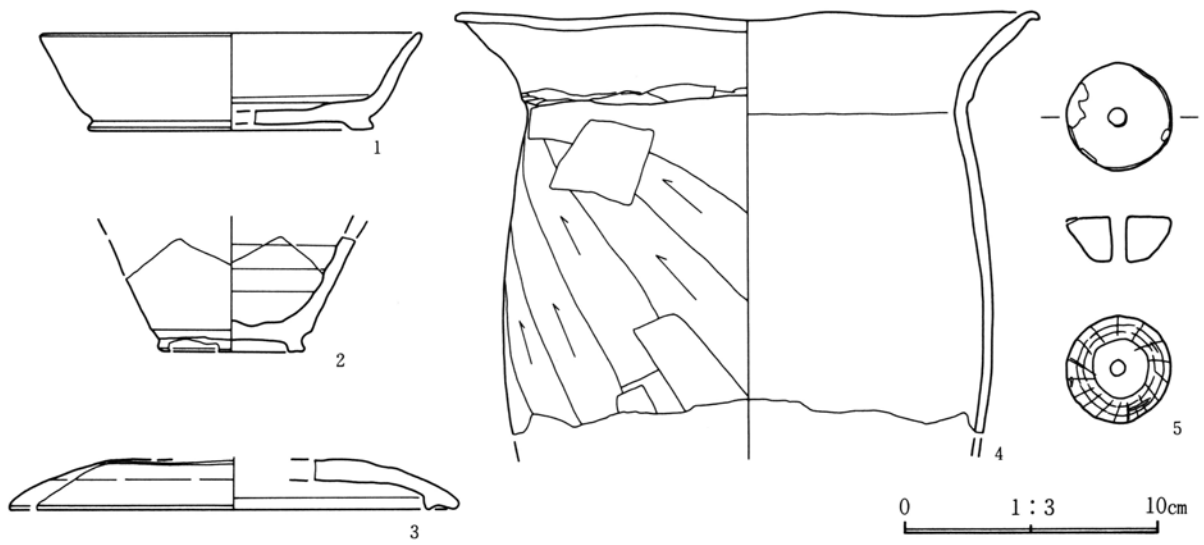
第64図 42号住居掘り方・出土遺物実測図



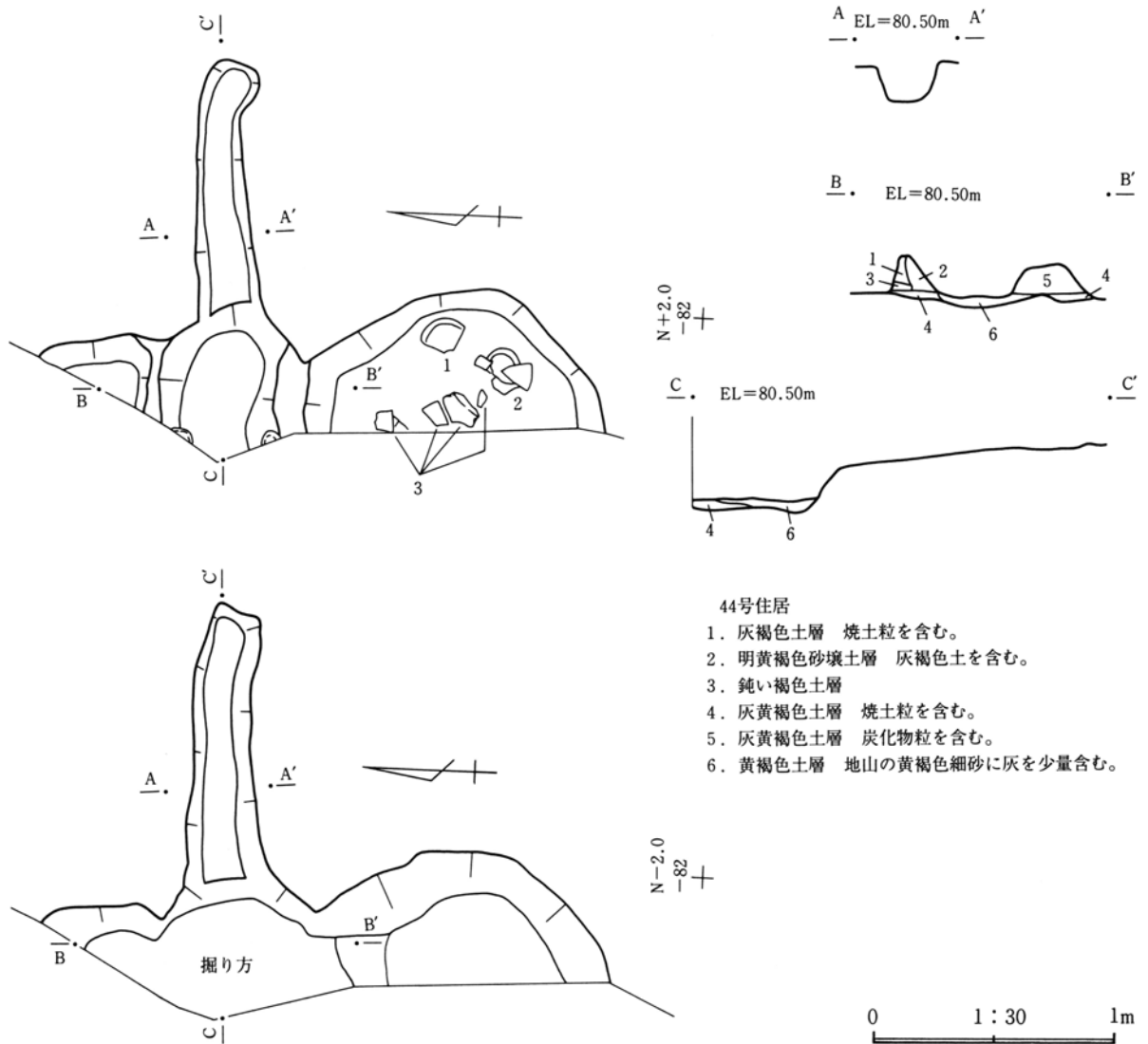
第65図 42号住居出土遺物実測図



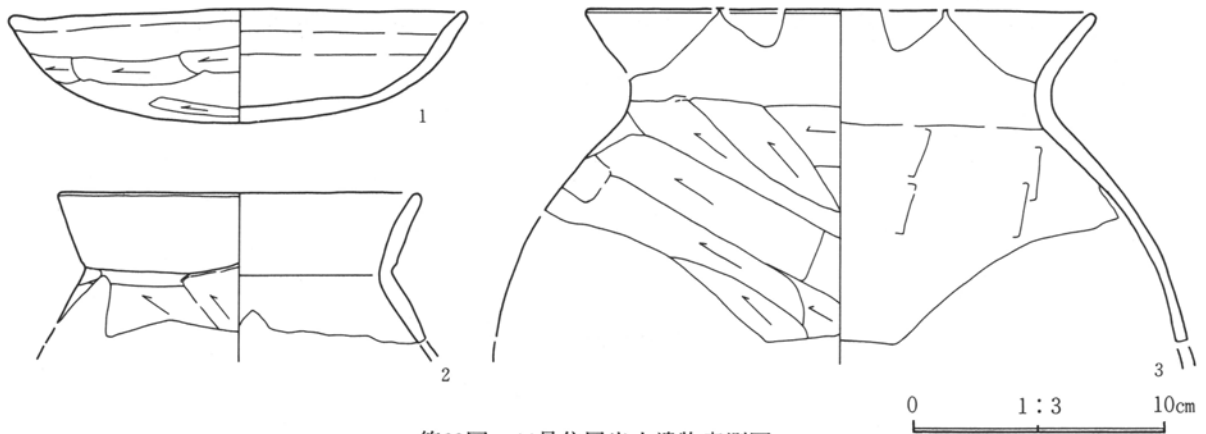
第66図 43号住居実測図



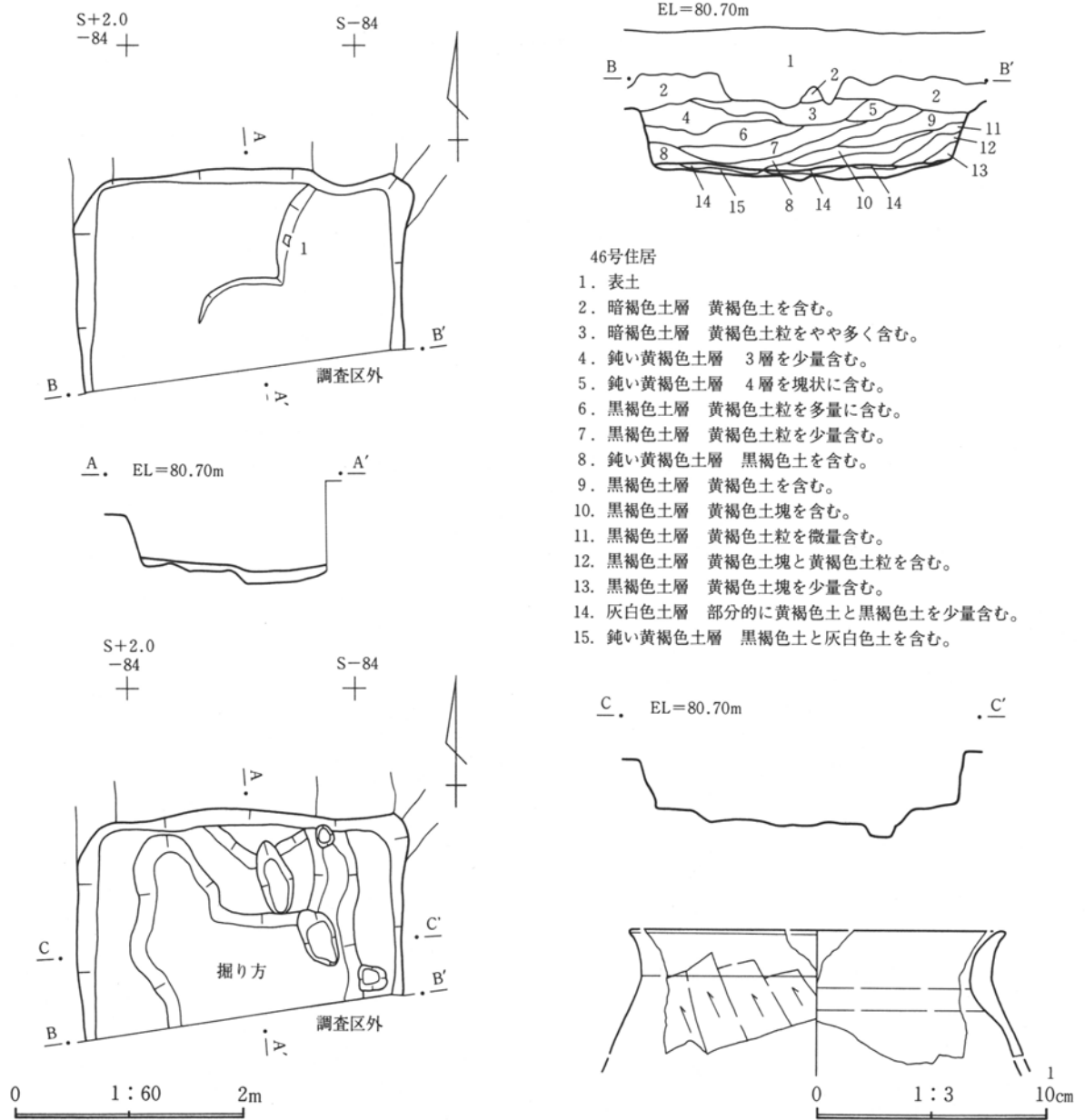
第67図 43号住居出土遺物実測図



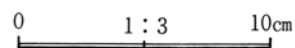
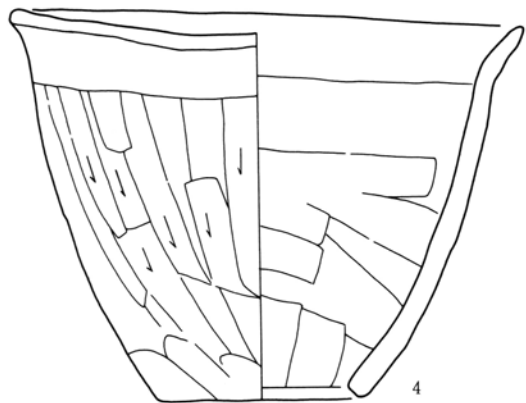
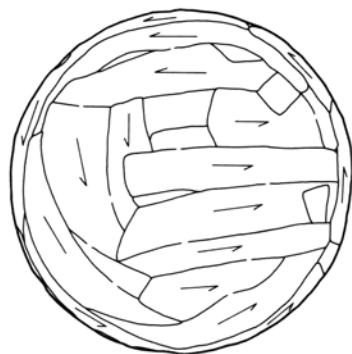
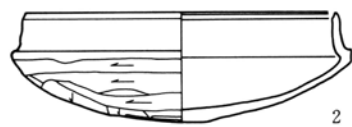
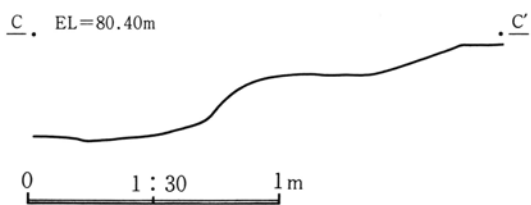
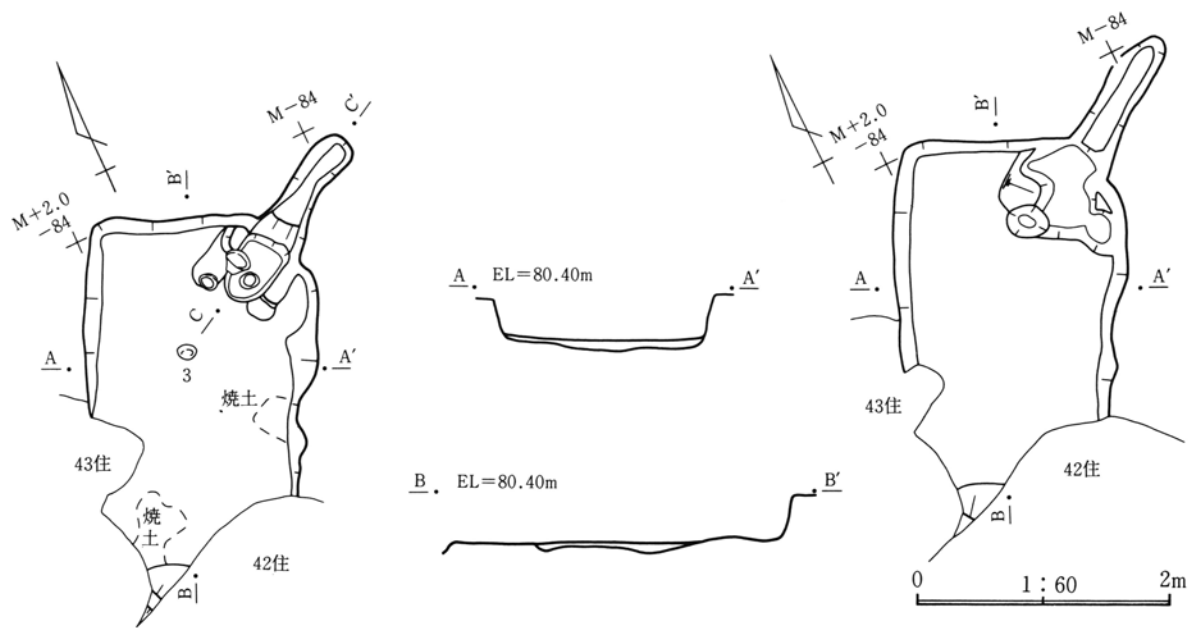
第68図 44号住居実測図



第69図 44号住居出土遺物実測図

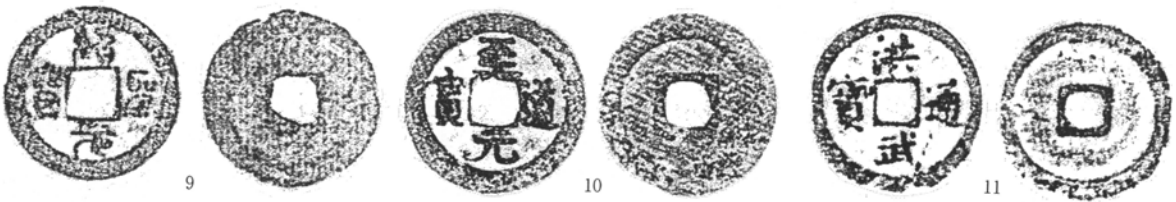
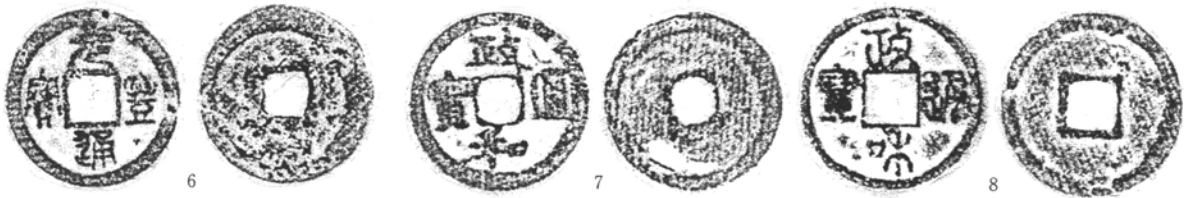
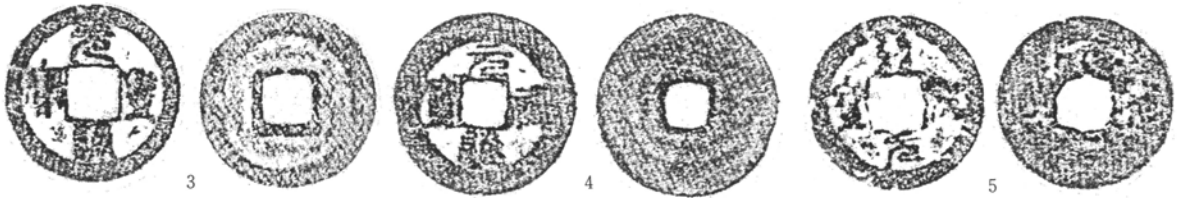
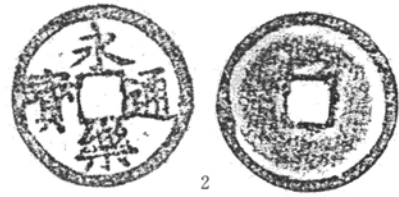
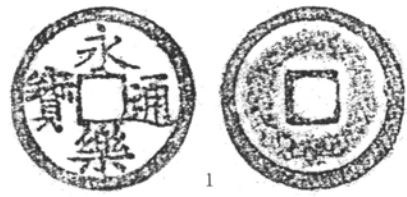
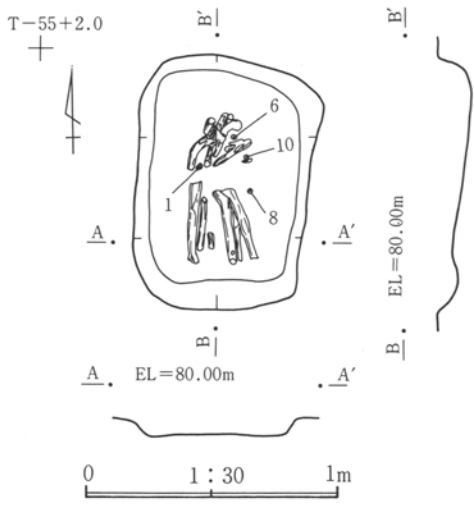


第70図 46号住居・出土遺物実測図



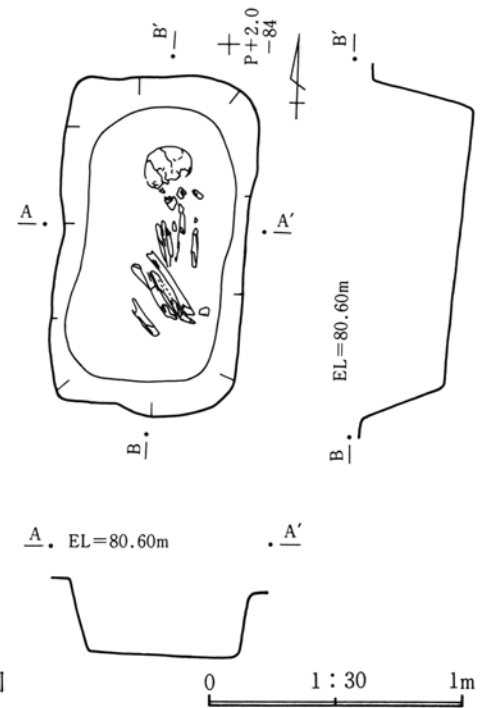
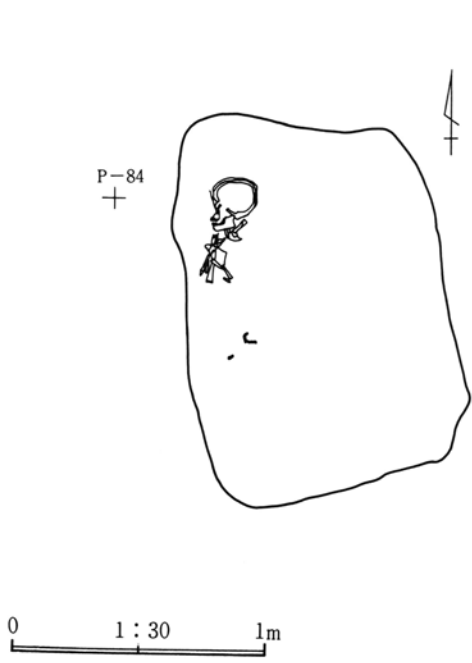
第71図 47号住居・出土遺物実測図



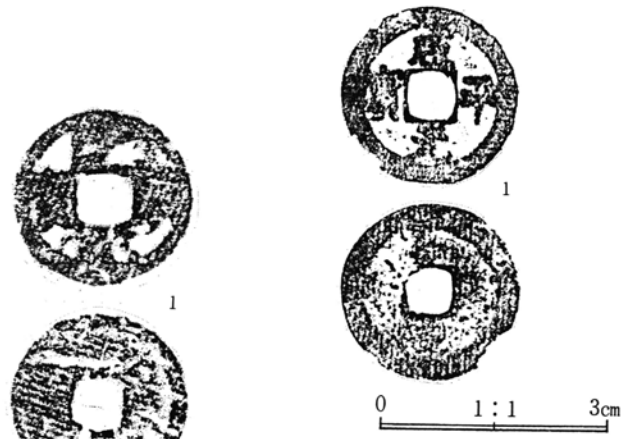
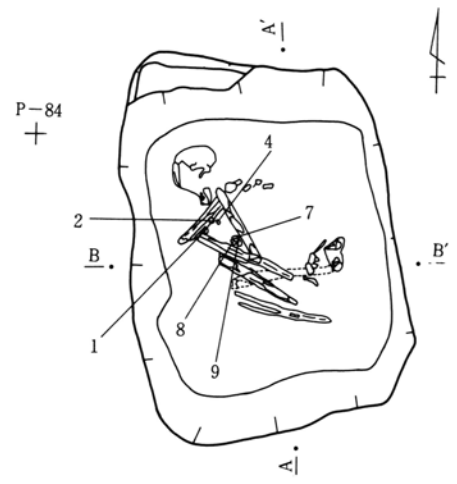


0 1:1 3cm

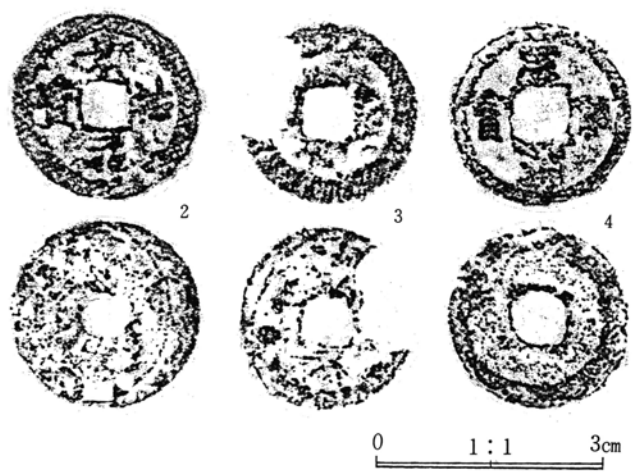
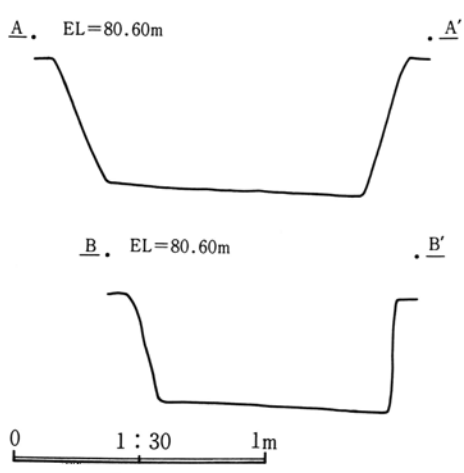
第72図 1号墓・出土遺物実測図



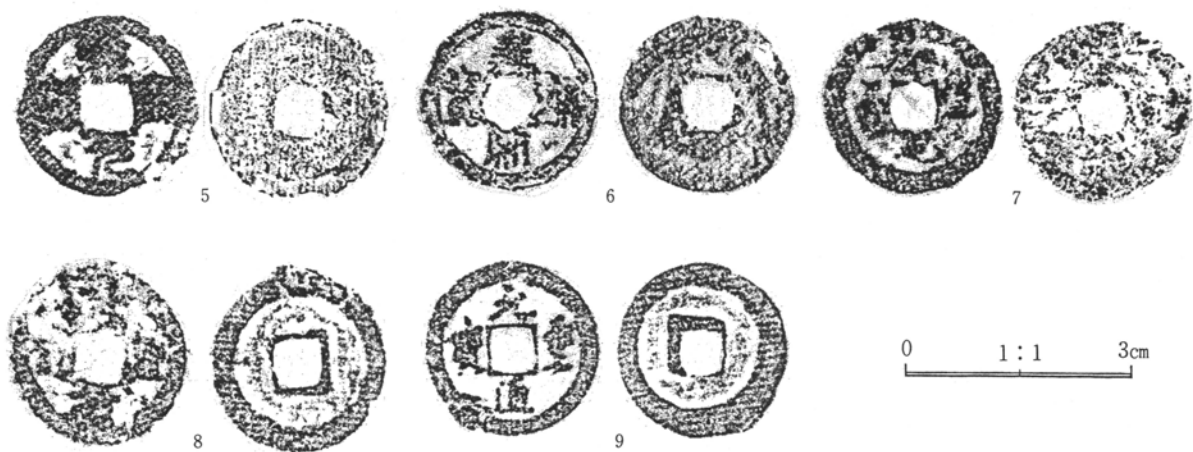
第73图 2号墓实测图



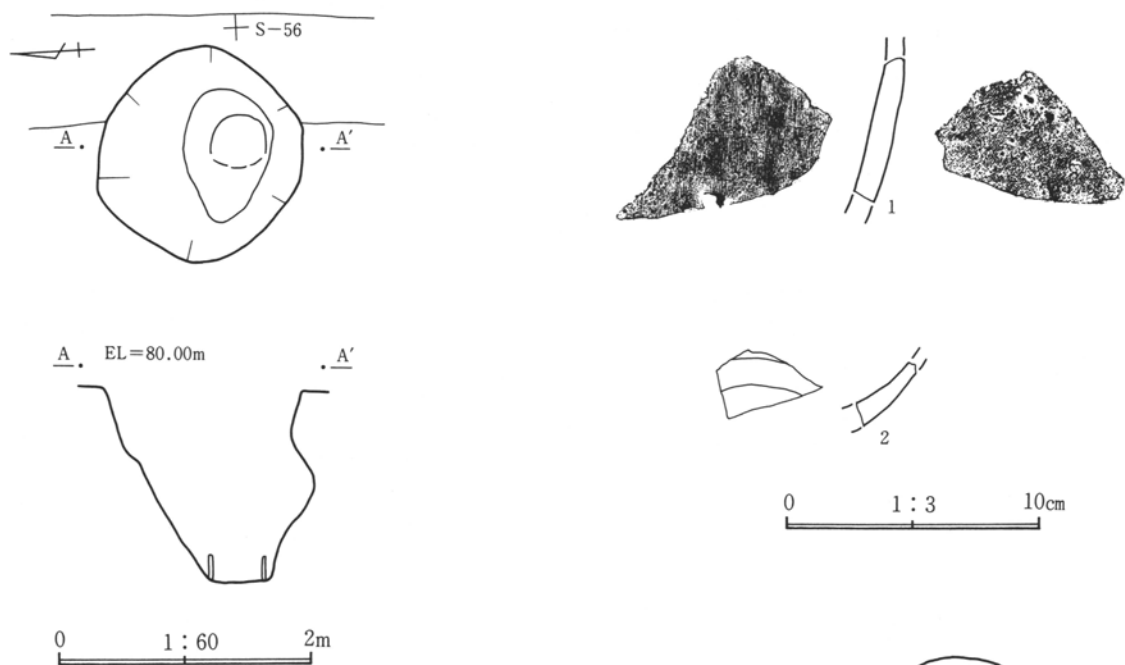
第74图 3号墓·出土遗物实测图



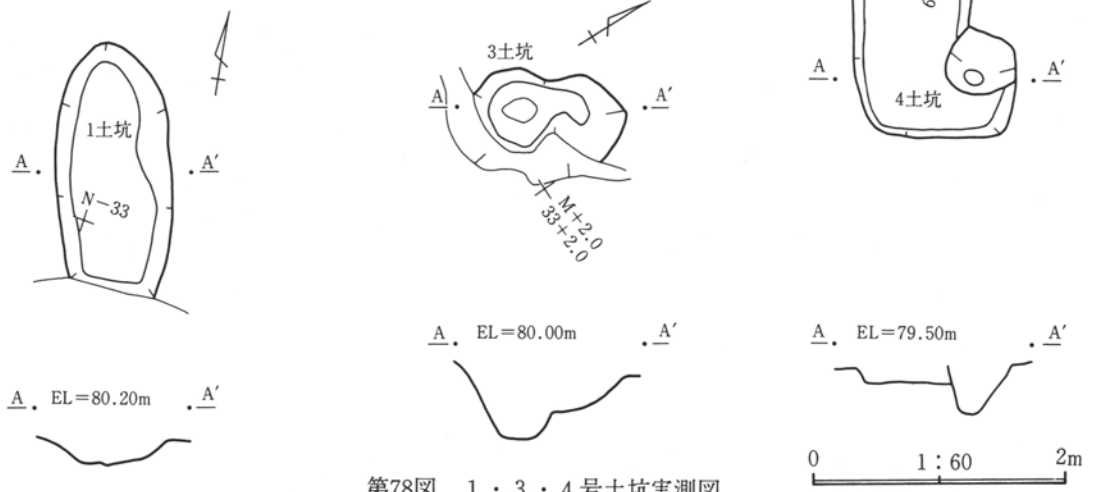
第75图 4号墓·出土遗物实测图



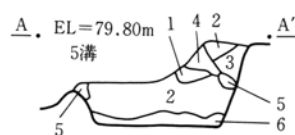
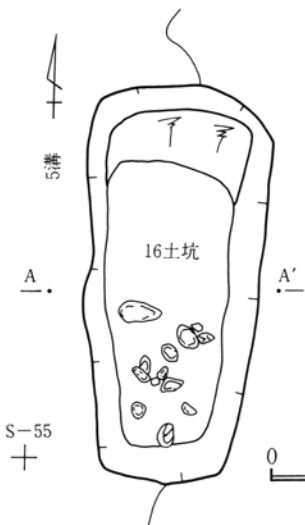
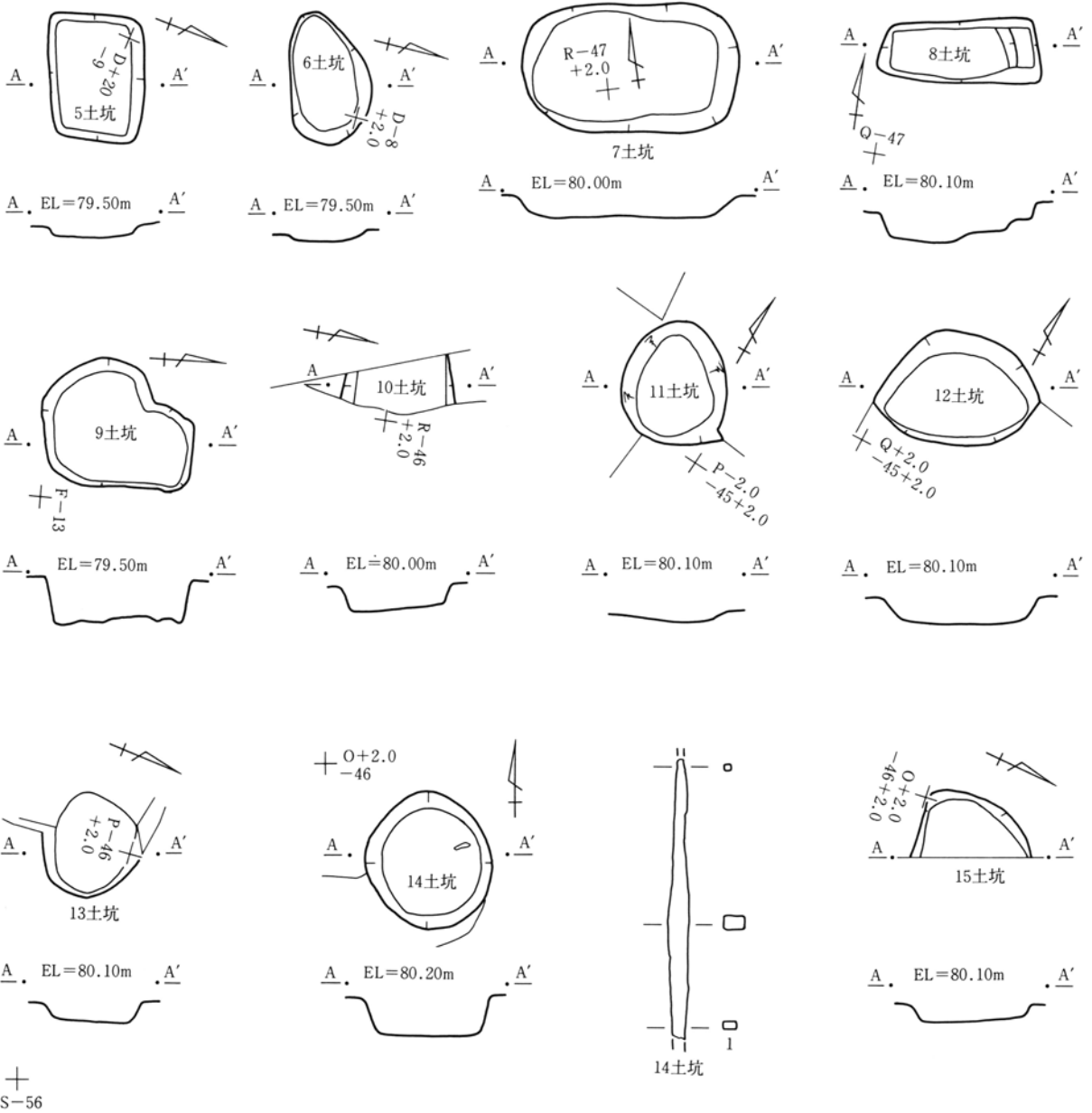
第76图 4号墓出土遺物実測図



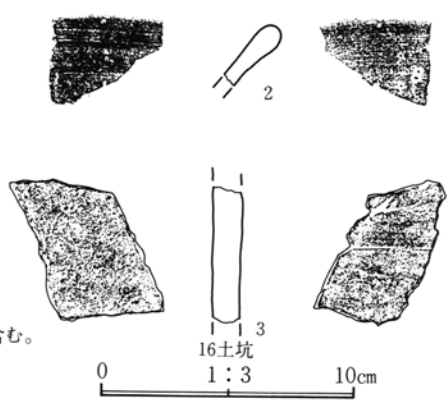
第77图 1号井戸・出土遺物実測図



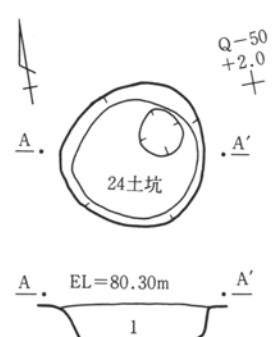
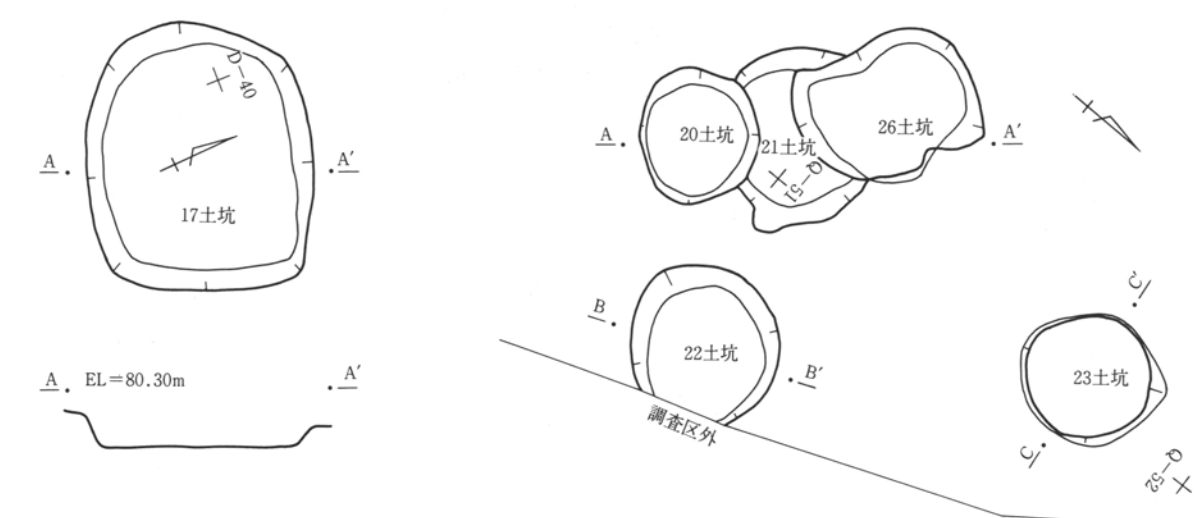
第78图 1・3・4号土坑実測図



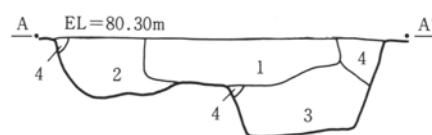
- 16号土坑
1. 暗褐色土層 As-C? を多量に含む。
  2. 層のやや酸化した層。
  2. 黒褐色土層 As-C? を多量に含む。
  3. 暗褐色粘質土層
  4. オリーブ灰色砂壤土層 As-B を多量に含む。
  5. 淡黄色細砂層 地山小塊。
  6. 3層を主体とし、2層小塊を20%程含む。



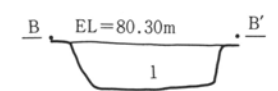
第79図 5～16号土坑・出土遺物実測図



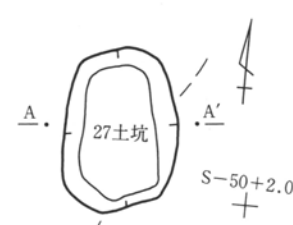
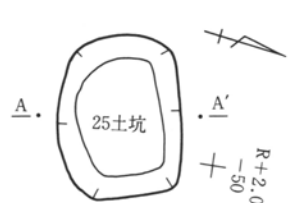
24号土坑  
1. 黄灰褐色土層 暗褐色土中粒を30%程含む。



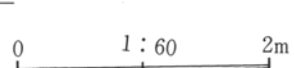
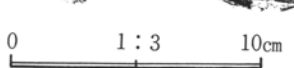
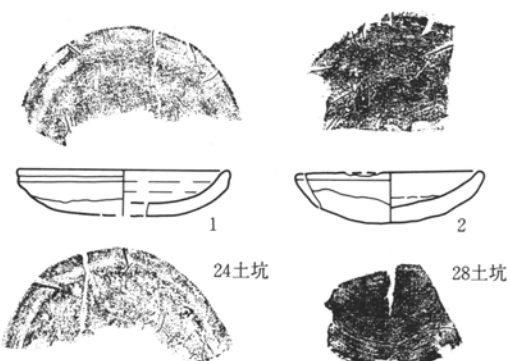
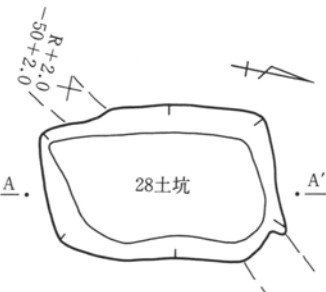
20・21・22・23・26号土坑  
1. 黄灰褐色土層 暗褐色土中粒を30%程含む。  
2. 黄灰色細砂層 地山の淡黄色細砂を主体とし、10%程1層を均質に含む。  
3. 地山の淡黄色細砂と砂礫、1層の混土層  
4. 地山の崩壊土



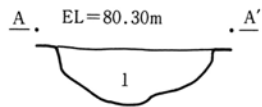
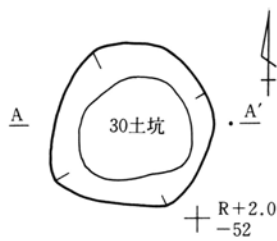
25号土坑  
1. 地山の淡黄色細砂とオリブ灰色土の混土層 人為堆積。



27・28号土坑  
1. オリブ灰色土層 地山の細砂小塊を不均質に10%程含む。

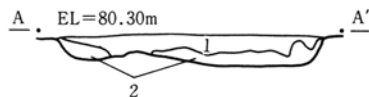
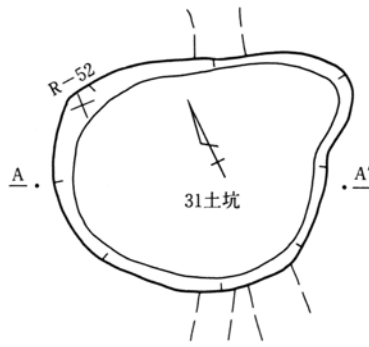


第80図 17・20～28号土坑・出土遺物実測図



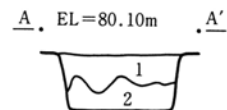
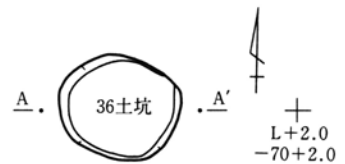
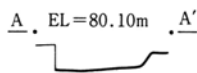
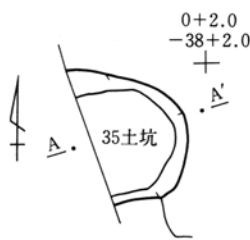
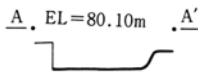
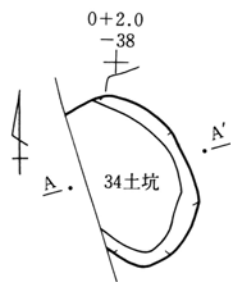
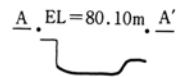
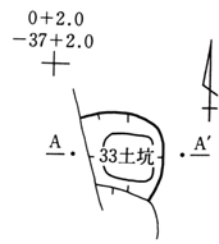
30号土坑

1. オリーブ灰色土層  
地山の細砂小塊を不均質に10%程含む。



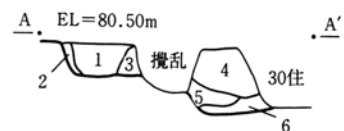
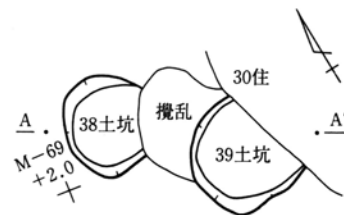
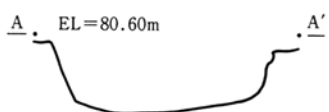
31号土坑

1. オリーブ灰色砂壤土層 As-Bを含む。
2. 1層と地山の細砂層の混土層



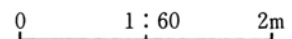
36号土坑

1. 暗褐色土層
2. 暗褐色土層 黄褐色シルトと黒褐色土大粒を含む。

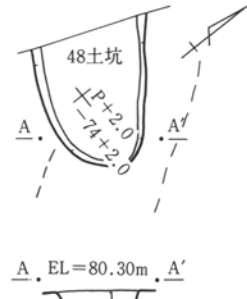
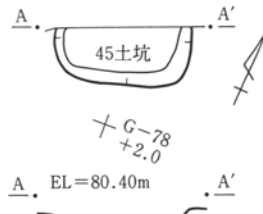
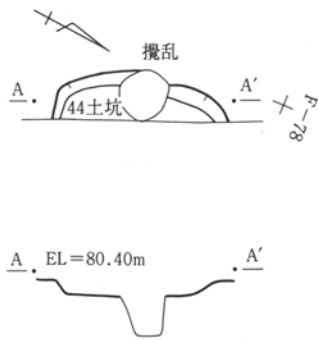
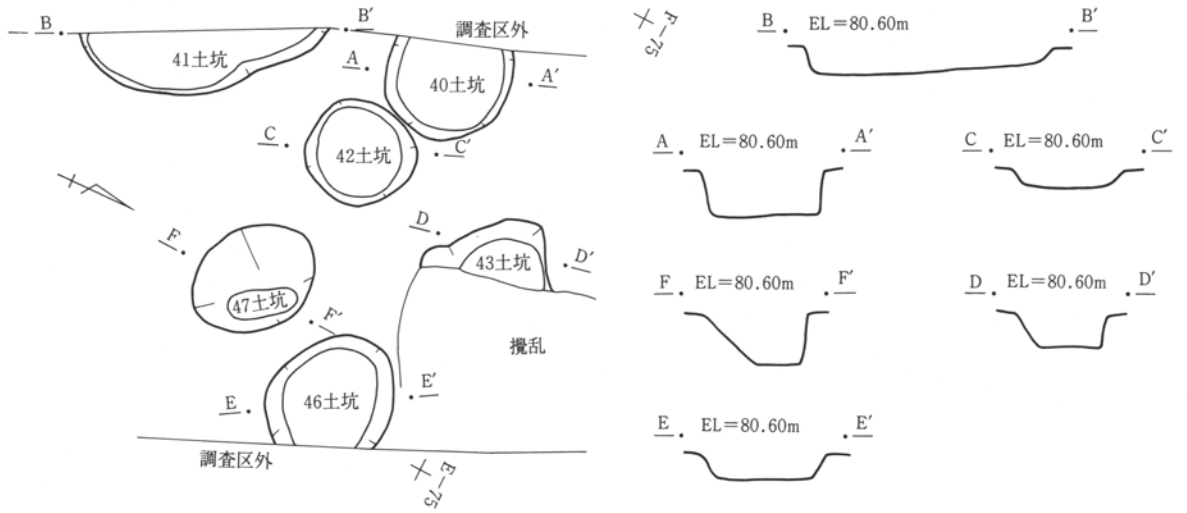


38・39号土坑

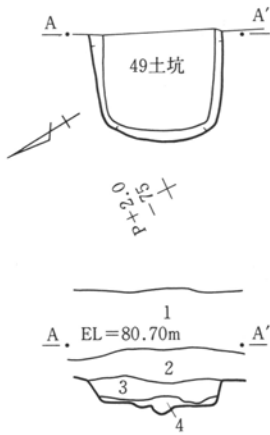
1. 暗黄褐色砂壤土層
2. 褐色土層 粒子が細かい。
3. 褐色土層
4. 褐色土小塊と黄褐色土小塊、黒褐色土小塊の混土層
5. 褐色土塊と黒褐色土塊の混土層
6. 黒褐色土層



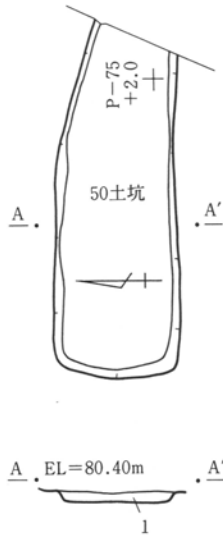
第81図 30・31・33～39号土坑実測図



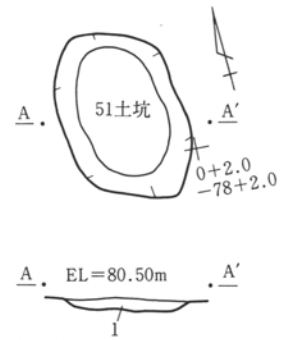
48号土坑  
1. 暗褐色土層  
不明軽石を20%程含む。



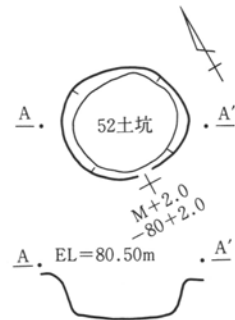
49号土坑  
1. 盛り土  
2. 灰黄褐色土層 土の硬化剤により硬化する。  
3. 暗褐色土層 不明軽石を20%程含む。  
4. 3層と地山の黄褐色土の混土層



50号土坑  
1. 灰黄褐色土層  
不明軽石を均一に含む。

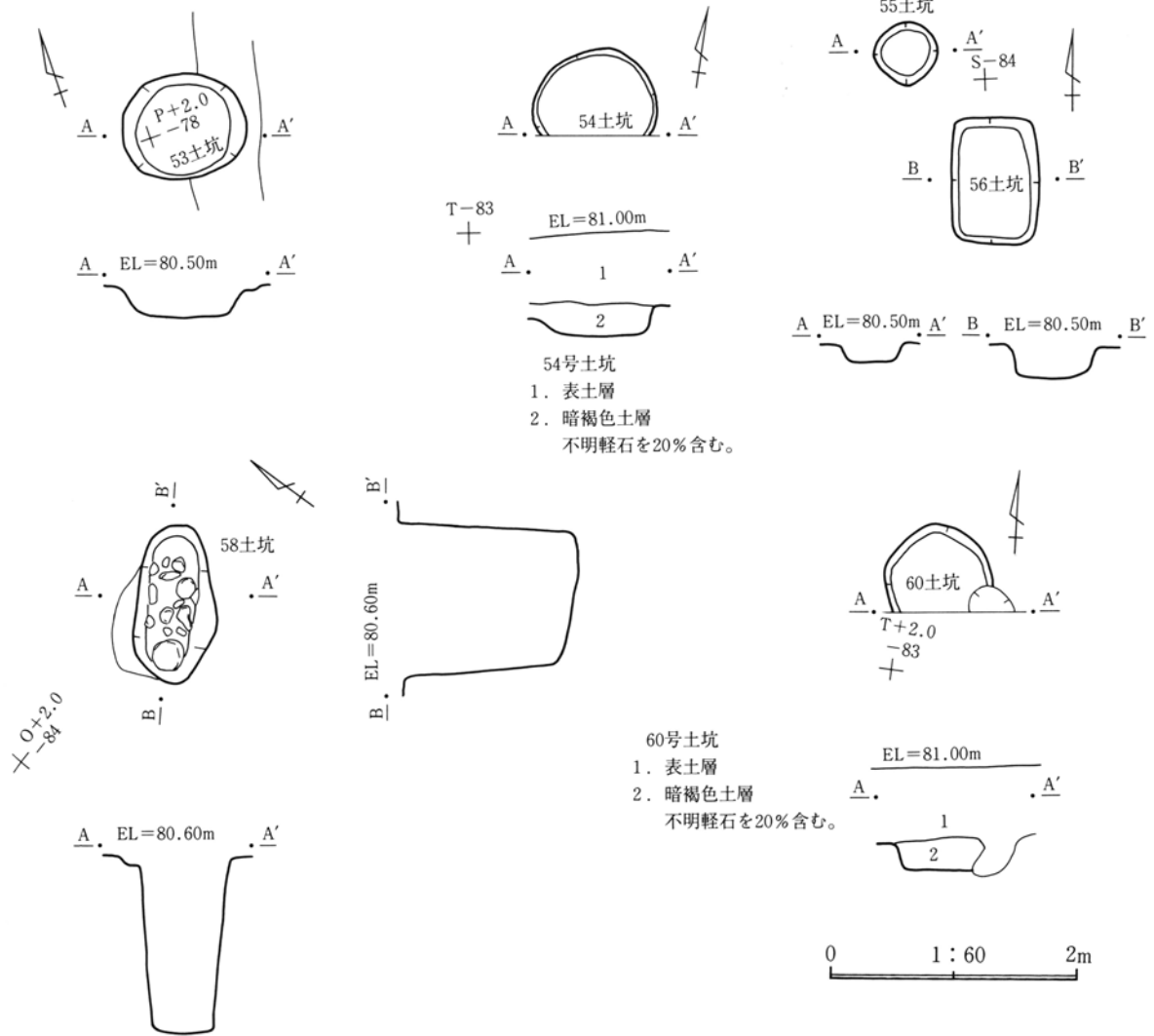


51号土坑  
1. 灰黄褐色土層 不明軽石を均一に含む。



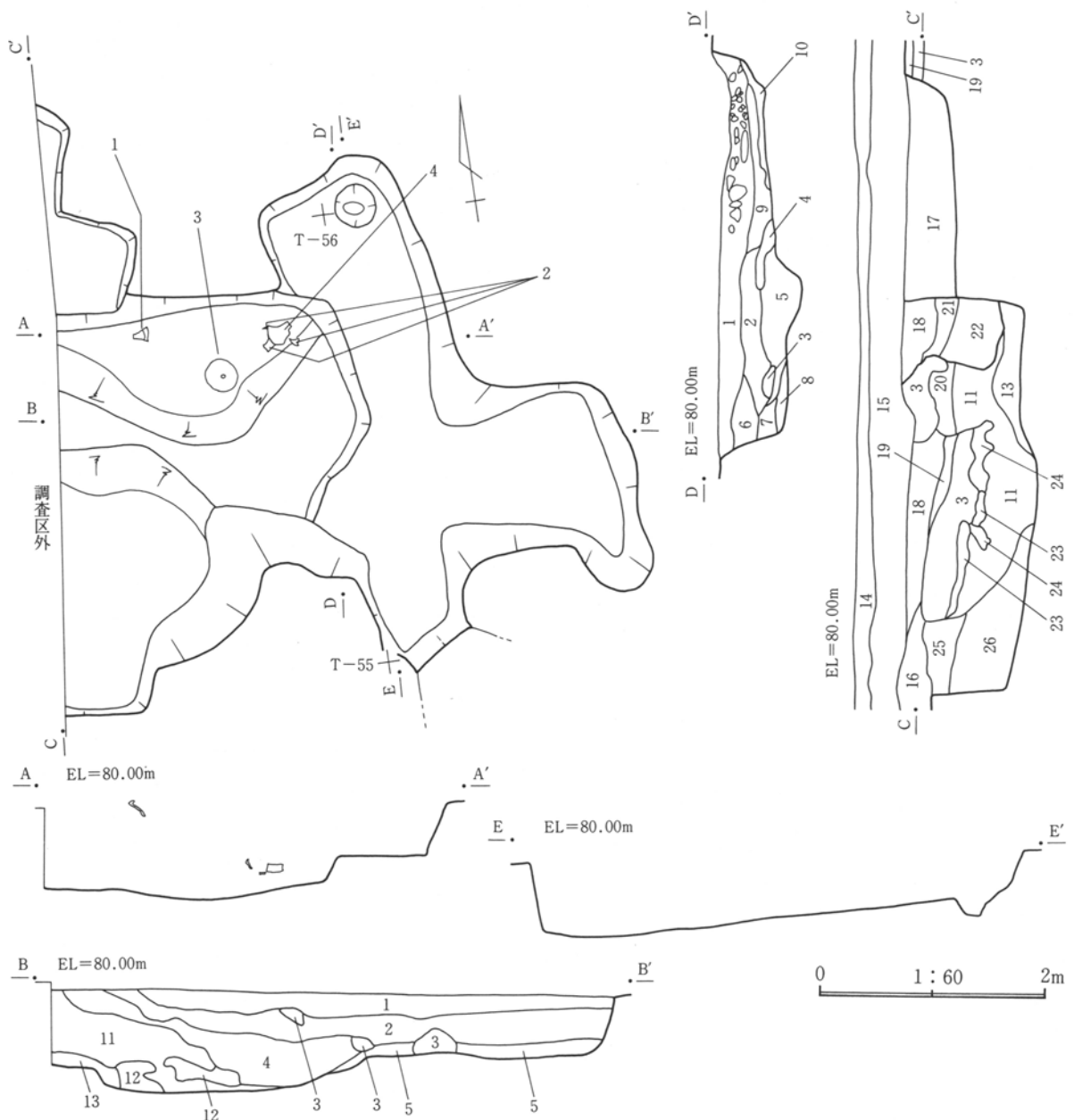
第82図 40~52号土坑実測図

0 1:60 2m



第83図 53~56・58・60号土坑実測図





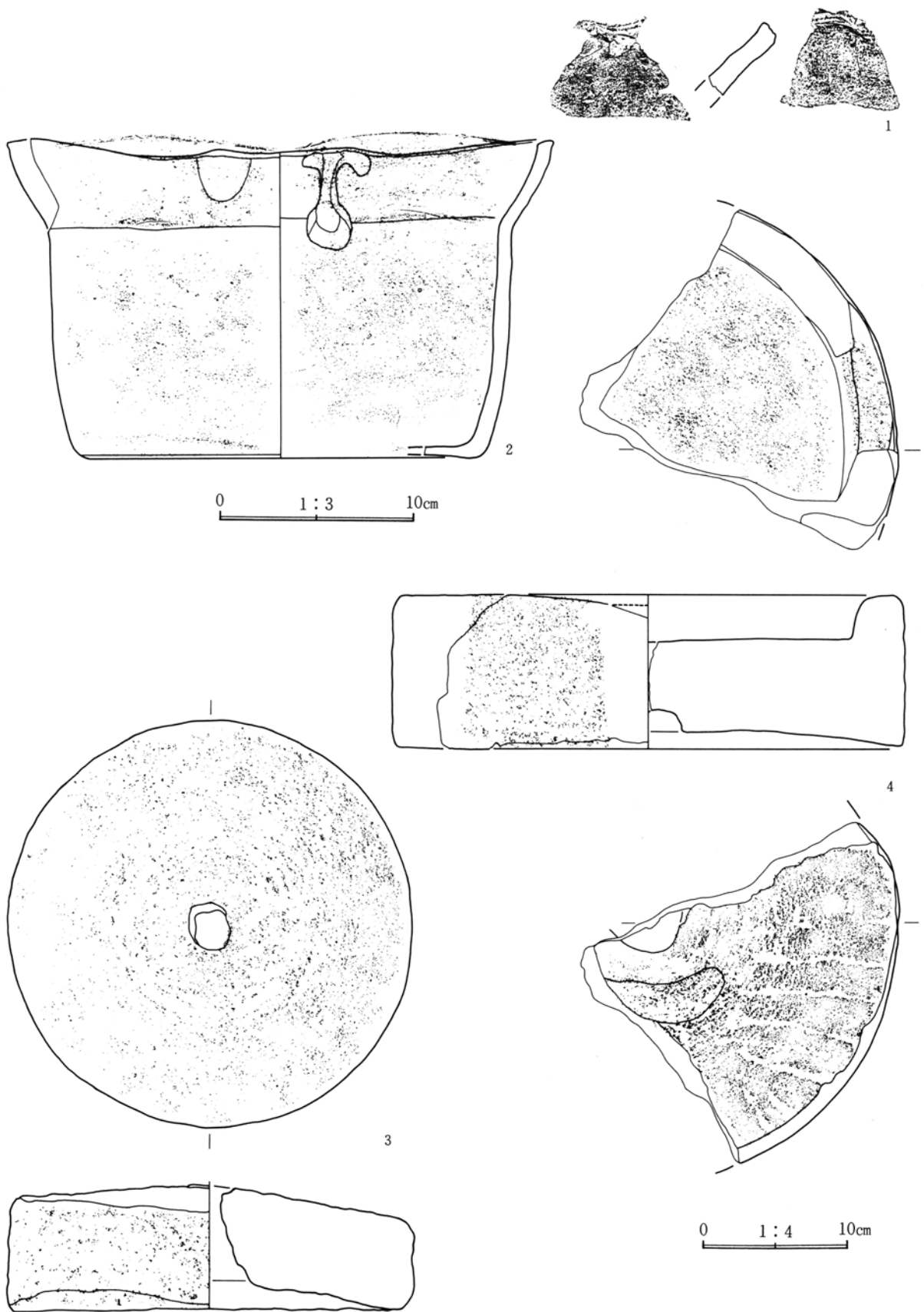
1号地下式坑

1. オリーブ灰色砂壤土層 As-Bを多量に含む。
2. オリーブ灰色砂壤土層 As-Bを少量含む。
3. 黒褐色土層 As-Cを多量に含む。基本土層と同じで、他の土は混じらない。天井部の崩落か。
4. 3層を主体とし、1層を塊状に含む。
5. 2層を主体とし、地山の淡黄褐色細砂を20%程含む。
6. 2層を主体とし、地山の淡黄褐色細砂を不均質に20%程含む。
7. 3層を主体とし、地山の淡黄褐色細砂を不均質に30%程含む。
8. 地山の淡黄褐色細砂を主体とし、20%程3層を不均質に含む。
9. オリーブ灰色砂壤土層 As-Bを含む。
10. 地山の淡黄色細砂を主体とし、20%程9層を含む。
11. 地山の淡黄色細砂層
12. 4層と地山の淡黄色細砂の混土層
13. 砂層

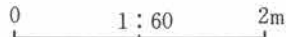
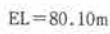
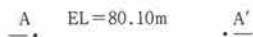
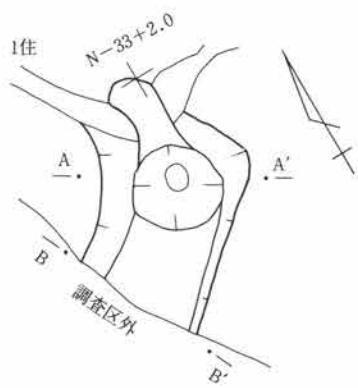
14. 表土

15. 暗褐色土層 As-Bを少量含む。
16. 暗褐色土層 As-B?を微量含む。
17. オリーブ褐色土層 As-Bを含む。
18. オリーブ褐色土層 As-BとAs-Cを含む。
19. 3層の酸化した部分。
20. 11層と同様であるが、粒径が小さい。
21. 暗灰黄色土層 地山の淡黄色細砂を含む。
22. 暗灰黄色土層 地山の淡黄色細砂粒と淡黄色細砂小塊を30%程含む。
23. 暗灰黄色シルト層 地山の淡黄色細砂層の中位に位置する土に、少量暗褐色土を含む。
24. 黒褐色土層 3層と地山の混土層。
25. 地山の淡黄色細砂比してやや粒径の大きい砂層
26. 砂礫層 確認面から60cm下で地山は砂礫層となるが、より上位から堆積し、微量他の土を含む。

第84図 1号地下式坑実測図

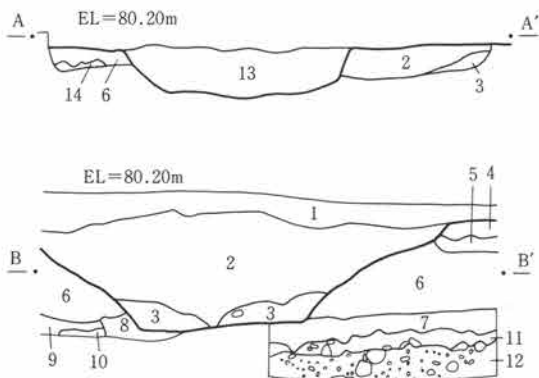


第85图 1号地下式坑出土遺物实测图

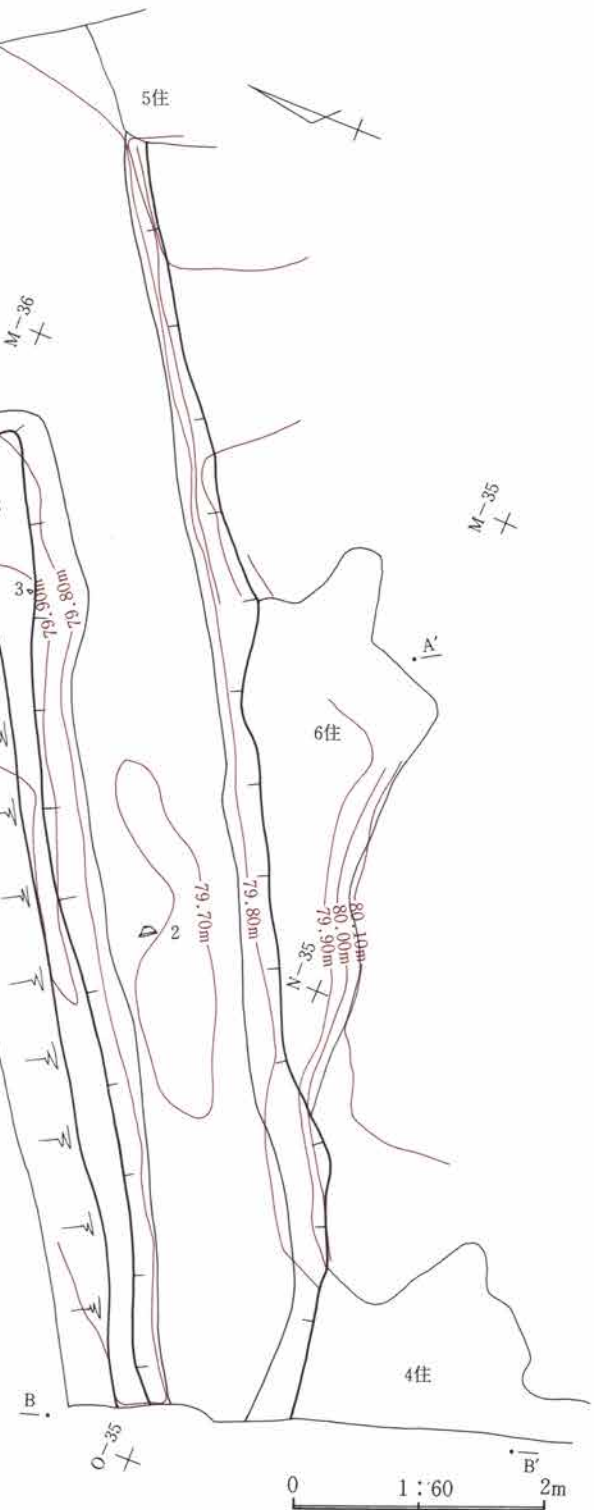


- 1号溝  
 1. 盛り土  
 2. 黒褐色土層 2~20cmの円礫を含む。  
 3. 黒褐色砂壤土層 5~10cmの円礫を部分的に含む。

第86図 1号溝実測図

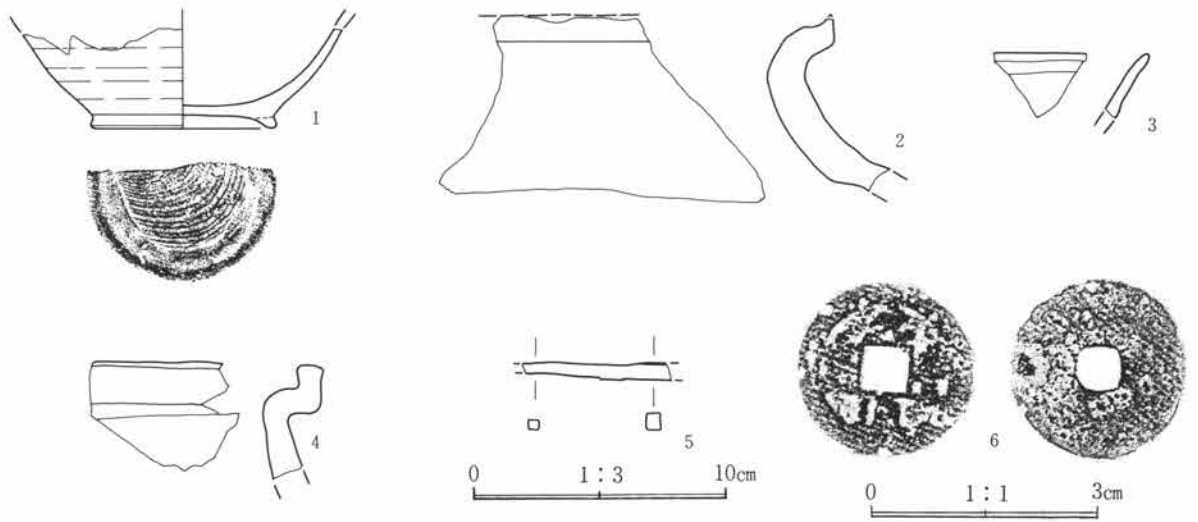


- 2号溝  
 1. 盛り土  
 2. 暗褐色砂壤土層 5~15cmの円礫を含む。  
 3. 暗褐色砂壤土層 地山の淡黄褐色細砂小塊を20%含む。  
 4. 暗褐色土層 As-Bを含む。  
 5. As-Bを主体とし、少量の6層を含む。部分的にアッシュを含む。  
 6. 黒褐色砂壤土層 炭化物粒・焼土粒を含む。  
 7. 4号住居埋土  
 8. 地山を主体とし、6層小塊を含む。

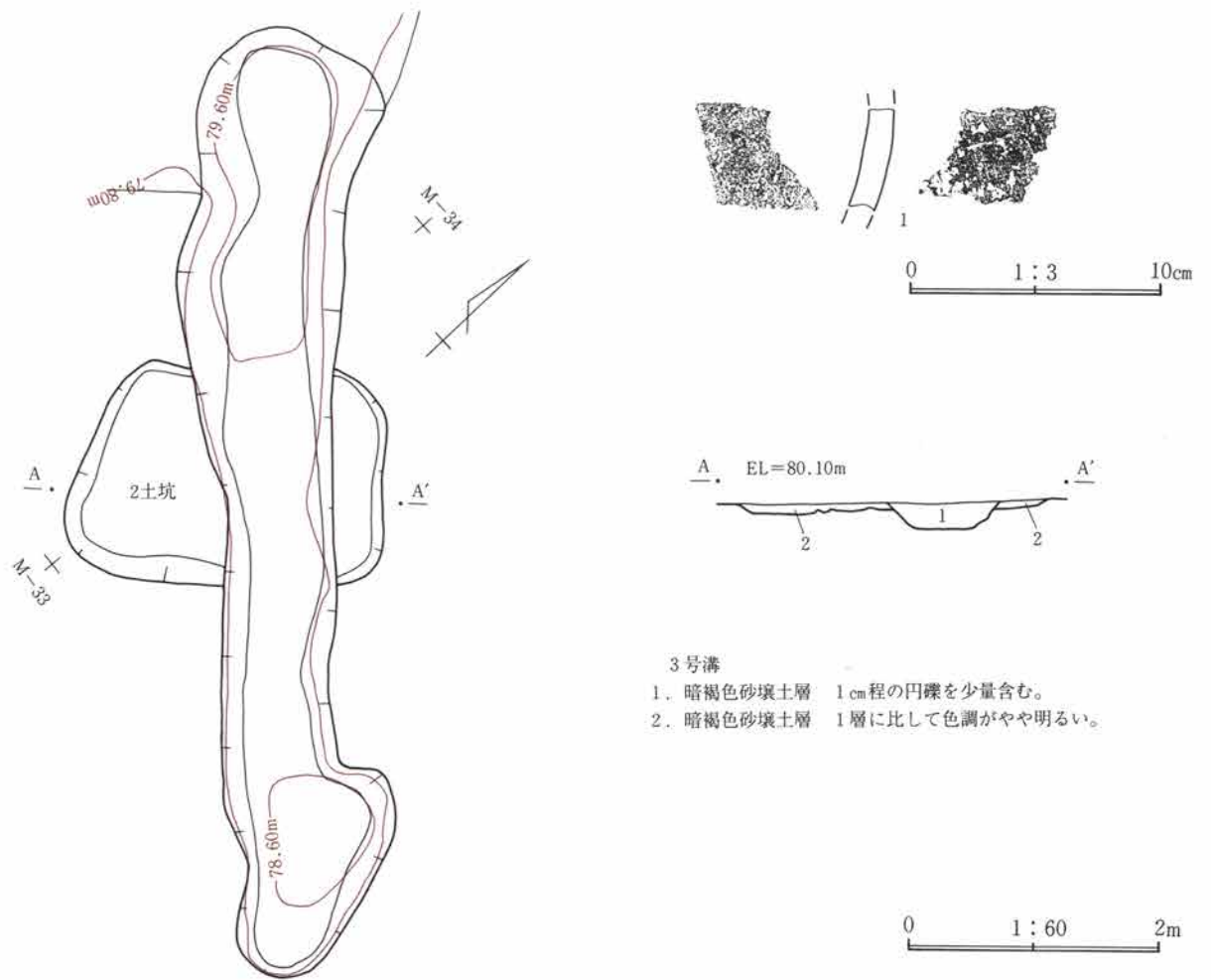


9. 黒褐色砂壤土層 やや締まった土。  
 10. 明黄褐色シルト層 住居床面のように固い。5号住居の床面か。  
 11. 淡黄褐色砂礫層 砂を主体とし、5~15cmの円礫を含む。  
 12. 砂礫層  
 13. 暗褐色砂壤土層 淡褐色細砂小塊を含む。  
 14. 明黄褐色シルト層 住居床面のように固い。6号住居の床面か。

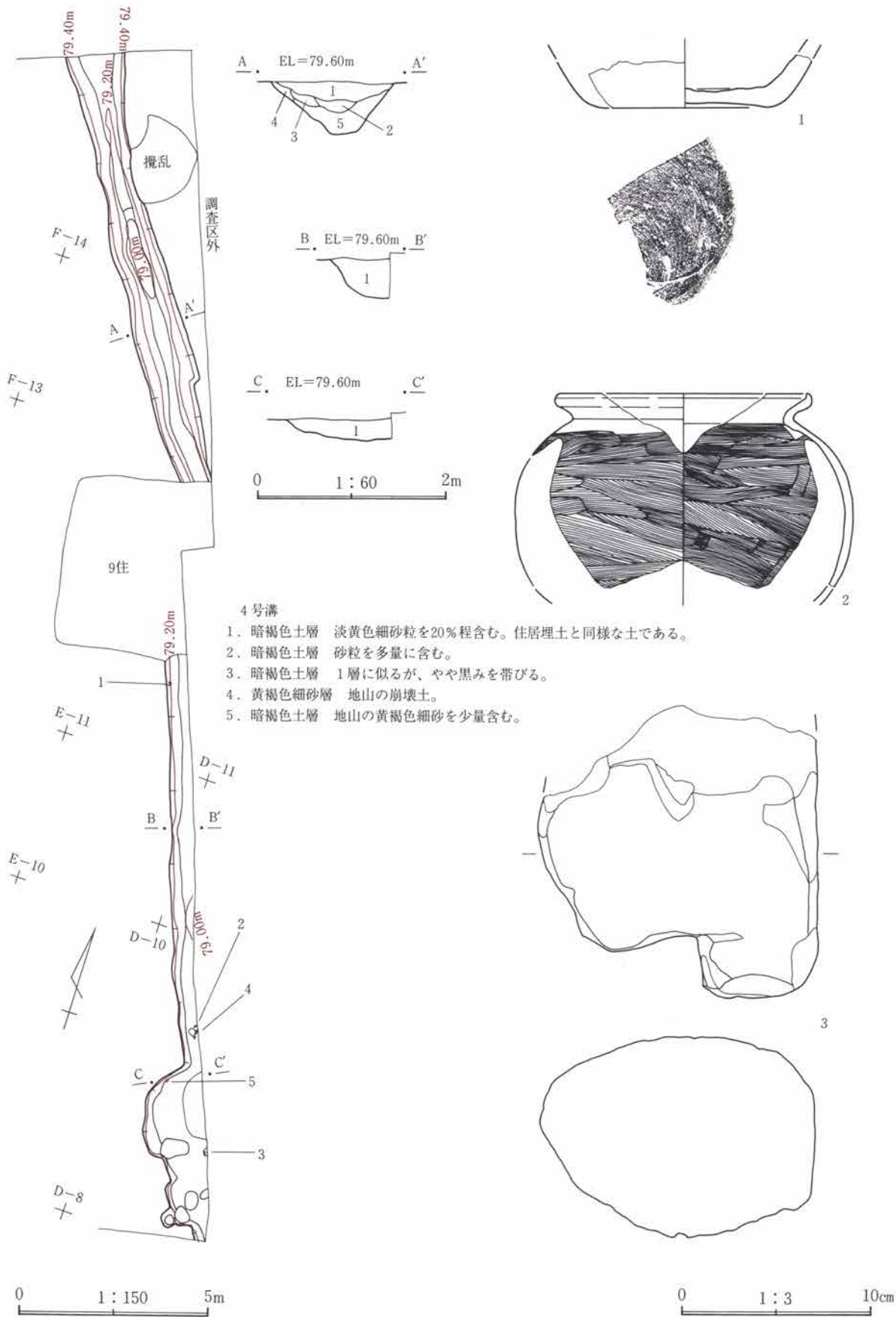
第87図 2号溝実測図



第88図 2号溝出土遺物実測図



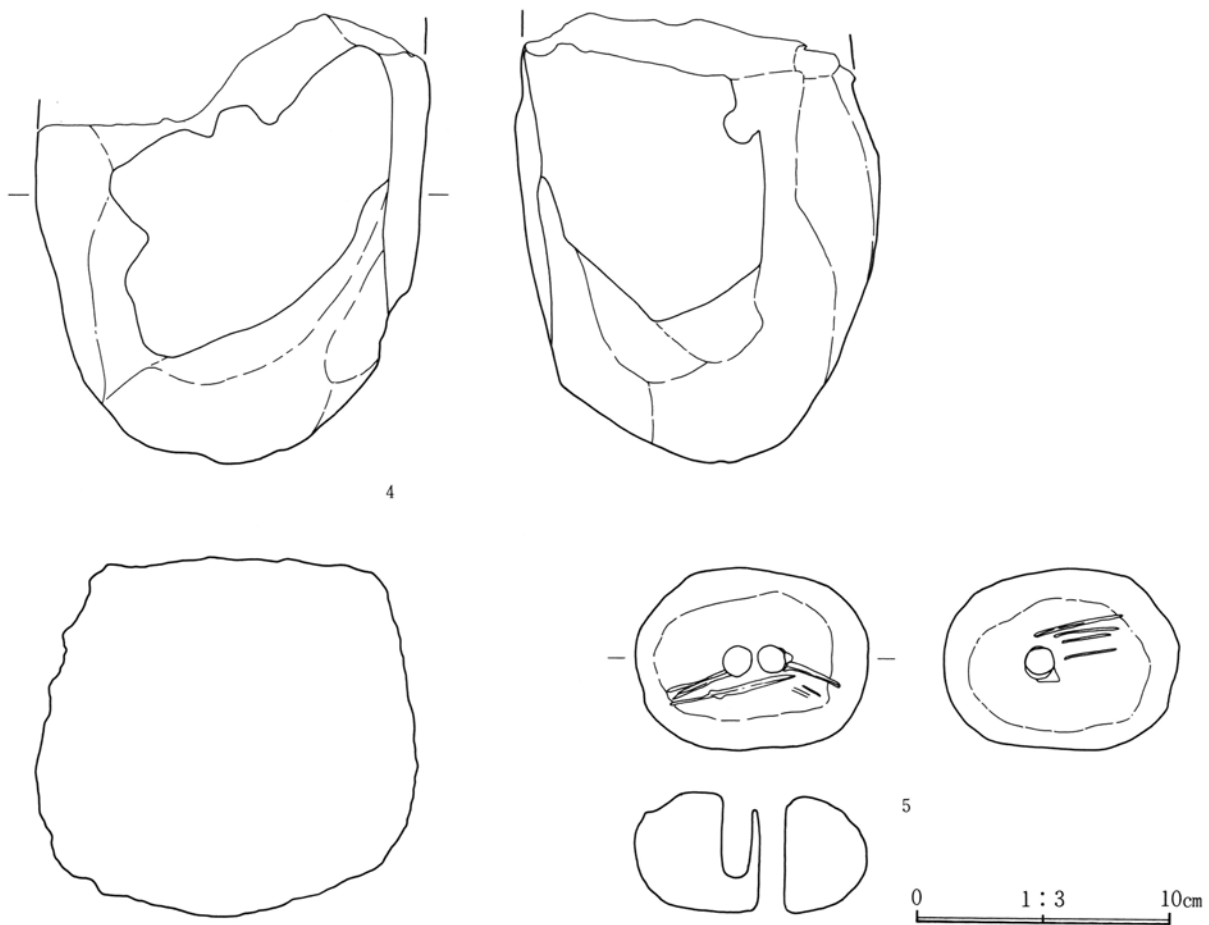
第89図 2号土坑・3号溝・出土遺物実測図



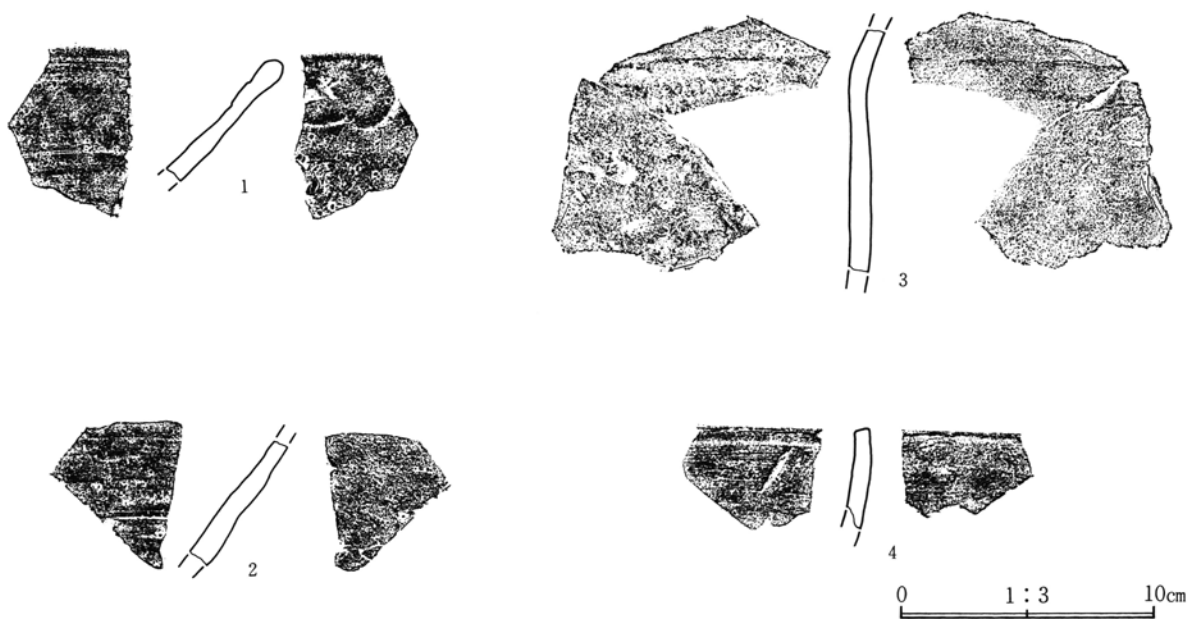
4号溝

- 1. 暗褐色土層 淡黄色細砂粒を20%程含む。住居埋土と同様な土である。
- 2. 暗褐色土層 砂粒を多量に含む。
- 3. 暗褐色土層 1層に似るが、やや黒みを帯びる。
- 4. 黄褐色細砂層 地山の崩壊土。
- 5. 暗褐色土層 地山の黄褐色細砂を少量含む。

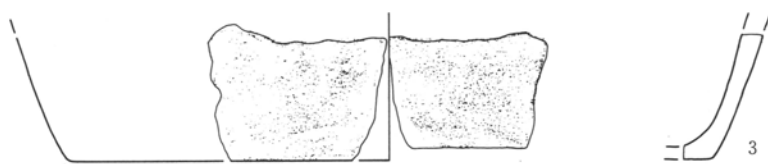
第90図 4号溝・出土遺物実測図



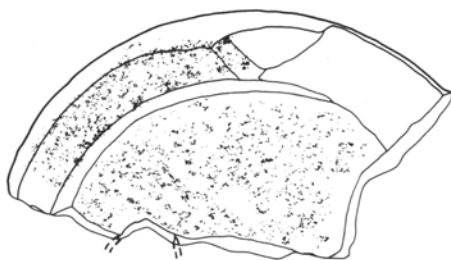
第91图 4号溝出土遺物实测图



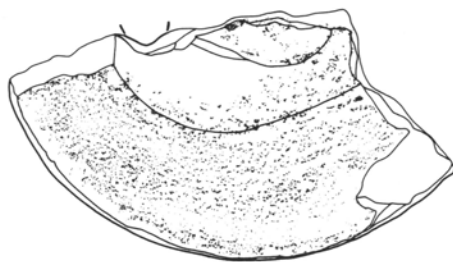
第92图 5号溝出土遺物实测图



0 1:3 10cm

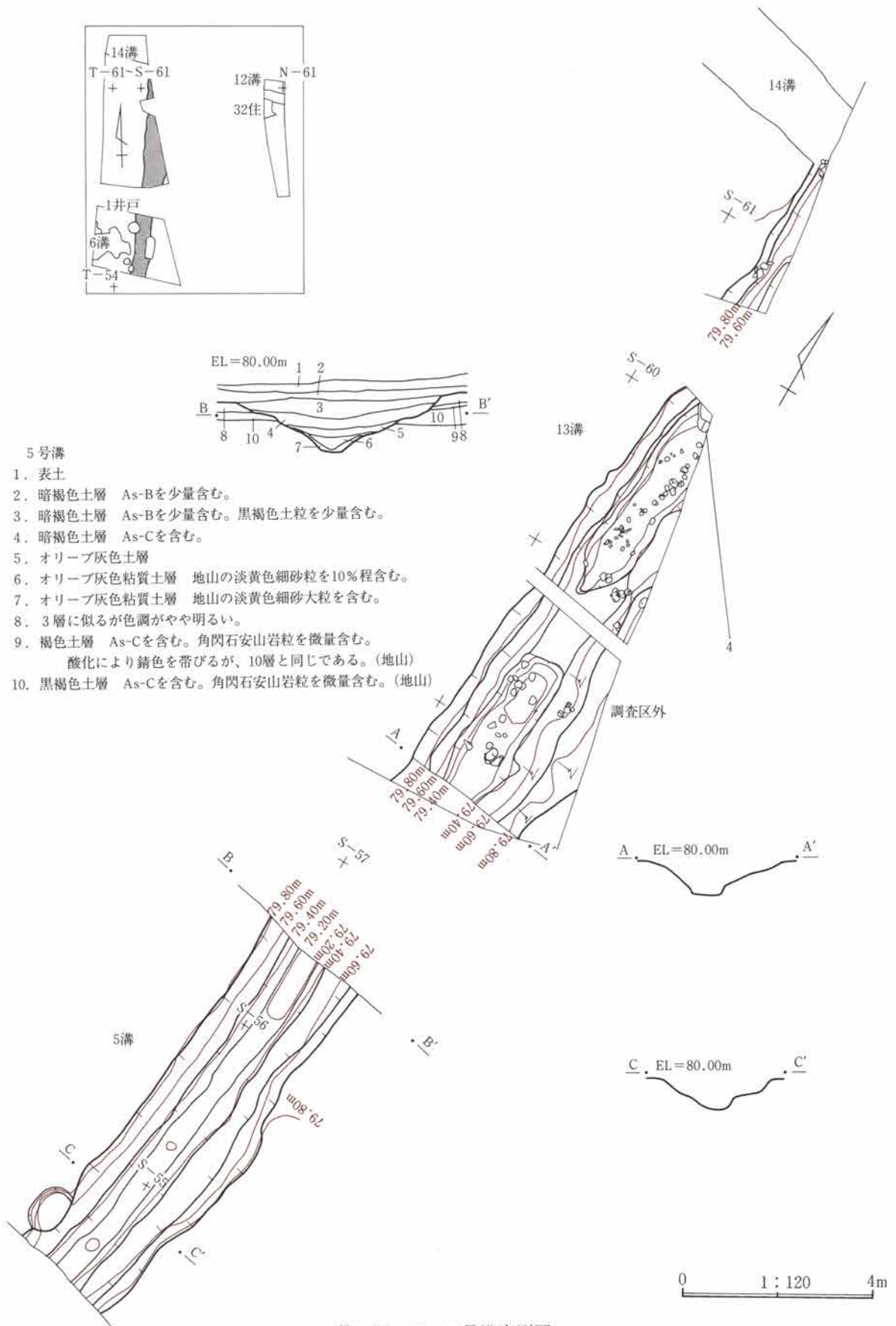


4



0 1:4 10cm

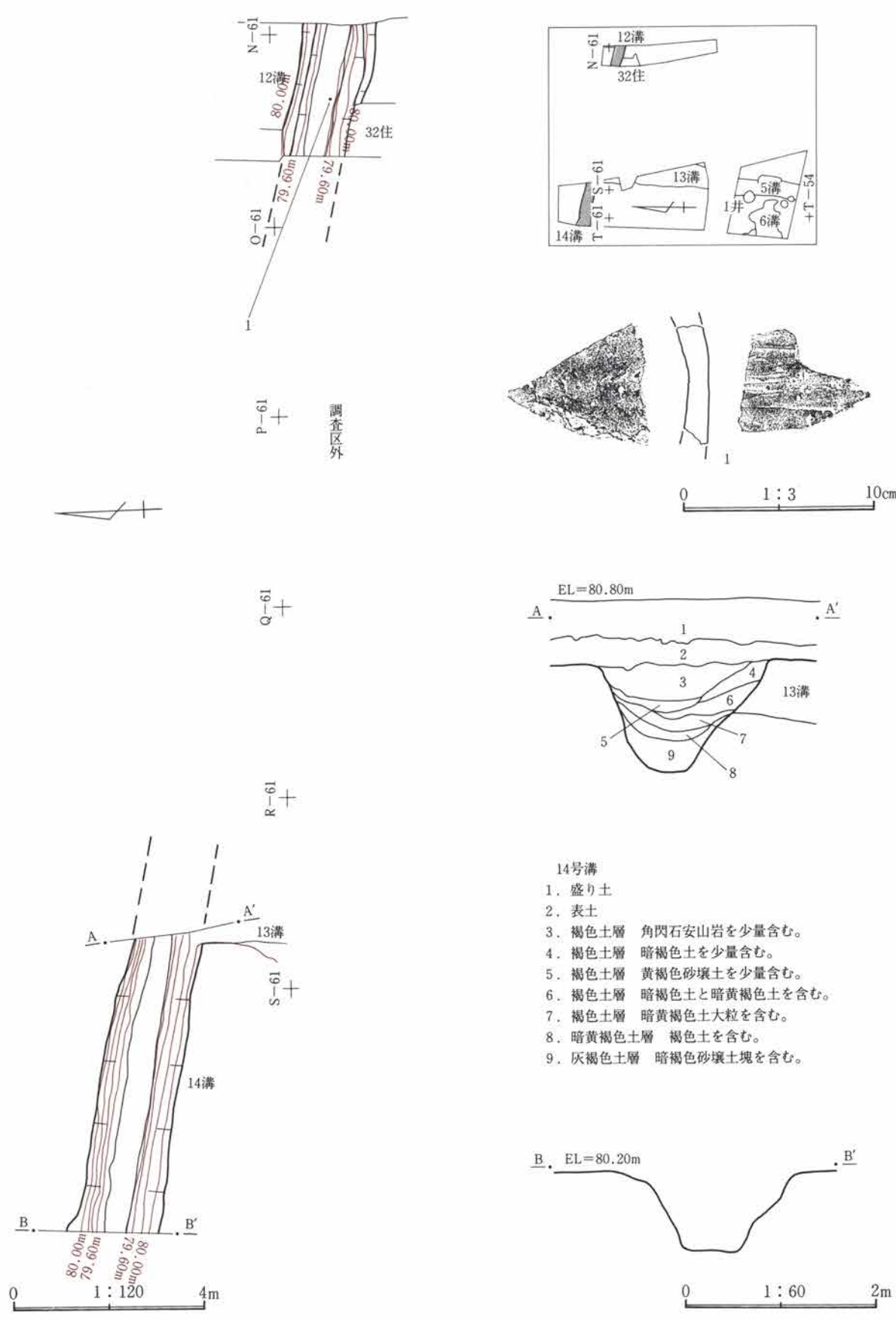
第93图 13号溝出土遺物実測図



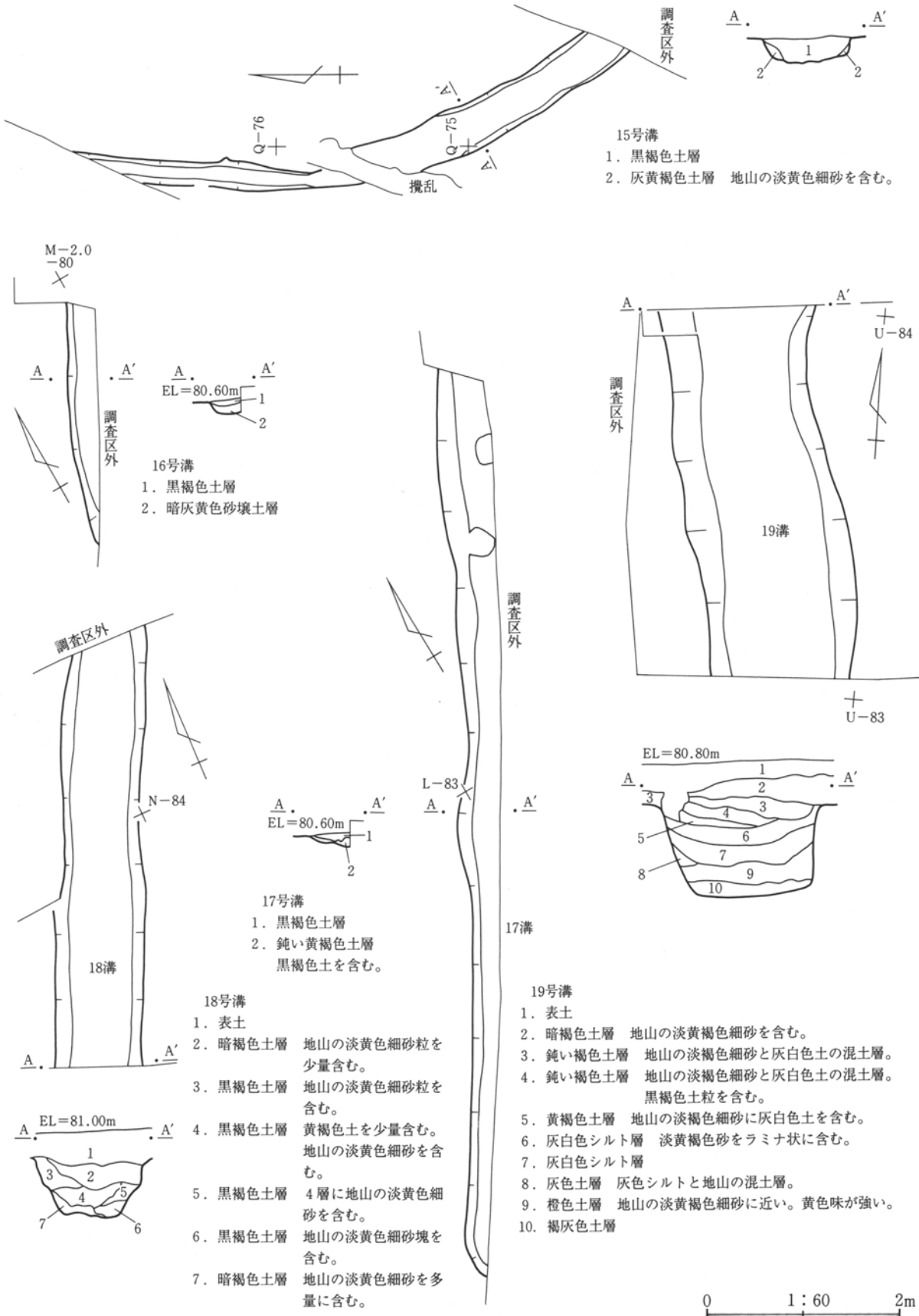
第94図 5・13号溝実測図



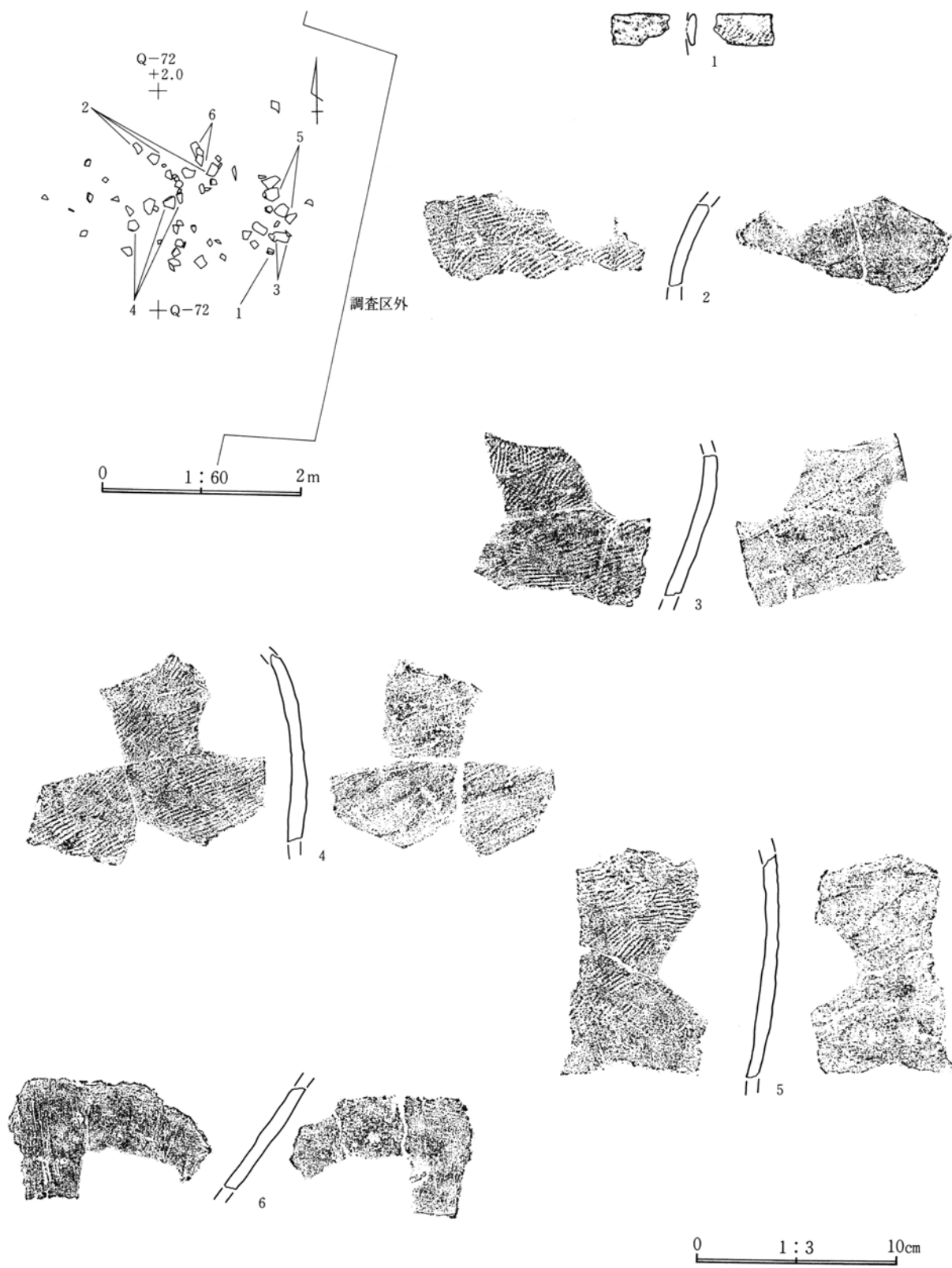




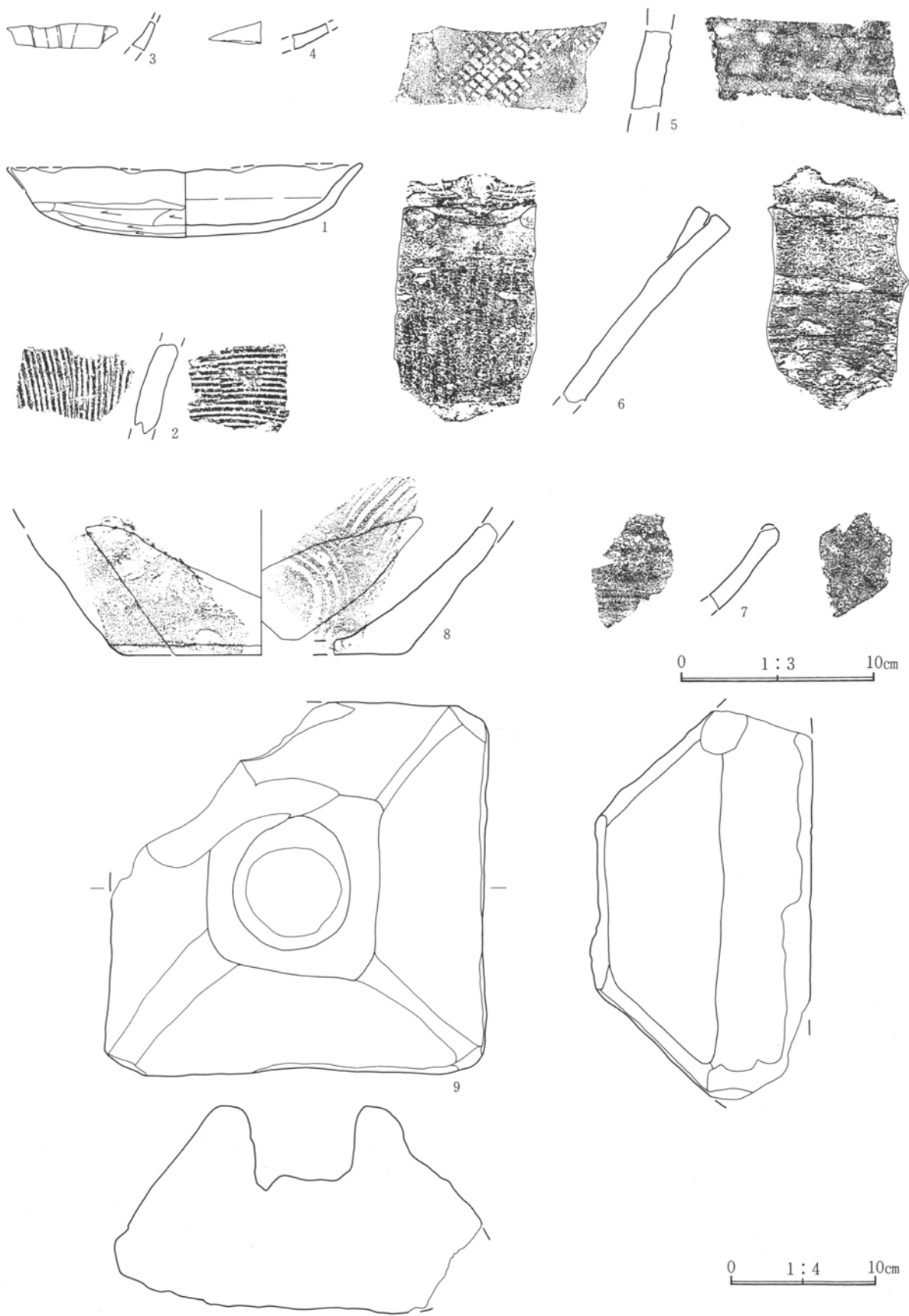
第96図 12・14号溝・出土遺物実測図



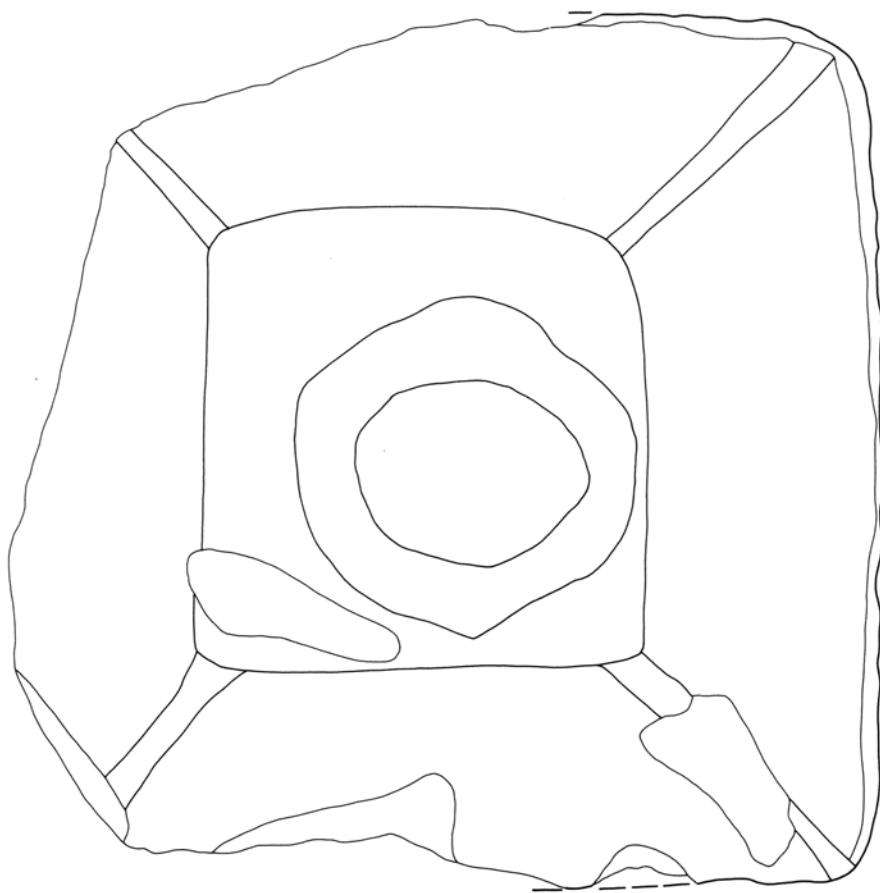
第97図 15~19号溝実測図



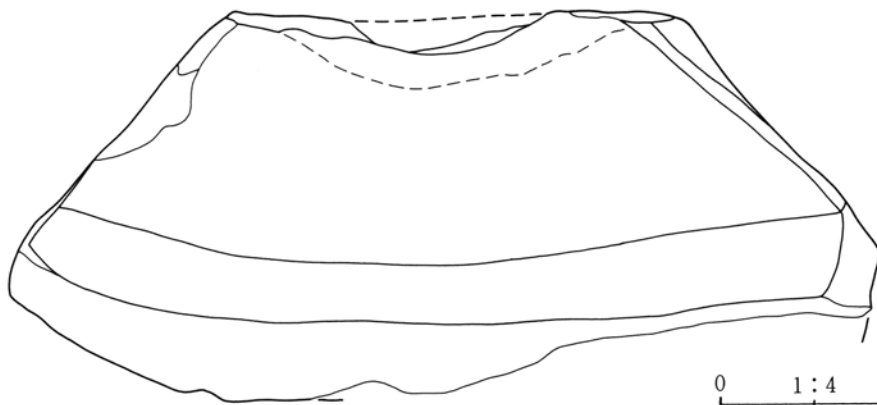
第98図 弥生土器出土状態・出土遺物実測図



第99図 遺構外出土遺物実測図(1)



10



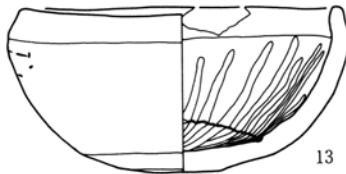
0 1:4 10cm



11



12



13

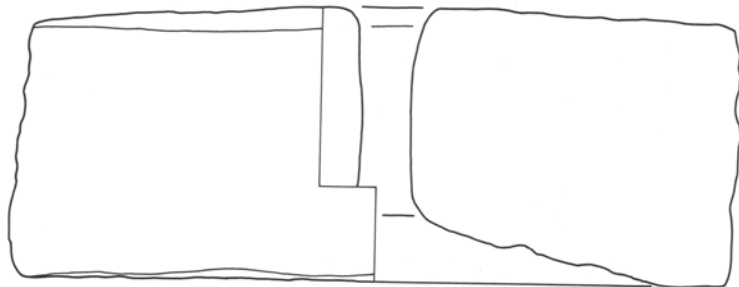
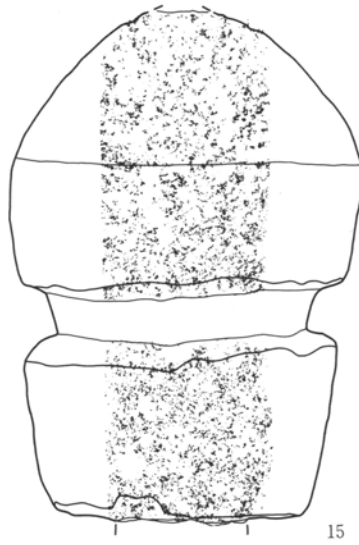
0 1:3 10cm



14

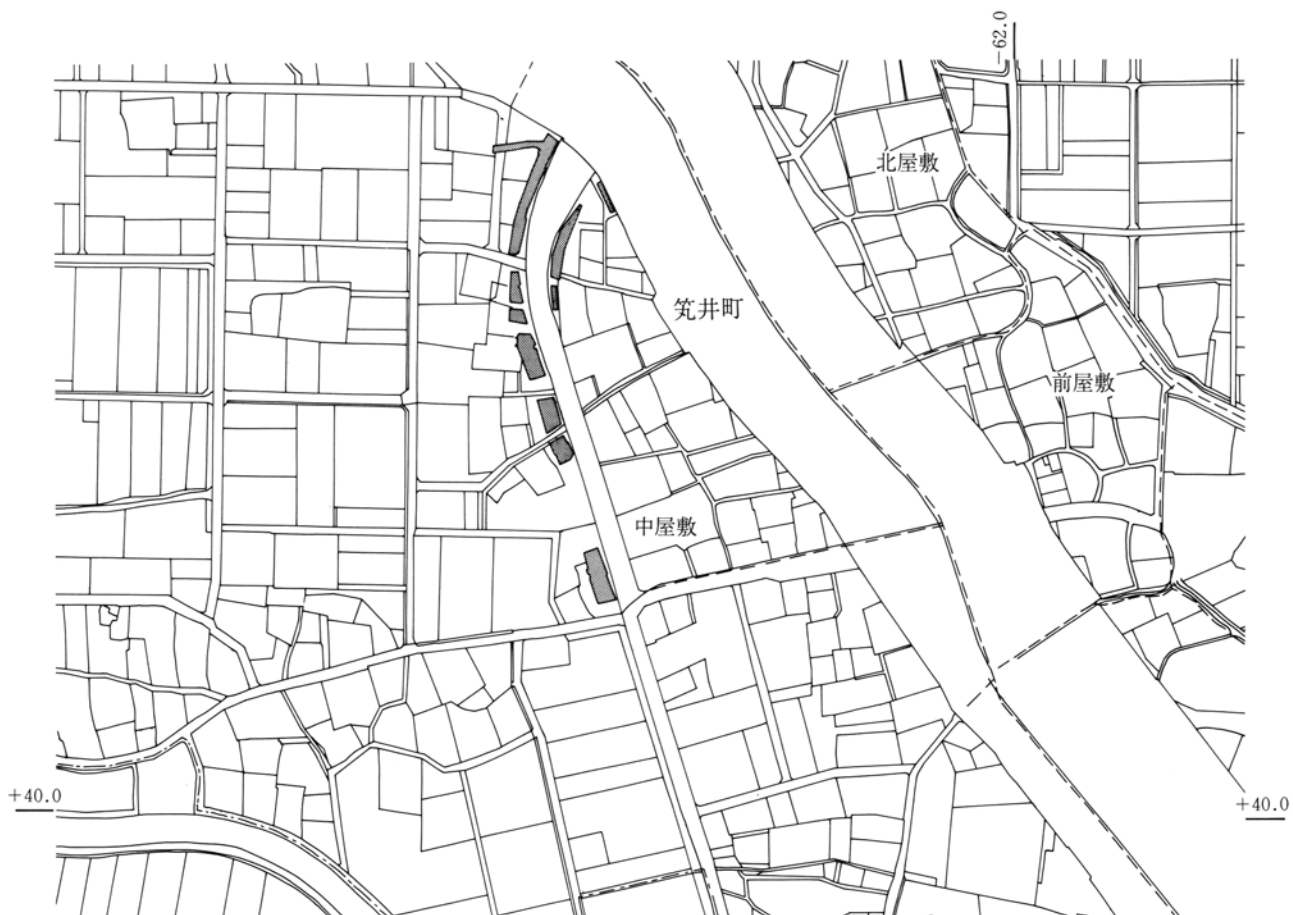
0 1:1 3cm

第100図 遺構外出土遺物実測図(2)

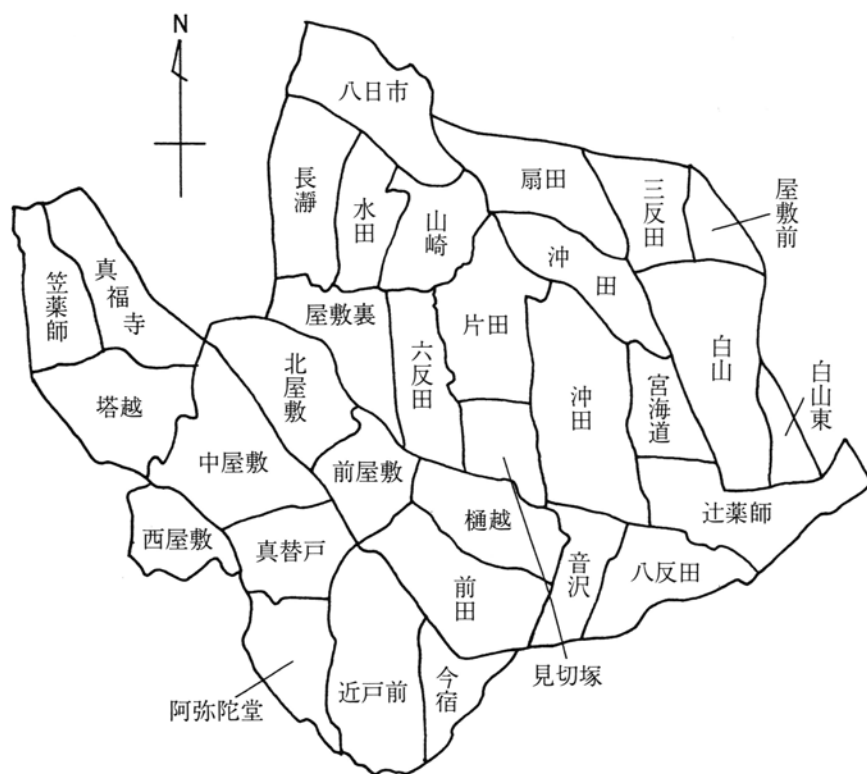


16  
0 1:4 10cm

第101図 遺構外出土遺物実測図(3)



第102図 遺跡周辺の地割り図 (1/5,000)



第103図 箕井町の小字地図 (『木瀬村誌』より転載)



# 写真図版





遺跡周辺の空中写真（昭和22年米軍撮影の空中写真を使用）



遺跡の航空写真



1区全景

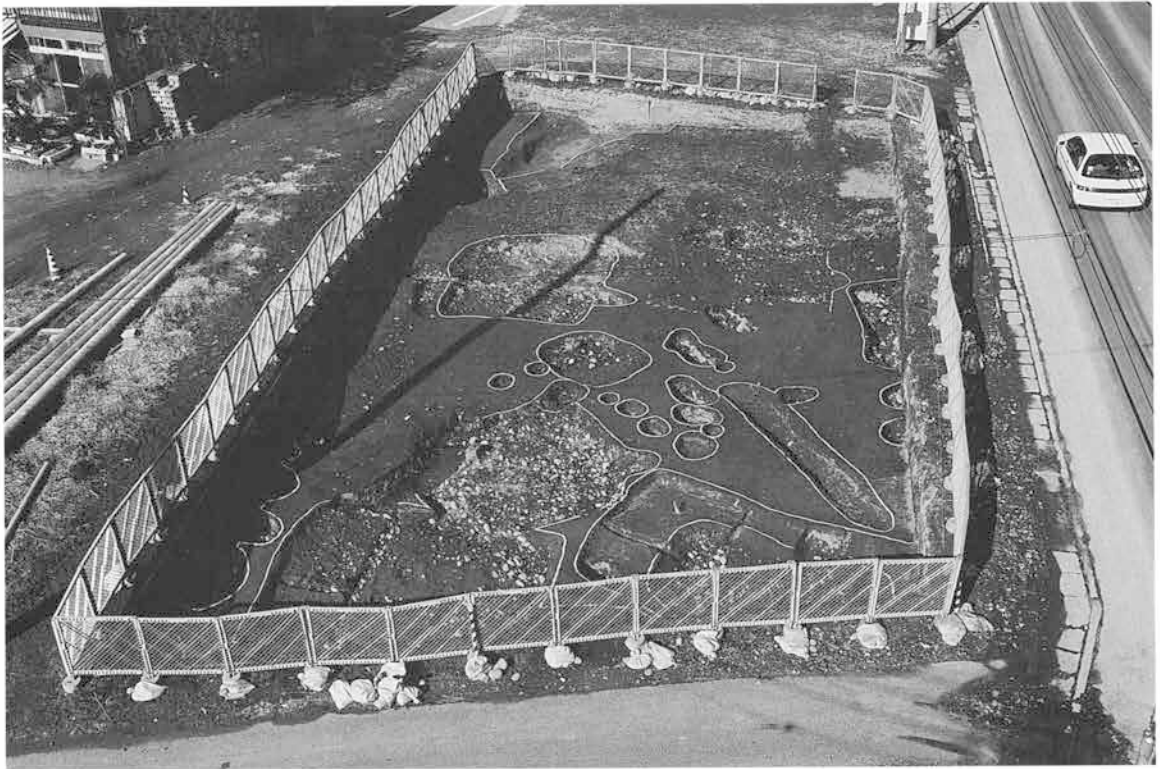


3区北半全景



3区南半全景

PL-4



4区全景



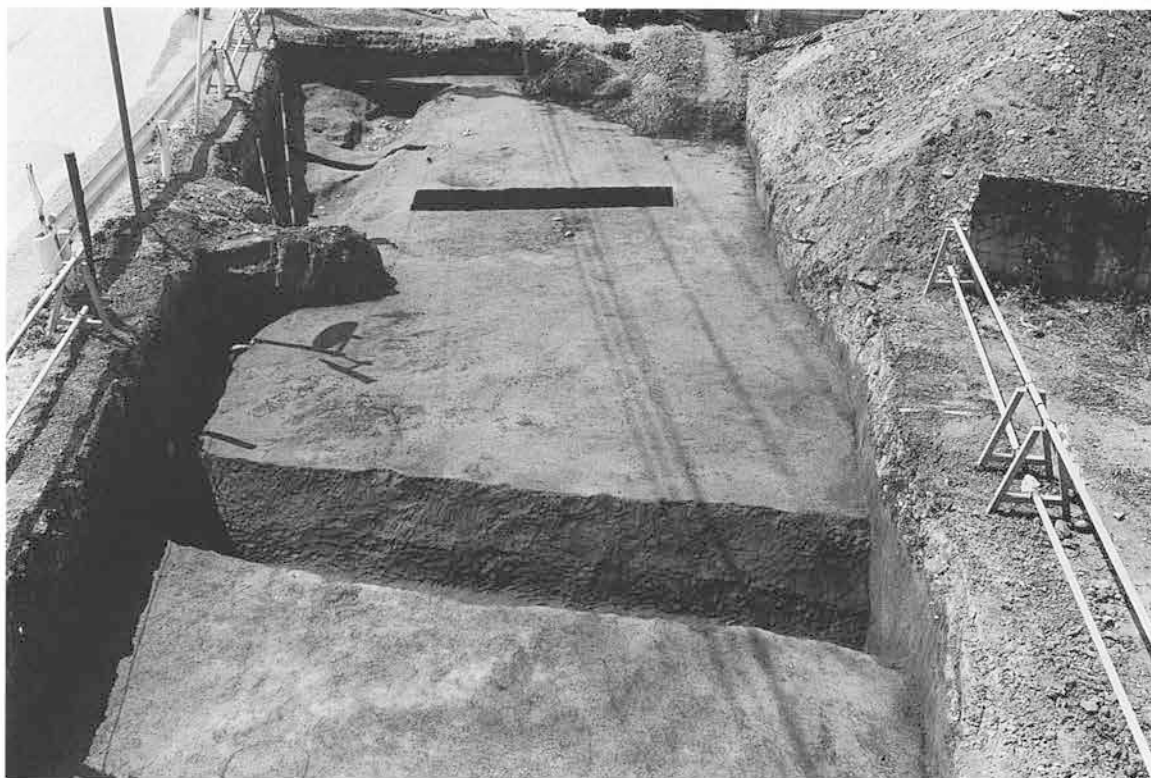
5区全景



7区全景



8区全景



11区全景

PL-6



12区全景



13区全景





1号住居全景



2号住居全景



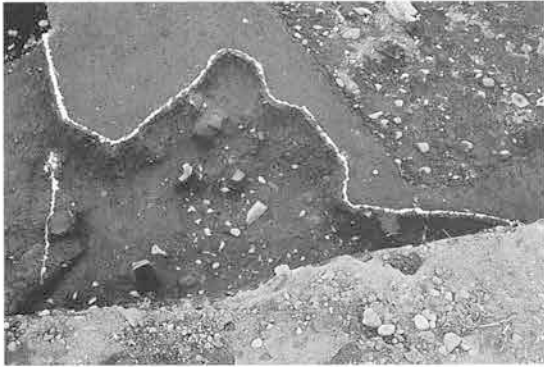
2号住居遺物出土狀態



2号住居遺物出土狀態



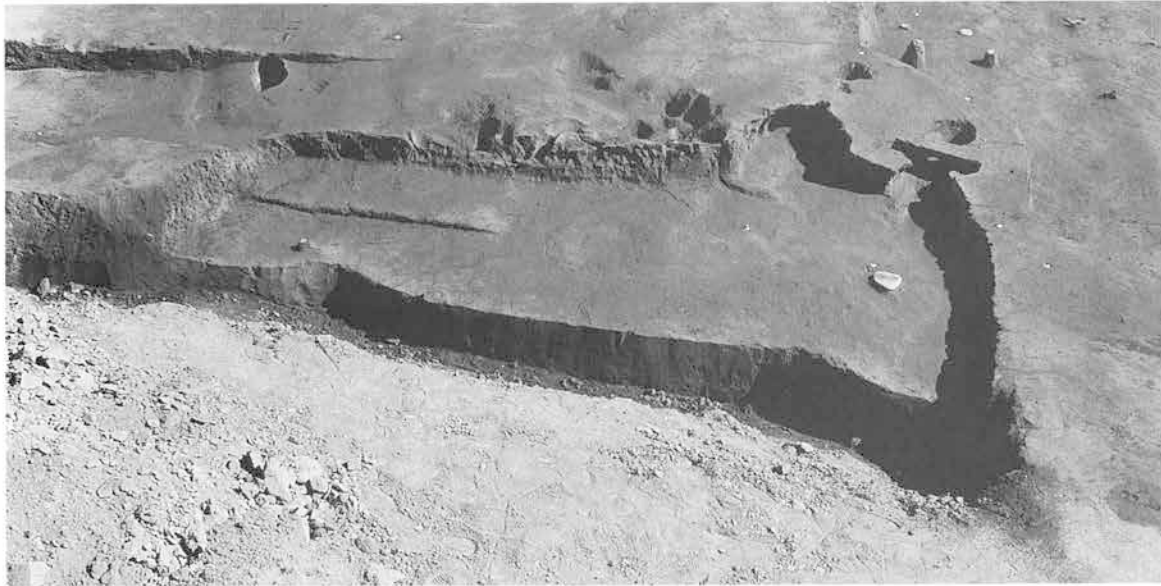
3号住居全景



4号住居全景



5号住居全景



7号住居全景



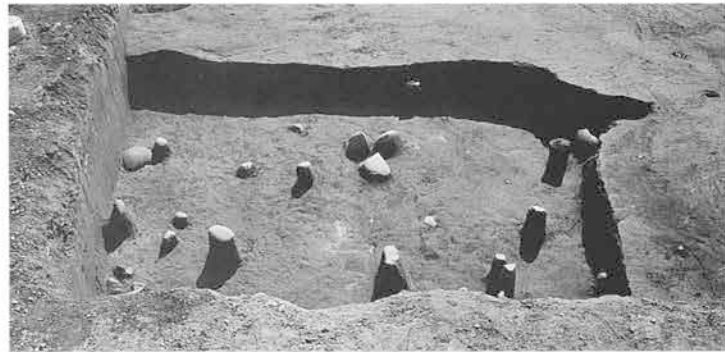
7号住居竈



8号住居全景



8号住居竈



9号住居南半



9号住居北半



9号住居掘り方南半



9号住居竈



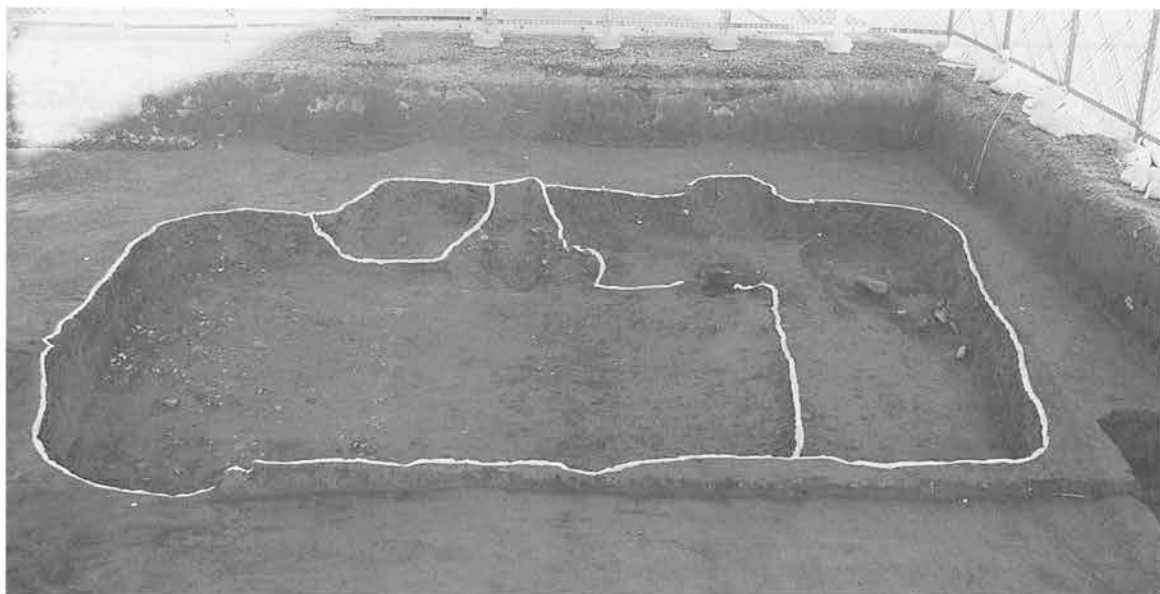
9号住居床下の噴砂



10号住居掘り方全景



11号住居掘り方全景



13・14号住居全景



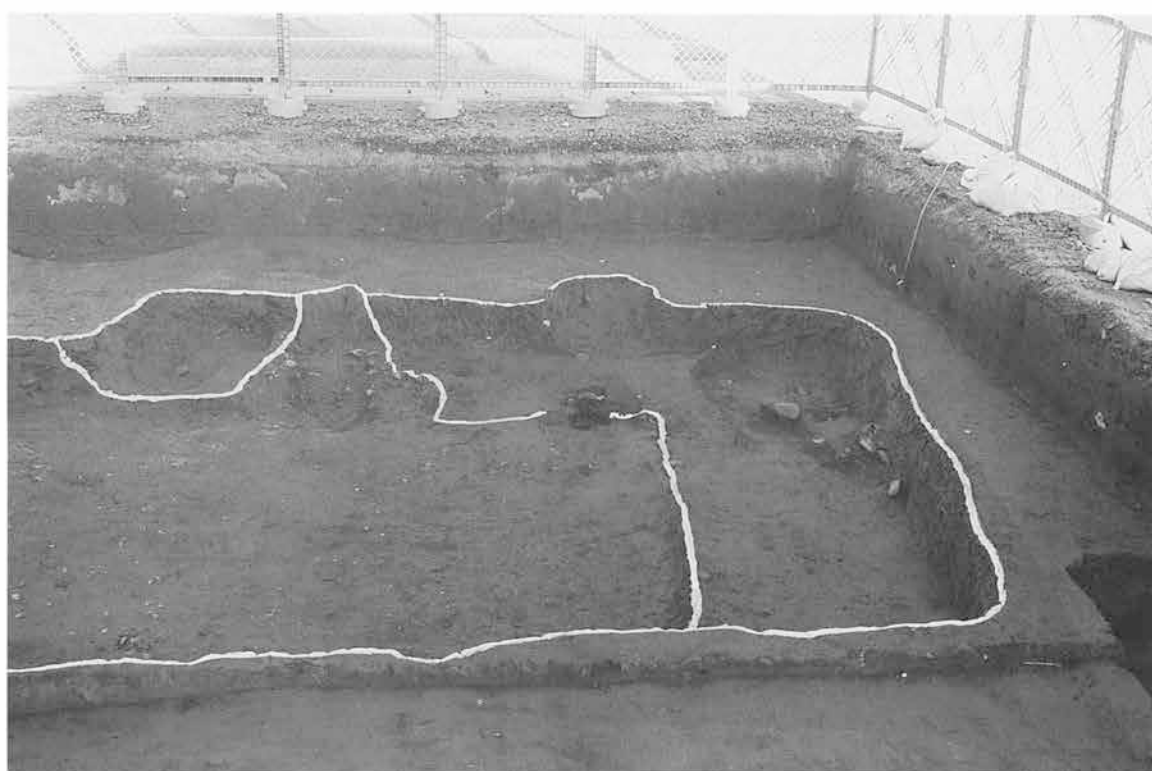
13号住居全景



13号住居遺物出土状態



13号住居竈



14号住居全景



14号住居遺物出土状態



14号住居竈



15号住居北半



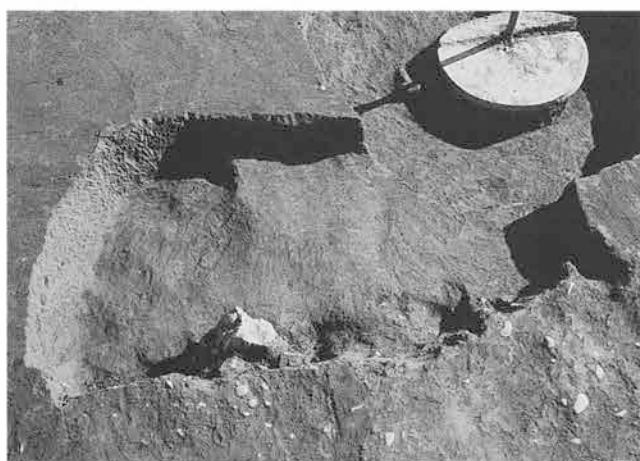
15号住居南半



15号住居遺物出土状態



15号住居竈



16号住居全景



17号住居全景



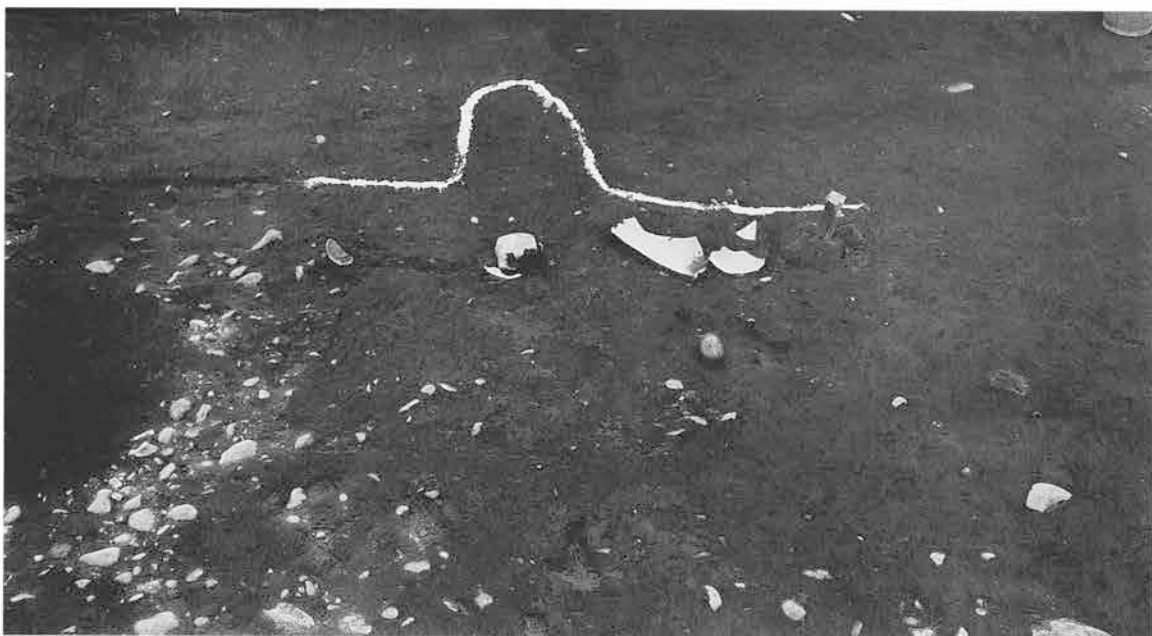
18号住居全景



19号住居全景



20号住居全景



21号住居全景



23号住居全景





24号住居全景



28号住居全景



28号住居貯藏穴



25号住居全景



29号住居全景



29号住居竈



30号住居竈



30号住居全景



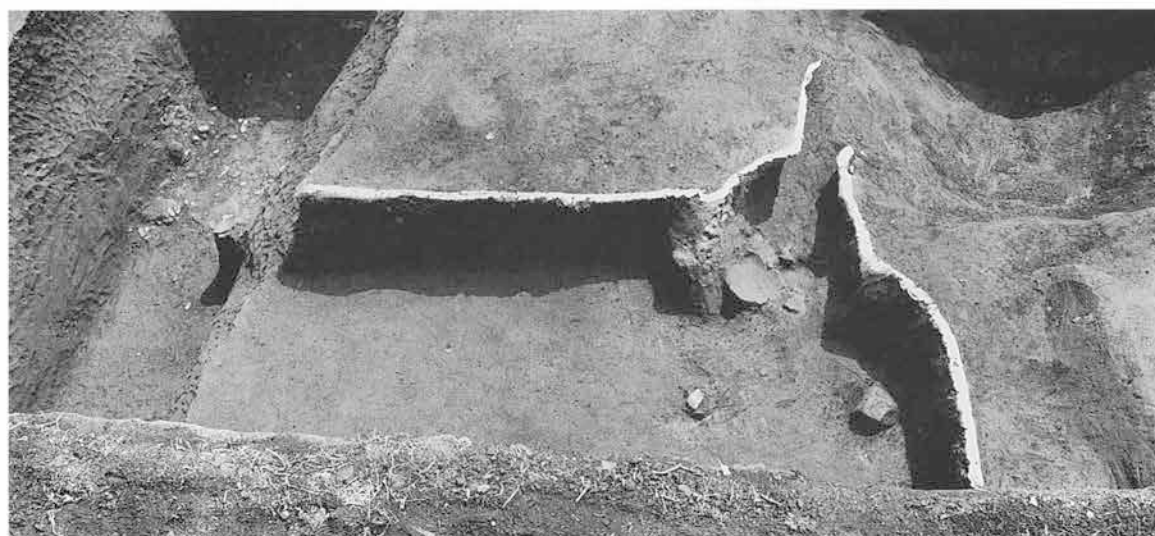
31号住居全景



31号住居竈



33号住居全景



32号住居全景



34号住居全景



36号住居全景



36号住居遺物出土状態



36号住居竈



36·37·38号住居全景



38号住居全景



38号住居遺物出土状態



38号住居竈



39号住居全景



39号住居遺物出土状態



39号住居竈



39号住居掘り方全景



41号住居全景



41号住居竈



40号住居全景



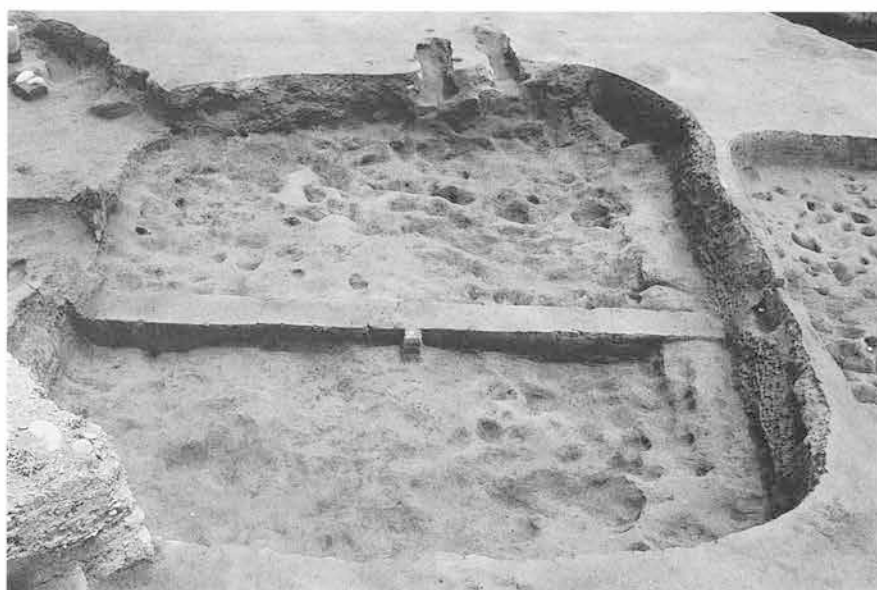
42号住居全景



42号住居竈



42号住居竈掘り方



42号住居掘り方全景



43号住居全景





43号住居窟



44号住居遺物出土状態



44号住居全景



45号住居全景



47号住居全景



47号住居遺物出土状態



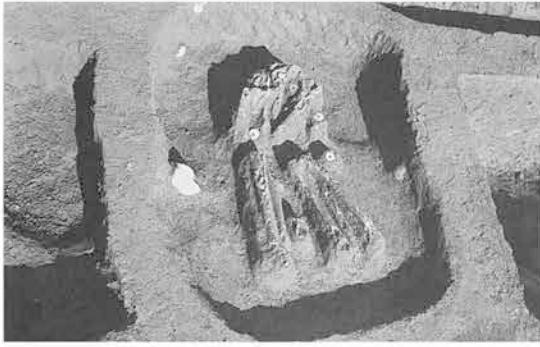
47号住居遺物出土状態近接



47号住居遺物出土状態近接



47号住居竈



1号墓全景



1号墓錢貨出土状態



2号墓全景



3号墓全景



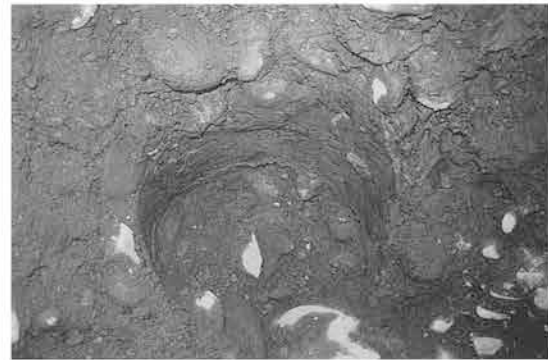
4号墓全景



4号墓右大腿骨と錢貨出土状態



1号井戸全景



1号井戸井筒近接



1号地下式坑



1号地下式坑遺物出土狀態



1号地下式坑遺物出土狀態



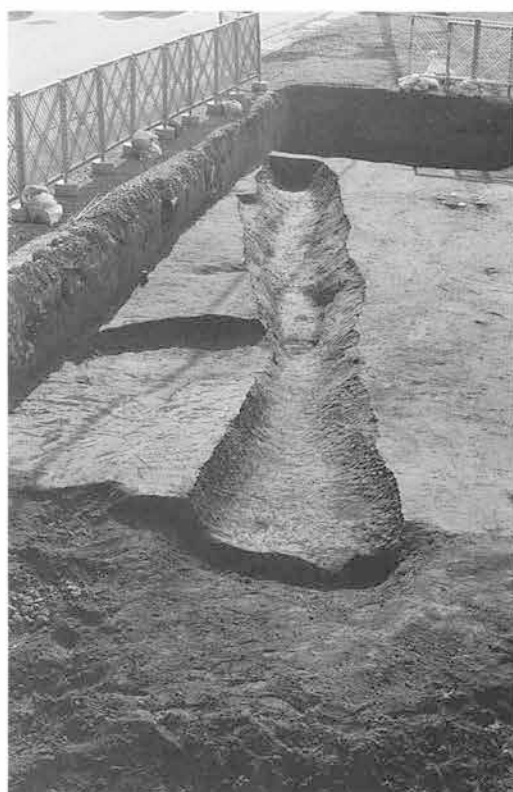
16号土坑全景



58号土坑全景



2号沟全景



4号沟北半全景



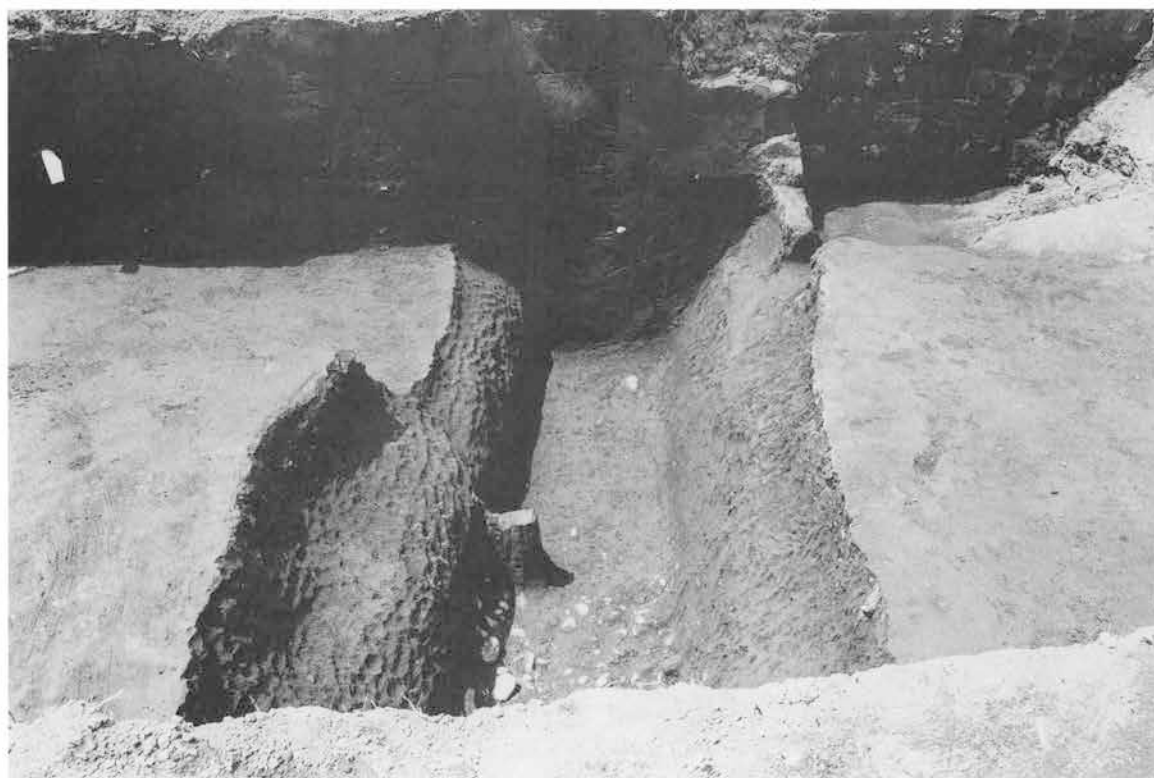
4号沟南半全景



5号沟全景



8号沟全景



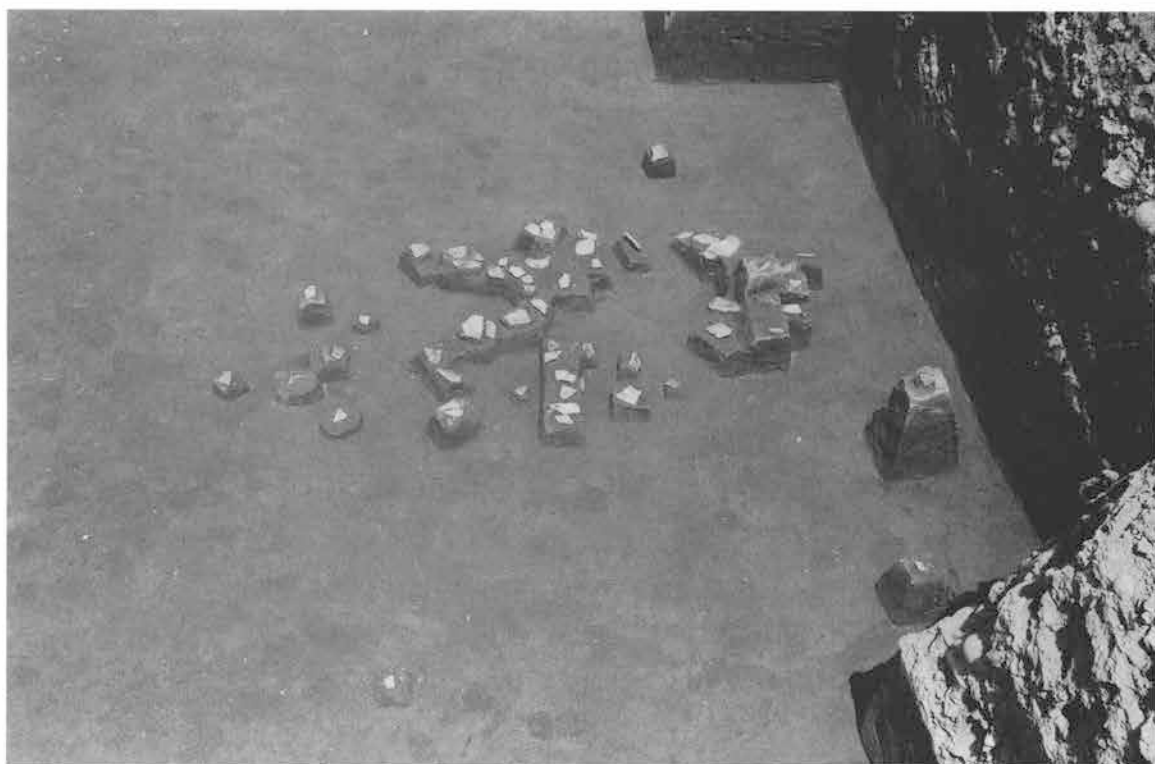
12号沟全景



13号溝全景



14号溝全景



弥生土器出土状態







13住-1



13住-1



13住-2



13住-4



13住-3



14住-1



14住-2



14住-4



15住-1



15住-2



15住-3



15住-4



15住-6



15住-8



15住-6



15住-7



18住-1



19住-1



20住-2



18住-2



19住-1



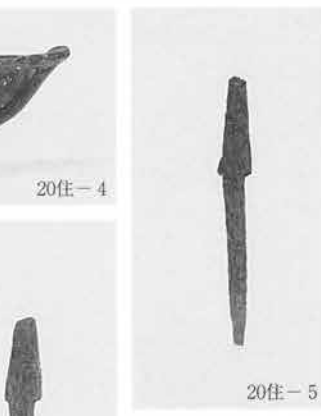
20住-3



21住-1



20住-4



20住-5



21住-3



21住-4



22住-2



24住-1



23住-1



24住-2



24住-3



24住-4



28住-5



28住-3



29住-1



28住-5



28住-4



29住-1



28住-1



30住-5



29住-2



30住-1



30住-2



30住-3



31住-4



31住-1



33住-1



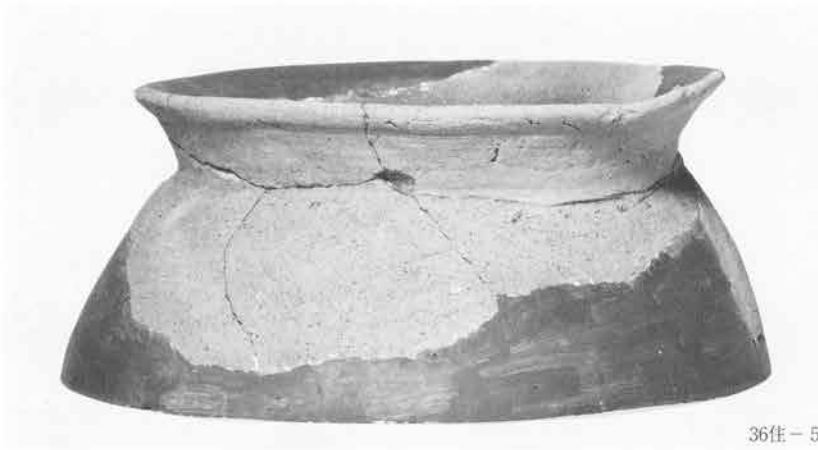
36住-1



36住-2



36住-6



36住-5



37住-3



38住-4



38住-6



38住-4



38住-7



38住-5



38住-8



39住-1



39住-2



39住-5



39住-4



39住-3



39住-6



41住-1



41住-3



41住-2



41住-4



41住-5



41住-6



45住-8



45住-9



45住-10



45住-11



42住-1



42住-7



42住-3



42住-2



42住-8



42住-6



42住-5



43住-5



43住-4

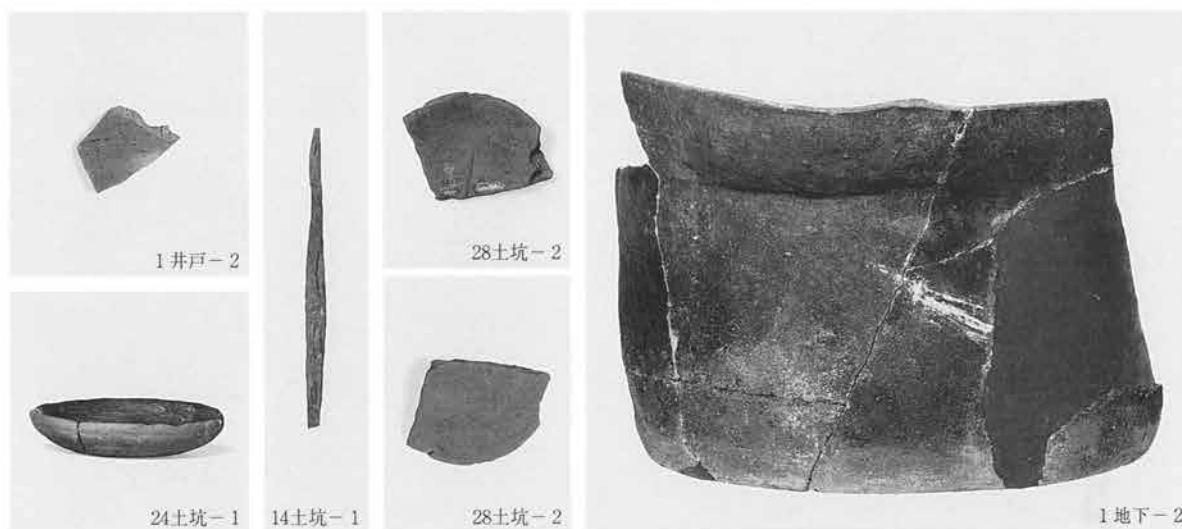
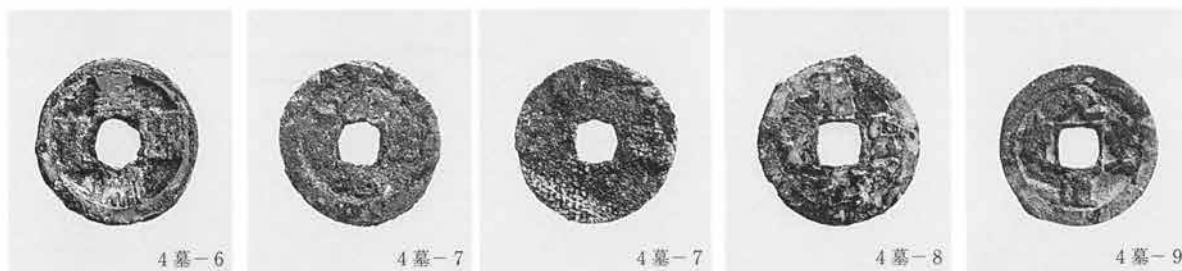
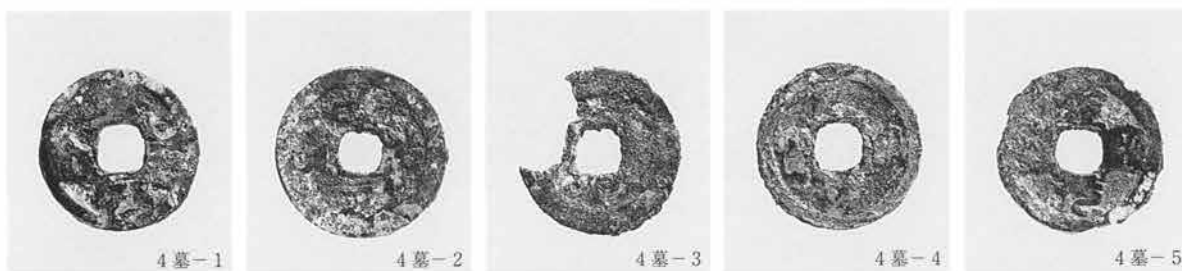


43住-1



43住-5











13溝-4



13溝-4



遺構外-9



遺構外-3



遺構外-4



遺構外-6



遺構外-9



遺構外-15



遺構外-16



遺構外-10



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12

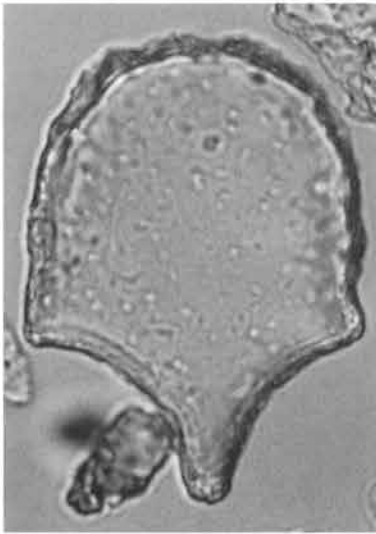


遺構外-14



遺構外

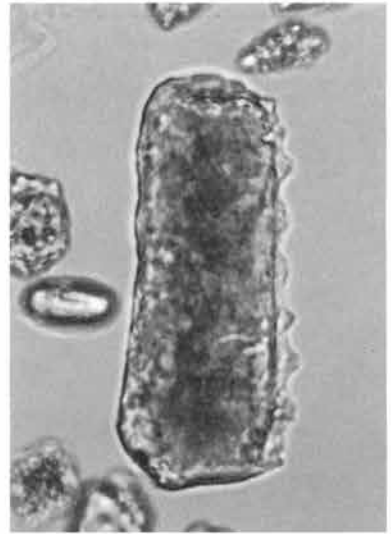
プラント・オパール顕微鏡写真



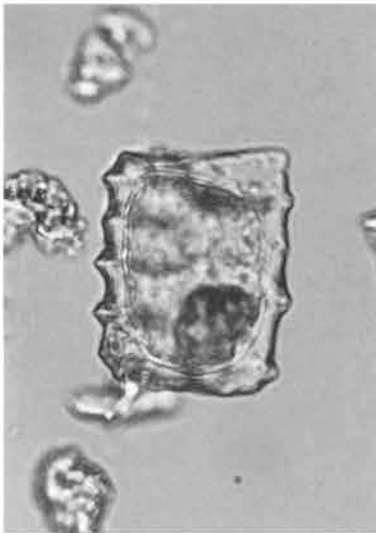
ヨシ属



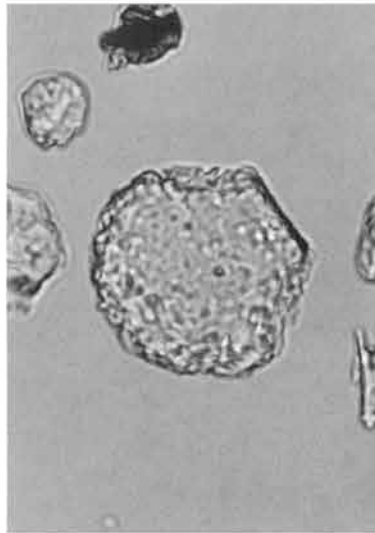
ウシクサ族 (ススキ属など)



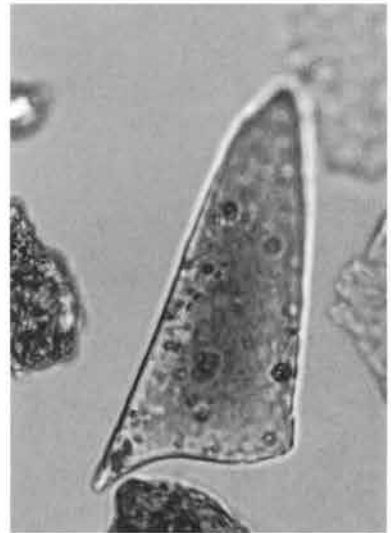
キビ族型



ネザサ節型



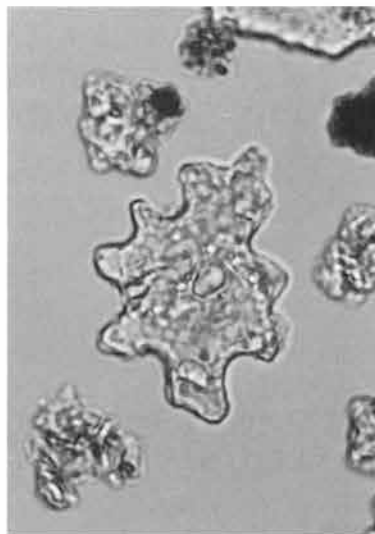
クマザサ属型



表皮毛起源



棒状珪酸体

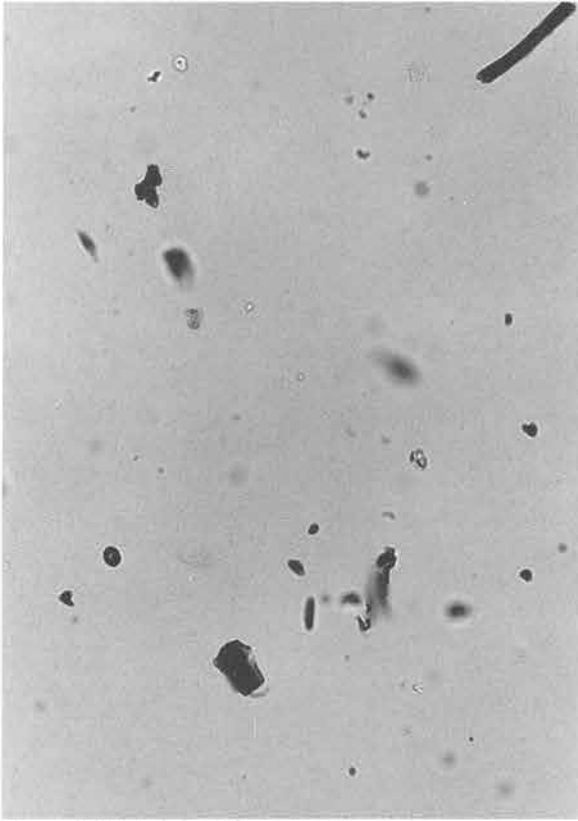


はめ絵バズル型 (ブナ属など)

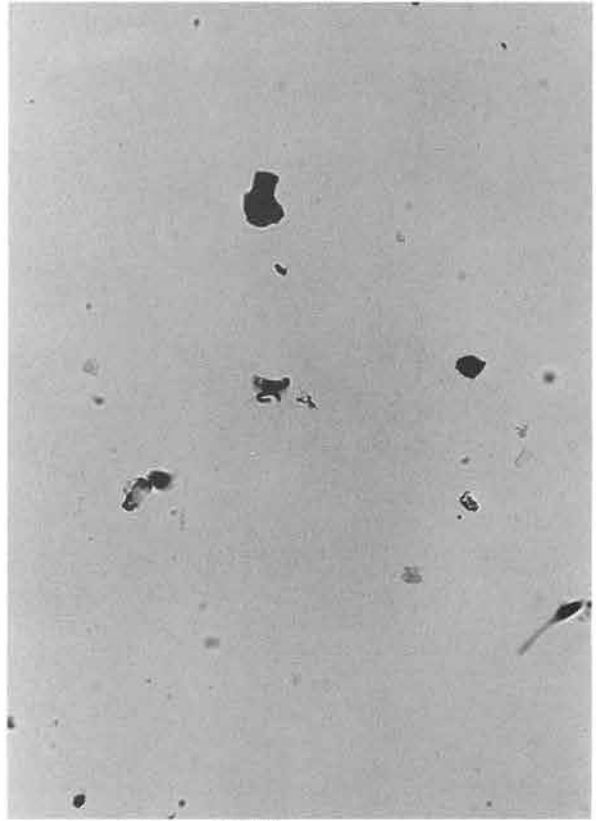


樹木起源

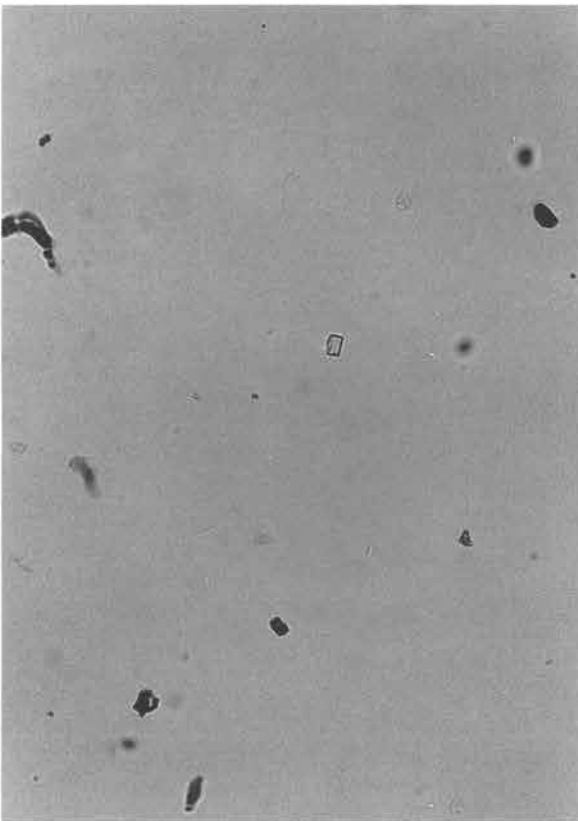
0 50 100 $\mu$ m



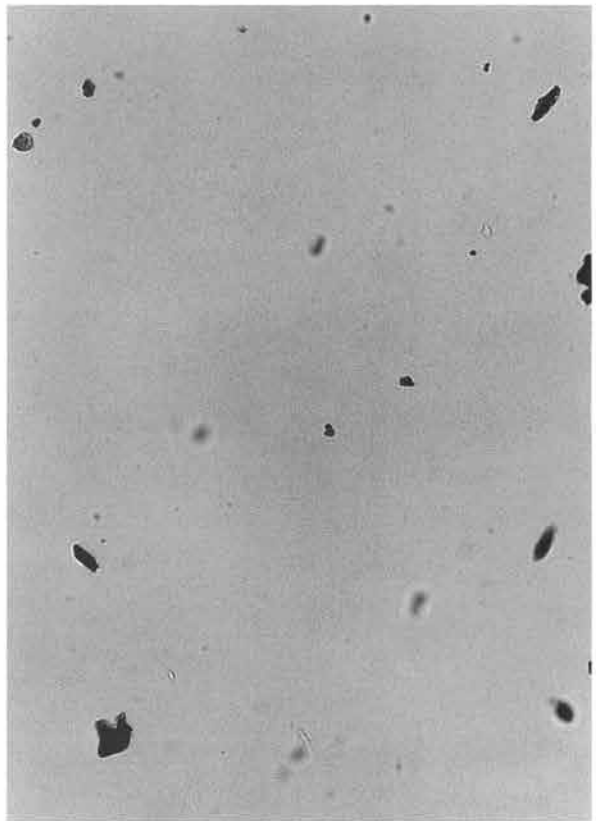
1 9区最北トレンチ



2 10区67グリッド西壁



3 11区S59グリッド Po 1



4 11区S59グリッド Po 2

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第226集

## 笄井中屋敷遺跡

主要地方道藤岡・大胡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月21日 印刷

平成9年3月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

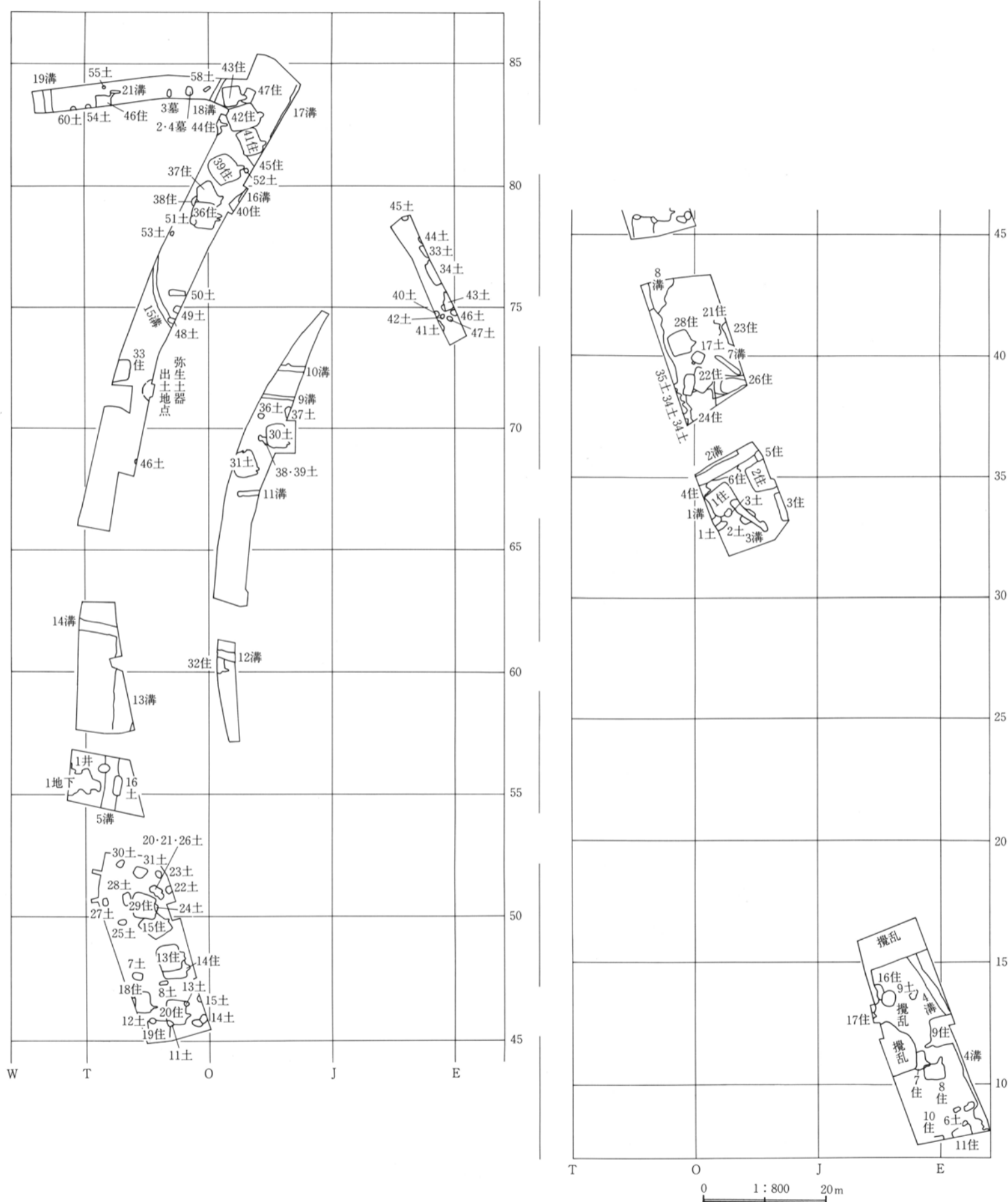
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局



付図 笄井中屋敷遺跡全体図